# THE ISOLATOR
realization of absolute solitude

## Sect.001 The Biter

「絶対的な
《孤独》を求める……
だから、僕のコードネームは
《アイソレータ》です」

Reki Kawahara

illustration»Shimeji

design»BEE-PEE

# Fragment 01

きおく？

きおくって、なに？

ミノルの質問に、姉のワカバはおやつのプリンをすくう手を止め、少し考えてから言った。

「ミーくん、昨日のおやつ、なんだったかおぼえてる？」

「えっと……」

すぐ隣（となり）に座るワカバから、台所で鼻歌をうたいながら洗い物をしている母親に視線を移す。

土曜日と日曜日のおやつは決まって母親の手作りで、午後三時になると、キッチンに隣接（りんせつ）した食料庫（パントリー）から、魔法（まほう）のようにプリンやクッキーやパイを出してきてくれる。ミノルたちはそこを、ママの秘密の部屋、と呼んでいる

昨日、秘密の部屋から現れたのは……。

「えっとねえ、ばろろわ！」

「うん、ババロアだったよね」

ワカバはにっこり笑うと、卓上のナプキンでミノルの口の端（はし）についたカラメルソースを拭（ぬぐ）いながら続けた。

「じゃあ、ミーくん。昨日のババロアと、今日のプリンと、どっちが好き？」

再び問われ、ミノルは目の前の、早くも半分減ってしまったカスタードプリンを眺（なが）めながら考える。

母親が作ってくれるプリンは大好きだ。売ってるのと違ってカラメルがぜんぜん苦くないし、ちゃんと卵の味がする。

でも、ババロアも同じくらい好きだ。とくに、昨日食べたイチゴのババロア。口の中で、雪みたいにふわっと溶けてしまう。

「……どっちもだもん……」

選ぶことができず、ミノルが涙目になりかけると、ワカバは微笑（ほほえ）みながら優しく頭を撫（な）でてくれる。

「うん、おねえちゃんもどっちも好き。ねえミーくん、いま、昨日のババロアの味を思い出せた？」

「思い出せた！　いちご！」

たちまち涙を忘れて、ミノルは勢いよく叫ぶ。台所の母親がリビングに目を向け、二人の様

子に顔を綻ばせる。

「そう、いちごだったよね。いまミーくんがいちごババロアの味を思い出せたのは、ミーくんの中にババロアの記憶があったから。記憶っていうのは、おぼえてるってことなんだよ」

「ふうん……」

ミノルには少し難しかったが、姉の言葉の意味を一生懸命考え、一つの結論に到達した。

「……じゃあ、ぼく、これからおやつを全部きおくする！」

「どうして？」

「だって、きおくすれば、食べちゃっても思い出せるもん！　プリンも、ばろろわも、しゅーむりーくも、全部きおくするよ！」

「そっか」

ワカバはミノルの顔を覗き込むと、もう一度微笑んだ。

「じゃあ、大事に、味わって食べないとね。食べ終わったら、一緒にプリンのお絵かきしよう。そしたら、きっと、いつまでもおぼえていられるから」

「ぼく、ずっと、ずーっとおぼえてるよ！　そんで、おっきくなったら、ママとワカちゃんにプリンをつくってあげるの！」

「ありがとう、楽しみにしてるね。約束だよ」

——これは、ミノルが四歳、ワカバが七歳の時の記憶。

＊＊＊

ねえワカちゃん。

記憶って、なにでできてるの？

ミノルの質問に、姉のワカバは小学校の宿題をする手を止め、不思議そうな顔で首を傾げた。

「……なにって、なんのこと？」

「えっと……記憶って、頭のなかに溜まってるんだよね。それで、お遊戯とか、お歌とか覚えたら何かが新しく増えて、忘れちゃったらまたなくなるんでしょ？　その、増えたりなくなったりするものって、なんなの？　文字なの？」

「わあ、ミーくんも、ずいぶん難しいこと考えるようになったのねえ」

ワカバはにっこりと微笑む。

家や幼稚園でどんなにたくさん本を読み、色々なことを覚えても、三つ年上の姉の知識にはまったく追いつけない。ミノルが不思議に思ったことを訊ねると、たいがいは即座に解りやすく教えてくれる。

しかし、たまにはワカバでも即答できないことがあって、そんな時に姉が浮かべる、優しさの中にほんの少しの苦笑が混じった、大人びた表情がミノルは大好きだ。

「記憶の媒体……かぁ。うーん……あのね、人間の頭の中には……」

ゆっくりと喋りながら、ワカバは右手を伸ばし、ミノルの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「脳が入ってるの。脳はニューロンっていうものでできてて、そのニューロンは、シナプスで繋がってるのよ」

「にゅーろん……しぷ……なす？」

「シナプス、だよ。わたしたちの記憶は、そのシナプスの中にあるって言われてるんだけど、何でできてるかはまだ解ってないの。いま、世界中の学者さんが、がんばって調べてるところなんだよ」

「ふうん……。しなぷす……っていうのは、頭のなかに、いくつくらいあるの？」

するとワカバは、先ほどより大きな苦笑を浮かべる。

「えっとねえ……ミーくんは、数、いくつまで数えられるかな？」

「ひゃく！」

最近ようやく数えられるようになった数字を元気いっぱいに叫ぶと、ワカバは「すごいねえ」ともう一度頭を撫でてくれる。

「……あのね、脳全体で、ニューロンがだいたい一千億個あるって言われてるの。一千億っていうのは、十の、百倍の、百倍の、百倍の、百倍の、そのまた百倍のことなの」

「ひゃくばいの……ひゃくばいの、ひゃくばい……？」

そもそも《百倍》という概念を理解できず、ミノルは顔をしかめた。

「……それって、パパのお部屋にある本と、どっちが多いの？」

父親の書斎は壁の一面が造り付けの本棚になっていて、新旧の書籍がぎっしり並んでいる。以前、端から数えようとしたことがあるのだが、五十まで行ってもまだほんの一部で、わけが解らなくなってしまった。

ワカバはくすっと笑うと頷いた。

「パパの本、いっぱいあるもんねえ。千冊くらいかな……でも、一千億のほうが、ずーっと、ずーっと多いんだよ。それでね……シナプスは、一千億個あるニューロンのひとつひとつに、だいたい一万個ずつあるみたいなの」

「…………？」

姉が口にした数の巨大さを想像することもできず、ミノルはぽかんと口を開けた。

そんな弟を抱き寄せながら、ワカバは視線を窓の外の青空に向けた。

「一千億かける一万は、一千兆……。わたしたちの天の川銀河にある星の数も一千億個だから、一万の銀河を合わせた星と同じだけの数のシナプスが、わたしやミーくんの脳の中にあるのよ。いつか、ミーくんにも数えられる……ううん、想像できるようになるわ」

そこで少し言葉を切り、ミノルをぎゅうっと抱き締めると、ワカバは囁いた。

「その時は、わたしにも教えてね。ミーくんが、一千兆個のシナプスで、何を感じたか。……約束だよ？」

姉が口にした言葉の、最後のひとつだけはミノルにも理解できた。だから、ミノルは姉の顔を見上げながら、勢いよく頷いた。

「うん、約束する！　ぼく、小学校にいったら、いっせんちょうまで数えられるようになるよ！」

これは、ミノルが六歳、ワカバが九歳の時の記憶。

＊＊＊

ワカちゃん……。

こわいよ、ワカちゃん。

ミノルの細い悲鳴を、まるで誰にも聞かせまいとするかのように、ワカバは弟をきつく抱き締めた。

しかしすぐに腕を解き、ミノルをしゃがませる。再び悲鳴が込み上げそうになるが、ワカバが口許に指を当てたので、どうにか我慢する。

二人がいるのは、《ママの秘密の部屋》――キッチンに接続する、小さなパントリーの奥。棚の最下段から大きなバスケットを引き出したワカバは、その下に隠れていた床下収納庫のハッチを素早く開ける。中には十キログラムの米袋が二つ収められていたが、ほっそりした腕のどこにこんな力がと思える勢いで両方とも引っ張り出し、代わりにミノルを中に押し込む。

立ち上がろうとする姉の手を、ミノルは必死で握った。

「……ワカちゃん、どこいくの……？」

震え声の問いかけに、ワカバは、強張ってはいるが優しい笑みを浮かべ、答える。

「おねえちゃんはお巡りさんを呼びにいくから、ミーくんはそこでじっとしてるのよ」

「やだ……ワカちゃんも、一緒に……！」

ミノルの声を、ワカバは確たる意思に満ちたひと言で遮る。

「大丈夫」

「……でも…………」

「大丈夫だよ。ミーくんは、わたしが守るから。わたしを信じて、その中で、声に出さないで数をかぞえててね。千まで数えられたら、プリンを作ってあげる」

「……ほんと？　約束？」

涙を浮かべながら訊ねるミノルに、ワカバは笑顔で、しっかりと頷く。

「うん、約束。だから、絶対にそこから出ちゃだめだよ」

頭上でハッチが閉められ、収納庫は闇に包まれる。重い音が二回続けて響く。続いて、大きなものを引きずる音。ワカバが、二つの米袋をバスケットに入れ、それをハッチの上に戻したのだ。

かすかな足音が遠ざかり、すぐに聞こえなくなる。

ミノルは、しゃくり上げそうになるのを堪えながら、心の中で懸命に数をかぞえはじめる。

一、二、三、四、五、六、七…………。

どこか遠くで、どすん、どすんと重い音が響く。家族の誰のものでもない、乱暴で粗雑な足音。

五十二、五十三、五十四、五十五…………。

足音が近づいてくる。リビングで何か大きなものが割れ、床に落ちる。ダイニングの椅子が次々に倒れる。何者かはキッチンに入ってくる。冷蔵庫や、カップボードの扉を荒々しく開け閉めする音。食器やグラスが力任せに叩き落とされ、砕け散る。

百二十九、百三十、百三十一、百三十二…………。

足音の主はついにパントリーへと踏み込む。母親自慢のスパイスのコレクションがばらばらと落下する。鍋やフライパン類もそこに加わる。まったく見えていないのに、ミノルにはその様子がありありと感じられる。どすん、どすん。足音は、まるで床下を確かめるように何度も足踏みする。

百五十五、百五十六、百五十七……。

ミノルの真上で、ずずずっと重いものが擦れる。二十キロの米袋を収めたバスケットが動く音。

百五十九、百六十……。

しかし、バスケットは、半分ほど引きずり出されたところで止まる。

百六十一、百六十二……。

足音が、ゆっくりと遠ざかる。キッチンで、ダイニングで、再び破壊音が響く。

百八十、百八十一、百八十二……。

足音が消える。

長い、長い静寂が続く。

ミノルは数をかぞえ続ける。姉に言われたとおり、ひたすらに数える。

やがて、サイレンが近づいてくる。家のすぐ近くで止まる。沢山の足音が家に入ってくる。張り詰めた大人の叫び声が幾つも聞こえる。

数える。かぞえる。

三千六百十七まで数えた時、ついに真上のバスケットが完全に引き出され、収納庫のハッチが開けられる。

眩しさに眼を細めながら、ミノルは上を見る。

しかし、そこにあるのは、金色の徽章つきの帽子と紺色の制服を身につけた、見知らぬ男性の顔。

ワカバではない、誰かの顔。

ミノルは再び小さく丸まって、数をかぞえ始める。

三千六百十八。

三千六百十九。

三千六百二十——。

---

これは、ミノルが八歳、ワカバが十一歳の時の記憶。

三つの約束は、もう永遠に果たされることはない。

## Fragment 02

二〇一九年七月。

月の裏側、ドライデン・クレーター内部に建設された大型電波望遠鏡《ドライデンI》が、微弱だが重大な意味を持つ電波バーストを捉（とら）えた。

中心周波数1420・406MHzのごく短いシグナルが、わずかな間隔（かんかく）を置いて、二回、三回、五回、七回、十一回、十三回、十七回と繰（く）り返されたのだ。

2、3、5、7、11、13、17。それが素数の最初の七個であることは、小学生にも理解できる事実だった。ニュースは世界中を駆け巡り、ありとあらゆる分野の学者、専門家、そして好事家（こうずか）たちがシグナルそのものの解析に挑（いど）んだ。

《七つの素数（セブン・プライム・ナンバーズ）》の頭文字を取って《SPNシグナル》と命名されたその信号は、たった一週間のうちにありとあらゆる意味合いの《宇宙からのメッセージ》に翻訳（ほんやく）され、インターネット上で発表された。だがそのどれ一つとして、万人（ばんにん）を納得（なっとく）させ得る論拠（ろんきょ）を備えてはいなかった。

SPNシグナルが、とある災厄（さいやく）に対する警告であったことが判明したのは、全（すべ）てが始まり、そして終わったあとのことだった。

---

二〇一九年九月。

地球上の、いくつかの高密度エネルギー地域に、人類が初めて接触する地球外有機生命体が複数落下した。だが、それはあまりに小さく、また知性と呼べる物も有していなかったため、接触の事実を知り得た者は、ほぼ当事者だけに限られた。

# 第一章 咀嚼者

## Sect.001 The Biter

偶然だったのか。

それとも、自分の中の何かに呼び寄せられたのか。

空木（うつぎ）ミノルは、《接触》のあと、何度もそう考えた。

真実は解（わか）らない。けれど、ひとつだけ確かなことがある。

あの黒い球体は、ミノルの望みを誤解した。

ミノルが求める孤独（こどく）は、球体に与えられた超常の力を以（もっ）てしても、決して手に入れられない。

なぜなら、自分自身でもまだ見つけられずにいるのだから。

あの日からずっと探し続けている、究極の、完璧（かんぺき）な、絶対なる孤独が、いったいどんなものなのか。

## 1

朝靄（あさもや）を貫（つらぬ）いて、黒いアスファルトが、細く、長く、どこまでも続いている。

ランニングシューズの薄（うす）いソールで、湿った路面を捉（とら）え、蹴（け）る。

ピッチに合わせて鼻から二回空気を吸い、口から白い息を二回吐（は）き出す。

心臓がリズミカルに脈打ち、全身に血液を巡らせる。

筋肉の伸縮と、呼吸と、脈拍（みゃくはく）。それだけを感じながら、ミノルは走り続ける。

肥満指数（BMI）は平均値をかなり下回っているし、高校で陸上部に入っているわけでもないので、フィットネスやトレーニングが目的ではない。そもそも走ることが好きなのかどうかもよく解らない。

ミノルが毎朝十キロのランニングを日課にしている理由は、走っている時だけは何も考えずに済むから。そして、呼吸と血流が、不要な記憶（きおく）を洗い流してくれる気がするからだ。

だから、本当は、早朝ではなく深夜に走りたい。

一日の終わりに、土手上の遊歩道を、遠い街明りと月明りだけを頼（たよ）りに走って、昼間に蓄積（ちくせき）された記憶を汗と一緒（いっしょ）に流し尽（つ）くしてしまいたい。

しかし以前、実際に夜十時ごろ走りに出ようとしたら、義姉の由水典江（よしみずのりえ）にやんわりと、かつ

交渉の余地なく禁止されてしまった。確かに夜中の荒川河川敷は改造スクーターが爆音を響かせていたりもするし、生活の全てを典江に頼り切っている高校一年生の身では反抗することなど考えられない。

ゆえにミノルは、始めてからもう五年になる毎朝の習慣を、今日――二〇一九年十二月三日も継続している。

足で蹴る。腕を振る。

息を吸う。息を吐く。

十二月の早朝にしては気温が高く、ジッパーを半ばまで下ろしたウインドブレーカーの胸元に当たる空気が心地良い。予報では来週からしばらく雨らしいので、軽装で走れるのもあと数日だ。レインジャケットを着ての真冬の雨中ランは、十キロのコースをほぼ独り占めできるという利点もあるものの、登校前に体力と精神力を消耗し過ぎてしまう。

もちろんある程度の負荷がなければ走る意味はないのだが、学校で居眠りをして教師に怒られでもしようものなら本末転倒だ。ミノルが走るのは記憶をリセットするためなのに、そんな目に遭ったら、忘れるのに何週間かかることか。

最後に教師の叱責を受けたのは二年前、中学二年生の二学期。ミノルが弁当に持って行った義姉手作りのチェリーパイが、校則で禁止されている《お菓子》に該当すると担任教師が言い出し、散々怒鳴られた挙げ句にパイも没収されたのだ。

あの時は、教師が義姉のことまで悪し様に言い始めたので、反論したい衝動を必死に堪えていたら、少しだけ涙が出てしまった。それを意地悪な同級生に見つかり、囃し立てられ、今度こそ我慢できずに…………。

「…………!!」

歯を食い縛り、走るペースを一気に上げる。

ほとんどスプリントのような勢いでコースを疾駆しながら、切れ切れの言葉を吐き出す。

「なんで……思い……出すんだよ……!」

忘れろ。忘れろ。忘れなくてはならない。自分の愚かさを含む全ての記憶を。

なぜなら、それらの記憶は必ず繋がっていくから。

八年前の、あの日に。ミノルの世界が完全に破壊されたあの日――暗い穴の中で、ひたすらに数をかぞえていたあの日の記憶に。

アスファルトを思い切り蹴りつける。

呼吸は荒くなり、脈拍も速まる。だが、まだ足りない。もっともっと苦しくならなければ、いったん黒い水のような記憶に浸された頭はリセットされない。

走る。走る。

いっそ、このまま、心臓か肺が破けるまで走り続ければ。

そうすれば、全ての記憶を置き去りにして、ここではないどこかに行ける…………。

だが、数秒後、朝靄の向こうから銀色のポールが姿を現す。ランニングコースの始点と終点にしている、遊歩道の車止めだ。

捨て鉢な衝動を抑え込み、少しずつペースを落としていく。胸元を冷やす走行風が弱まった途端、ウインドブレーカーの下で汗が噴き出す。呼吸も、脈拍も、たちまち平常に戻る。

ラスト五十メートルは軽く流し、ポールの間を抜けると、ミノルは足を止めた。

リストバンドで額の汗を拭ってから、左手首に嵌めたスポーツウォッチのストップボタンを押す。チチッという電子音を聞いてから、恐る恐る液晶画面を覗き込む。表示されるデジタル数字を見て、思わず顔をしかめる。

予想はしていたが、やはり今日も――。

「……速すぎる……」

口から零れた呟きを、深呼吸で吹き払う。

早朝の十キロランを五年間続けたおかげで、長距離走にはささやかながら自信を持てるようになった。しかし、だからこそ断言できる。タイムというのはそう簡単に向上するものではないのだ。体調や天候などの条件によって日々上下しながら、何ヶ月というスパンで少しずつ速くなっていく――いや、速くなったことに後から気付く。少なくとも、これまではずっとそうだった。

なのに、いまミノルの腕時計に表示されている数字は、たった三ヶ月前のそれと比べて三分

近くも短縮されている。最後に少しスパートしたとはいえ、全体的にはむしろ抑え目で走ったつもりなのに。

時計にあてがったままだった右手を、胸の前に移動させる。

指先で、胸骨の真ん中あたりを軽く押す。

痛みも、異物感もない。しかし、確かに感じる。心臓の真上でひっそりと息づく、かすかな気配のようなものを。

「……お前の、せいなのか」

囁きかけても、答えはない。だが、もう、そうとしか思えない。

三ヶ月前のあれは、夢ではなかったのだ。空から落ちてきた何かが、ミノルの胸から体内に潜り込み、消えた。いや、組織と同化した。

その何かのせいで、ランニングのタイムが異常に伸びた。それだけではない。聴力や視力も、以前より良くなっている気がする。

――有り得ない。そんな、非常識なこと。

心の中で打ち消すが、同時にもう一人の自分が呟く。

――常識なんてものは、ただの幻想だ。

どんなに異常で、恐ろしくて、悲しい出来事だろうと、起こり得ることはなんだって起きるのだ。

たとえば、家族四人での幸福な暮らしが、ある日突然跡形もなく破壊されるようなことが。

「…………どうでもいい」

右手を下ろし、小声で吐き捨てる。

体に入り込んだものが何だろうが、そいつが十キロランのタイムを伸ばそうが落とそうが、どうでもいい。別に、大会に出るために走っているのではないのだから。

望むのは、ただ無色透明な日々が過ぎ去っていくこと。余計な記憶を増やさず、誰の記憶にも残らず、あたかも幽霊のようにひっそりと生きていくことだけ。

――そう、いまの僕は、幽霊みたいなものだ。本当なら、あの日、父さんと、母さんと……そして姉さんと一緒に、僕も死ぬはずだったんだから。

声に出さずに独りごちると、ミノルは体の向きを変えた。

少し先に、土手を降りる階段が見える。そこから自宅までは約一キロメートル。

タイム計測モードだった時計を時刻表示モードに戻し、登校時間までまだ充分に余裕があることを確認する。顔を上げると、あかね色に染まり始めた空が目に入る。今日もまた、昨日と変わらない一日が始まる。

時間割を頭の中で確認しながら、階段に向かおうとした時。

後ろから、リズミカルな足音が聞こえてきた。同じコースを走っていたランナーが追いついてきたのだ。

ミノルは、いったん遊歩道の左端まで下がった。この場所は、車止めのせいでコースの真ん中しか走れないので、そこを塞いでしまうと通り抜けようとするランナーの邪魔になる。もし舌打ちでもされようものなら、せっかくリセットした頭の中に、早くも嫌な記憶を溜め込んでしまう。

彼方で真冬の朝日を受けて煌めく、さいたま新都心の高層ビル群を眺めながら、ランナーが通り過ぎるのを待っていると――。

足音は、少しずつ減速し、ミノルの真後ろで停止した。

はあはあと荒い息遣いが耳に、仄かな香りが鼻に届く。姿は見えないが女性ランナーだろう。どうやらミノルと同じく、このポイントを終点にしていたらしい。

ならばいつまでもここに立っている理由もない。顔をそむけたまま、階段へと歩き出そうとしたミノルは、しかし再び足を止めざるを得なかった。

右斜め後方から、突然呼びかけられたのだ。

「あ、待って……空木くん……でしょ？」

呼吸の合間に発せられた言葉に、ぎょっと立ち止まってしまう。

声に聞き覚えはない。知り合いがこのコースをこの時間に走っているという記憶もない。そうと知っていたら、場所か時間を変えている。

ほんの一瞬、「違います」と走り去ろうかと思ったが、そういう衝動的かつ逃避的な反応は

決して最上の選択ではないと、幾つかの失敗を経て学んだ。離脱を諦めて、ぎこちない動作で振り向く。

二メートルほど離れた場所で、両膝に両手を乗せた姿勢で盛んに真っ白い息を吐いているのは、小柄な女性――と言うより女子だった。

同学年か、少し下だろう。小柄で、髪は短い。いっけん華奢だが、パステルグリーンのランニングウェアから伸びる手足にはしっかりと筋肉がつき、日常的に走り込んでいることを窺わせる。

そしてやはり、上目遣いにこちらを見る顔に憶えは――ないような、あるような。

「……ええ……と……」

誰でしたっけ、とは言えずに語尾を濁すと、女の子の浮かべていた微笑が消え、口が見事なへの字形になった。ようやく呼吸が整ったのか、深々と息を吸いながら勢いよく体を起こし、両手を腰の後ろ寄りにばしっと当てて――。

「ミノワ」

「は、はい？」

「箕輪朋美。吉城高の一年八組」

「……そ、そう……」

どう反応すべきか決めかねて、ひとまず微妙な角度で頷く。

埼玉県立吉城高校は確かにミノルが通っている学校で、学年も同じだが、クラスが違う。ミノルは校舎の反対側にある一組だし、入学してそろそろ八ヶ月が経つとは言え、箕輪朋美と名乗る女子生徒の顔を覚えていなくてもやむを得ないのではないか。

と、そこまで考えたところで、朋美が再び口を開いた。

「……で、八中の時は、二年二組」

「…………そ、そう……」

今度は、先刻よりも少し深めに首を動かす。

八王中学校も、ミノルが通っていた学校だ。しかも二年生の時は二組だった記憶がある。すなわち眼前の女子生徒は、たった二年前――いや正確には一年と九ヶ月前まで、ミノルのクラスメートだったわけだ。

人の顔を覚えるのは得意ではない。会話中も相手の顔をまともに見られないのだから当然と言えば当然だが、それにしても、一年も同じクラスで勉強していれば一度や二度は話したことがあったはずだ。なのにこうも思い出せないというのは、毎日の《記憶リセットランニング》に思った以上の効果があったのだろうか……。

などと考えていると、不意に、眼前のむくれ顔に淡い面影が重なった。眉を寄せ、懸命に遠い記憶をたぐり寄せる。

「えっと……箕輪さん……ミノワさん…………。――あれ……昔は、もっと髪が長かったよう

な……」

ミノルが呟くと、朋美の不機嫌顔が、瞬時に笑顔へと戻った。ショートヘアを勢いよく揺らして頷く。

「正解！　高校に上がる前にバッサリやったの」

「……ふうん……」

これはバッサリの理由を訊くべき場面なのか否か。

と悩む必要は、幸いなかった。朋美が、肩上三センチほどにある毛先を摘みながらあっさりと理由を口にしたからだ。

「うちの陸上部、一年はロング禁止なんだよね。中学の時は結んでればOKだったのにさ」

「そうなんだ」

と、当たり障りのない相づちを返す。

部活の規則が理不尽だと思うなら、改善を訴えるか辞めればいいのに、と考えてしまうのがミノルだが、口には出さない。クラブ活動、とくに運動部はそう簡単に辞められるものではないらしいし、一年生部員が長年の決まりに文句など言えば、それはそれで面倒なことになりそうだ。

——いや、そういう話でもなく。

単純に、この箕輪朋美という女子生徒は、陸上が……走ることが好きなのだろう。そのため

なら、髪をばっさり切ってしまえるくらい。

その思考が、再び遠い記憶を呼び覚ます。全校朝礼の壇上で、校長から表彰状を手渡され、ぴょこんとお辞儀をする女子生徒。その後ろ頭で元気に揺れるポニーテール。

「ああ……箕輪さんて、もしかしたら、中三の時に全国大会に出た……」

「思い出すの、遅い！」

不満顔でそう叫んでから、朋美はすぐにくしゃっと破顔した。

「でも、ひとの部活の話なんてそんなもんだよね。それに、全中に出たって言っても十位だったし……今年は県予選止まりだったし……」

「い、いや、凄いと思うよ。全国で十番なんて、なかなかなれるもんじゃないよ」

慌ててフォローしたつもりだったのだが、なぜか朋美は再び唇を尖らせた。

「……そーゆう空木くんに、あたし、ぜんぜん追いつけなかったんですけど」

「え？」

「羽根倉橋のとこで見かけたから追いかけたのに、ここまでぜーんぜん追いつけなかったんですけど！」

「……き、気付かなかったな……」

「見たとこ、あんまり汗もかいてないし」

「……き、今日はすごく寒いから……」

などと言い訳しつつも、内心で大いに慌てる。

走っているところを同じ学校の生徒に見つかり、しかも追いかけられていたとは、まったく気付かなかった。そのうえ、自分の走行ペースがそこまで――女子陸上部の全国大会経験者と同レベルにまで上昇していようなどとは、想像もしていなかったのだ。

黙り込むミノルを、朋美は茶色がかった大きな瞳でじっと見つめてくる。

「空木くんて、中学でも、高校でも、陸上やってないよね？」

「……うん」

「毎日ここ走ってるの？　いつ頃から？　距離は？」

「えっと……」

何かをごまかそうにも過大申告すべきか過小申告すべきか解らなかったので、正直に答える。

「……五年前から、十キロくらい」

「へえ――っ！」

ミノルの返事をどのように解釈したのか、朋美は大きな声を出してから、再び笑顔を見せた。

「すごいねえ、うちの部員でも毎朝そんなに自主練してる人なかなかいないよ」

続けて、ミノルが恐れていた言葉を、さらりと口にする。

「そんなに速いんだから、入ればいいのに、陸上部！」

「えっ……と……」

これぱかりは、うんと答えるわけにはいかない。

陸上部に限らず、クラブに所属すれば不要な記憶をいまの何倍も溜め込んでしまうだろうし、そもそも朋美の関心を引いたミノルのスピードは、五年間のランニングで得たものではない。三ヶ月前、体に入り込んだ《何か》の影響だとしか思えないのだ。そんな、言わば借り物の力で、真剣に頑張っている陸上部員たちと競っていいはずがないし、得た時と同様に突然速さが失われてしまう可能性もある。誘われるがまま陸上部に入ってから、急に足が遅くなったりしたら……と考えるだけで冷や汗が滲む。

「……その……」

――僕は、速くなりたくて走っているわけじゃないんだ。

ということを、穏便に伝えるにはどう言えばいいのか、ミノルはしばし苦慮した。

だが、何かを口にするよりも先に。

「…………！」

近頃やけに鋭敏になってきた気がする耳が、しゃあっというような軽い音を捉えた。反射的に右側を見ると、濃い朝靄の向こうから、急速に近づく影が見えた。

自転車――ロードレーサーだ。

車止めの隙間に、スピードを落とさず突っ込んでくる。そしてその進路上には、箕輪朋美が立っている。自転車側が前方の人影を認識しているかどうかは定かでないが、朋美は明らかに

気付いていない。

　このままでは、三秒もしないうちに接触、いや衝突する。時速三十キロメートルは出ていそうな自転車に突っ込まれれば、かすり傷では済まない。

　ようやく朋美を視認したらしい自転車乗りが、「おい！」と大声を出した。

　その声をきっかけに、やっとミノルも動いた。一歩前に出ながら右手を伸ばし、朋美の背中に回すと、思い切り左側に押しやる。ロードレーサーの細いタイヤが急ブレーキでロックし、朝露で濡れた路面を滑る。

　ミノルに押された朋美が、自転車の進路から外れる。反動で、ミノルは前方につんのめる。右側から、停止できない自転車が迫る。

　ぶつかる。

　ミノルは息を詰めた。

　どくん、と心臓が大きく脈打った。

　その時――。

《何か》が起きた。

　あらゆる音が消滅する。

　視界全体がわずかに青みがかる。

**靴底が路面から離れ、体が数センチ持ち上げられる。**

　ロードレーサーのハンドルからツノのように突き出したブレーキレバーが、ミノルの右腕に接触した。そのはずだった。

　だがミノルは何も感じなかった。痛みも、衝撃も、何かが触れたという感覚すらなかった。自転車は弾かれたように進路を右にずらし、大きくふらついたものの辛くもバランスを回復して、遊歩道の中央に戻った。ほぼ同時に、ミノルに訪れた〈何か〉が去った。

　世界の色が元に戻り、浮き上がっていた両足が路面に触れる。異様な静寂も消散し、様々な環境音が押し寄せる。

「気をつけろ！」

　という怒鳴り声は、自転車乗りのものだ。徐行しながら振り向き、サングラス越しにミノルたちを睨み付けてから、スピードを上げて北へと走り去っていく。

　大きな事故にならなくて良かった、と考える余裕は、ミノルにはなかった。

　――なんだ、さっきのは⁉

　不安定な姿勢のまま、鋭く息を吸い込む。強張る右手を動かし、目の前に持ってくる。

　自転車は、確かにこの手に接触したはずだ。掠めた、程度ではない。自転車の進路が変わるほどの衝突だったのだから、こちらも体ごと弾き飛ばされるか、そうでなくともアザのひとつ

くらいできていなければおかしい。

だが、右手をどれほど眺め回しても、打ち身も切り傷も見つからない。もちろん痛みも一切感じない。

「う……空木くん！　大丈夫⁉」

掠れた声に、ミノルは右手を下ろし、顔を左に向けた。

すると、両手を胸の前で握り合わせた箕輪朋美が、いまどきの女の子にしてはクッキリした眉を見事な八の字に固定し、両眼を零れ落ちんばかりに見開き、口をかまぼこ形に強張らせていた。

その、豊かすぎる表情を眺めているうちに――。

ミノルは、軽く噴き出してしまった。慌てて口を塞ぎ、謝る。

「ご、ごめん。箕輪さんが、すごい顔してるもんだから……」

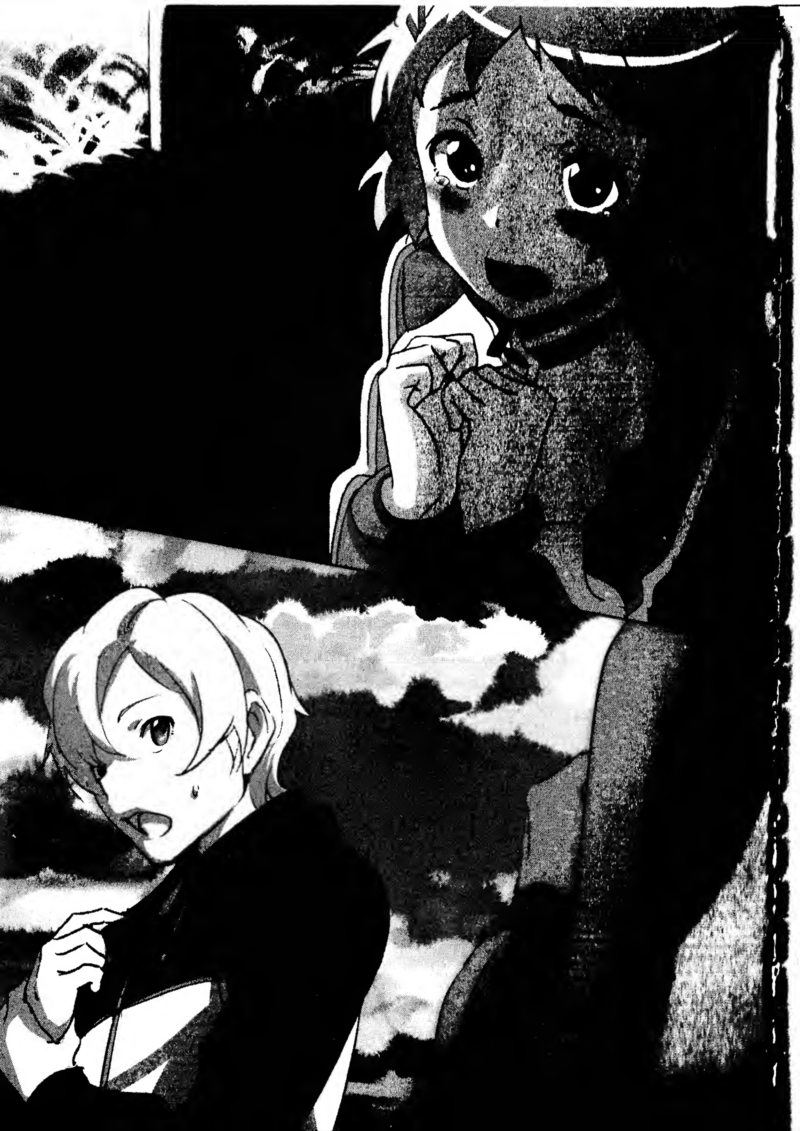
すると朋美はきょとんと眼を瞬かせ、次いで頬を真っ赤に染めた。

「な……なによ、心配してるのに！　顔に出すぎなのは昔からだもん！　それより、怪我は⁉　いま、自転車とぶつかったでしょ⁉」

「……うん、でも……」

ミノルは表情を改めると、朋美に自分の右手を示した。

「大丈夫だったみたいだ。どこも怪我してないよ」



「ほ、ほんと？　………よかった………」

これ以上ないほどホッとした表情を見せてから、朋美は軽く唇を噛み、いきなり深々と頭を下げた。

「ぼーっとしててごめんなさい！　それと、かばってくれてありがと！」

「い、いや……そっちも、怪我しなくてよかった」

ミノルがそう応じても、小柄な陸上部員は五秒近くも低頭し続けていたが、やがておずおずと顔を上げた。

「……あたし、前にも、この道で自転車にぶつかりそうになったの。だから、ロード練はずっと秋ヶ瀬でやってたんだけど……」

朋美が口にした地名は、埼玉県さいたま市桜区南西部の、荒川の本流と堤防の間に作られた大きな公園のことだ。ジョガーには人気のスポットだが、ミノルはあまり足を向けていない。秋ヶ瀬に限らず、大型の公園に入ると、ずっとずっと昔の記憶を刺激されるからだ。

「……この道は、自転車がスピード出してるからね。でも、何もなくてよかったよ」

思考を堰き止め、もう一度ミノルが繰り返すと、朋美はようやく笑顔を見せた。

「うん、ほんとにありがとう、空木くん。もうすぐ合同合宿だから、怪我したら大変なことになってたよ。やっぱり、空木くん、昔から……」

そこで言葉が止まったので、ミノルは軽く首を傾げた。

すると朋美は、少し迷うような表情を見せたあと、再び喋り始めた。

「……ほら、中二の時、教室で空木くんが珍しく大きな声出したことあったでしょ？　あたし、よく覚えてるよ。あの時、空木くんが怒ったの、先生がお姉さんのこと悪く言ったからだよね。あたしもすっごく腹が立って、先生に言い返したかったけど、怖くてできなかった。あの時、思ったんだ。空木くん、勇気あるなって……それと、優しい人なんだな、って……」

朋美の、その言葉を——。

途中から、ミノルはほとんど聞いていなかった。

息が詰まる。体の芯がかあっと熱くなり、それなのに手足は氷のように冷たくなる。

忘れなければならない——忘れたはずの記憶だったのに。あの場にいた全員が、もう誰ひとり覚えていないはずの記憶だったのに。

深く俯く。両手をきつく握り締める。塞がりかけた喉からどうにか空気を吸い込み、吐き出す。

「………空木くん……？」

訝しそうに呼びかける朋美の顔を見ずに、ミノルは掠れ声で言った。

「そ……そろそろ帰らないと、学校に遅刻しちゃうから。それじゃ……また」

そしてミノルは体の向きを変え、少し先にある階段へと全力で走り始めた。

こんなふうに逃げたら、箕輪朋美に変に思われる。正確には、変に思われたという、容易に

消せない記憶を抱え込んでしまう。

そう解っていてなお、走らずにはいられなかった。

……こんなにも、空気の如くあろうと努力しているのに。それなのに、どうしてひとは僕を記憶するのか。どうして、僕を独りにしてくれないのか。

孤独。

孤独になりたい。誰の記憶にも残らず、誰のことも記憶しない、そんな空白の世界で永遠にうずくまっていたい。

コンクリートの階段を駆け下り、住宅街に入っても、ミノルは懸命に走り続けた。

先刻、自分を襲った——あるいは守った異常な現象のことは、もうほとんど忘れていた。

## 2

ダメ。

まったくダメだ。料理の名に値しないクズだ。

という内心の罵声を完璧に押し隠しながら、高江洲晃はナイフとフォークを置き、ナプキンで口許を拭った。

ワイングラスを取り上げ、唇に当てると、口直しにこの硬くて滑らかな無機物を噛み砕いてしまいたい——という衝動が湧き起こるが、もちろん実行するわけにはいかない。

白ワインを一口含み、歯で噛むように味わってから呑み込む。ソムリエが大仰に薦めたわりには味も香りもいまひとつだが、料理に比べればまだマシだ。

グラスを右手に持ったまま、皿にまだたっぷりと残るパスタを見下ろす。

手打ちのフェットチーネは店の看板メニューと聞いていたが、この程度の出来なら、乾麺を使ったほうがまだしも喰えるだろう。乾麺と違って芯を残すことでアル・デンテに仕上げられない生パスタは、素材と生地造りと茹で加減に細心の注意を払わなければ、パスタの命である歯ごたえを簡単に失ってしまう。

この店のフェットチーネが、まさにそれだ。粉が悪いし、捏ね方が悪いし、茹で方が悪い。

結果、噛んでもまったく歯ごたえがなく、にちゃにちゃべたべたと絡みつくだけの代物に成り果ててしまっている。

歯ごたえ。

高江洲が主に評論しているイタリアンに限らず、あらゆる料理で最も重要視されるべき要素は、味でも香りでも盛りつけでもなく歯ごたえ――食感だ。

噛みつき、引き裂き、割り砕き、磨り潰す。その行為が人間の原始的な本能を活性化させ、食事に充足感を与える。誰だって、黒毛和牛のステーキをフードプロセッサーでドロドロにした液体よりは、三百円の牛丼の筋張った輸入肉のほうが旨いと感じるはずだ。

食感を生かすセンスのない料理人は、結局それ以外の能力も低い。このぶんでは、次に出てくる肉料理（セコンド・ピアット）も期待外れだろう。いっそ席を立ってしまいたいが、そうもいかない。ここの常連だとかいうマスコミ関係者の紹介で訪れたので、それなりに持ち上げた記事を書かねばならないのだ。

いやいやフォークを手に取り、犬のエサ以下のフェットチーネをなんとかもう一口呑み込んだところで、厨房からコックコート姿の男が歩み出てきた。

清潔感のないひげ面に大きな笑みを浮かべている男は、確かこの店のオーナーシェフだ。

「ようこそ、高江洲先生！　いかがですか、これまでのところは！」

大声で呼びかけられ、上辺だけの笑顔を返す。

「どうも、楽しませて貰ってますよ」

「いやあ、それは嬉しいなあ。このあとも腕によりをかけた料理をお持ちしますからね、おっと、これは店からのサービスです。次の皿にピッタリですよ！」

と言ってシェフがテーブルに置いたのは、赤の発泡ワイン（スプマンテ・ロッソ）が注がれたフルートグラスだ。

ワインを、しかもスパークリングを、ボトルも見せずに裏で注いでくるとはどういうセンスなのか。再び苛立ちが込み上げるが、シェフは気付いた様子もなく、なぜかこのタイミングで握手を求めてくる。

やむなく立ち上がり、にこやかに右手を握り返しながら――。

………噛んでやろうか。

内心で、呟く。

とても料理人の右手とは思えない、無骨で、粗雑で、タバコのヤニまで染み込んだ指を持ち上げ――おもむろに噛み付く。

前歯で皮膚と肉を切り裂き、中節骨に到達したら、ゆっくり力を入れていく。するとまず外骨膜がぱりんと砕け、緻密質がさくりと断たれ、ハバース管がぷちぷちした歯触りを添える。そして内骨膜が最後の抵抗感を演出する。ぐっと噛み切ると、汁気たっぷりの骨髄が弾ける。

アル・デンテ。アル・デンテ。歯が気持ちいい（コモード・アル・デンテ）。

「……先生？」

少々の当惑を滲ませた声で呼びかけられ、高江洲は瞬きした。自分がシェフの右手を握ったままであることに気付き、笑顔を浮かべたまま手を広げる。

「これは失敬、この右手が今夜の素晴らしい料理を生み出したのかと思うと、感激してしまいましてね」

するとシェフは、左手で右手をさすりながらぎこちない笑みを返してきた。

「いや、はは。こちらこそ、先生ほどの方にそう仰って頂けて感激ですよ」

少し決まり悪げなのは、高江洲に五秒ほど手を握られたからではなく、料理の大部分を自分では作っていないからだろう。もっとも、そこに文句をつける気はない。ヤニ臭い手で捏ねた生パスタなど食わされた日には、人間関係をひとつふたつ失っても、雑誌でとことんこき下ろさずにはいられない。

そそくさと厨房に戻るシェフを見送り、高江洲はオーダースーツの襟元を整えると、椅子に腰掛けた。

スプマンテを一口含み、下顎の軟組織で疼く《あれ》を冷やす。

ずきん。ずきん。

痛痒いような、不快でもあり心地良くもある感覚の源は、直径二センチ弱のしこり。医者には行っていないが、腫瘍の類ではないことは確信している。なぜなら、まるで生き物の目玉のような赤い球体は、高江洲の体内で生まれたものではないのだから。

目玉は、どこか《外》からやってきたのだ。東京の……日本の……もしかしたら、地球の外側から。そして三ヶ月前のある夜、高江洲の下顎に潜り込み、二つのものを与えた。

一つは、噛みたい、という衝動。

もう一つは、それを実行するための能力。

以来、あれ——もう体内にあるのだから《これ》と呼ぶべきかもしれないが——は、絶えず高江洲を誘惑してくる。

咥えよう、噛み切ろう、そして咀嚼しよう、と。

お前はもう人ではない。都市の底をしなやかに泳ぎ、獲物を狩る捕食者なのだから、と。

だが高江洲も、まがりなりにも美食評論家を名乗っている以上、噛む価値のないものを口に入れる気はない。たとえば、先ほどのオーナーシェフの、ヤニくさい指の如きものは。

……もう少し、ガマンしろ。

口の中で目玉に囁きかけると、疼きが徐々に薄れていく。だが、そう長くはおとなしくしていないだろう。前に骨を噛んでから、今日で一週間も経っている。

七日前の、愉悦に満ちた饗宴を思い出しそうになった時、ようやくウェイターが主菜の皿を運んできた。載っているのは、何のオリジナリティもない仔牛のサルティンボッカ。ひと目見ただけで味を想像できる。そのうえ火が通りすぎだ。

せめて肉が骨付きなら……いや、たとえそうでも、手づかみで丸ごとぽりぽり齧るわけにも

いかないが。

ため息をつく代わりに、楽しみで堪らないというような作り笑顔を浮かべながら、高江洲はナイフに手を伸ばした。

店を出た途端、やれやれとばかりにかぶりを振ってから、高江洲は愛車を停めたコインパーキングへと歩き始めた。

道は広いが、夕方の六時にしては人通りが少ない。頭上にそびえる高層ビルも、ほとんどの窓が暗く沈んでいる。さいたま新都心などと名前は威勢がいいが、ここが新宿に取って代わる日が果たして来るのだろうか。

少なくとも、それまでに背後のイタリアン・レストランが廃業していることだけは確実だ。そんな店の提灯記事を書かねばならない自分にも腹が立つ。

にちゃにちゃした生パスタの食感が、まだ口の中に居座っている。さっさと愛車に戻って、何はともあれ歯を磨きたい。グローブボックスにはミネラルウォーターのボトルと、旅行用の歯磨きセットが常備してある。ペーストをたっぷり付けたブラシで、力いっぱい、ごしごし磨きまくれば少しは気分も晴れるだろう。

ごしごし、ごしごし。

いまの高江洲の歯は、何時間磨き続けようとも、まったく痛まないのだから。昔と違って。

東京に戻ったら、次の骨を手に入れて、綺麗になった歯で、心ゆくまで噛む。

ターゲットは四つほど見つくろってある。計画は前回以上に慎重に練る必要があるが、晩餐のメニューをあれこれ考える時間もまた楽しいものだ。

注文靴の踵を音高く鳴らしながら、さいたまスーパーアリーナ横の道を数十メートル歩いてパーキングに戻る。入り口でしばし立ち止まり、奥の区画に駐めたダークブルーのマセラティ・グラントゥーリズモを眺める。

力感に溢れるグラマラスなボディ。牙のように輝く横長のオーバル・グリル。魚の鰓を思わせる三連のエア・アウトレット。

この車は鮫だ。しかも、全てのサメ類の中で最も速く泳ぐアオザメ。高江洲が四番目に好きな鮫。

コクピットに収まり、近くの入り口から高速に乗ってスロットルを踏み込めば、気分も少しは晴れるだろう。その前に、まずは歯磨きタイムだ。

愛車に歩み寄り、ドアロックを解除しようとした――その時。

高江洲は、ぴたりと動きを止めた。

いいにおい。

くん、くん、と鼻を蠢かせる。十二月の底冷えする空気の中に、ほんのりと甘い匂いが含まれている。花でも、ましてや香水でもない。

健康で、ほどよく鍛（きた）えられ、しっかりと詰まった、肉と骨の匂（にお）い。嗅覚（きゅうかく）に次いで鋭敏（えいびん）な聴覚（ちょうかく）が、たったっと軽快な足音を捉（とら）える。大柄な愛車に寄り添うように立ち、近づく足音の主を待ち受ける。

やがて視界に現れたのは、歩道をジョギングする、ジャージ姿の若い女だった。中学生か、高校生。短い髪は染められておらず、化粧品その他の化学物質の匂いもしない。汗に濡（ぬ）れる肌からは、健康的な、ミルクを思わせる体臭だけが放散されている。

とっても、いいにおい。

目を閉じ、足音に意識を集中する。

シューズがアスファルトを叩（たた）く乾いた音の中に、骨の響（ひび）きを聞き取る。高江洲（たかえす）がことのほか好むスネの骨——伸びやかな頸骨（けいこつ）としなやかな腓骨（ひこつ）が奏（かな）でるハーモニーを。

素晴らしい。

骨の外層を作る緻密質（ちみつしつ）が、その名の通りきめ細かく詰まっている。幼い頃（ころ）から良質のカルシウムやビタミンをたっぷり摂取（せっしゅ）してきたのだろう。鍛えられた筋肉の奥で、真珠（しんじゅ）のように白く輝（かがや）く外骨膜（がいこつまく）が眼に見えるようだ。

足音がパーキングの前を通り過ぎると、高江洲は眼を開け、ちろりと舌で唇（くちびる）を舐（な）めた。

ずきん、ずきん。下顎（したあご）の中央で、赤い目玉が疼（うず）く。

噛（か）もうよ、噛もうよ、と誘（さそ）いかけてくる。

「……そう焦（あせ）るなよ、相棒（コンパーニョ）」

囁（ささや）き返すと、少し待ってからパーキングを出た。

少女の後ろ姿はかなり小さくなっている。だが高江洲の、鮫（さめ）のように研（と）ぎ澄（す）まされた嗅覚を以（もっ）てすれば、完全に見失っても跡をつけるなど造作もないことだ。

コートの襟（えり）を立て、その陰で薄（うす）く微笑（ほほえ）みながら、高江洲は歩き始めた。

## 3

十二月四日の水曜日は、近付きつつある低気圧を予感させる薄曇りだった。

さいたま市桜区の北端にある自宅から、首都高埼玉大宮線とJR埼京線、東北本線を越えてすぐの高校までの約六キロを、ミノルは自転車で登校している。昨日あわや衝突しかけたようなスポーツタイプではなく、何の変哲もない軽快車だ。

六キロ程度なら足で走れる距離だが、学校で着替えが必要になるし、何より運動部でもないミノルがそんな真似をすれば妙な目立ち方をしてしまう。残り三週間余りとなった二〇一九年を、いかに無難に、波風立てずに乗り切るか。それが、現在のミノルの、唯一にして最大の関心事なのだ。

そういう意味では、昨日の朝の失態が大いに悔やまれる。

箕輪朋美との別れ際に、動転して走り去ってしまったのはまったく愚かだった。

それ以前に、ロードレーサーの接近に気づいてからすぐに動ければあんな大げさな庇い方をせずとも朋美を退避させられただろうし、そもそもあんなに長々と話し込まずに挨拶くらいで切り上げることだってできたはずだ。

誰かと長く会話を続けても、消したい記憶が増えてしまうだけだと解っていたつもりだった

のに。

しかし、起きてしまったことはもうどうしようもない。

朋美が昨日の一幕をすぐに忘れてくれるよう祈りつつ、当分は接触を回避し続けるしかないだろう。すでに、今朝からランニングコースは変更している。同じ学年なのだから学校内ですれ違ってしまうくらいは仕方ないが、まさか向こうも、他人の眼がある場所でミノルのようなポジションの生徒に話しかけてはこないはずだ。何せ朋美は、全国大会に出場した経験のある陸上部のホープ――つまり、学校内ヒエラルキーの最上層に属する生徒なのだから。

などという思考を巡らせつつ約六キロの道のりを走ったミノルは、自転車を生徒用駐輪場の端に停めると、きっちりと施錠した。帰ろうとしたら自転車がない、というようなトラブルは極力回避したいので、キー式の頑丈なワイヤーロックを使っている。

防水素材のメッセンジャーバッグを背負い直し、マフラーに顔の下半分を埋めて、他の生徒たちに混じって昇降口へと歩く。

下駄箱から上履きを出し、スニーカーを入れて金属扉を閉めると、三桁のダイヤルロックをランダムに動かす。本当はここにも小型の南京錠などをつけられれば安心なのだが、悪目立ちしてしまうリスクのほうが大きい。高校生にもなって靴を隠すような悪戯をする奴がいるとも思えないし、ほとんどの生徒はダイヤルロックさえ使わないが、これはもう性分なので致し方ない。

——結局、僕は、他人を信用していないんだろう。

——それは今更改められないから、せめて表に出さないようにしないと。今日はいちにち、誰とも余計な話をせず、静かにしていよう。まあ、僕の性癖なんか、気にする奴はいないと思うけど。

と、朝から後ろ向きな省察にふけっていると。

誰かが、後ろから背中をぽーんと叩いた。同時に、元気いっぱいな声。

「おっはよ、空木くん！」

一瞬全身を強張らせてから、ぎこちなく振り向く。

上下ジャージ姿の箕輪朋美が、無邪気な笑顔を浮かべて立っていた。ノート類と筆記用具、そして部活の道具が全て入っているらしい黄色のデイパックを背負い、額に軽く汗を滲ませている。

学校で話しかけてはこないだろう。

という数分前の推測があっさり否定されてしまったことに戦慄しつつも、ミノルはどうにか挨拶を返した。

「……おはよう、箕輪さん」

こうなってしまった以上、先んじて昨日の唐突な逃走を謝罪するべきだろうが、自分からどう切り出せばいいのか判らない。だからと言って朋美がすぐ近くにいるのに黙り込むのもいかがなものか。なんとか自然に、当たり障りのない対応を……。

などと超高速で思考した結果口から出たのは、

「毎日、走って登校してるの？」

という質問だった。

すると朋美は、ランニングシューズを脱いで簀の子に上がりながらこくりと頷く。

「うん、軽くだけどね。っていうか……いままで、自転車の空木くんに追い抜かれたこと、何度もあるけどね」

「え……ご、ごめん、気付かなかった……」

謝ってから、何となく気になって質問を重ねる。

「箕輪さんの他にも、そういう人いるのかな」

「んー、陸上部だと、あたしの他には男女合わせて三人くらいかな。運動部全体ならもっといると思うよ？　このへん、歩道広くて走りやすいから」

「へえ……そうなのか……」

「空木くんもやってみる？　お家、どのへんだっけ？」

「あ、桜区の、浄水場の近く」

「あのへんかあ、けっこうあるねえ。片道六キロくらい？」

「そんなもんかな。箕輪さんは？」

「四キロちょい。空木くんちからけっこう近いよ……って、同中だったんだから近くて当たり前だよね」

　――というようなやり取りを、昇降口から教室に向かって歩きながらごく自然に交わしてしまったのは、ミノルが半ば上の空だったからだ。自分も走って登校することが可能かどうか、頭の半分を使って検討していたのである。

　トラブル回避のために、持ち歩くモノは最小限に抑えたいミノルなので、自転車も使わずに済めばそれに越したことはない。半年に一回はパンクして最寄りの自転車屋まで押し歩きするはめになるし、いままで経験はないが、歩行者や自動車と接触するリスクは明らかに徒歩より高い。

　だが、やはり、帰宅部のミノルが走って登校すれば奇異に思う者はいるだろう。バッグも、背負えるタイプに買い換える必要がある。それくらいの貯金はあるが、いまの肩掛けバッグは義姉の典江が今年の四月に買ってくれたばかりなので、たった半年で使わなくなるのは心苦しいし、消費税も十二パーセントに上がったばかりだし……。

「……ぎくん。空木くんってば」

「え……あ、ご、ごめん」

「教室ついたよ」

　そう言われて、自分がいつの間にか一年一組のドアの前に立っていることに気付く。

　朋美はくすっと笑うと、

「もしジョギング登校するなら、朝はどっかで待ち合わせて一緒に走ろ。じゃあ、またね」

と手を振り、自分の教室のほうへと駆けていった。

　自分が陸上部のホープと長々と会話してしまったこと、それを多数の生徒に目撃されていたことを遅まきながら認識し、内心で呻く。

　――毎朝一緒に走って登校？

　とんでもない、有り得ない、考えただけで恐ろしい。

　時間を五分巻き戻してくれ、いや昨日の早朝までの二十七時間ほど頼む。それが無理なら、僕と箕輪さんが喋っている場面の記憶を全校生徒から消してくれ。

　世界の創造主に向けてそう念じながら、ミノルは教室に入った。

　もちろん、時間は戻らなかった。

　そして、喋りながら歩くミノルと朋美を見た生徒たちの記憶も消えなかった。

---

　放課後。

　下駄箱のダイヤルロックを解除し、扉を開けたミノルは、ひらりと舞い落ちた小さな紙片に気付いた。恐らく、扉とフレームの間に挟まっていたのだ。

嫌な予感をひしひしと覚えつつ、簀の子の上に落ちた紙片を拾い上げる。ノートを千切ったらしき紙には、殴り書きされた文字が並ぶ。

曰く、格技場の裏まで来い。

「……おお……」

この手の呼び出し状のようなものを受け取ったのは初めてなので、思わず口から感嘆詞が漏れるが、呑気に構えてもいられない。

紙片の指示に従う、あるいは無視する。平穏な学校生活を維持するためにはどちらを選択するべきなのか、真剣に考える必要がある。

とりあえず靴を履き替え、昇降口から出たところで再び立ち止まり、左右を見やる。駐輪場に行くなら左、格技場へと向かうなら右だ。

胸に吸い込んだ空気を、長いため息に変えてはあーっと吐き出してから、ミノルは右に体を回した。

呼び出された理由は、箕輪朋美と会話した件しか思い当たらない。もちろん待っているのは朋美本人ではなく、一件を不愉快に思う第三者だろう。ミノルが彼女に対して積極的な意図を持たないことを呼び出し人に納得してもらえば、今回限りのイレギュラーな出来事で終わるはずだ。

何本かの渡り廊下を横切り、体育館脇を通り抜けると、前方に四角い格技場が見えてくる。

横と裏手は小規模な雑木林のようになっていて、冬はこの時間でもかなり薄暗い。ミノルも、足を踏み入れるのは初めてだ。

湿って滑りやすい地面を慎重に歩き、建物の角を回った途端、行く手から複数の声が聞こえてきた。

「おっ、来た来た。カラアゲくんおごれよな」

「マジかよー、来なくていいよー」

「ちょ、呼び出せっつったの先輩じゃないすか」

歩きながら前を見ると、揃いのウインドブレーカーを着た複数の男子生徒が目に入る。会話の感じからして、壁に寄りかかる二人が上級生、少し離れて立つ一人が一年生か。

五メートルほど離れた場所で足を止めると、ミノルは無言で生徒たちを観察した。

この高校にはもともと本格派のヤンキーだのチーマー的な生徒はいないが、それにしても、三人ともに外見的な剣呑さはまるで感じられない。ミノルが来るか来ないかでささやかな賭けはしていたようだが、雰囲気はいたって普通の運動部員だ。

安堵と警戒をない交ぜにしつつミノルが立っていると、上級生の一人が壁から離れ、気さくな笑みを浮かべて言った。

「えーと、きみが空木くん？　悪いね、急に呼び出しちゃって」

「…………いえ」

最小限の言葉だけを口にしながら、三人を更（さら）に観察する。

話しかけてきた長髪の上級生は笑顔だが、後ろで壁に寄りかかる坊主頭（ぼうずあたま）は、カラアゲくんをゲットしたにもかかわらずムスっとしている。呼び出し状を書いて下駄箱（げたばこ）に挟（はさ）んだのは一年生らしいが、命令されてやっただけなのだろう。

再び黙（だま）り込んだミノルに、長髪は新たな、そして核心的な質問を投げ掛けてきた。

「ちょっと立ち入ったこと訊（き）くけどさ、空木（うつぎ）くんって、ウチの箕輪（みのわ）ちゃん狙（ねら）ってるの？」

やはり、という納得（なっとく）と、まさか、という驚（おどろ）きが同時に訪れる。

箕輪朋美（ともみ）に関連する呼び出しだとは思っていたが、昇降口から教室までの、ほんの二、三分のあいだ話しただけで《狙ってる》ことになるとは。

ウチの、という発言からして陸上部員らしい三人に向けて、ミノルは用意していた言葉を返した。

「中学で同じクラスだったから、ちょっと話をしただけです」

少し考え、ひと言付け加える。

「……別に、狙ったりとかしてません」

しかし長髪男は薄（うす）い笑みを浮かべたまま、でもさあ、と首を傾（かし）げた。

「空木くん、ふだん女子と喋（しゃべ）ったりとか全然しないみたいじゃん？　なんで箕輪ちゃんとだけ話すわけ？」

「全然……ってわけじゃないですよ。話しかけられれば、返事くらいしますし……」

「でも、情報によると、けっこう長く話してたっぽいよ？　オグッチ、何秒だっけ？」

長髪に問われた一年生は、慌（あわ）てたようにかぶりを振る。

「い、いや、タイム取ってたわけじゃないっすから。えっと……だいたい、十五分くらいかなーって……」

下駄箱から教室までそんなにかかってたまるか、と言い返したくなるが我慢（がまん）する。十五分が三分になっても、それが会話であることに変わりはない。

――狙ってたらどうだっていうんですか？

などと格好良く言い返してやりたい気持ちも、まったくないわけではない。だが実行すれば向こうも引っ込みが付かなくなるだろうし、ミノルも家に帰ってから一時間ばかり頭を抱えて呻（うめ）くこと必定（ひつじょう）。あらゆるトラブルは頭を低くしてやり過ごす。この八年間、ずっとそうやって生きてきたのだ。

「……あの、ほんとに、箕輪さんにちょっかい出そうなんて気はまったくないですから」

長髪男の胸元あたりに視線を据（す）えて、きっぱり言い切る。

だが、敵は予想外にしつこかった。

「ふーん。でもさあ、次にまた箕輪ちゃんに話しかけられたらどうするわけ？」

「知……」

りませんよそこまで、と言いかけてから危うく修正する。

「知り合いですから、挨拶くらいはしますけど、でも……」

「いいよもう、めんどくせー」

唐突に割り込んできたのは、後方で背中を壁に預けていた坊主頭だった。

ウインドブレーカーのポケットに両手を突っ込んだまま、体のバネだけで直立すると、長髪の横を通ってすたすた歩み寄ってくる。

目の前で立ち止まった坊主頭は、ミノルの眼の高さにある鼻をフンと鳴らし、どすの利いた声で囁いた。

「おまえ、理数クラスなんだって？　だったらお勉強だけしてりゃいいんだよ。ウチの女子にちょっかい出すとかマジありえねーから」

ちょっかいなんか出してません、と答える猶予は与えられなかった。

坊主頭が、ポケットから引き抜いた左拳を、無造作にミノルの腹へと叩き込んだ——正確には、叩き込もうとしたからだ。

ミノルは、反射的に体を屈め、腰を引いた。だがその程度の動きで回避できるはずもない。

大人のように筋張った拳が、みぞおちに吸い込まれる。下腹を殴られた時の、絶望的な痛みをありありと予感し、ミノルは呼吸を止めた。

だが、痛みは、現実のものとはならなかった。

あの現象が、再び引き起こされたのだ。

視界の色相が変わる。

あらゆる音が消える。

両足が、湿った土から離れる。

まるで、世界から、切り離されたかのような。

坊主頭のパンチが、下腹を抉った。

なのに痛みも、衝撃も、何かが触れたことすら感じられない。昨日の朝、ロードレーサーのハンドルに接触した時と、まったく同じ………。

いや。

触れていない。

見開いた両眼で、ミノルは確かに見た。停止した坊主頭の拳と、ミノルの着ている学生服のあいだに、ほんの数ミリだが隙間が空いているのを。

殴るふり……？　激突する寸前に止めたのか……？

静寂の中でそう考え、顔を上向けたミノルが見たのは、激しく歪められた坊主頭の顔だった。怒りではなく——恐らく、苦痛に。

再び息を呑んだのとほぼ同時に、怪現象が消え去った。色と、音と、地面の感触が戻る。パンチは届いていないが、自ら腰を引いた勢いのままに後退り、湿った落ち葉に足を滑らせ

て、ミノルは尻餅をついた。

　後方で、長髪男は憐憫の笑みを、一年生は奇妙に強張った笑いを浮かべている。二人とも、坊主頭を襲った異変に気付いていない。

　左拳を右手で包み、歯を食い縛る坊主頭は、迸りそうになる悲鳴を必死に堪えているように見えた。

　柔らかい人体ではなく、コンクリートの壁か何かを、思い切り殴ってしまった人間の表情。

　痛みは数秒で和らいだらしく、坊主頭はゆっくり息を吐き出すと、座り込んだままのミノルを異様な目つきで見下ろした。

「……おまえ……」

と掠れ声で呟く。いまの感触はいったい何なのか、と考えているのだろう。

　幸い、深く追及する気にはならなかったようで、低く吐き捨てる。

「調子乗んなよ。次は、こんなもんじゃ済まさねーぞ」

　足早に去って行く坊主頭を、一年生が小走りに追いかける。

　二人に続いた長髪が、横を通り過ぎざま、

「悪いね空木くん、でもこういうのは、世の習いってやつだからさ」

と投げ掛けていった言葉を、ミノルはほとんど聞いていなかった。

　頭の中では、もし、という言葉が何度も繰り返される。

　もし……もし、もしも、あの瞬間、自分から思い切り腰を引いていなければ。

　もしパンチに反応できず、棒立ちになっていたら。

　坊主頭の拳は、骨まで砕けていたのではないか。

　いかなる根拠もない、ただの直感だ。しかし、それは確実に起きていたことだと、ミノルは疑いもなく信じた。

　――さっきのは、なんなんだ。

　――あの坊主頭は、いったい、何を殴ったんだ？

　呆然と座り込んだまま右手を持ち上げ、制服の上から胸骨に触れる。

　何もない。だが、何かがある。

　何かが……いる。

「……おまえが、やったのか」

　喘ぐような問いかけに、答える声はなかった。

---

　どこをどう通って下校したのか――。

　我に返った時、ミノルは自宅のポーチで、自転車の鍵を掛けていた。

　腕時計を見ると、時刻は午後六時三十分。すでに空は真っ暗で、ささやかな庭越しに見えるリビングの窓からは温かな光が漏れている。義姉の典江がもう帰宅しているのだろう。

ふと気付き、バッグを覗（のぞ）くと、帰りに返却するつもりだった図書館の本はなくなっていて、代わりに別の本が入っている。どうやら自動操縦状態のまま市立図書館に寄り、本を返して、新しく借り出してきたらしい。

事故を起こさなくてよかった、とぼんやり考えながら玄関ドアに歩み寄る。

典江（のりえ）に話したことはないが、彼女が先に帰っている日は、ドアを開ける時にほんの少しだけ緊張（きんちょう）する。そんなはずがないと頭では解（わか）っていても、どうしても想像してしまうのだ。家に入った途端（とたん）、血まみれで倒（たお）れている典江を見つけるのではないか、と。

左手に握（にぎ）ったままだった自転車の鍵（かぎ）を、大型のディンプルキーに持ち替える。

在宅中でも、必ず玄関と勝手口を施錠（せじょう）するのがこの家のルールだ。キーを鍵穴に差し込み、左に回すと、がちんと頼（たの）もしい解錠音が響（ひび）いて、ミノルは軽く息を吐（は）く。

ドアを開けて玄関ホールに入り、振り向いてサムターンを確実に回す。

まだ靴を脱がないうちに、ぱたぱたと小走りに近づいてくるスリッパの音が聞こえた。続いて、ふんわりしたトーンながら活力に満ちた声。

「おかえりなさい、みーくん！」

「ただいま」

と、自然に挨拶（あいさつ）を返せるようになるまでには、一年ほどもかかったものだ。

そんなことを考えながら、スニーカーを自分専用のスリッパに履（は）き替えて廊下に上がる。

目の前に立つのは、エプロンをつけて右手におたまを握った妙齢の女性。身長は箕輪朋美（みのわともみ）と同じくらいだが、とうに追い抜いてしまったいまもさして小柄に感じられないのは、義理の姉という続柄のせいだろうか。

由水（よしみず）典江、八年前に家族を失ったミノルを引き取り、育ててくれた人だ。

「あの……典江さん、何度も言うけど、料理中は玄関まで出てきてくれなくていいから……」

おたまを見ながらミノルがそう言うと、典江は笑顔をくるりと不満そうな表情に変えた。

「みーくんも、何度も言うけど、さん付けなくていいから！」

「そう言われても、もうこの呼び方で慣れちゃったし……あ、なんか、台所でかたかた言ってるよ」

ミノルの言葉に、典江はしばし沈黙（ちんもく）してから、

「きゃーっ、おナベ噴いちゃう！」

と叫んで廊下をぱたぱた駆け戻っていった。

ふう、と軽く息を吐き、二階への階段を上りかけたミノルの耳に、再び大ボリュームの声が届く。

「今日は餃子（ギョーザ）だよ！　包む人、一名様募集中！」

「……着替えたら、すぐに行きます！」

と大声で返事をして、ミノルは階段を駆け上った。

築十五年、４ＬＤＫの戸建て住宅の二階にある八畳間がミノルの部屋だ。

なるべくモノを持たないというポリシーに従って、家具は少ない。東側の壁際にローベッド、西の壁には造り付けのクローゼットと本棚、南の掃き出し窓の隣にシンプルな机と椅子。デスクの上には典江のお下がりのノートＰＣがひとつ置いてあるが、テレビやレコーダー、ゲーム機の類は存在しない。本棚にも小説や学術書が三十冊ほど並んでいるだけで、仮にこの部屋に誰かが遊びにくれば時間の使い方に困りそうだが、幸か不幸か、そこまで親しい友達もいない。

学生服の上下をハンガーに掛け、ワイシャツとＴシャツも脱いで、ボクサーブリーフだけの姿でクローゼットから着替えを取り出そうとしたミノルは、ふと手を止めた。

クローゼットの扉の内側には、大きな鏡が取り付けられている。そこに映る半裸の自分に、視線が吸い寄せられる。

暗そうなヤツ、という感想を間接的に聞かされることが多いミノルだが、自分でもまったくその通りだと思う。

目つきはどこか懐疑的で、口許は笑い方を忘れてしまったかのように固く引き結ばれている。眉の下まで伸びる前髪は、走っている時は邪魔なのだが、これ以上短くする気にはなれない。体つきは痩せ形というより貧弱で、ことに首や肩幅の頼りなさは、まるで女の子のようだ。

更に、どこか薄く感じられる髪の色が、陰気な印象を決定づけている。白髪というほどではないが、光の当たり具合で灰色に見えるのだ。これは生来の色ではなく、八年前の一夜を境にこうなってしまった。黒く染めるのは簡単なのだろうが、髪色に関して教師や同級生に何かを言われたことはないので放置している。

自分の姿が、見た目には以前と変わっていないことを確認したミノルは、最後に裸の胸――浮き出た肋骨の真ん中を凝視した。

白い皮膚には、傷も、凹みも、出っ張りも存在しない。

だが、もはや否定はできない。三ヶ月前の出来事は、白昼夢ではなかったのだ。

この場所に、何かが潜んでいる。そいつが不可解な現象を引き起こし、自転車のハンドルと、上級生の拳がミノルに触れることを阻んだ――。

結果的には怪我から守ってくれたことになるが、感じるのは有難さよりもむしろ薄気味悪さだ。いままでミノルが生きてきた世界の常識では説明できない、異常なことが起きているのかもしれないと思うと、剝き出しの肌がぷつぷつと粟立つ。

しかし。

「……常識……」

小声で呟いた途端、悪寒はどこかに去っていく。

常識。コモン・センス。

ミノルが持っている辞書には、【常識】の項目に、森鷗外（もりおうがい）の手になる一文が引用してある。

——常識ハ普通ノ事理ヲ解シ適宜ノ処置ヲナス能力ナリ。

普通のことを理解し、適切に処置する能力が常識であるのなら、ミノルはそれを見失ってしまった。普通と異常の境界がどこにあるのか、よく解（わか）らないのだ。

毎朝十キロ走るのは普通？　異常？

休日に遊ぶ友達がいないのは普通？　異常？

家に入り込んできた何者かに家族を全員殺されるのは？　そしてその犯人が、八年も経（た）つのにまだ捕まっていないのは普通なのか？　異常なのか？

もしもそれらが全（すべ）て普通だというのなら——空から降ってきて体に潜（もぐ）り込んだ何かのせいでタイムが向上したり、するはずの怪我（けが）をしなかったりするのも、恐れおののくほどのことではない。今年の夏には、地球外文明から発信されたという電波が月の望遠鏡でキャッチされて大（おお）騒（さわ）ぎになったのに、それも半年足らずで沈静化してしまったのだから。

起こり得ることは、なんでも起きる。

あるいは、この世界ではなんだって起こり得る。

ミノルは鏡の中の自分から視線を引き剝（は）がし、着古したトレーナーとコットンパンツを身につけて部屋から出た。

一階の洗面所で念入りに手を洗い、うがいをしてからリビングに入ると、奥のキッチンから

大きなボウルを抱えた典江（のりえ）がぱたぱたと駆け寄ってくる。

「ナイスタイミング、みーくん！　ちょうど具の用意ができたとこだよ」

「あ、すぐ……」

手伝うよ、と言いかけながらボウルを見下ろし、一秒ほど絶句する。

「……ちょっと、多すぎないかな、コレ」

キャベツ、白菜、ネギ、ニラ、挽肉（ひきにく）、そして粗く叩（たた）いた芝（しば）エビを混ぜ合わせた餃子（ギョーザ）の具は、ボウルの底からこんもりと盛り上がっている。この家に暮らすのは典江とミノルだけ、しかも二人ともあまり量を食べるほうではないので、どう考えても残ってしまいそうだ。

しかし典江は、ボウルをダイニングテーブルに置きながら、得意そうに言った。

「作りすぎても、冷凍しておけばかなり長く保（も）つのよ。粉を振ってから急速冷凍するのがコツなんだって」

ということは、近々また餃子の日が来るわけだな、と思いながらミノルは椅子（いす）に腰掛けた。

テーブルには、さすがにこれは既製品の皮と、完成品を並べるための大きなステンレスバット、接着剤となる水を満たした器などが並べられている。

ミノルの向かいに座った典江は、にやりと不敵な笑みを浮かべると、

「どっちがいっぱい作るか勝負だからね、みーくん」

といきなりの開戦を宣言した。

「や、やめようよスピード勝負とか……皮がちゃんと閉じてなくて悲しいことになる未来しか想像できないよ」

「焼き餃子だからちょっとくらい隙間あってもへーきへーき！　よーいドン！」

……これで、県庁の副主査さんだっていうんだからなあ。

と内心で呟きながら、ミノルも急いでスプーンを手に取った。

　適量すくった具を薄い皮で包み、ひだを作りつつ圧着していく作業を手早くこなしていると、集中しているつもりでも思考が少しずつ過去へと彷徨い出していく。

　孤児となったミノルをこの家に連れてきた八年前から、典江はいつも笑顔を絶やさず、姉代わり、母親代わりを務め続けてくれた。

　しかし、当時、典江は大学を卒業して県庁に就職したばかりだったのだ。ずっと大人に思えたけれど、いまのミノルとはたった七歳しか違わない。七年後、二十三歳の自分が、名前くらいしか知らない子供の面倒を見られるとはまったく思えない。

　――うちの子になりなよ。

　典江は、あの時、俯くミノルにそう言ってくれた。

　優しく微笑みながら、一切の迷いも、躊躇いもない声で。

　凄惨な事件によって一夜にして家族を失ったミノルを引き取ることには、ほとんどの親族が難色を示した。当時はまだ存命だった典江の父親も、すでに夫人（典江の母親）と死別して娘

と二人暮らしだったこともあり、難しいと考えていたようだった。

だが、そんな父親を、典江は懸命に説得したらしい。

典江にとって、ミノルは母方の従兄の子供、つまり《いとこ違い》にあたる。それまで数えるほどしか会ったことがなかった、五親等も離れた子供のために、大学を出たばかりの典江がどうしてそんなに親身になってくれたのか。それを、本人に直接訊ねたことはない。

だが、この家に来て一年ほど経った頃、典江の父親である由水弘平氏から教えられた。

典江も、ミノルと同じ八歳の時に、母親を交通事故で亡くしていること。

それ以来、中学生の頃までは、ほとんど笑わない子供だったことを。

最初は娘のためを思って養子縁組に反対したものの、ミノルの養父となってからは厳しくも優しく接してくれた由水氏は、四年前に脳出血で倒れ、世を去った。典江もまた、若くして両親を失ってしまったことになる。

彼女の顔から笑みが消えたのは、共に暮らした八年間で、由水氏が亡くなった時だけだ。

---

「はい、おしまい！」

という典江の声で、ミノルは物思いから醒めた。

ボウルは綺麗に空になり、ステンレスバットには乳白色の餃子が、手前と奥に分かれて整列している。典江が「にーしーろーやーと」と自分の作品を数え始めるので、ミノルもやむなく

付き合う。

「わたし、三十一個！　みーくんは？」

「ええと……三十三個……」

「おおー！」

勝負と言っていたのに、典江は満面の笑みを浮かべて、粉で白くなった両手を打ち合わせた。

「さすがみーくん！　全日本餃子包み大会男子高校生の部にノミネートしてあげよう！」

「あ、ありがとうございます。ていうか……六十四個も作っちゃって、ほんとに大丈夫なの……？」

「お、いい数じゃない。焼き餃子と揚げ餃子と蒸し餃子と水餃子でひとり八個ずつ食べれば、ぴったりなくなるよ」

「無理だと思う。っていうか、さっき焼き餃子だから隙間あっても平気って……」

「仕方ないなあ、半分冷凍してやるか」

と言い残してバットをキッチンに運ぼうとする典江に、ミノルは慌てて「三分の二で！」と声をかけた。

## 4

まだ、さいたま市にいる。

住めば都ではないが、最初は愚弄(ぐろう)されているように思えた平仮名の市名も、たった二日間の滞在(たいざい)でそれなりに親しみを覚えるのだから不思議なものだ。あるいはそれは、この地で極上(ごくじょう)の《骨》(えもの)を見つけることができたからかもしれないが。

シャワーを浴び終え、バスローブ姿で部屋に戻った高江洲(たかえす)は、正面の窓に近づくとカーテンをいっぱいに開いた。

昨夜チェックインした高層ホテルのデラックスツインからは、さいたま新都心の夜景が一望できる。JRの駅から西に伸びるペデストリアンデッキは、この時期イルミネーション装飾が行われていて、無数のブルーLEDが静かに煌(きら)めくさまにはそれなりの趣(おもむき)がある。

デッキのすぐ北側に広がる、緩(ゆる)く傾斜した大平面は、さいたまスーパーアリーナの屋根か。まるで深海から立ち上がる平頂海山(ギヨー)のようだ。あそこを独り占めして食卓を設(しつら)えたら、さぞかし気分がいいだろう。

高江洲は夜景を見下ろしながら右手を動かし、傍(かたわ)らのテーブルに置かれた紙袋から二センチほどの球体を摘(つま)み出すと、口に放り込んだ。

光沢のある茶色は、トリュフチョコに似ているがそうではない。食用の木の実では最も硬いとも言われる、殻(から)付きのマカダミアナッツだ。

普通(ふつう)は専用のナッツクラッカーを使って割るそれを、しばらく口中で転がしてから、右側の第一小臼歯(しょうきゅうし)と第二小臼歯で軽く挟(はさ)む。

ゆっくり、ゆっくりと力を入れていく。まるで鋼鉄(こうてつ)のボールを噛(か)んでいるが如(ごと)き歯ごたえ。下顎骨(かがくこつ)と上顎骨(じょうがくこつ)が軋(きし)み、それらを繋(つな)ぐ咬筋(こうきん)が震(ふる)える。常人がこれほどの力で噛めば、間違いなく歯が折れる。

しかしもちろん、高江洲は常人ではない。

否(いな)。人ですらない。鮫(さめ)だ。都市を泳ぎ、人を喰(く)らう鮫。

イタチザメという鮫がいる。最大七メートルにもなる大型種で、英名はタイガー・シャークだが、人喰い鮫(マンイーター・シャーク)の別名を持つ。

イタチザメの歯は独特な形をしていて、ナイフのように鋭(するど)い尖端(せんたん)と、分厚い鋸(のこぎり)のような根元の二段構えになっている。その歯でウミガメの甲羅(こうら)すら噛み砕(くだ)いてしまう、高江洲が三番目に好きな鮫だ。

イタチザメになった自分をイメージしながら、思い切り噛む。

ぴしっ、という心地良い衝撃(しょうげき)が、口中で弾(はじ)ける。

分厚い殻が縦に割れ、中から一回り小さな胚(はい)——通常マカダミアナッツと呼ばれる部位——

が転がり出る。高江洲は、殻を口に留めたまま、胚だけをくずかごに吐き捨てる。

　二つに割れた殻を、右側と左側の歯で同時に嚙み締める。再度のせめぎ合いは、今度も歯の勝利に終わる。ばきん、と砕けた殻を、更に細かく嚙み潰していく。

　ぼり。ぼり。ぼり。

　三ヶ月前までなら、とてもこんな真似はできなかった。

　いや、あの頃の高江洲は、子供でも難なく食べられる堅焼き煎餅やビーフジャーキーさえも恐れねばならなかった。評論のために訪れたレストランで、がちがちの固焼きビスケットでも出てこようものなら、ごまかすのに四苦八苦したものだ。

　でも、いまはもう違う。

　ぼりぼりぼりぼり。

　下顎にあれが宿った日、高江洲は新たな歯を得た。どんなに硬い食い物だろうと嚙み砕ける歯を。硬いものを喰えば喰うほど、どこまでも強くなる素敵な歯を。

「嚙んで嚙んで嚙んで嚙んで」

　砂粒のように細かくなった殻の破片を執拗に嚙み続けながら、高江洲は歌うように呟く。

「かんでかんでかんでかんで」

　不意に、口中に得も言われぬ生臭さが滲み出る。ナッツの殻の味ではない。干からびたカタクチイワシ……煮干しの味。

　――よーく嚙んでね、ひーくん。嚙んで。嚙んで。もっと嚙んで。

　――出したらつねつねだからね。ほら、嚙んで。嚙んで。嚙んで。嚙んで。嚙んで。

「…………ッ！」

　強烈な吐き気に襲われ、軽くえずくが、どうにか堪える。煮干しの味は数秒で去ったので、ペースト状になったマカダミアナッツの殻を呑み込む。

　一般的な栄養価があるのかどうかは知らないが、これで高江洲の歯はまた少し強くなった。

　遠い過去の記憶を振り払い、近い未来を想像する。

　あの娘は、今日も眼下の新都心を貫く道路を走っただろうか。家に帰ってたっぷりと夕食を食べ、今頃はベッドでぐっすり眠って、また少し成長しているだろうか。

　少女の体に吸収されたカルシウムが血管を巡り、純白の骨に染み込んでいく様子を思い描くだけで、大量の唾が湧き出る。下顎の真ん中が、ずきずきと痛痒く脈打つ。

　新しいマカダミアナッツを口に放り込み、ころころ甘嚙みしてあれをなだめながら、高江洲は軽く身震いする。

　まだだ。まだ早い。

　このホテルは偽名でチェックインしているが、ロビーや廊下の防犯カメラを全て回避することは不可能だし、昨夜訪れたイタリアン・レストランの従業員も高江洲を覚えているだろう。行動を起こすには、せめてあと一日……いや二日は待つ必要がある。

幸いモバイルPCを持ってきているので原稿はホテルで書けるし、それくらいのお預けは、骨を嚙(か)んだ時の喜びを増すスパイスと思えばいい。

「よーく寝て、よーく育つんだよ、お嬢さん(シニョリーナ)」

窓から見える市街地のどこかで眠っているのであろう少女にそう囁(ささや)きかけてから、高江洲(たかえす)は二つ目の殻(から)を勢いよく嚙み割った。

## 5

さして興味があるわけでもないランニング専門誌を最後までめくり終わったミノルは、それをマガジンラックに戻した。

左腕のデジタル時計に目を落とす。午後四時二十五分。このコンビニに立ち寄ってからまだ三十分しか経(た)っていないが、先刻からミノルをちらちら見ている――ような気がする店員は、「もう三十分」と思っているかもしれない。

約束の五時まで近くの図書館で時間を潰(つぶ)すつもりだったが、よもやの臨時休館だったのだ。しかしそんなミノルの事情など店員には知った事ではないわけで、立ち読みを続けるのもそろそろ限界だろう。

待ち合わせ場所の秋ヶ瀬(あきがせ)公園はここから自転車で五分とかからない。残りの三十分、公園のベンチで寒風に耐えながら本でも読んでいるしかあるまい。幸い今日は学生服の上にウールのチェスターコートを着ているし、バッグの中には図書館に返却するつもりだったハードカバーが入っている。再読もたまにはいいものだ。

今後の方針を決定したミノルは、雑誌コーナーから離(はな)れ、菓子の棚へと向かった。

三十分も立ち読みをしておいて、何も買わずに店を出られるほどの強靭(きょうじん)な精神力は持ち合

わせていないが、さりとて財政的に余裕があるわけでもない。毎月のように小遣いが足りているか気にしてくれる義姉には感謝しつつも、自分から必要最低限の金額にして貰っている。

棚をしばらく眺めてから、小さなケース入りのミントタブレットを一つ取って、レジに向かう。

二つある会計カウンターの片方には休止中の札がかかり、もう一方には二人の先客がいた。会計中の客は初老の男性で、カゴにぎっしり詰まった商品に、女性店員が無愛想にバーコードリーダーを当てている。男性の後ろには、待ち切れなさそうに体を揺らす小学三年生くらいの男の子が並んでいる。

ミノルが小学生の後ろに立ってから数分後、やっと一人目の会計が終わった。両手にレジ袋をぶら下げて出口へ向かう男性客と入れ替わりに、勢いよく前に出た男の子が、カウンターに商品を置いた。ミノルも名前を知っている、小中学生に大人気の対戦型トレーディングカードゲームの十枚入りパッケージ。

一刻も早く袋を開けたい様子の男の子は、店員がリーダーを当てるのを待たず、左手に握り締めていた何枚かの硬貨をカウンターに落とした。直後、女性店員が、レジの表示を見ながら言った。

「三百十三円です」

それを聞いた男の子の両肩が、ぴくんと震えた。

まず店員の顔を見上げ、続いて自分が置いたばかりのコインを見下ろすが、そこで動きが止まってしまう。何事ならんとミノルも少し体を傾け、カウンターを眺める。

ガラスに載っているのは、百円玉が三枚と十円玉が一枚。カードを買うには三円足りないが、男の子は固まったままで、コインを追加しようとする気配はない。

不意に、ミノルは状況を理解した。

消費税が八パーセントに上昇したのは二〇一四年。翌二〇一五年には十パーセントとなり、計算しやすいその数字がしばらく続いていたが、今年になって十二パーセントまで引き上げられたのだ。しかも急な増税論に国会が混乱し、新税率が施行されたのは年の瀬も押し詰まった十二月一日——つまり、たった五日前。

恐らく、問題のカードは、十一月までは税込み三百十円以下の値段だったのだろう。しかしプラス二パーセントの増税によって、わずかに値上げされた。

ほんの数円であっても、小学生には大きな違いだ。ようやく値段が変わったことを理解したらしい男の子の耳が、瞬時に赤く染まった。ズボンの前後ポケットを何度も探るが、不足分のコインは出てこない。きっと、自宅からカードを一パック買えるだけのお小遣いを握り締めて、この店まで走ってきたのだろう。

商品をレジに出してから所持金が足りないことに気付くのは、高校生のミノルにとっても気恥ずかしいものだ。男の子はこれが人生初の出来事なのか、完全に動転してしまい、深く俯い

たままひたすらポケットを手探りしている。

ミノルには、少年の頭に刻み込まれていく記憶が眼に見えるようだった。彼はきっと、この瞬間のことを、これから何度も思い出すことになるだろう。

あるいはここでレジの女性店員が、これは取っておくからおうちであと三円貰ってきてね、とでも声を掛ければ少年はパニックから抜け出し、いずれこの件を忘れることもできようが、店員にそのつもりはないようだ。カウンターのガラス面を指先でこんこん叩きながら、仏頂面で押し黙っている。

重苦しい沈黙が十秒近くも続いてから、ようやく男の子は次の行動を思いついたようだった。カウンターから四枚の硬貨を掴み取ると、

「それ、いいです」

と消え入るような声で言う。さっと身を翻し、自動ドアへと走り出そうとする。

その瞬間、ミノルは、少し前に財布から出して右手に握りこんでいた五円玉を床に落とした。甲高い金属音に、男の子が足を止める。

おずおずと振り向く少年の目の前で、ミノルは腰を屈め、床の上で回り続ける黄銅色の硬貨を拾い上げた。指先に摘んだそれを、しゃがんだまま差し出す。

「これ、ポケットから落ちたよ」

そう声を掛けると、男の子は不思議そうに眼を丸くしながら、握っていた右手を開いた。

汗ばんだ掌に載る四枚の硬貨の上に、ミノルは五円玉をそっと置いてから立ち上がった。

「それで、さっきのカード、買えるんじゃないかな」

ミノルの言葉に、男の子は左手の人差し指で一枚ずつ硬貨を数えた。三百十五円あることを確かめると、ぱっと顔を上げ、はにかんだように笑う。すぐにレジの前に取って返し、全ての硬貨を再びカウンターに落とす。

女性店員があらためてレジを打ったカードパックと、おつりの二円を握り締めると、男の子はもうミノルには目もくれずに駆け出した。

小さな後ろ姿が自動ドアの向こうに消えるまで見送ってから、ミノルは自分も買い物の途中だったことを思い出し、慌ててミントタブレットをカウンターに置いた。顔を上げると、気味悪そうにこちらを見る店員と目が合った。

素早く眼を逸らしながら、当分この店には近寄れないな、とミノルは心の中で呟いた。

---

コンビニを出て、自転車にまたがると、吹き付ける寒風に逆らってペダルを漕ぐ。

住宅街をしばらく走り、荒川の支流である鴨川にかかる橋を渡る。細い土手道を立ち漕ぎで勢いよく登ると、視界いっぱいに夕景の荒川河川敷が広がる。

このあたりは河川敷の幅が一・五キロもあり、対岸の堤防はまるで地平線のように霞んでいる。もう一本ある土手に遮られて川面は見えないが、手前に横たわる広大な緑地が、ミノルの

目的地である秋ヶ瀬公園だ。

さいたま市内では最大級の公園で、堤防に沿って三キロも伸びる敷地には、野球場やテニスコートのようなスポーツ施設のほかに、森林エリアや野鳥園、バーベキューエリアなどが存在する。

八年前まで暮らしていた町の近くにも、似たような大型公園があった。よく晴れた休日には、家族四人で、お弁当を詰めたバスケットを持ってピクニックに行ったものだ。

強く頭を振って想念を堰き止めると、土手を下って公園に入る。案内板の前で一度自転車を停め、目的地までのルートを確かめてから、再び移動する。

公園の中心部を貫く道をゆっくり走ると、左側に、規則正しく樹が植えられた芝生の広場が見えてくる。《西洋庭園》と名付けられたそこが目指す場所だ。春や夏には家族連れで賑わうのだろうが、十二月のいまは人っ子一人いない。

広場の脇で自転車を降りたミノルは、薄茶色に枯れた芝生に踏み込むと、メッセンジャーバッグを肩から外し、幾つかあるベンチの一つに腰を下ろした。時計は四時四十分を示している。待ち合わせの相手が来るまで、あと二十分。

バッグには本が入っているが、読み始める気分になれず、固い背もたれに寄りかかって眼を閉じる。すると脳内で、コンビニでの一幕が自動的にリプレイされる。

あんな小芝居を打ってまで男の子に五円玉を渡したのは、決して可哀想に思ったからでも、

助けようとしたわけでもない。

あの場面を最後まで傍観していたら、絶対にあとで嫌な気分になるだろうと思ったからだ。つまりあくまで、自分自身のためにしたことだ。しかし行動に出たら出たで、いまミノルは、己の小賢しいお節介に居たたまれない思いを味わっている。

結局、他人と接触すれば、必ず負の記憶が増えるのだ。

三日前、早朝の土手で箕輪朋美との会話中に逃げてしまったこと。

二日前、陸上部員たちの前で、無様に尻餅をついたこと。

そして今日の、偽善的な行い。

黒い水となって溜まり続ける記憶の沼は、ことあるごとにミノルを捕らえ、引きずり込む。沼の奥に潜むのは、八年前の、あの出来事。いまでも一秒一秒をありありと思い出せる、恐怖と絶望、悔恨と自責に彩られた惨劇の記憶。

あの一夜を追体験するたびに、自分の中から何かが失われていく気がする。それはたぶん、生きる力のようなものだ。

こんなに苦しい思いをしてまで生き続ける理由が、この世界にあるのか。いますぐに命を絶ち、両親と姉の待つところに行ったほうが幸せになれるのではないか。記憶の沼に沈むたび、そんな衝動に襲われる。

いままで抗い続けられたのは、自殺などすれば、八年間ミノルを守り、育ててくれた典江が

……そしてあの夜、ミノルを助けるために命を落とした姉ワカバがどれほど悲しむか、という思いがあるからだ。

けれど、これ以上黒い記憶が増えてしまったら。沼が、自分の中から溢れ出してしまったら。

いつか、戻ってこられなくなるのではないか。

いっそ、誰もいない世界に行ってしまいたい。

他の人間がまったく存在しない場所ならば、負の記憶が増えることもないだろうに。

ＳＦやホラー小説を読んでいると、主人公が無人の町に放り出されて恐怖に駆られるという展開にたびたび出会う。仮に自分がそういう境遇に置かれれば、きっと恐怖より先に深い安堵を覚えるだろうとミノルは思う。

もしかしたら――。

《あれ》は、ミノルをそんな孤独の世界に連れて行くために空から降ってきたのではないだろうか……？

昨日と今日の早朝、ミノルは日課のランニングをこなしたあと、無人の土手で例の怪現象を再現しようとしてみた。残念ながら一度も成功しなかったが、現象が消えてしまったわけではなく単にスイッチの入れ方が解らないだけで、試行錯誤を続けていればいつかは自分の意思で現象を起こせるようになるという予感がある。

仮にあの力を意のままに操れるようになったとしても、ミノルの真の望みは、物理現象では

叶えられない。でも、いまはそれでもいい。強く求め続ければ、いつか本当に行けるのかもしれないのだから。

たったひとりだけの、絶対なる孤独の世界に。

瞼を閉じたままそんなことを考えていると、かすかな足音が耳に届いた。軽快なリズムには聞き覚えがある。体を起こし、左のほうに眼を向ける。

残照もほぼ消え失せた宵闇のなかを、勢いよく駆け寄ってくる小さなシルエットが見えた。腕時計を確認すると、午後五時三分前だ。十七分も考え事をしていたことに少し驚きながら、ベンチから立ち上がる。

ミノルの前までやってきた待ち合わせ相手は、その場で足踏みしながらしばらく呼吸を整えていた。だが、息遣いが平常に戻っても、なぜか言葉を発しようとしない。

逆に息苦しさを感じながら、ミノルはとりあえずベンチを指差し、言った。

「ええと……座る……？」

すると、ジャージ姿の女子生徒――箕輪朋美はこくりと頷き、デイパックを背負ったままベンチの端に腰を下ろした。ミノルも、少し間を空けて座る。

こっちから何か話を振るべきなのかと考えていると、ちょうど五時になったらしく、近くのソーラー照明灯に光が点った。それをきっかけに、朋美が口を開いた。

「……ごめんね、遅い時間に、こんな場所まで来てもらっちゃって」

「……僕は、学校終わったら帰るだけだから……」

「空木くんて、部活やってないんだっけ」

「うん。帰宅部は、学年に十人もいないらしいけど」

　そこで再び、会話が途切れる。

　数時間前、下駄箱を開けたらまたしても紙片がひらひらと落ちた時は、よっぽど見なかったことにしてしまおうかと思ったものだ。しかし、不承不承拾ったそれに几帳面な文字で書いてあったのは、夕方五時に秋ヶ瀬公園の西洋庭園に来てください、というメッセージと箕輪朋美の名前だった。

　無視すべきかどうか、もちろん今回も考えた。そうしなかった理由は、フルネームの署名に強い意志を感じたからだ。一昨日の、陸上部員たちの命令のほうを無視する結果になったが、呼び出しておいて名乗りもしなかった連中に、唯々諾々と従ういわれもない——はずだ。

　と、自分に言い聞かせていると、再び朋美が小声で謝った。

「………ごめんね、空木くん」

「いや……ここから家まで、そんなに遠くないし……」

「そっちじゃなくて」

　一瞬淡い微笑みを浮かべた顔を、朋美はいきなり大きく歪めた。目尻にみるみる透明な雫が湧き上がるので、ミノルは呼吸が止まりそうになる。

「女子陸上部の先輩が、うわさしてたの、聞いたの。男子部員が、空木くんを呼び出して……シメた、って」

「えっ」

　朋美が震え声で口にした言葉を聞いて、ミノルは眼を丸くした。

　呼び出されたのは事実だが、その先は少々誇張されている。腹を一発殴られはしたものの、例の怪現象のおかげでダメージはまったくなかったし、直接的には無関係な朋美が泣いて謝るほどの話ではない。

「そ、それはちょっと大げさだよ。怪我もぜんぜんしてないし、口であれこれ言われたくらいだから……」

　慌ててそう説明してから、しまったと思う。

　どうせなら、呼び出しそのものを否定すべきだった。なぜなら朋美は、自分との会話が原因でミノルが男子部員に眼を付けられたのではと思ったからこそ、学校から遠く離れたこの公園を待ち合わせ場所に選んだのだろうから。ミノルの返事は、朋美の危惧を肯定してしまっただけだ。

「…………ごめんなさい……」

　消え入るような声でもう一度謝ると、朋美は両手で顔を覆った。かすかな嗚咽が、十二月の乾いた空気を震わせる。

何かを言わないと、と思いつつも、ミノルにはこれ以上何を言っていいのか解らなかった。

解るはずがないのだ。いままでずっと、こんなふうに女の子と――いや相手が誰であろうと一対一で向き合うことを避けてきたのだから。

ミノルは口を閉ざし続け、朋美は泣き続けた。結局、その時間を終わらせたのは、ミノルではなく朋美自身だった。

口をきつく引き結んで泣き声を抑え込み、ジャージの袖でごしごしと目許を拭った朋美は、深く俯いたまま掠れ声で言った。

「……あたし、もう、空木くんと、話さないほうが、いいよね」

「…………」

ミノルの沈黙を、肯定と受け取ったのだろう。

小さな体をいっそう縮めるようにして、最後にもう一度、

「……ほんとに、ごめんね」

と囁くと朋美は立ち上がった。

背中を向け、もと来た道ではなく、公園の真ん中にある森に向かってゆっくりと歩き始める。

歩調が少しずつ速まり、やがてジョグに変わる。

どこか重く感じられる足音が、宵闇の向こうに遠ざかっても、ミノルは身動きひとつできなかった。朋美が座っていた場所に光る一滴の雫が、少しずつ木製の座面に染み込んでいくのを、

ただじっと見詰めていた。

＊＊＊

ふむ。

堤防上の歩道から広大な公園を見下ろしながら、高江洲は軽く首を傾けた。

獲物の行動パターンが、いままでと違う。

一昨日と昨日は午後六時過ぎにさいたまスーパーアリーナの横を通過し、そのまま真っ直ぐ帰宅していたのに、今日は途中でコースを外れた。自宅に向かわずに細い川沿いを走り続け、高い堤防を越えて、そのまま公園に入っていったのが約五分前。

五十メートル以上距離を取っていたので追跡に気付かれたとは思えないが、念のために公園の手前で足を止め、状況を吟味することにしたのだ。

尾行を始めてからまだ三日目なので、これがイレギュラーな行動なのかどうかは解らない。毎週金曜は、自宅から二キロばかり離れたこの公園まで足を延ばしているのかもしれないが、今日は獲物の足音がどことなく重く感じられたのが気になる。

まさかとは思うが、気付かぬうちに警察に捕捉されていたのだろうか。これは高江洲を誘い込むための罠？　獲物を狩るつもりで足を踏み入れたら、逆に狩られることになるのか？

高江洲は、この三ヶ月で、すでに四人の骨を噛んでいる。

食べ滓は慎重に処分したので発見される可能性は低いが、獲物の二人は行方不明事件として報道された。当然、警察は捜査を進めているはずで、思いもよらぬ手がかりから高江洲に辿り着いた、ということも絶対に有り得ないとは言えない。

《あれ》は、常人を遥かに上回る身体能力と、人間の上腕骨だろうが大腿骨だろうが容易く噛み砕ける歯を与えてくれた。しかし、さすがに銃弾を避けたり止めたりは不可能だ。複数の警察官に包囲され、拳銃を撃ちまくられれば、恐らくそこで高江洲の《咀嚼》も終わるだろう。

死を恐れてはいない。だが、無様で醜悪な結末だけは断固拒否する。警察如きの策にはまって死ぬくらいなら、茹ですぎのフェットチーネを喉に詰まらせて窒息死したほうがマシというものだ。

少女が入っていった公園は、すでに大部分が闇に包まれ、明かりがあるのは中心部と南側の車道くらいだ。あの暗がりに、犬どもが潜んでいるのだろうか。

これは悪魔がくれた好機か。それとも天使の仕掛けた罠か。

その時――。

いままでずっと、背後から公園に向かって吹いていた北風が止まった。少しして、今度は南から少し温い空気が吹き寄せてくる。

高江洲は、買ったばかりの黒いスポーツウェアを着込んだ体を縮めながら、肺の中の空気を全て吐き出し、すかさず鼻から長々と吸い込んだ。

試したことはないが、公園に警官が何十人も潜んでいれば、必ずそれらしい匂いを嗅ぎ取れるはずだ。南風に含まれているのは、地面に積もった落ち葉の匂い、緑色に濁った沼の匂い、茶色く枯れた芝生の匂い…………そして、あの少女の、甘い匂い。

下顎で、あれがズキンと疼く。

大丈夫、危険はない、と囁きかけてくる。

噛もうよ、噛もうよ、と誘いかけてくる。

「……そうだな、相棒」

呟き、高江洲は、堤防から公園へと降りる階段を軽やかに駆け下り始めた。

＊＊＊

――僕は、何をやっているんだろう。

自責の念に苛まれながら、ミノルは何度目かのため息をついた。

箕輪朋美が走り去ったのはもう五分近くも前だが、まだ西洋庭園のベンチから立ち上がれずにいる。

この公園までやってきたのは、彼女の意思表示を無下にはできないと思ったからだったはず

だ。ならば、朋美が何度も口にした「ごめんね」という謝罪に、上辺だけのごまかしではなく精一杯の言葉で答えるべきではなかったのか。

　そもそも、ごまかせてもいないのだ。ミノルは何も言えずに、ひたすら黙り込んでいただけだったのだから。

　他人と触れ合いたくない。記憶を増やしたくない。

　本当にそう願うのなら、いっそ学校にも行かずに自分の部屋に閉じこもっていればいいのに、その勇気もない。孤独になりたいなどと言いながら、心の奥では進学や就職のレールから外れることを恐れている。正確には、レールから外れたせいで、ミノルを知る人間たちが憐れみや蔑みの目を向けてくることを恐れているのだ。

　結局、絶対的な孤独などというものは、ただの幻想だ。

　たとえミノルが引きこもったところで、周囲の人間たちの記憶からも即座に消滅する、というわけにはいかない。そういう意味では、真の孤独など存在し得ない。

　――でも、たぶん周りの人たちは、僕が思うほど僕のことなんか気にしてないんだ。

　――あの子も、きっとそうだ。僕と話をしたことや、さっき泣いたことも、すぐに忘れてくれるはずだ。明日からはまた、誰とも関わらない生活が戻ってくるんだ。

　自分にそう言い聞かせ、のろのろとベンチから立ち上がった――

　その時だった。

「…………？」

　何か妙な匂いを嗅いだ気がして、ミノルは眉をひそめた。

　あまりに希薄すぎて、悪臭なのかどうかも判然としない。焦げ臭さ、鉄臭さ、獣臭さが入り混じったような……強いて言うなら、暴力の匂い。

　いったん肺を空にすると、ゆっくりと鼻から空気を吸い込む。

　気のせいではない。かつて一度も嗅いだことのない、妙に心をざわつかせる異臭が、冷たい空気に含まれている。しかも、匂いは、公園の中央部に広がる森エリアから漂ってくるようだ。

　箕輪朋美が走り去ったのと、同じ方向から。

* * *

　きりり。

　と軽い音を立てて、右の犬歯が擦れ合う。

　下顎に宿る[illegible]は、もうすぐ訪れるであろう饗宴が待ちきれないかのように昂ぶっている。

　その興奮が三十二本の歯たちに伝わり、高江洲の意志を離れて、勝手に歯ぎしりを繰り返す。

　――我慢だ、相棒。ここでしくじったら台無しだぞ。

　声に出さずに呟き、前進を再開する。

公園の中心部、広い森の中を足早に進む。歩道から外れているため、足許は湿った落ち葉で滑りやすいし、照明灯の光も届かない。しかし、いまの高江洲の眼なら、遠い街明かりだけで充分だ。獲物を追い詰める人喰い鮫のように、しなやかに歩き続ける。

鼻腔は、あの少女の匂いをくっきりと捉えている。

近い。もう百メートルも離れていないだろう。耳を澄ませれば、ランニングシューズが舗装を叩く音が届いてくる。

疲れているのか、昨日と比べると少し足取りが重いようだ。もちろん獲物の体調がベストであるに越したことはないが、疲労しているならそのぶん狩りが楽になる。

足音は、右前方から着実に近づいてくる。少し不規則な息遣いと、ジャージの衣擦れも。時折、鼻を啜り上げているようだ。風邪を引いたのか、それとも泣いているのか。後者だとすれば、この公園で何かがあったのだろうか。

しかしもう、どうでもいいことだ。ほどよく鍛えられた肉と、しっかり詰まった骨。求めるものはそれだけ。

足音はいよいよ近づく。前方の木立の向こうに、細い遊歩道が見えてくる。照明灯のLEDが放つ白い光の向こうに、小さな人影が揺れている。

高江洲は、遊歩道沿いにそびえる大きなクスノキの幹にぴったりと体を押しつけて待つ。

右側から走ってくる少女が木の裏側に差し掛かったその瞬間、体をくるりと回転させて、

獲物の後方から道路に出る。

かすかな足音に気付いたのか、走りながら少女が振り向く。高江洲の姿を視認した両眼が、いっぱいに見開かれる。その瞳に溜まっていた涙の粒が、LEDの光を受けてきらきらと輝く。

まずは、食前酒として、あの涙から味わおう。

そう考えながら、高江洲は薄手の手袋をはめた左手を伸ばし、悲鳴を上げようとする少女の口を優しく塞ぐ。

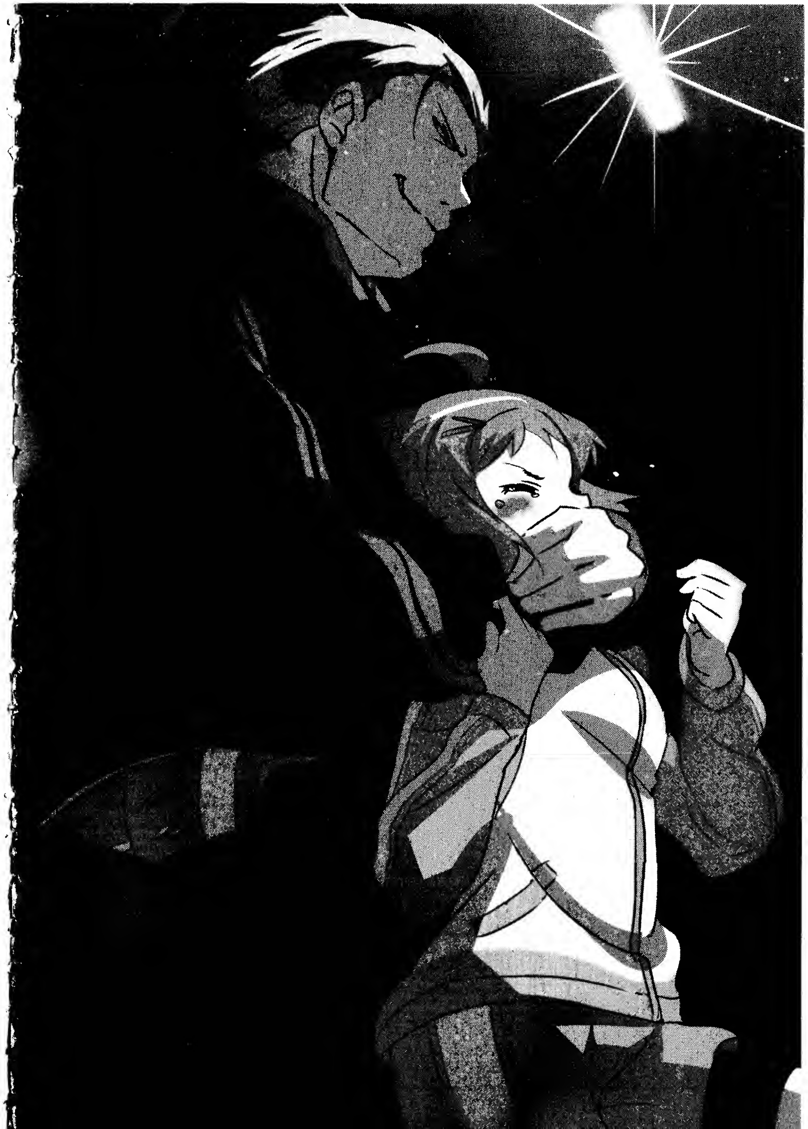
掌に声帯の振動が伝わるが、声にはならない。背後に回り込みながら引き寄せ、右腕を細い首に巻き付ける。

一人目の獲物は、ここで力加減を間違えて頸椎を粉砕してしまった。最終的な結果は同じとはいえ、やはり最初に噛む時は、生きた肉と骨の躍動感を味わいたい。

激しくもがく少女を押さえ込みながら、右腕に、慎重に力を込めていく。

絞め技で《落ちる》メカニズムは、一般的に、首の動脈が圧迫されて脳への血流が止まるからだと思われているが少し違う。正確には、頸動脈洞という場所を強く圧迫すると迷走神経が過剰な反射を引き起こし、その信号が心臓に伝わって瞬間的に脈拍が低下し、血圧が下がり、脳への酸素供給が足りなくなって失神するのだ。

だから、短時間落とすだけなら首全体を思い切り絞める必要はない。首の横、顎の下にある頸動脈洞を的確に押さえるだけで——ほら。



少女の全身から力が抜ける。ぐったりとした獲物の体を軽々と抱え上げ、高江洲は再び遊歩道から出る。

きりきりきり、と犬歯を擦り合わせながら、大股に歩き始める。

光も音も届かない、森の奥の暗闇へと。

＊＊＊

冷たい風に含まれる異臭は、消えそうで消えない。

森の中で何かが腐っているのか、それとも誰かがゴミでも焼いたのか。広い公園なのだからどちらもありそうなことではあるが、この場所に来る時に気付かなかったのが不思議と言えば不思議だ。

普段のミノルなら、どうでもいいと切り捨てて立ち去っていただろう。だが、奇妙な胸騒ぎが、足を自転車に向けさせない。

この匂いが気になる理由は、きっと、箕輪朋美が走り去った方向から漂ってくるからだ。

そもそもこれは、本当に腐敗臭や焦げ臭さなのか。もしかしたら、生きている獣の匂いではないのか。

だとしても、秋ヶ瀬公園に棲息しているのはせいぜいタヌキや野良猫くらいのものだろう。

人間に危害を加えるような大型獣がいるはずもない。少し視線を移せば、ほんの一・五キロ先の秋ヶ瀬橋を行き交う車のヘッドランプが見えるのだ。今頃は、朋美も公園を抜けて、土手道に出ているに違いない。

頭でそう考えても、胸に居座る違和感は消えない。

——色々あったから、神経が昂ぶっているんだ。

——家に帰って、今日を終わらせよう。出来事を忘れることはできないけれど、過去にすることはできるんだから。

自分にそう言い聞かせ、足を踏み出して、西洋庭園の脇に止めてある自転車に近づく。

だが、わずか三歩進んだところで、再びあの匂いが鼻を刺激した。

より濃密で、より嫌らしい、獣の匂い。

まるで、途轍もなく危険な大型肉食獣の縄張りに入り込んでしまったかのような。

「………何なんだ……」

呟き、ミノルは再び右斜め前方の木立を見やった。

胸の奥、胸骨の真ん中で、あれが疼くのを感じる。自転車にぶつかりそうになった時より——上級生に殴られそうになった時よりも、強く。

いつの間にか掌に滲んでいた汗をズボンに擦りつけ、マフラーを口許まで引き上げて、歩行を再開する。

自転車ではなく、黒々と盛り上がる森に向かって。

＊＊＊

気を失った少女を抱きかかえたまま、高江洲は道なき森の中を悠然と歩いた。

これまでの獲物は、同様の手段で捕獲してから車で運んでいたが、今回はその手は使えない。遠く離れたホテルの駐車場に入れてあるマセラティまで、誰にも見られず、防犯カメラにも捉えられずに移動するのは不可能だ。少女の手足を縛り、公園のどこかに隠して車を取りに行くことも考えたが、頸動脈洞圧迫による失神は、血流さえ回復すれば数分で回復する。意識を取り戻した少女が、おとなしく高江洲の帰りを待っているはずもない。

幸い、この森は、市街地に隣接しているとは思えないほど広く、深い。お気に入りのダイニングテーブルを使えないのは残念だが、ここを饗宴の場としても、邪魔が入る気遣いはないだろう。

森の北側、何本かある遊歩道から最も離れた場所まで歩いた高江洲は、少女を地面に下ろそうとして、ふと前方に直線的なシルエットが存在することに気付いた。

足音を殺して近寄ると、それは簡素な物置小屋だった。壁にはびっしりとツタが絡みつき、引き戸に塗られたペンキはひび割れている。清掃用具か何かを置いておくための小屋だろうが、

この荒れ果てようを見ると、数年間は使われていないようだ。

腕の中の少女に顔を近づけ、ちゃんと呼吸していることと、まだ意識を取り戻す気配がないことを確かめてから、落ち葉の上に横たえる。小屋に近付き、手袋をはめた手で、扉の引き手にぶら下がる南京錠（ナンキンじょう）を摑（つか）む。

土埃（つちぼこり）と青サビにまみれてはいるが、真鍮（しんちゅう）の錠前は、思い切り引っ張ってもびくともしない。いまの高江洲（たかえす）の膂力（りょりょく）でも、これを素手では壊（こわ）せまい。体当たりでもすれば扉を外せるかもしれないが、その轟音（ごうおん）は森の外まで届くだろう。

しかし、せっかくの発見を捨て置くのも惜（お）しい。朽（く）ちた物置小屋とはいえ、声を遮（さえぎ）る効果はあるはずだ。それに——獲物の絶望を高める効果も。

《七つ道具》の入ったウェストポーチからウェットティッシュを取り出し、鈍色（にびいろ）の南京錠を丁寧（ていねい）に拭（ぬぐ）う。それでも湧（わ）き上がる嫌悪感（けんおかん）を押し殺し、口を大きく開けて、ずっしりと重い金属に前歯を立てる。

少し、力を入れてみる。

さすがに硬い。マカダミアナッツの殻（から）はまだわずかな弾力があったが、これはまるで撓（たわ）みもせず、かたくなに歯を跳ね返す。全力で嚙（か）んだら前歯が全（すべ）て折れてしまうのではないかという後ろ向きな予感が、口中の金臭（かなくさ）さを増幅させる。

だが、更（さら）なる高みを目指すなら、いつかは上らねばならぬ階段なのだ。高江洲の歯を退ける

有機物は、もう存在しないのだから。

嚙み潰（つぶ）すのではなく、断ち切る。鋼鉄（こうてつ）のたがねをイメージしながら、肺いっぱいに空気を吸い込み——あらん限りの力で、嚙む。

歯根に、鋭（するど）い痛みが走った。ガキン！　と硬い音が響（ひび）き、口許（くちもと）から黄色い火花が散った。

一秒後、高江洲はゆっくり立ち上がると、口の中に転がるものを掌（てのひら）に吐（は）き出した。半円形に嚙み切られた、真鍮の塊（かたまり）。いくらか血が付着しているのは、圧力で歯肉の毛細血管が破裂（はれつ）したからだろう。この程度のダメージは、あれがたちまち治してくれる。

引き手にぶら下がるもう半分を引っ張ると、U字の掛け金が外れた。二つの金属塊（かい）の切断面に刻まれた美しい歯形を眺（なが）め、満足をおぼえながら、ウェアのポケットに収める。

扉を慎重（しんちょう）に引き開けると、かび臭（くさ）い空気が流れ出た。一坪（つぼ）ほどの小屋の内部には、想像したとおり、熊手（くまで）や竹箒（たけぼうき）、手箕（てみ）といった清掃用具と、ブロックや鉄パイプなどの資材類が積み上げられている。しかし床の半分は空（あ）いていて、そこにはお誂（あつら）え向きに、大きなブルーシートが敷（し）かれている。

地面に横たわる少女を抱え上げ、小屋に入り、シートに寝かせてから扉を閉める。窓がないので、内部はほぼ完全な暗闇（くらやみ）に沈む。少し考え、ポーチから小型のLEDライトを取り出すと、ランタンモードで点灯し、積み上げられた道具類の上に置く。淡（あわ）い光が、ぼんやりと室内を照らし出す。

これでもう、邪魔（じゃま）は入らない。いまからここは、薄汚（うすぎたな）い物置小屋ではなく、三つ星のリストランテだ。

まず背中のデイパックを下ろさせてから、重要な狩りの道具である非伸縮性のテーピング用テープを、少女の両手首と両膝（りょうひざ）に巻き付ける。口にはハンカチを押し込み、上からテープでぐるぐる巻きにする。

拘束（こうそく）を終えると、高江洲（たかえす）は、朦朧（もうろう）とした様子の少女の頬（ほお）を軽く叩（たた）いた。やがて獲物は意識を覚醒（かくせい）させ、数回瞬（まばた）きしてから、両眼の焦点（しょうてん）を高江洲の顔に合わせた。

茶色い大きな瞳（ひとみ）に、まず混乱、次に疑念、最後に恐怖の色が浮かぶ。

自分が置かれた状況をようやく認識したらしい少女は、塞（ふさ）がれた口の奥でくぐもった悲鳴を上げ、両足を海老（えび）のように動かして後退（あとずさ）った。しかし、すぐに後ろの壁にぶつかってしまう。

「……そう怖がるなよ、お嬢さん（シニョリーナ）」

高江洲は不明瞭（ふめいりょう）な声で言った。我ながら酷（ひど）い発音だと思うが、全（すべ）ての歯がすでに肥大化を始めているせいで発音がままならない。下顎（したあご）の中央では、あれが狂ったように脈打っている。

眼が眩（くら）むほどの飢（う）えと渇（かわ）きを抑え込み、高江洲は小屋の左側に置かれた掃除用具やら資材の山から、太い鉄パイプを摑（つか）み上げた。いっそう両眼を見開いた少女が、くぐもった悲鳴を漏（も）らしながら背後の壁に体を押し付ける。

「安心したまえ、こんな粗雑な道具は使わないさ」

くぐもった声で囁（ささや）くと、高江洲は大きく口を開いた。

LEDライトの灯（あか）りを受けた歯たちが、少女の瞳の中できらきらと輝（かがや）く。下顎の真ん中が、耐えがたいほどに熱く疼（うず）く。前回の饗宴（きょうえん）の夜からずっと溜（た）め込み続けてきた欲望を、一気に解放する。

ごきっ。

下顎骨（かがくこつ）が、大きな音を立てる。

高江洲の、もともと日本人としては逞（たくま）しい顎が、ごき、ごきと軋（きし）みながら前に伸びる。

関節が外れたわけではない。骨そのものが、現代生物学を超えたメカニズムによって拡大しているのだ。

更（さら）に、上顎の骨にも同じ現象が引き起こされる。鋭（するど）く尖（とが）った上下の顎が平常時より十センチ以上も突き出した高江洲の顔は、もはや人間のそれではない。限界まで見開かれた少女の両眼が、恐怖のあまりか瞳孔（どうこう）を散大させる。

だが、本番は、これからだ。

長く伸びた顎の中で、三十二本の歯たちが、きし、きしと甲高（かんだか）い音を放ちながら巨大化していく。ナイフのように鋭利（えいり）な尖端（せんたん）と、斧（おの）のように強靱（きょうじん）な根元を持つ、二段構えの牙（きば）へと。

イタチザメだ。海亀（うみがめ）さえ嚙（か）み砕（くだ）く、獰猛（どうもう）な人喰い鮫（マンイーター・シャーク）になるのだ。

左側に置かれたライトが、右側の壁に異形の影を映し出す。長い顎から凶悪（きょうあく）な歯、いや牙

が伸びるそのシルエットは、強いて言うなれば、猿ではなく鮫のＤＮＡを持つ新たな人類か。旧い人類たちにとっては異様であり醜悪でもあろうが、しかし高江洲にとっては、何年ものあいだ追い求め続けてきた理想の姿だ。逞しい顎と、何でも噛める、美しくて、頑丈で、健康な歯。

常軌を逸した高江洲の《変身》を目にして、少女はもうガタガタと震えることしかできないようだった。そこにいっそうの恐怖を注ぐべく、高江洲は右手に持った鉄パイプを口許に運ぶと、おもむろにその先端に齧りついた。

パイプは、工事現場でよく使われる炭素鋼管で、直径約六センチ、肉厚は四ミリを超える。昨日、いや十分前までなら、たとえ変身しても文字通り歯が立たなかっただろう。しかし、先ほど、常態で南京錠を噛み切った記憶が高江洲に——そしてあれに力を与えている。

無骨な鉄パイプに、巨大な犬歯が、ぎゃい、ぎゃい、と耳障りな音を響かせて沈んでいく。大型の油圧カッターでも、これほどの切断力は発揮できまい。まるで棒状の干菓子でもあるかのように、鋼管はほんの六、七秒でぼきりと切断された。

高江洲は、噛み千切った鉄パイプの先端を、口の中で更に数回咀嚼した。そのたびに甲高い金属の悲鳴が響き渡る。

やがて、足許のビニールシートにごちゃっと吐き出されたのは、わずか数ミリの欠片にまで寸断された鉄屑だった。もう、血など一滴もついていない。

「まずい」

高江洲は、にやりと笑いながら呟く。金属片をまたいで一歩前に出ると、少女のすぐ目の前に屈み込む。

「でも、きみの骨はすごく旨そうだ」

そう告げると、少女はテープで塞がれた口の奥からくぐもった悲鳴を漏らし、壊れた玩具のように体を跳ねさせた。膝のところで拘束されたまま空しく宙を蹴る両足を、高江洲は右手でひょいと捕まえた。すかさず左手で、履き込まれたランニングシューズをむしり取る。

「〜〜〜ッ!!」

少女の悲鳴がひときわ高まった。だがそれは高江洲にとって、食卓の興趣をいや増すＢＧＭでしかない。

スポーツソックスも脱がすと、剝き出しになった素足をじっくりと愛でる。期待したとおり、土踏まずやアキレス腱がよく発達した美しい足だ。肉の奥に隠された骨は、さぞ極上の歯ごたえを供してくれることだろう。

すぐにでも齧り付きたかったが、あっさり死なれてしまっては興醒めなので、まずは止血の準備をしなくてはならない。再びウェストポーチを探り、細いナイロンタイを摘み出す。

それを少女のふくらはぎに巻き付けようとして、高江洲はぴたりと手を止めた。

ぱき、というかすかな音が耳に届いたのだ。恐らく、乾いた小枝が折れる音。

少しして、もう一度同じ音が聞こえた。間違いない。何者かが、この小屋に近づいてくる。

「騒（さわ）いだら、すぐに殺すよ」

異相を少女の顔に近づけ、涙に濡（ぬ）れた瞳（ひとみ）を間近から覗（のぞ）き込んでそう囁（ささや）く。摑（つか）んでいた足を床に置き、引き戸に近づくと、錆（さ）びた鉄に耳を押し当てる。

かさ、かさ、と規則的な音が聞こえる。降り積もった落ち葉を踏（ふ）む足音だ。もう、すぐそこまで近づいている。

警察か、と考えてから、足音が一人ぶんしか聞こえないことに気付く。刑事であれ機動隊であれ、警察官が単独で行動することはないはずだ。

ならば公園の管理人か。何年も放置されているように見えたのは、小屋を使いたいがゆえに眼を曇（くも）らせたからか。

やれやれと軽く頭を振り、掃除用具の上に置かれたLEDライトをちらりと見る。灯（あか）りを消すべきかと一瞬（いっしゅん）考え、点（つ）けたままにしておくことにする。

振り向き、扉のすぐ横で身構える。誰（だれ）であろうと、入ってきた瞬間に殺さねばならない。

今回は、悠長（ゆうちょう）に頸動脈（けいどうみゃく）を絞めたりはしない。ひと嚙（か）みで首を喰（く）いちぎる。ようやく捕らえた極上（ごくじょう）の獲物をお預けにして、粗悪な骨を嚙まねばならないのは残念だが、これも愚（おろ）かな油断の報（むく）いだ。

鮫（さめ）のように突き出した顎（あご）を、大きく開く。

剃刀（かみそり）のように鋭（するど）い前歯たちが、ライトの光にぎらりと輝（かがや）く。

＊＊＊

数十メートル歩いたところで、ミノルは遊歩道を外れて暗い森へと踏み込んだ。

空気に含まれる異臭は、もはや気のせいでは有り得ない。流れてくる方向までが、はっきりと識別できる。すぐに照明灯の光が届かなくなるが、以前より鋭敏（えいびん）になった視力のおかげか、歩くのには苦労しない。

愚（おろ）かなことをしている、という自覚はある。匂（にお）いの発生源は何であれ不愉快（ふゆかい）な代物（しろもの）だろうし、どうせ後でそれを見つけた記憶（きおく）を消したいと願うのだから。

しかし、引き返したら引き返したで、今度はいつもの自己嫌悪（けんお）に襲（おそ）われるだけだ。ここまでやってきたのは、箕輪朋美（みのわともみ）が走り去った方向から異質な匂いが漂（ただよ）ってきたことに不安を感じたからで、何でもないことを確かめずに戻れば、自分の臆病（おくびょう）さや薄情（はくじょう）さに打ちのめされてしまう。

——結局、どこまでも自分のためか。

口許（くちもと）を歪（ゆが）めながらそう考えた時、右の靴が枯れ枝を踏み、ぽきんと乾いた音を立てた。

反射的に立ち止まり、前方の暗がりに眼を凝（こ）らしたミノルは、十数メートル離（はな）れた空き地に建つ小さな小屋に気付いた。物置か何かだろうが、風雨に晒（さら）されて半ば朽（く）ちたような有様は、

現在も使われているようには見えない。

にもかかわらず、匂いの発生源はあそこだと、ミノルは直感した。

建物の周囲に何かがある、または何かがいる様子はない。小屋の中だろうか。だとすれば、この異様な臭気は、野生動物の匂いではないということになる。

全身の体毛が逆立つような感覚。冷え切った掌にじっとりと汗が滲んでいる。

立ち止まっているのに、臭気はどんどん濃くなるようだ。左手でマフラーごと鼻を覆っても、嗅細胞を突き刺すような匂いはまったく薄れない。

あの小屋の中には、尋常ではない何かが潜んでいる。

無意識のうちに半歩下がった右足が、再び枯れ枝を踏んだ。自分が発した音に、全身がびくっと竦む。

いますぐ後ろを向き、走って小屋から遠ざかりたかった。ぎりぎりのところで踏み留まりながら、ミノルは汗に濡れた右手で、制服の胸元を摑んだ。

すると、早鐘のように脈打つ心臓と、痺れた掌の間に、痛痒いような感覚があった。

あれだ。胸骨に潜り込んだ小さな球体が、熱をもって疼いている。恐れるな、前に進め、と囁きかけてくる。

大きく息を吸い、ゆっくり吐き出すと、ミノルは後ろに引いた右足を一歩踏み出した。

続いて左足。また右足。自分でも意外なほどしっかりした足取りで歩きながら、斜め掛けに

したバッグとマフラーを外し、そっと地面に置く。

小屋はもう目の前だ。閉じられた鉄扉と壁とのごく細い隙間をよくよく見ると、中から淡い光が漏れているようだ。

進むにつれ獣臭はいよいよ強くなるが、不思議に息苦しさは感じない。この臭気はきっと、鼻の細胞が匂い物質を感知しているのではないのだ。脳が、何らかの情報を、匂いとして直接受け取っている。

吸い寄せられるように、ミノルは右手を伸ばし、扉の引き手を握った。

そして、一気に引き開けた。

途端、鋭く息を呑む。薄暗い小屋の床には青いビニールシートが敷かれ、その上に、手足を灰色のテープで縛られ、猿ぐつわをされた箕輪朋美の姿があった。ジャージの上下はそのままだが、なぜか両足のシューズと靴下だけが脱がされている。

「み……」

喉から掠れた声を漏らしながら、ミノルは小屋の中に一歩踏み込んだ。

同時に、大きく両眼を見開いた朋美が、激しくかぶりを振った。

来ちゃ駄目、と言うかのように。

直後、幾つかのことが立て続けに起きた。

悪意すら感じるほど濃密な獣臭が押し寄せる。

すぐ左側から、黒い影が猛烈な勢いで飛びかかってくる。

前に長く突き出した、人間離れした形状の口が、ミノルの首を横から咥え込む。

異様に巨大で凶悪に鋭い歯が、首筋の皮膚に触れる。

＊＊＊

男だ。若い。高校生。

少女を知っているようだ。同じ学校？　涙の原因はこの小僧か？

なら、捕らえてもよかった。二人並べて、交互に噛んでやるのも楽しかっただろうに。

でももう遅い。顎を、歯を、あれをもう止められない。

細い首だ。女のように華奢。一噛みで頸骨まで断ち切れそうだ。

ほら、簡単に咥えられる。

邪魔者の姿を眼にしてから〇・三秒のあいだに、高江洲はそのようなことを考えた。

頭を横に傾け、学生服の詰襟ごと、小僧の首を咥え込む。右側の歯は黒いカシドス織の生地に触れ、左側の歯は白く薄い皮膚に触れる。このまま噛めば、肉と骨がざっくりと切り取られ、赤とピンクと白の綺麗な断面を見せてくれるだろう。

顎の筋肉が盛り上がる。溜め込んだ鮫のパワーを、一気に解き放つ――。

その時。

予期せぬ何かが起きた。

突然、異様な匂いが眉間の奥を直撃した。かつて一度も嗅いだことのない、無機的、化学的な刺激臭。

そして同時に、小僧の首が膨らんだ――ように思えた。

皮膚に軽く食い込んでいた歯たちが、高江洲の咬合力を上回る圧力で瞬時に押し戻される。

信じられないほど硬く、有り得ないほど滑らかな何かが歯を拒んでいる。左右の咬筋に痛みが走り、筋繊維が損傷したことを教える。

驚きに眼を見開きながら、高江洲は大きく突き出た自分の口許を見た。

そして、更なる驚愕に襲われた。

顎には、確かに何かを噛んでいる感覚がある。なのに、歯が肉に届いていない。白い皮膚から三センチも離れたところで、小刻みに震えながら静止している。

しかし、ならば、顎の骨に伝わるこの恐るべき歯ごたえは何なのか。小僧の首筋には、強化ガラスか何かでできた防具が装着されているのだろうか。

いや、たとえそうであっても、それがガラスや樹脂の類ならば、《イタチザメ・モード》の高江洲には容易に切断できるはずだ。では、ダイヤモンド？　この平々凡々とした男子高校生

が、そんな代物を身につけているとでもいうのか？

かつて経験したことのない硬さと、それが眼に見えないという事実の不可解さに、高江洲の思考は混乱した。

それでも、諦めて顎を開いたりはしなかった。

イタチザメとなった高江洲に、噛み切れないものなど存在してはならない。

みち、みちっと軋む咬筋の悲鳴を無視して、ひたすらに力を込める。いつのまにか謎の刺激臭は消滅していたが、それを意識することもなく、透明な何かを噛み砕くことだけに意識を集中する。

ゆえに、驚きから立ち直ったらしい小僧がぎこちなく右拳を振りかぶっても、避けようとは考えなかった。

《あれ》を下顎に宿らせてから、歯と顎だけでなく、身体能力そのものも飛躍的に向上している。ひ弱そうな高校生に一発や二発殴られたところで、痛みさえ感じるまい。振り下ろされる拳を無視して、あらん限りの力を絞り出す——。

衝撃。

視界が暗くなり、白い火花が瞬く。左のこめかみが焼けるように熱くなり、次いで、鉄釘を打ち込まれるような激痛が襲ってくる。

脳が揺さぶられたのか、平衡感覚までもがおかしくなり、高江洲は倒れまいと懸命に踏ん張

った。

殴られた。しかし、素手の感触ではなかった。硬く、重く、滑らかな……まるで、磨かれた鋼鉄の球を、思い切りぶつけられたかの如き一撃。

ということは、この小僧が不可視の防具を装着しているのは、首だけではないのか。拳にも、ダイヤモンドを思わせる物質でできたグローブか何かを嵌めているというのか。

いや。

もしかしたら。

高江洲は、ぐらぐら揺れる体を右側の壁に押し当てながら、小僧の無防備な腹部に左手の指を突き立てようとした。

だが、指は届かなかった。予想したとおり、小僧が着ている灰色のチェスターコートの直前で、何かに激突したのだ。つるりと滑らかで、熱くも冷たくもなく、有り得ないほどに硬い、不可視の壁。

全身だ。この小僧は、全身を守っている。

高江洲が呆然とそう考えた時、小僧が再び右拳を振りかぶった。

動きはまったくのど素人。だが、もう一度さっきと同じ威力の打撃を喰らったら、今度こそ失神してしまうかもしれない。

筆舌に尽くしがたい屈辱に耐えて、高江洲は小僧の首を噛んでいる顎を開いた。口腔に溜ま

っていた大量の唾液を振りまきながら、深く身を沈める。

小僧の拳は、一瞬前まで高江洲の頭があった場所を通過し、半分ほど開けられた金属の引き戸に激突した。

力自慢の大男が、鋼鉄のハンマーで打ち据えたかの如き轟音。

扉の表面がべっこりと凹み、剥離したペンキの欠片が宙を舞う。その中を、高江洲は懸命に這い進み、小屋の外へと転がり出た。

そのままごろごろと四メートルほども転がってから、どうにか立ち上がる。

新品のスポーツウェアだけでなく、髪にまで大量の落ち葉がこびりつき、肌は土埃で汚れている。こめかみからは一筋の血を、口からはボタボタとよだれを垂らし、脳を揺さぶられたせいでへっぴり腰にならざるを得ない。

耐えがたいほど無様な姿だが、高江洲には、怒りを感じる余裕はなかった。

小屋の戸口に姿を現した小僧の全身を、改めて凝視する。

身長は、百八十三センチある高江洲よりも七、八センチ低いだろう。この年齢にしては高いほうかもしれないが、体つきは貧相で、とても鉄扉を凹ませるほど重いパンチを打てるようには見えない…………。

いや、待て。

小屋の中から漏れるLEDライトの光が作る影が、小僧の足と接していない。

浮いている。

小僧の足が、戸口のコンクリートから、数センチだが離れている。例の透明な殻は、足の裏にまでも回り込んでいるということか。

人ひとりの全身を隙間なく包み込む、完全に透明で、鋼鉄よりも強固で、しかも自在に伸縮する装甲。そんな代物が、既存の科学技術で作れるはずがない。

腫れ上がり、ずきずきと疼くこめかみの痛みに耐えながら、高江洲は極めて不愉快な結論に辿り着いた。

あれだ。

ほんの四、五メートル離れた場所に立つ高校生も、体のどこかに、あの小さな球体を持っているのだ。

選ばれた人間は、高江洲だけではなかった。そしてあれが与える力も、一様ではなかった。

高江洲は鮫の力を得て――そして小僧は、見えない鎧を得た。

……他にも、いるのだろうか？　あの球体を宿らせる人間が？　そいつらは皆、それぞれに奇怪で危険な力を得て、日本のどこかに潜んでいるのか？

「…………許せない」

嗄れた声で、高江洲は呟いた。

そんなことは認められない。超常の力を持つ《優越種》は、この高江洲晃ただ一人でなくて

はならない。

巨大化したままの歯たちをギリギリと軋ませながら決意する。

排除するのだ。全員。目の前の小僧も……存在するのなら、他の《目玉持ち》も。

下顎の真ん中で、あれが狂おしく脈打つ。狩れ、噛め、喰い殺せ、と喚き散らすかのように。

左こめかみの痛みも、平衡感覚の狂いももう気にならなかった。圧倒的な怒りに衝き動かされるまま、体を前傾させたところで、どうにか自分を抑える。

次こそは噛む。小僧を守る透明な鎧ごと、全身の骨を噛み砕く。

だがその前に、少しでも情報を得ておくべきだ。小僧は、自分以外の目玉持ちについて、何か知っているかもしれない。

わずかに開いた口から乾いた空気を吸い込み、滾る歯たちを少しばかり冷やしてから、高江洲は小僧に向けて語りかけた。

---

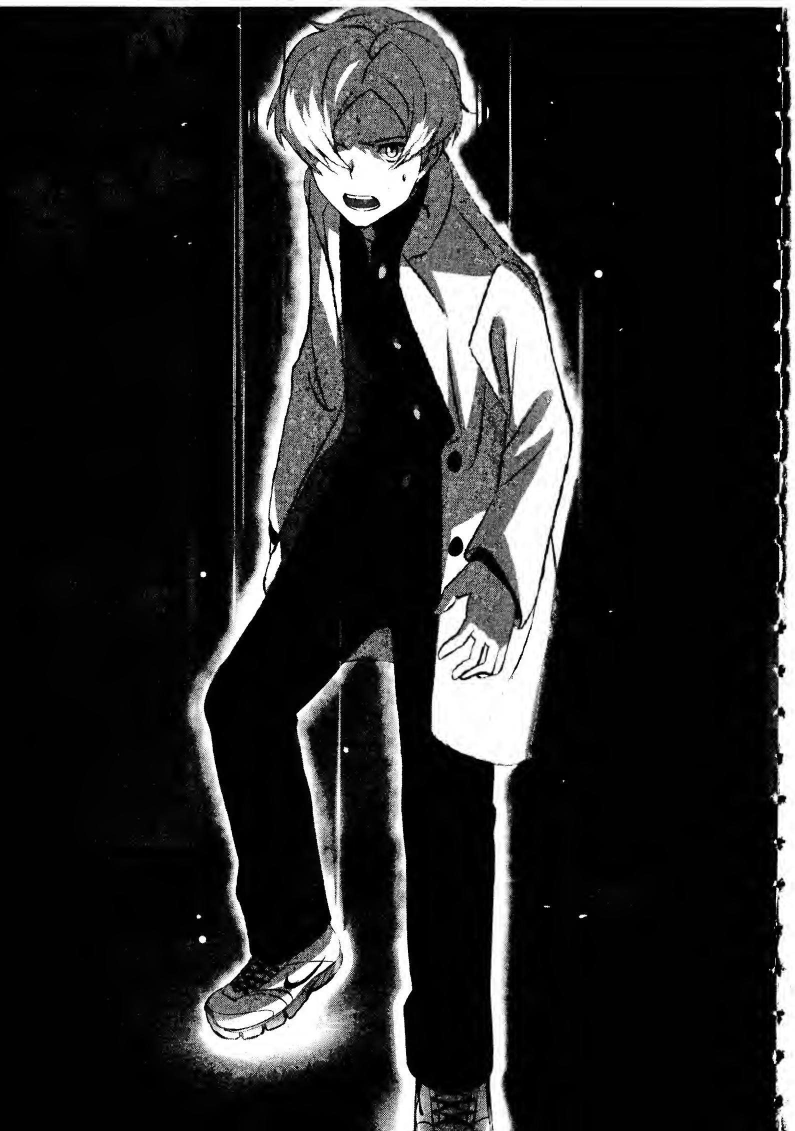
＊＊＊

---

目の前の男が、何か言葉を発したようだったが、ミノルには聞こえなかった。

男——だとは思う。だが、人間であるかどうかは確信が持てない。

上背は百八十センチを超えるだろう。手足が長く、肩幅も広い。黒いトレーニングウェアを



身につけた体はスマートだが、鍛えられた筋肉の厚みをも感じさせる。歳は三十前後だろうか。短めの髪をお洒落なツーブロックにまとめ、額から目許にかけては知的な雰囲気が漂う。

しかし、問題は、顔の下半分だった。

最初に見た時は、恐竜だ、と思った。異様に長い上下の顎が前方に突き出し、人間離れしたサイズの歯が覗く。

だが、先細りになった顎のフォルムは、爬虫類よりも魚を思わせる。しかも、人さえも襲う大型肉食魚。――鮫。

唾液に濡れてぎらぎらと輝く巨大な歯は鋭利な三角形に尖り、顔の両側には太い筋肉の束がうねっている。途轍もない力を秘めているであろう顎で一噛みされれば、人間の体など容易に引き裂かれるにちがいない。

あの顎に、一瞬ではあっても首を咥え込まれたのだ、と思うだけで全身に冷たい震えが走る。

一分数十秒前――。

小屋の扉を開け、縛られた箕輪朋美を見つけた途端、ミノルは考えることをやめてしまった。少し頭を働かせれば、扉の死角に、朋美を捕らえた何者かが潜んでいる可能性に気付けたはずなのに、無我夢中で小屋の中へ飛び込んだのだ。

直後、左側から黒い影が飛びかかってきて――ひんやりと冷たい歯と、炎のように熱い息が

首筋に触れ――刹那、胸の真ん中で、あれが激しく震えるのを感じた。

そして、またしても、あの奇怪な《現象》が引き起こされた。

音が消え、視界の色合いが変わり、体がわずかに浮き上がる。

確かに首の皮膚を凹ませていた襲撃者の歯が、見えない力に押し戻されるのを感じた時、ミノルはようやく自分に何が起きているのかを悟った。

殻だ。

眼に見えず、自在に変形し、しかし恐ろしいほど硬い殻が、体のまわりに隙間なく生成されている。

厚みは約三センチ。着ている学生服やチェスターコートが殻の内側に押しつけられる感覚がないのが不思議だが、そんなことを意識する余裕もなかった。

無我夢中で拳を握り、襲撃者に向かって突き出した。自分でも情けないほど不格好なパンチだったが、どうにか命中した。反動をほとんど感じなかったので、大したダメージは与えられなかったと思い、もう一度同じ攻撃を繰り出した。今度は身を沈めて回避されたが、襲撃者はそのまま床に転がって小屋の外に逃れ――いま、こうしてミノルと対峙している。

いったい、何者なのか。

その疑問に、ミノルは自分自身で答えを出した。

決まっている。胸に……いや、そうとは限らない。体のどこかに、あの球体を宿らせている

人間だ。何度も推測したとおり、あれと接触した者が他にもいたのだ。つまり、男はミノルの《同類》ということになる。

しかし、鮫の顎を持つ男の両眼には、仲間意識のようなものは欠片も存在しない。冷たい殺意と、滾るような敵意だけが、双眸を爛々と光らせている。

鮫男は、呆然と立ち尽くすミノルを睨みながら、突き出た顎を何度か動かした。

何かを喋ったらしいが、不可視の殻に囲まれているミノルには、男の言葉はもちろん風が梢を鳴らす音も、秋ヶ瀬橋の交通音も聞こえない。ただ、まったくの無音というわけでもなく、ごぉん、ごぉん、という機械のような……あるいは巨大生物の鼓動のような重低音がかすかに聞こえる気がする。何の音なのかは、まったく解らない。

男との距離は五メートル足らず。この状態で、《殻》を失うのは危険すぎる。そもそも解除する方法も解らないのだが、それでも、男が何を言っているのか聞いてみたいという気持ちもある……。

**完全に無味無臭**、ミノル自身の体臭すら感じない空気を吸い込み、ぐっと肺に溜めた、その**瞬間**。

**視界を覆う**、わずかに青みがかった色合いが元に戻り、体が三センチ下降して、靴底が湿ったコンクリートに触れた。

「…………！」

《殻》が消えたのだ。驚きのあまり声を上げそうになり、危うく堪える。意図せざる消去であることを気取られたら、間違いなく再び攻撃される。

だが幸い、鮫男は、殻を消したのはミノルの意志だと判断してくれたようだった。再び口を動かしながら、洒脱な仕草で両手を広げる。

「……やれやれ、ようやく私の話を聞く気になってくれたのかな」

その声も、本来はよく通る美声なのだろうが、語尾が不明瞭なうえに奇妙に歪んだ響きを帯びて、まるで人間のふりをした宇宙人が喋っているように聞こえる。

ミノルが黙っていると、男は軽く首を傾け、続けて言った。

「少年。いちおう確認しておくが……きみも、体のどこかに持っているんだろう？　あの赤い目玉を？」

「……メダマ……？」

ミノルは、反射的にそう問い返していた。

男の言葉が、ミノルの胸に埋まるあれを指していることは明らかだ。しかし、ひとつだけ、無視できない食い違いがある。

三ヶ月前、空から降ってきた謎の球体。直接眼にしたのは数秒間だけだったが、外見はいまでも詳細に思い出せる。

球体の直径は二センチ弱。表面は濡れたような光沢を持ち、透き通った表層の奥に、一回り

小さな核が収まっている。その二重円は、言われてみれば確かに生物の眼球に似ていなくもない。だが――。

「赤い……？」

そこだけが、明らかに違った。

ミノルの胸に潜り込んだ球体は、透過層が薄いグレー、そして核は全ての光を吸い込むような漆黒だったのだ。とすると、球体はひとつひとつ色が異なるのだろうか？　そもそも、全部でいくつ存在するのか……？

棒立ちになるミノルに向けて、鮫男は苛立ったように尖った顎をしゃくった。

「どうなんだね、持ってるのかい、いないのかい？」

「――も、持ってる……というより、体に、埋まってる……」

掠れた声で、ミノルはそう答えていた。

男は両眼を細めながら頷くと、更に問い質してきた。

「三ヶ月前？」

小さく頷く。

「……そうか」

男は巨大な顎を閉じると、口の両端をきゅうっと持ち上げ、子供が見たらしばらくうなされるであろう空恐ろしい笑みを浮かべた。

「きみの目玉は、なかなか愉快な力をくれたみたいだね。体中を包む、見えない鎧……さっきは少々驚かされたよ。それよりももっと驚いたのは、私の他にも目玉持ちがいたという事実に、だがね」

「…………」

言葉遣いこそ気さくな感じだが、男の両眼に宿る殺意はまったく消えていない。

そう、勘違いしてはいけない。目の前の鮫男は、《球体を宿らせている》という共通項こそあれ、決してミノルと解り合える存在ではない。なぜならこの男こそが、箕輪朋美を襲い、背後の小屋に連れ込んで、手足を縛り上げたのだから。

もしミノルが邪魔をしなければ、男は朋美を……どうしていたのか。

普通に考えれば、女子高校生を拉致して縛るような奴がすることは一つだろうが、相手はただの人間ではない。大きく突き出た異形の顎と、鋭く尖った巨大な歯。もしかしたら、あの歯を使って……。

ミノルの恐ろしい想像を、

男は、あまりにもあっさりと肯定した。

「ま、次はきっちり噛むけどね。いくら鎧があろうとも、身を守っているだけならやりようはあるさ。安心したまえ、すぐには殺さない。動けなくなった君が見ている前で、あの子をゆっくりゆっくり、時間をかけて噛んでやろう……いやいや、順番は逆のほうがいいかな……？」

「……か、噛む……？　噛む、って……」

呆然と呟くと、男はもう一度凄絶な笑みを浮かべた。

「おいおい、人間がものを噛むなら、その理由は一つだけだろう？　食べるんだよ、もちろん。私の歯は、そのためにあるのだから」

「た……べる、って……なんで、そんなことを……。あんただって、頭まであれに……目玉に乗っ取られたわけじゃないだろうに……？」

「もちろん、これは私の意志だ。目玉は、手段を与えてくれたに過ぎない。私はね、昔から、ずっと人間を噛みたいと思っていたんだよ。だから目玉は私のところに来たのさ……ちなみに私が噛むのは、君で五人目。後ろの女の子が六人目だよ？」

異相に浮かぶ笑みがひときわ大きくなり、引き延ばされた唇の下から凶悪な刃物の如き歯が幾つも剝き出された。

「では……試食といこうか」

真っ赤な舌でちろりと唇を舐め、男はじりじりと距離を詰め始めた。

浅い呼吸を繰り返しながら、ミノルは考えた。

──こいつは、本気で僕と箕輪さんを噛み殺す気だ。

早く、もう一度《殻》を出さなければ。しかし、どうすればスイッチが入るのか、それがまだ解らない。

三日前、自転車と接触しそうになった時。

二日前、上級生に殴られかけた時。

そして数分前、目の前の男に首を噛まれた時。

その三回とも、《殻》が出現する直前に、何か共通する行動を取っているはずだ。

男との距離が三メートルを切る。

……拳を握る……違う。

二メートルまで近づく。

……歯を噛み締める……違う。

目の前まで近づいた男が、凶悪なあぎとをいっぱいに開く。仄かに金属光沢を帯びる歯が、宵闇の中でぎらりと輝く。

……そうだ。

……あの時も、さっきも、僕は、息を──。

ミノルは鋭く空気を吸い込んだ。

だが、球体に与えられた能力を発動させる、その寸前。

ミノルが、そして恐らくは異相の男も、想像すらしていなかった出来事が引き起こされた。

ばっ！　と空気が弾け、ミノルから見て鮫男のすぐ左側で、地面に積もっていた落ち葉が大量に舞い上がった。

一瞬前には確かに存在しなかった人影が、そこに出現していた。

長い髪が、渦巻く風の中で翻る。黒っぽいブレザータイプの服を着た、女性。右手に何か、棒のようなものを持っている。

「ぬ……！」

両眼を見開いた鮫男が、唸り声を上げながら素早く右に向き直ろうとした。

その時にはもう、少女は右手に持った黒い棒を突き出していた。その先端が、男の右脇腹に触れた瞬間、バチッ！　と青白いスパークが強烈に閃いた。

「ぐっ！」

男がぐらりと体を揺らしたのと同時に、ミノルは、吸い込んだばかりの空気を驚愕とともに吐き出した。

目と鼻の先に立つブレザーの女性は、木の枝や小屋の屋根から飛び降りてきたわけではない。もちろん地面に潜っていたのでもない。瞬間的に、ただその場所に《出現》したのだ。

長い髪に隠されて、顔は見えない。暗がりでは真っ黒に見えるブレザーと、灰色のプリーツスカートは、恐らくどこかの学校の制服。脚は同じく黒いタイツに包まれ、靴はくるぶしまで覆うタイプの、ミッドカットスニーカー。

出で立ちは、ごく普通の女子高校生のそれだ。右手に握られた、長さ三十センチほどの黒い棒さえなければ。

先端から二つの電極が伸びる棒は、いわゆるスタンガンの仲間だろう。しかも、その手の機具にまるで詳しくないミノルにも、明らかに違法と思えるほどの高出力仕様。

強烈な電気ショックを喰らった鮫男は、長身を棒のように突っ張らせながら、後ろにぐらりとよろめいた。

だが、地面に倒れ込む寸前、右足を引いて踏み留まる。大きく仰け反った上半身の向こうに、長い顎の先端だけが見える。限界まで開かれたあぎとから、突然、凄まじい咆哮が迸る。

「ゴアアアアッ‼」

もし鮫が陸上生物だったらこんなふうに吼えるだろうと思えるその声には、空気を震わせるほどの怒りが満ち満ちていて、ミノルは再び全身を強張らせた。

男の黒いトレーニングウェアの下で、筋肉の束がうねる。後ろに傾いていた体が、弾かれたように前に戻る。電撃の影響か、両腕をだらりとぶら下げたまま、頭を突き出して謎の少女に飛びかかる。

「っ……‼」

ミノルは鋭く息を吸い込んだ。

正体は不明だが、結果だけを見れば、少女はミノルを助けてくれた。ならば今度はミノルが彼女を助けなければならない。そう思うのに、体が動かない。鮫男の咆哮で、全身が竦んでしまっている。

凶悪な歯が並ぶあぎとが、少女の黒髪に迫る。少女は体を引き、地面を蹴って飛び退ろうとするが、とても逃れられない。あの顎に噛まれれば、頭が半分なくなる――。

ガチン！　と金属質の音が響き、閉じられた歯から白い火花が散った。

噛まれたのは、空気だけだった。少女は、顎が閉じる寸前で素早く体を沈め、紙一重のところで攻撃を回避したのだ。

だが、鮫男の動きは止まらない。再び顎を突き出し、執拗に噛もうとする。がちん、がちん、と開閉するあぎとを、少女は右に左に動いて、危うく躱していく。

見事な身のこなし――ではあるが、永遠には避けられないだろう。スタンガンならぬスタンバトンをもう一度使おうとしないのは、高出力の代償として連続使用できないからか。

助けないと、とミノルはもう一度考えた。

強張り、痺れた右足を、懸命に前へ出す。ぎこちなく前進しながら、大きく息を吸う……。

だがその時、少女が湿った落ち葉に足を滑らせたか、左向きに倒れ込んだ。

「ガアッ!!」

鮫男が短く吼え、少女に覆い被さった。

両手で掴みかかりながら、九十度を超えて開かれたあぎとで、少女の華奢な首筋を――。

「っ………!」

無我夢中で男の背中に飛びかかろうとしたミノルは、しかし、無意識のうちに動きを止めてしまった。

初めて、少女の顔が見えたのだ。

端整で涼しげな美貌には、一抹の恐怖も存在しなかった。

唇はしっかりと引き結ばれ、黒々とした瞳は、自分を喰い殺そうとしている怪物を真っ直ぐ見据えている。冷ややかでさえある表情を崩さずに、少女は、右手のスタンバトンを鮫男の口の中に深々と突き入れた。

バシイッ!!

再びの破裂音。巨大な口が青白い閃光に満たされ、短めの髪が激しく逆立つ。

電撃は、たっぷり三秒以上も続いた。これでもう、さすがの鮫男も動けないだろう。少しずつ体の力を抜きながら、ミノルは新たな戦慄を覚えていた。

黒ブレザーの少女はきっと、意図的にぎりぎりの回避を繰り返していたのだ。本当はもっと余裕を持って避けられたのに、敢えて隙を作ってみせた。全ては、二度目の電撃で確実に敵を無力化するため――。

いったい、何者なのか。

異形の怪物をあしらう冷静さといい、市販品とは思えない超高出力のスタンバトンといい、見た目どおりの学生とは思えない。それに何より、前触れもなく鮫男の隣に出現した、あの現象……もしくは、能力。

この女の子も、持っているのだろうか。あれを。

瞬間的にミノルがそう考えた、その時だった。

口の中を電撃に灼かれ、完全に動きを止めていた鮫男が、顎から首にかけて浮き上がった太い筋を痙攣させた。

はみ出した長い舌は黒く焦げ、口の端からは白煙が漏れている。両眼は完全に白目を剥き、意識があるようには見えない。

なのに、巨大な口の周辺だけが、まるで別個の生物でもあるかのように震えている。限界まで開かれていた顎が、少しずつ閉じられていく。

鋭い前歯が、口に突っ込まれたままのスタンバトンを軽く噛むのを見て、ミノルは掠れ声で呻いた。

「う……そ、だろ……」

地面に倒れたままの女子高生も、今度こそ想定外の事態なのか、美貌を強張らせる。

白い右手がスタンバトンのスイッチを押し、三度目の電撃が弾けたのと、まったく同時に。

鮫男の両顎が、がちん！　と鋭い音を放って閉じた。スタンバトンは半ばから分断され、漏れ出したバッテリーの内容物が白い炎を噴き上げる。

その時にはもう、バトンから右手を放していた少女は、俊敏な動作で立ち上がりながら距離を取った。

鮫男のほうは、燃え上がるバトンの残骸を吐き出すと、縁が黒く焦げた口を——にやり、と歪めてみせた。

裏返っていた両眼が震え、ぐるりと黒目が現れる。点のように小さな瞳孔で少女を睨め付けながら、不明瞭な声を響かせる。

「……ずいぶんな真似を、してくれるじゃないか……」

さすがに傷は浅くないようで、体をふらつかせながらも、黒髪の女子高生に向けて足を踏み出す。

「……逃がさないよ……。誰だか知らないが、もう、どうでもいい。君を、噛む……骨という骨を、一本残らず、噛むからね……」

恐ろしい言葉を口にしながら、じわり、じわりと距離を詰めていく。

五メートルほど離れた場所に立つ少女は、動こうとしない。両足を軽く広げ、腰を落として、接近する鮫男を睨んでいる。

——何してるんだ、早く逃げろ。

小屋の戸口に立つミノルは、必死にそう念じた。見たところ、少女は予備のスタンバトンも、それ以外の護身具も持っていない。仮にミノルや鮫男と同じく《球体》を——何色なのかは解らないが——宿しているのだとしても、与えられた能力で鮫男を倒せるのなら、最初からスタンバトンなど使わなかったはずだ。

ミッドカットのスニーカーはしっかりと落ち葉を踏んでいるし、灰色のプリーツスカートや長いストレートヘアが風になびく様子も自然なので、ミノルと同じような透明の《殻》を出現させているわけでもないだろう。

まさか……反撃も逃走もできないと諦めてしまったのか？　このまま、鮫男に噛まれて死ぬ気なのか……？

そんなふうに考えた瞬間、ミノルは強く両拳を握り締めていた。

ちらりと背後を見やる。物置小屋の奥に倒れる箕輪朋美は、あまりの恐怖に気を失ってしまったようだ。テープで拘束された手足が痛々しいが、怪我をしている様子はない。

いますぐ朋美を抱え上げ、公園の外まで走り去るという選択肢もあった。

だが、この小屋の扉を開けたのと同じ理由で、ここから逃げることはミノルにはできなかった。

再び前を向く。鮫男とブレザーの少女は、もう三メートルも離れていない。

胸いっぱいに空気を吸い込む。その一部を消費して、叫ぶ。

「早く逃げろ！」

そして、ぐっと息を止める。肺に掛かる圧力を、胸骨の真ん中に集める感覚。

確信はなかった。だが、黒い球体は、ミノルの意志に応えた。

葉擦れの音と真冬の寒さが消え失せる。体がわずかに浮き上がる。見えない殻が展開されたのだ。やはりスイッチは《呼吸》だった。

息を止めたまま、ミノルは殻越しに地面を蹴った。こちらを向こうとする鮫男の左脇腹に、頭から突っ込む。

思い切り激突したはずなのに、ミノルはほんのわずかな減速感を覚えただけだった。しかし男にとっては、重さ五十キロ以上の鉄の塊がぶつかってきたに等しい。ひとたまりもなく吹き飛び、ミノルと一緒に地面へ倒れ込む。

異相に強烈な怒りを滾らせながら、男はミノルを押しのけようとした。

必死に抑え込んでいると、たちまち息が苦しくなる。殻が消えてしまうのではという恐怖を振り払い、肺に溜まった炭酸ガスを吐いて、無味無臭の空気を吸う。小屋の入り口で男と戦った時は、殻の中で何度も呼吸していたのだから、これで解除されることはないはずだ。

だが、新たな懸念もある。

透明な殻は、ミノルの体から約三センチ離れたところに生成されている。数学の授業で自分の体表面積を計算した時は、約一・六三平方メートルという数字だったと記憶しているので、殻の内側に存在する空気の量は、約四十九リットルか。あと何度呼吸すれば、そこに含まれる酸素を使い果たすのか……。

そんなことを考えながら、ミノルは口の動きだけでもう一度「逃げろ」と伝えるべく、少女のほうに顔を向けた。

だが、そこに、黒ブレザーの女子高生の姿はなかった。

格闘中であることも一瞬忘れて、眼を見開く。ミノルが少女から眼を離したのは、せいぜい三秒足らず。どっちに走ろうと、視界から完全に消え去るほどの距離を移動することは不可能だったはずだ。とすれば、現れた時と同じ能力を使ったのか。

鮫男は、少女の消滅に気付いているのかいないのか、狂ったように暴れながらところ構わず噛み付こうとする。いまのところミノルの殻は男の歯を防いでくれているが、いつまで保つのかは解らない。殻の中の酸素がなくなるのが先か、ガラスのように砕け散るのが先か——。

突然、落ち葉が大量に舞い上がった。

ミノルと取っ組み合う鮫男のすぐ後ろに、あの少女が立っていた。

今度こそ、ミノルは《出現》の瞬間をしっかりと見た。だが、相変わらず移動方法は解らなかった。○・一秒前には誰もいなかった場所に、瞬間移動したかの如く唐突に出現した女子高生は、またしても右手に黒い棒——新品のスタンバトンを握っていた。まるで、どこかに予備を取りに行って、いま戻ってきたかのように。

少女は、男と取っ組み合うミノルを見るや、顔をしかめて何かを叫んだ。もちろん殻の中にいるミノルには聞こえないが、「どきなさい」的なことを言われたのだと直感する。

「わ、わかった！」

同じく相手には聞こえないだろうが、そう叫び返すとミノルは鮫男から離れようとした。

その瞬間——。

いままで、理性を失ったかの如く暴れていた鮫男の眼が、冷たい理性の光を迸らせた。

体を起こしかけたミノルを、両手で殻ごと高々と抱え上げる。そのまま、プロレス技のスープレックスの要領で、真後ろに立つ少女めがけて猛烈な勢いで放り投げる。

謎の女子高生も、こればかりは予想していなかったようだ。切れ長の両眼を大きく見開き、飛び退こうと体を沈めるが、恐らく間に合わない。

激突する——！

本能的にミノルは呼吸を止め、球体に意識を集中した。直後、ミノルは、上から覆い被さるような格好で少女に正面衝突した。

涼やかな香りと、密度のある柔らかさを感じながら、勢いよく地面に倒れ込む。

殻の解除はぎりぎりのところで間に合ったが、それゆえに衝撃は大きく、すぐには立ち上がれない。ミノルの下敷きになった少女は、しかし呻き声ひとつ上げることなく、耳許で鋭く叫んだ。

「どきなさい、早く!!」

初めて聞く少女の声は、和弓の矢音を思わせる、清冽な響きを持っていた。

ミノルは慌てて跳ね起きようとしたが、自分のコートの裾と少女のスカートを同時に右膝で踏んでしまっていて、なかなか離れることができない。立つのを諦め、左に転がって距離を取

る。

すかさず少女が立ち上がり、右手のスタンバトンを構えながら身を沈めた。獲物に飛びかかる寸前の黒豹を思わせる、しなやかな動き。

しかし直後、土埃で汚れた顔に、悔しそうな表情が浮かぶ。

慌てて振り向いたミノルが見たのは、小屋の脇にある灌木の茂みを突っ切って遠ざかる黒い人影だった。時々ばちん、ばちんと聞こえるのは、鮫男が邪魔な枝を喰いちぎる音か。

瞬間移動できるなら、その力で追いかけられそうなものだが、少女は腰を落としたまま動かない。

鮫男が発する音はたちまち遠ざかり、消える。あの方向にはサッカー場やテニス場があったはずなので、すぐに開けた空間に出るだろう。謎の少女は、人目につくことを忌避したのだろうか。

数秒後、ため息をつきながら体を起こした女子高生は、スカートを無造作にたくし上げると、右の太ももに装着されているホルスターにスタンバトンを収めた。

地面に尻餅をついたままのミノルにはもう眼もくれず、物置小屋に向けて足を踏み出す。歩きながら、左手首に装着した小さな時計に向けて、低く囁きかける。

「《バイター》は逃げた。保護対象者一、予定外の確保対象者一。一番と三番のキット持ってきて」

……あの時計、あんなに小さいのに通信機能があるのかな？　キットってなんだ……？

半ば呆然としながらそんなことを考えていたミノルは、ようやく、少女が向かう先の小屋に誰がいるのかを思い出した。

「あっ……み、のわ、さん……」

強張った口で切れ切れに名前を呼びながら、震える足に力を込めてどうにか立ち上がる。

ミノルが小屋の入り口に到達した時、すでに謎の少女は、気絶したままの箕輪朋美を抱き起こしていた。手慣れた様子で脈を取り、呼吸を確かめている。

「あ、あの……箕輪さん、無事……ですか」

扉の端に摑まりながら、ミノルはそう言葉をかけた。

すると少女は顔を上げたが、応じようとはしない。厳しい――敵意さえ感じられる視線で、じっとミノルの顔を射貫く。

しばらくして、ようやく少女の唇が動いた。

「この子の名前を知っているの」

冷ややかな声に気圧されながらも、こくりと頷く。

「は、はい……同じ学校ですから……」

「ふうん。《ルビー》のうえに大馬鹿か。同じ学校の子を狙ったりしたら、すぐ正体がバレるのに。まあ、もう関係ないけど」

その言葉の意味は、ミノルにはまったく解（わか）らなかった。

「……ルビー？　狙（ねら）う……？」

「下手（へた）な演技はやめなさい。どうせ、バイターとこの子を奪（うば）い合って仲間割れしたんでしょ」

「……演技……？　バイター……？」

九割がた理解不能ではあるが、しかし最後の言葉だけは聞き捨てならない。深呼吸してから、少しだけ音量を増した声で言い返す。

「……あの、バイターってのがさっきの怪物のことなら、僕は仲間なんかじゃ……」

——その時。

ミノルは、背後で響（ひび）いたかすかな音に気付いた。落ち葉が、靴に踏（ふ）まれる音。

素早く小屋の戸口から離（はな）れ、壁を背にしながら振り向く。

すると、五メートルほど離れた場所に、黒い人影があった。

あいつが戻ってきたのか、と息を吸い込みかけてから気付く。人影は、鮫男（さめおとこ）——少女の言い方に従えば《バイター》と比べれば、かなり縦方向に小さい。ミノルと比べても十センチは低いだろう。

その背格好ゆえに、またもや女の子かと思ったが違った。黒ブレザーの少女と同年代か少し上の、男だ。

オリーブ色のキャップを前後逆に被（かぶ）り、迷彩柄（めいさいがら）のダウンベストを着ている。下半身はだぶっ

としたカーゴパンツに、ごついコンバットブーツ。両手にぶら下げているのは、黒い金属製のアタッシェケース。

なかなか威圧的（いあつてき）な出で立（い）ちではあるが、しかし顔や表情に剣呑（けんのん）なところは皆無（かいむ）だった。瞼（まぶた）が重そうな印象の眼を見開き、まじまじと——あるいはポカーンとミノルを眺（なが）めている。

どう反応していいのか解らず、ミノルが立ち尽（つ）くしていると、小屋の中から少女が歩み出てきた。ブレザーを脱いで、白のブラウス姿だが、寒そうな素振（そぶ）りはまったく見せない。警戒心も露（あら）わな目つきでミノルを睨（にら）みながら少し離れた場所を通り過ぎ、小柄な青年に左手を突き出す。

「DD（ディーディー）、三番キットちょうだい」

「あ、お、おー」

《DD》と呼ばれた若者は、頷（うなず）くと左手のアタッシェケースを持ち上げた。しかし、少女が受け取る寸前、素早く引っ込める。

「……ちょっと、何のつもり？」

「いや、だって、確保対象のルビーってこのボーヤなの？　拘束（こうそく）もなにもしてないのに？」

「何かしようとしたらすぐ無力化するわ。バイターと戦って死んでないだけで、証拠（しょうこ）は充分でしょ。騙（だま）されないで、もう精神干渉（かんしょう）が始まってるわ。同じ学校の子を攫（さら）って殺そうとしたんだから」

「ま、マジかよ。かわいー顔してんのになー」

「そうかしら。……じゃなくて、はやくそれ貸しなさい。今夜中に処理したいから」

「わ、わーったよ。さすがにせっかちだなー、ユミコちゃんは……」

「こら、あんたなに名前で呼んでるのよ！」

「あっ、ご、ごめん」

……で、女の子の名前が《ユミコ》？　こっちはどうやら本名みたいだけど、ＤＤってのは違うよな。それとも、ああ見えて外人さん……？

などと考えてしまってから、ようやくミノルは、二人が自分のことを話しているのだと気付いた。確保対象、とは捕まえるという意味だろうか。ならば、処理するとはいったい——。

尚も立ち尽くしていると、黒いアタッシェケースを受け取ったユミコは、くるりと振り向き、冷ややかな声で告げた。

「抵抗しなければ、手荒な真似はしない。これからあなたに注射を一本打つけど、ただの鎮静剤だからしばらく眠るだけ。そのあいだに東京の某所で摘出手術と記憶のブロックを施して、今夜中には家に帰してあげるわ」

言いながら、ぱくんと音を立ててケースを開く。中には、黒い緩衝材に固定された、大型の注射器やその他の器具類が並んでいる。

思わず一歩遠ざかりながら、ミノルは問い返した。

「て、摘出……って、何を……」

「決まってるでしょ」

少し迫力を増した声で、ユミコが答えた。

「あなたの体のどこかに埋まってる《サードアイ》を、よ」

「サード……アイ」

再び、鸚鵡返しに呟く。

Ｔｈｉｒｄ　Ｅｙｅ。第三の眼。

初めて聞くその言葉が示すものは、ミノルにも容易に推測できた。

ミノルの胸骨に埋まる、小さな異物。鮫男が《目玉》と呼んだ、黒い球体。

《サードアイ》などという名称を用いるからには、この二人は球体についての研究や分析を進めているのだ。それも恐らく、組織的に。

ミノルの沈黙をどう解釈したのか、ユミコは少しだけ語気を緩めて言った。

「……あなた、《バイター》と仲間割れしたってことは、まだ完全に乗っ取られてはいないんでしょ？　でも、このままほっといたら、あなたもあの鮫野郎みたいに見境なく人間を襲って殺すようになるよ。いまならまだ、元の日常に戻れる。サードアイに寄生される前の、普通の生活に」

両眼に宿る敵意が、わずかにせよ薄れたせいか。

こんな状況ではあるが、ミノルはユミコの強烈なまでの存在感を改めて意識せずにはいられなかった。

目鼻立ちは、凄腕の彫刻家が入魂の一刀で彫り上げたかのような揺るぎのない造作。ことに印象的なのが、澄んだ夜空のような深い色の瞳で、ミノルはつい吸い込まれるようにその奥を凝視してしまった。

するとユミコは、いぶかしむように弓形の眉をひそめ、真っ直ぐにミノルの目を見詰め返してきた。唇が動き、かすかな声が漏れる。

「あなた……もしかして……？」

ほとんど同時に、後ろに立っていたＤＤも、右手でキャップのつばを持ち上げながら唸るように言った。

「待った……こいつ、本当にルビーなのか？　《ジェット》じゃねーのかよ……？」

またしても初耳の用語にミノルは首を傾げたが、ユミコはもう解説してくれる気はないようだった。振り向き、ＤＤと口早に言葉を交わし始める。

「でも、関東にもうジェットはいないって断言したのはあんたじゃない」

「正確には、覚醒済みのジェットはもういないって言ったんだ。いくら俺の鼻でも、未覚醒のサードアイまでは嗅ぎ分けらんねーよ」

「未覚醒なら、なんでバイターと戦って無傷なのよ？　能力を使わなきゃ、一瞬で噛み殺されてたはずでしょ」

「そ、それはそーだけど……」

どうやら自分について交わされているらしい会話の中身を、ミノルはどうにか理解しようとした。

《ルビー》や《ジェット》というのは、もしかしたら球体――サードアイの種類だろうか。そうなら、ルビーは鮫男が言っていた《赤い目玉》のことだと思われるが、ジェットが何色を指すのかは解らない。覚醒、未覚醒という言葉の意味も不明だ。

唯一確かだと思えるのは、バイターこと鮫男も、そしてユミコとＤＤも、空から降ってきた球体を体のどこかに宿しているということだ。バイターの巨大な口や、ユミコの瞬間移動は、ミノルの《殻》と同じく球体に与えられた力なのだ。

いや、力だけではないのかもしれない。

ユミコの言葉を信じるのならば、バイターが箕輪朋美やミノルを喰い殺そうとしたのも、サードアイの影響らしい。

――なら、僕も本当に、そのうち人を襲うようになるのか……？

半ば呆然としながらそこまで考えた時、ミノルはようやく重要なことを思い出し、あっと声を漏らしてしまった。

再度振り向いたユミコが、警戒心も露わに睨んでくる。

「どうしたのよ？」

「あの……僕のことより先に、箕輪さんを……」

　箕輪朋美は、まだ背後の物置小屋に寝かされたままだ。大きな怪我はしていないとは言え、恐ろしい怪物に拉致され、あわや喰い殺されるところだったのだから、大変な精神的ショックを受けたはずだ。

　小屋に向かおうとしたミノルの左腕を、細い、しかし力強い指が摑んだ。

「待ちなさい」

　一瞬で至近距離まで間を詰めたユミコが、口答えを許さない、厳しい声を放った。

「私の質問に、正直に答えて。三ヶ月前、サードアイ……空から降ってきた球体と接触した時のことは憶えているわね？」

「……え、ええ」

「あなたに寄生した球体は、何色だった？」

　普段のミノルならここで、どう答えれば相手が気に入るのか、と真っ先に考えてしまっただろう。

　だが、ユミコの瞳に見詰められた瞬間、ミノルは吸い込まれるように真実を口にしていた。

「……………黒」

「…………」

　更に数秒間ミノルを凝視し続けてから、ユミコはごく小さな動きで頷いた。

「……本当にジェットなのね……。――行っていいわ」

　手を離し、一歩下がる。後ろのＤＤが、慌てたように口を挟む。

「い、いーのかよ？」

「この子がルビーじゃないって言ったのはあんたでしょ」

「だ、断言はしてねーし」

「ああもう、ぐだぐだ言ってないで、バイターの匂いでも嗅いでなさいよ」

「力を使ってくんなきゃ嗅げねーよ」

　そんなやり取りを背中で聞きながら、ミノルは小走りに小屋へと戻った。

　箕輪朋美は、何枚も重ねられたブルーシートの上に寝かされていた。体には黒いブレザーが掛けられ、まだ瞼は閉じたままだが顔色は悪くない。手足を拘束していたテープはすでに取り除かれ、ソックスと靴もちゃんと履いている。

「……箕輪さん」

　囁きかけながら、傍らにひざまずく。

　躊躇いがちに手を伸ばし、即席の上掛けから覗くジャージの肩に指先を触れさせる。

　あまりにも多くの、しかも信じがたい出来事が立て続けに起きたせいで、まだ頭は激しく混乱している。だが、一つだけ確かなことがある。

西洋庭園のベンチで、ミノルがもっと真剣に朋美と向き合っていれば。

涙を流す朋美に、何の言葉を掛けもせず、そのまま立ち去らせたりしなければ。

朋美が、あの恐ろしい鮫男——バイターに襲われることは、きっとなかった。

「……僕の…………せいだ」

喉から絞り出した掠れ声が、聞こえたかのように。

朋美の睫毛が震え、ゆっくりと瞼が持ち上がった。

LEDライトの弱々しい光の中で、茶色がかった瞳が何度か瞬きを繰り返してから、ミノルの顔に焦点を結ぶ。唇がかすかに動き、ほとんど音にならない声が零れる。

「…………うつぎ、くん……？」

「…………うん」

頷くことしかできないミノルを、朋美はしばらく見詰め続けていたが、やがて淡い微笑みを浮かべて言った。

「…………夢じゃ、なかったんだ。…………空木くんが、助けて……くれたんだね」

「いや……僕は、なにも……」

できなかったんだ、と言おうとして、ミノルは口をつぐんだ。震えそうになる唇で、どうにか笑みのようなものを作り、答える。

「もう、大丈夫だよ。すぐ、家に帰れるから」

「…………ありが……とう……」

微笑みながらそう囁くと、朋美はまた瞼を閉じてしまった。限界を超える負荷を受けた心が、再びスイッチを切ったのだろうか。

ミノルは、壁際に転がっていた黄色いデイパックの肩紐に手首を通してから、朋美の体の下に両腕を差し込み、ブレザーごとそっと持ち上げた。

小屋から出ると、ユミコとDDが並んで立っていた。一歩前に出たユミコが、朋美の顔を覗き込んで言う。

「大丈夫みたいね」

「…………ええ」

頷いてから、礼を言うべきなのかどうか考えていると、先に思わぬ言葉が告げられた。

「その子は、私たちが預かるわ」

「え……いや、僕が家まで送りますから……」

「だめよ、ちゃんと病院で診て貰わないと。それに……その子、バイターの顔を見ているのよ。また狙われる危険がある。そんなことも想像できないの？」

「…………！」

言い方は刺々しいが、確かにそのとおりだ。

バイターが、偶然森を通りかかった朋美に眼を付けたのか、それとも最初から狙っていたの

かは解らない。仮に後者だとするならば、確かにあの怪物は朋美の名前や自宅まで知っている可能性がある。

　だが、言われるがままに朋美を預け、責任を放棄してしまうことを良しとしない気持ちが、ミノルをかたくなにさせた。

「……だったら、あんなにすぐ諦めないで、バイターを追いかければよかったじゃないですか。あなたは、あれ……サードアイ、の力で瞬間移動できるんでしょう？　なら、楽に追いつけたはずなのに」

　その言葉を聞いた途端、ユミコの両眼が険しくなる。いつもなら萎縮して顔を伏せてしまう場面だが、いまだけは半ばやけくそな気分で、相手の視線を受け止め続ける。

「……できるもんなら、やってたわよ」

　吐き捨てるように呟いたユミコは、大きく息を吸い、吐くと、抑制された口調で続けた。

「言われなくてもバイターは見つけるわ。あのダメージなら、しばらくはこの街から動けないはずだから。……ま、あんたがその子をどうしても家に帰すっていうなら、バイターをおびき出す餌に使わせて貰うけどね」

「…………そんなつもりは……」

　反射的に言い返しかけたが、ミノルはそこで唇を噛んだ。つもりがあろうとなかろうと、朋美の自宅が危険なことに変わりはない。だが。

「……なら、あなたがこの子を連れて行く病院は、安全だって言い切れるんですか」

「少なくとも自宅よりは確実に。それに、もちろん警護もする」

「…………」

　ミノルは、もう一度、腕の中の朋美に視線を落とした。

　気を失っているというより、眠っているようだ。全身にしっかり筋肉がついているせいか、小柄なわりには確かな手応えがある。命ある、人間の重み。

　だがこの重みが、ちょっとした運命の気紛れで簡単に失われてしまうことを、ミノルは知っている。

「……この子の家族には、何て説明するんですか」

「んー、変質者に襲われかけたけど、たまたま人が通りがかって無事だった……かなー」

　と答えたのは、ユミコではなくDDだった。ダウンベストに包まれた肩をひょいとすくめ、言葉を続ける。

「こういうケースは初めてじゃないんだ。きちんとその子を保護、治療したうえで、もとの生活に戻すノウハウが俺らにはある。メンタル面のケアも含めてね」

「でも、変質者の仕業ってことにしたら、警察が事情を訊きに来るんじゃ……？　それとも、警察とかマスコミも抑えられるんですか？　……あなたたちは、いったい、何者なんですか……？」

　ユミコとDDの向こうに何らかの組織の存在を感じていたミノルは、恐る恐るそう訊ねた。

「んー、俺らは一応お上に仕える身だけど、警察や報道をどうこうする力なんてありゃしないよ。詳しいことは、正式に協力要請して、色々書類を書いて貰ってからじゃないと話せないんだけどね」

「協力……要請？」

「そういうことになるだろーね。……いま、この日本には、殺人衝動を持つ《ルビーアイ》が山ほど潜伏してるんだ。さっきのバイターもその一人。全国で急増している行方不明者の大部分が、ルビーの犠牲者だと推測されてる。ちなみに、ルビーって呼んでる理由は、寄生してる球体の色が赤いからだよ」

　少し間を置いて、DDは説明を続けた。

「いっぽう、黒い球体を持つ俺ら《ジェットアイ》は、ルビーよりかなり少ない。恐らく君は、関東地方で最後に確認されたジェットだ。能力の種類にもよるけど、まず間違いなく協力を要請されると思う。ちなみに、ジェットはジェットエンジンのジェットじゃなくて、黒玉って意味ね」

「…………」

　ミノルは、しばし呆然とDDの顔を眺め、次いでもう一度朋美に目を落とした。

　やはり、あの球体は二種類存在するのだ。

　赤いものが《ルビーアイ》、そしてミノルの胸に埋まっている黒いものが《ジェットアイ》。ルビーアイに寄生された人間は、バイターのように他の人間を襲うようになる。ユミコやDDたちジェットアイを持つ人間は、お上、つまり政府によって組織化され、ルビーアイと戦っている……。

　信じがたい――を通り越して、荒唐無稽な話だった。

　顔を上げたミノルは、掠れ声で訊ねた。

「……サードアイは、どこから来たんですか？」

　すると小柄な若者は、遭遇して以来最も真剣な表情を作り、右手の人差し指を真上に向けた。つられて見上げると、木々の梢の向こうに、灰色の夜空に瞬くわずかな星が見えた。

　…………宇宙？

　……宇宙から来た謎の物体が人間に寄生して、超常的な能力を与えて、人を襲わせたり守らせたりしてる……だって？

　やめてくれ、と胸中で呻く。

　そんな話を受け入れたら、ミノルが最大限の努力を重ねて守ってきた日常など、次元の彼方にまで吹き飛んでいってしまう。何より、《悪と闘う組織》などというものに加わる資格が、ミノルにあるはずがない。

八年前のあの日、ひとり床下に隠れて、目を耳を塞ぎ続けていたのだから。

大好きだった両親と姉を犠牲にして、自分ひとりだけ生き残ったのだから。

「おい、大丈夫かい、少年？　顔色が悪いぞ」

ＤＤの声に、ミノルははっと目を見開いた。

――僕はいない。どこにもいない。

心の中でおまじないを唱えて、繋がりかけた記憶の回路を懸命に切り離す。

「いえ……何でもないです」

小刻みにかぶりを振りながらそう返事をすると、右側で口を引き結んだままのユミコに目を向ける。

組織の詳細は教えて貰えなかったし知りたくもないが、少なくとも、ミノルにできないことが彼らにできるのは確かだ。

それに、これ以上、箕輪朋美の近くにいてはいけないことも。

「……解りました。箕輪さんを、よろしくお願いします」

呟くように言うと、ミノルは眠る朋美をそっと前に出した。

ユミコがいっけん華奢な両腕で軽々と受け取ると、右手に引っかけていたデイパックはＤＤに渡す。

「その中に、箕輪さんの生徒手帳とかが入ってると思いますから」

「了解。保護者への連絡はこっちでやっとくよ」

「……お願いします」

軽く頭を下げると、ミノルは少し離れたところに落ちていた自分のメッセンジャーバッグを拾った。そのまま歩き始めた途端、鋭い声が飛んでくる。

「ちょっと、どこに行く気？」

立ち止まり、しかし顔は動かさずに短く答える。

「帰ります」

「帰るゃて……そんなのダメに決まってるでしょ。さっきＤＤがあれこれ言ったこと、聞いてなかったの？」

ある程度予想していた台詞だったが、かたくなに前を向いたまま、ミノルはかぶりを振った。

「僕にできることはもうないんでしょう。そう言ったのはあなたじゃないですか」

「この場でできることはなくても、これからして貰うことは山ほどあるのよ」

刺々しいユミコの声を、慌てたようなＤＤの声が遮る。

「ま、待った待った、もっと穏便に行こーよユミコちゃん。せっかく新しい仲間が見つかったんだからさー」

「私はまだこいつが仲間だなんて……」

「わー、ちょっと黙っててお願いだから！」

そう叫ぶと、DDはがさがさ落ち葉を鳴らして走り、ミノルの前に回り込んだ。見事な八の字を描く眉の下で、取りなすように笑みを浮かべる。

「えーと、あのさ、君、もっといろいろ知りたいことあるんじゃない？　一緒に来てくれれば教えてあげるよ、可能なかぎり」

「…………」

確かに、サードアイや、二人の属する組織について詳しく知りたいという気持ちはあった。だがそれ以上に、もうこの場所にいたくない、という拒否感のほうが大きかった。

箕輪朋美がバイターに襲われるきっかけを作ったのはミノルだ。幸い肉体的な怪我はなかったとはいえ、心には深い傷を負ったはずだ。数十分前、黙って朋美を行かせてしまったことを……いや、三日前に荒川土手で長々と会話をしてしまったことを、どれほど悔やんでも悔やみ切れない。

——もう、僕のせいで、誰かが傷つくのは嫌なんだ。絶対に。

心の中でそう呟きながら、ミノルはぼそりと答えた。

「いいです、別に」

「えっ」

ミノルの返事に本気で驚いたのか、DDがぱちくりと瞬きする。

「いいって……知りたくないの？　だって、常識では有り得ないことでしょ、何もかも」

「……常識なんて、ただの幻です。なんだって、起きる時は起きるんです」

「へ、へぇー……若いのに、なかなか達観しちゃってるんだねえ……」

今度は本気で感心したように、首を左右に傾ける。

その時、やり取りに業を煮やしたような声が、左側から聞こえた。

「もういいからスティックを使いなさい」

ぎょっとしたように眼を剝くDDの右手が、ぴくりと動いたことにミノルは気付いた。

スティックとは恐らく、ユミコが使っていたスタンバトンのことだろう。言われてみれば、迷彩柄のダウンベストの左側が、右側に比べて少しだけ膨らんでいる気もする。

困り顔で固まるDDを凝視しながら、いつでも息を止められるように準備していると、再びユミコの冷ややかな声が響いた。

「ルビーアイの犠牲者について説明されたのに、自分は関係ないですみたいな顔してる奴には、それなりの扱いをしてやればいいのよ」

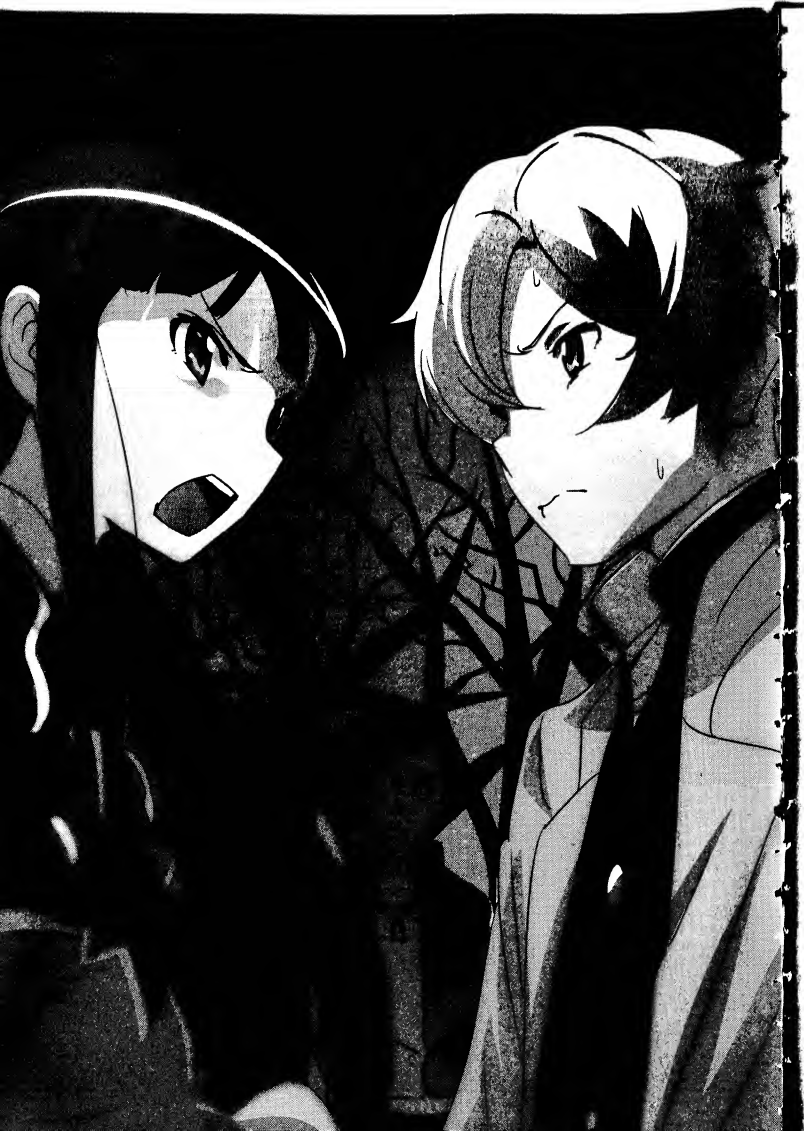
「い、いやいやいや、同じジェットに手荒なことするわけには……」

「同じ？　冗談じゃないわ」

吐き捨てるようなひと言に、毅然とした足音が続く。

ミノルの左側、かなり近いところで立ち止まったユミコは、有無を言わせぬ口調で命じた。

「こっちを向きなさい」



「…………」

二秒ほど抵抗してから、左に向き直る。

朋美を抱いたままのユミコが、超高温の炎を結晶化させたかのような瞳でミノルの眼を射貫いた。反射的に目線をずらしながら、こんなふうに他人の眼を真っ直ぐ見たことが僕は一度でもあっただろうか、とミノルは頭の片隅で考えた。

「……ジェットアイを体に宿した時点で、あなたに選択の余地はなくなったのよ」

凛とした声が耳を打つ。

「こうしているあいだにも、どこかでルビーが罪もない人たちを狙っている。全てのルビーを駆逐するまで戦い続ける義務が、あなたにはあるのよ！」

日頃、他人から叱責されるような事態を忌避し続けているミノルにとって、ユミコの言葉は胸に打ち込まれる鉄釘のようだった。

だが、その痛みの中にも、ユミコの高圧的な口ぶりに対するささやかな反発心は存在した。

ミノルは両拳を握り締め、慣れない抗弁を喉から絞り出した。

「……好きであれを受け入れたわけじゃない。ジェットとかルビーとか、さっき初めて聞いたんです。知らなかったんです、何も」

「だから、知らなかったことを恥じて、ルビー殲滅に協力しなさいって言ってるのよ！」

「僕には関係ない。戦いたい人が戦えばいいでしょう。――もう帰ります」

これ以上会話を続けても痛みの記憶が増えるだけだと思ったミノルは、ユミコの左側を通り抜けて森の外に向かおうとした。

だが、その方向に一歩動いて通せんぼしたユミコが、十二月の夜気よりも冷たい声でDDに命じた。

「いますぐこのバカにスティックを使いなさい。力尽くでも本部まで連れていく」

「だ、だから、そりゃーヤバイってばさ」

と応じる口調は変わらず軽いが、声には焦りの色がある。

「そんなことしたら、説得できるもんもできなくなるよ。だいたい、少年の能力はまだ未知数なんだ。まがりなりにもあのバイターと戦って無傷だったんだぜ、ここは本人の意志を尊重してだな、話し合いはまた後日ということで……」

「本部の記録を見たら、こいつも甘っちょろいこと言えなくなるわよ。こいつよりずっと小さいサナエが、どれだけ勇敢に戦ったか……！」

怒りに満ちたユミコの言葉には、初めて耳にする名前が含まれていた。しかし、それを気にとめる余裕はもうミノルにはなかった。自分でも意外なほどの苛立ちに衝き動かされるまま、低く吐き捨てる。

「知りたいなら、いま教えてあげます。能力を使ったら、僕の声はそっちに聞こえなくなるし、そっちの声も僕には聞こえないから。――僕は、体のまわりに、何も通さない透明な殻を作れるんです。だから、そんな武器は効きません」

「へええ……なるほどなー」

途端に興味深そうな表情になったDDは、キャップの鍔を引っ張りながら唸った。

「それで、バイターの奴に嚙まれても無傷だったわけか。しっかし、人間を骨ごと齧るあいつの歯を防ぐとは大した力だよ、うん。これは……むむ……ねえユミコちゃん、ここはひとまず引き下がろう。少年の言うとおりなら、確かにスティックは役に立たないよ」

「…………」

するとユミコは、スタンバトンの代わりに視線で昏倒させようとするかの如き強烈な一瞥をミノルに浴びせてから、短く息を吐いた。

「……胡散臭い話だけど、もし事実なら、ちょっとだけ興味深いわね。確かに、バイターは、こいつを嚙もうとしても嚙めなかったように見えた……」

「話し合いは、日を改めてもっと穏便にやろーぜ。――そんなわけで、少年、脅かしちゃってすまんかったね。話はまた後日っつーことで」

キャップを軽く持ち上げながらDDはそう言ったが、ミノルはかたくなにかぶりを振った。

「もう、あなたたちと話をする気はないです。……じゃあ、箕輪さんのこと、よろしくお願いします」

ユミコの腕の中で眼を閉じたままの朋美をちらりと見てから、ミノルは今度こそ森の南へと

歩き始めた。

数メートル離れた時、背後から、二人の声が投げ掛けられた。

「最後にひとつだけ忠告するわ。バイターは、この子だけじゃなくて、あなたの顔も見ている。狙われる可能性はゼロじゃないわよ」

「匂いだ。ルビーアイの匂いに気をつけろよ、少年」

一瞬足を止めたミノルは、前進を再開しながら答えた。

「自分の身は、自分で守れます」

---

——とは言っても、秋ヶ瀬公園を出て自転車で家に向かう道すがら、ミノルは何度も周囲を確かめずにはいられなかった。

薄暗い小道や、路上駐車された車の陰に、あの鮫男が潜んでいるのではないかと思うだけで呼吸が浅くなる。物置小屋で、首筋を巨大な歯に挟み込まれた時の感覚は、まだ肌に染みついている。

だが、DDの最後の言葉を信じるならば、鮫男を含むルビーアイは匂いで識別できるらしい。言われてみれば、そもそもミノルがあの小屋に近づいたのも、大型の獣を思わせる異様な臭気が気になったからだ。

きっと、あれこそがルビーの匂いなのだろう。十メートル、いや三十メートル以内に近寄られれば気付かないわけにはいかないほどの異臭なので、少なくとも物陰から急に襲われるようなことにはならないだろう。

しかし、それ以前に——。

異形の怪物に殺されかけたことを含めた何もかもが、大掛かりな虚構のように思えてならない。

宇宙からやってきた謎の球体《サードアイ》。それに寄生された者は、既知の科学では説明できない能力を発揮するようになる。赤い球体を宿すルビーアイは、能力だけでなく人を殺したいという欲求をも与えられ、黒い球体を宿すジェットアイが、ルビーの殺人を防ごうとしている。

ここまででも充分に信じがたい話だが、いっそう不思議なのが、なぜこんな大事件がまったく世間に知られていないのか、ということだ。ルビーアイが人を襲うというなら、全てを公にして、広く国民に注意を喚起するべきではないのだろうか。

バイターなる異形の男は、ミノルが邪魔をしなかったら、間違いなく箕輪朋美を殺していた。ユミコたちが後を追っていたようだが、朋美を無傷で助け出すには数分遅かったはずだ。

なればこそ、彼女たちの組織が、秘密裏に対処しようとしていることには納得が行かない。すでに多くの被害者が出ているというなら、ミノルひとりに協力を強要せずとも、警察なり自衛隊なりを動員して大々的に対処すればいいのだ。

わずかな憤（いきどお）りを交えつつそこまで考えてから、ミノルは軽く唇（くちびる）を噛（か）んだ。

いつものように「どうでもいい」と思えない理由は、自分で意識している以上に、ユミコの叱責（しっせき）が堪（こた）えているからだろうか。まったく自分らしくない。こんなふうに怒（いか）ったり反発したりするほどに、痛みの記憶（きおく）が強く、大きくなってしまうだけだというのに。

——忘れるんだ。全部。ジェットアイたちが人知れずルビーアイと戦いたいなら、そうすればいい。僕の知ったことじゃない。

胸の裡（うち）でそう呟（つぶや）き、左腕の時計を一瞥（いちべつ）する。空は真っ暗だが、まだ七時にもなっていない。荒川（あらかわ）から離（はな）れて生活道路に入ると、部活帰りの中高生やコンビニ袋をぶら下げたサラリーマンの姿が目につき始める。つい十数分前に、恐ろしい怪物と命がけの取っ組み合いをした記憶が、少しずつ現実感を失っていく。

——忘れるんだ。

もう一度独りごちると、ミノルは自転車を漕（こ）ぐ脚に力を込めた。

## 6

手足の関節が軋（きし）むくらい寒く、顔全体が焼け付くように痛み、はらわたが捩（よじ）れるほどに空腹だったが、ぐつぐつと滾（たぎ）る怒（いか）りのエネルギーで、高江洲（たかえす）はそれらの感覚を捻（ね）じ伏せた。

公園から二キロほど離れた解体工事中の廃ビルに忍び込んでから、すでに六時間近くが経過している。零時（れいじ）を跨（また）いで日付は十二月七日土曜日へと変わり、今日と明日は工事は行われないはずだ。二日間ここで身を休めれば、また動けるくらいには回復するだろう。

もとは倉庫だったらしい大きな廃ビルの一階は、至るところから寒風が吹き込み、コンクリート剝（む）き出しの床は氷のように冷たい。布団（ふとん）代わりの汚（よご）れたブルーシートにくるまり、逃走中に自販機で買ったペットボトルのジュースを少しずつ舐（な）める。

日頃（ひごろ）は異性化糖入りの清涼飲料水など頼（たの）まれても飲まないが、いまはこれに頼（たよ）るしかない。焼け焦（こ）げた顔ではコンビニにも入れないし、奇妙で危険な連中に追跡されていると解（わか）った以上、元通りに動けるようになるまではこの隠（かく）れ場所でじっとしている必要がある。

少しでも眠って体を休めなければ。そう思うが、思考を空白にすると、すかさず怒りの炎が燃え上がろうとする。

「……静まれ（トランキラ）……落ち着け（カーマティ）……」

口を動かさずにそう呟きながら、眠るのは諦めて、せめて静かに考察を巡らせる。

待ちに待った骨の饗宴を、まず透明な殻を持つ小僧に邪魔され、次に瞬間移動できる小娘に襲撃された。どうにか小娘のスタンバトンは噛み切ってやったものの、二人のどちらにもかすり傷ひとつ付けられず、負け犬のように逃げ出さざるを得なかった。

——あの状況では、最善の選択だったのだ。

高江洲の理性はいまもそう判断しているが、感情ではどうしても納得できない。

最強のハンターである鮫の力を手に入れたこの自分は、選ばれた存在ではなかったのか。あらゆるものを噛み砕く、傲慢なる捕食者ではなかったのか。

——いや。決して、惨めに敗走したわけではない。

目玉持ちが、高江洲の他にもいたこと。目玉が与える能力は、個々で異なること。そして、恐らく組織的に、目玉持ちを狩っている奴らが存在すること。

それらの新情報を吟味し、計画を練り直すために、いっとき距離を取っただけだ。人喰い鮫が、哀れな獲物の周囲をゆっくり旋回するように。

惜しくも噛みそこねた少女の知り合いらしい小僧はともかく、瞬間移動の小娘は、最初から高江洲が目玉持ちだと知って襲撃してきたようだった。しかし、どうやって居場所を掴んだのか、それが解らない。

ずっと尾行されていたのなら、少女を物置小屋に引っ張り込む前に攻撃されたはずだ。また、

目玉の力によって追跡できるのなら、何時間も前に小娘はこのビルに現れただろう。

小娘、もしくは小娘の仲間の追跡能力が限定的なものならば、いまのうちにずっと遠くまで移動するべきかもしれない。だが、新都心のホテルに借りている部屋に戻ることはもちろん、ホテルの駐車場に入れてあるマセラティまで辿りつくことすら、この顔では難しい。

口の周囲を爛れさせている火傷だけなら、マスクか何かで隠せるだろう。だが、口腔に強烈な電撃を受けたせいか、鮫のように変形した顎が元に戻らないのだ。この廃ビルまで、通行人に見咎められることなく移動できたことがすでに奇跡的な幸運だ。

瞬間移動の女が、何らかの組織の一員であると判断した理由は、まさにあのスタンバトンの性能にある。

ミリタリー系の雑誌広告やインターネットで販売されているスタンガンには、よく超高電圧何十万ボルト、といった惹句が躍っている。いかにも強力そうだが、実際のところは、人体にとって危険なのは電圧ではなく電流——アンペアのほうだ。

電池の電圧をトランスで上昇させるスタンガンは、それに比例して電流量は1アンペア以下にまで下がり、見た目には派手なスパークが飛んでも、人体に深刻なダメージを与えることはほとんどない。

だがあの小娘が持っていたスタンバトンは、恐らく大容量の専用バッテリーを使っていて、大アンペアの電撃で高江洲の口に酷い火傷を作った。あんな代物は、当然ながら日本では市販

されていない。海外から輸入するか、改造品を闇ルートで買うしかなく、どう考えてもただの女子高生がおいそれと入手できるものではないのだ。

　消えたと思ったら現れる小娘の移動能力もさることながら、むしろあの武器のほうに注意を払うべきだ。それはつまり、小娘の背後には、何らかの組織が存在するということだからだ。恐らくは、複数の目玉持ちが所属し、他の目玉持ちを排除することを目的とした、甚だ危険な組織が。

　そう――危険だ。

　たとえプロの格闘家十人に囲まれようと何ほどのこともないが、目玉持ちの集団となればそうはいかない。実際、あの小娘は、常人には反応できるはずもないスピードの攻撃を紙一重のところで避け続け、手痛い反撃を浴びせてきた。目玉のせいで身体能力が向上しているうえに、それなりの戦闘訓練も受けているに違いない。あんな敵があと一人いたら、とても逃げ切れなかっただろう。

　どうする。どうすればいい。

　まずは、一刻も早く傷を癒し、この街から離れることだ。

　そして情報を収集する。可能ならば、あの小娘か、組織の他のメンバーを捕え、知る限りの情報を吐き出させる。しかる後に、一人ずつ狩る。どれだけ時間が掛かろうと、選ばれた者が自分ひとりになるまで、殺し続ける。

　だが。その前に。

　いっとき火傷の痛みを忘れ、高江洲はイタチザメのように尖ったままの歯をギシギシと擦り合わせた。

　その前に、あの小僧だけは――。

　最初に食事の邪魔をした小僧は、どうやら小娘の組織とは無関係のようだ。変形した高江洲の顔を見て驚愕していたし、なぜ殺すんだ、などと呑気な台詞を口走っていたからだ。

　ならば、傷が癒えてから、一度くらいは襲撃するチャンスがあるのではないか。

　この街に留まれば留まるほど危険が増大することは解っているが、小僧を見逃すことだけはできそうにない。なぜなら、あの殻つき小僧は、高江洲の進化を真っ向から否定する存在に他ならないのだ。

　攻撃力は、瞬間移動の小娘より遥かに下だろう。一発殴られてしまったのは不覚だったが、動きそのものは素人のそれだ。気をつけていれば容易に避けられる。

　だが、問題は防御力――不可視の殻の、恐るべき硬さだ。

「…………グルル……」

　思い出しただけで、変形したままの口から、野獣の如き唸り声が漏れる。

　殻ごと小僧の首を噛み砕こうとした時に伝わってきた、信じがたいほどの硬さが、いまでも歯根の奥に残っている。

およそモノを噛んでいる時の歯ごたえではなかった。どんな物質でも、イタチザメ・モードの高江洲が噛めば、少なくとも撓みはするはずだ。だが小僧の鎧は、変形した感覚を、一ミクロンたりとも伝えてこなかったのだ。

三ヶ月前、空から降ってきた赤い目玉が下顎に潜り込み、やがて入れ歯を押しのけて本物の歯が生えてきた時、高江洲は狂喜した。

ジョッキ一杯の氷をばりばり齧った。

かちかちのサラミソーセージを貪り食った。

石のようなビスコッティを思うさま噛み砕いた。

新しい歯は、硬いものを喰えば喰うほど強くなるようだった。Tボーン・ステーキを骨ごと喰えるようになった時、高江洲は、己に与えられた特権を悟った。

それは、噛むこと。優越者として、捕食者として、夜の都市を優雅に泳ぎながら獲物を狩り、美味い骨を心ゆくまで味わうこと。

だからこそ、あの小僧は噛まねばならない。

目玉持ちだろうと関係ない。高江洲に噛めない人間など存在してはならないのだ。次こそは、忌々しい殻ごと噛み砕く。そのためには、一刻も早く傷を癒さなければ。

鮫だ。鮫になるのだ。

サメ類は、魚類としては驚異的な生命力を誇る。病気に対する抵抗力が強く、他の魚なら

すぐに死んでしまうような深傷からも回復できる。寿命も長く、ホホジロザメのオスでは七十歳以上という個体が確認されている。

こんな火傷、鮫にとっては何ほどのこともない。

海底の岩陰に潜む自分を想像しながら、高江洲はひたすら寒さと痛みに耐え続けた。

＊＊＊

熟睡など、できようはずもなかった。

もともとミノルは眠りが浅い。見ている夢がほんの少しでも悪夢の色合いを帯び始めると、無理矢理に目を醒ましてしまう習性が染みついているからだ。

それが無意味な努力であることは理解している。夢を見やすいのは、体が眠っているのに脳は起きている状態――いわゆるレム睡眠中なのだから、夢を見たくなければしっかり熟睡するべきなのだ。浅い眠りを繰り返せば、それだけ悪夢に迷い込む確率も上がる。

そうと解っていても、自分ではコントロールできないのが夢というものだが。

「…………ふう……」

ため息をつき、ヘッドボードの目覚まし時計を手探りで掴んで目の前まで持ってくる。

午前一時。普段なら、さすがに眠りに落ちている時間だ。

明日、ではなく今日は土曜だが、ミノルの高校は隔週で授業を行っていて、残念ながら登校日である。四時間後には起きて、早朝ランニングに行かなくてはならない。あんな体験をしたのだから今日くらいは休んでもいいか、という気もするが、毎日の習慣を乱されるのはそれはそれで癪だ。

時計を戻し、暖かい布団に頭まで潜り込む。瞼を閉じていると仄かな眠気は感じるのだが、すうっと眠りに落ちようとする瞬間、かすかに獣の遠吠えを聞いたような気がしてハッと眼を開けてしまう。実際にベッドから出て窓際まで歩き、細く開けたサッシの隙間から外気の匂いを確かめたのも一度や二度ではない。

バイターがこの家を知っているはずがない、と何度も自分に言い聞かせるが、前の道路の暗がりにあの鮫男が潜み、部屋の窓をじっと見上げているのではないか——という疑念がしつこくつきまとう。

——たぶん、僕を怯えさせているのは、あの男の存在だけじゃない。

横向きにした体を小さく丸めながら、そう考える。

昨夜の出来事は、この街に来てから必死に守ろうとしてきた平穏な日常が崩れ去る前兆だ。だから、こんなにも胸騒ぎがするのだ。

あの球体……《サードアイ》が体に潜り込んだ日から、その崩壊は始まっていたのだろう。だが、ミノルは今日までずっと事実から眼を逸らし、打ち消してきた。十キロランのタイムの異常な向上や、自転車に接触してもかすり傷ひとつつかない奇怪な現象さえも、どうでもいいのひと言で切り捨ててきた。

だが、ユミコという少女の言葉が、ミノルの世界を容赦なく打ち砕き、二度と元に戻れないほどに変容させようとしている。

——この力が、人を襲って殺す《ルビーアイ》と戦うための武器……？

——いまこの瞬間にも、あの鮫男みたいな怪物に狙われている人がいて、僕には、その人たちを守る義務がある……？

布団の中で小刻みに頭を振り、苦笑いでごまかそうとするが、口許は強張ったまま動こうとしない。

バイターに襲われかけた箕輪朋美が無事でほんとうに良かった、とは思う。彼女を助けるために自分の力が役に立ったのなら、それは喜ぶべきことだ。

だが、その感情は所詮、目の前で彼女が無惨に殺されるという事態が回避され、嫌な思いをせずにすんだ、という利己的な安心感の付随物に過ぎない。結局、公園に行く前、コンビニで困っている男の子に五円玉を渡した時と同じだ。朋美が、顔も名前も知らない他人だったら、ミノルの知らないうちにバイターに襲われて殺されたとしても、物騒だな、かわいそうだな、と思うだけだっただろう。

——そうだ……僕は、僕の周りの小さな世界だけを守れれば、それでいいんだ。

ユミコやＤＤと、彼女たちの属する組織が、どこで何と戦い誰を守ろうと、それは関係ないことだ。とっととバイターを捕まえて、殺すなり、手術をするなりすればいいのだ。

——僕は、もう嫌だ。

身近な誰かが死ぬのも。その記憶に、繰り返し繰り返し胸を抉られるのも。何もかも、もう嫌なんだ。

突然、ミノルはベッドの上で跳ねるように体を起こした。

「いない、僕はここにいない、どこにもいない」

呪文のように、低い声で叫ぶ。

溢れかけた記憶の濁流は、危ういところで流れを変え、再び意識の奥底へと落ち込んでいった。

これ以上、暗闇の中で自問自答するのは危険だ。八年前のあの夜を追体験し、生き続けるための力を奪われてしまう。もう二度と、自殺未遂なんかしてはいけないのだ。典江のためにも——ワカバのためにも。

振り向き、ぼんやりと光る時計の針を見ると、さっきから十五分しか進んでいない。

授業は半日だし、徹夜でもなんとかなるだろう。ランニングは——五キロにしておこう。

今夜はもう眠るのを諦めて、ミノルはベッドの読書灯を点けると、ヘッドボードに積んである文庫本から適当に一冊引き抜いた。

＊＊＊

右手で口のまわりをそっと引っ掻くと、変色した皮膚の欠片がボロボロと落ちた。

火傷の痛みはかなり薄れてきたが、その代わりに今度は猛烈な痒みに苛まれている。両手の爪を立てて、顔中を思い切り掻き毟りたくてたまらない。

しかし、この痒みは、傷が癒えつつあることの証だ。動かすたび焼け付くように痛んだ顎の関節や筋肉も、いまはピリッと引きつるだけ。下顎に埋まる目玉がどくんどくんと激しく脈打ち、痛めつけられた部分を全力で再生しようとしているのを感じる。このまま治癒が進めば、一日で火傷はそれほど目立たなくなるだろう。

「……頼んだぞ、相棒」

嗄れた声で囁くと、高江洲はコンクリートの床にごろりと横たわった。

急激な代謝活動の代償として、肉体は大量のエネルギーを消費し続けている。トレーニングウェアの上から腹を触ってみると、もともと少なかった脂肪がほぼ完全に削げ落ちてしまっているようだ。

空腹などという段階はとうに過ぎ去り、鋼鉄の万力で胃を締め上げられているかのような感覚が周期的に襲ってくる。ペットボトルのジュースはとっくに飲み干してしまった。七つ道具

隠れ場所から引きずり出され、無理矢理口を開けさせられる。白粉臭い指が、唾液に濡れた黒飴を引っ張り出す。

——こんなもの！　こんなもの食べて！　砂糖の塊じゃないの！

——砂糖を食べると、歯が溶けるのよ！

サトウヲタベルトハガトケル。遠い昔、呪いの言葉のように繰り返し聞かされたフレーズ。

いつしか幼子のように体を丸めながら、高江洲は記憶の淀みへと落ち込んでいく。

---

高江洲晃の母親は、有名な教育及び料理評論家だった。食育に関する著書を何冊も出版し、各種メディアにも頻繁に露出していた。

テレビで見る母親は、綺麗で、優しそうで、まさしく理想の母親然としていた。だが晃は、母に褒められた記憶がほとんどない。命令。禁止。命令。禁止。それだけが、母から与えられる言葉の全てだった。

両親が離婚したのは、晃が五歳の時だったはずだ。

優しい父親だった、と記憶している。商社に勤めるサラリーマンで、趣味と呼べるものは、休日のパチンコだけだった。取ってきたチョコレートやスナック菓子を、ママには内緒だぞ、と言って食べさせてくれた。

家を出ていったその日も、父親は晃にたくさんのお菓子をくれた。晃はそれを、自室のクローゼットの奥に隠した秘密の箱に、大事にしまい込んだ。

元麻布の大きな家には、晃と母親と家政婦しかいなくなった。母親が晃をヒステリックに叱るようになったのはその頃からだ。

小学校に入学すると同時に、晃は中学受験塾に通わされ、やがてスイミングスクールと英会話教室が追加された。遊ぶ時間などまったく存在せず、七歳の誕生日に携帯ゲーム機が欲しいと言ったら、激怒した母親に千切れるかと思うほど耳をつねられた。勉強はできたがクラスでは浮いた存在で、友達など一人もいなかった。

母親が血道をあげたのは、教育だけではなかった。自分の食育理論に基づいた献立を家政婦に作らせ、それ以外のものを食べることを厳しく禁じた。

子育ての基本は健康な歯と健康な骨、とにかく子供にはカルシウムというのが母親の持論で、食卓には小魚や海藻がひしめいていた。甘い物は完全に禁止され、食後には必ず十分間の歯磨き、学校に行く時すら歯磨きセットを持たされた。こっそり飴玉を舐めているのを見つかった時は、ゲーム機を欲しがった時以上のお仕置きを受けた。

なぜ、母親があれほど歯を大切にさせたのか。

それは、自分の本や雑誌記事に、晃の写真を載せるためだった。

自分がいかに正しく子供を育てているか。自分の理論がどれほど素晴らしいものか。それを誇示する材料に晃は使われた。皮肉にも、真っ白な歯を輝かせる幼い晃は主婦層に人気が出て、

八歳の時には歯磨き粉のＣＭにまで起用されたものだ。

やがて、母親の主張には《噛む力が脳を育てる》という理論まで追加され、食事には更なる改良が加えられた。ご飯は玄米や雑穀米、魚は骨ごと食べられる干物、野菜は硬い茎ばかり。おやつも塩豆や干し昆布、そして煮干しだけになった。百回噛んで食べなさい、食事のたびにそう言われた。

——よーく噛んでね、ひーくん。噛んで。噛んで。もっと噛んで。

——出したらつねつねだからね。ほら、噛んで。噛んで。噛んで。噛んで。

——ひーくんは、……ちゃんのぶんまで頑張らなきゃいけないのよ。だからもっと噛んで、噛んで、噛んで噛んで噛んで噛んで。

小学校の高学年になっても晃の成績はトップクラスで、虫歯も相変わらず一本もなかった。

晃が、とある癖を自覚したのは、六年生の夏休みが終わった頃だった。

歯ぎしりだ。授業中も、自宅で勉強している時も、登下校の間も、歯と歯を強く擦り合わせる癖がいつの間にか染みついてしまったのだ。

止めようと思っても、どうしても止められなかった。ことに母親のことを考えると、勝手に顎が強張り、歯がぎしぎしと音を立てた。

大したことじゃない。そう思っていたが、しかし晃は知らなかった。過剰な歯ぎしりは、立派な病気であることを。

咬耗症。

歯が絶えず擦り合わされることによって、エナメル質が異常に摩耗してしまう病気。ようやく生え替わったばかりの永久歯は象牙質が露出するまで磨り減り、晃は痛みのあまりまともに歯を磨くことができなくなった。学校での歯磨きはサボり、自宅でも磨く振りをしてごまかした。

すると今度は、弱った歯をたちまちのうちに細菌が冒していった。あちこちで虫歯が同時発生し、猛烈な勢いで進行した。

しかしもちろん、歯医者に行くことはおろか、母親に相談することさえできなかった。虫歯が何本もできたと知られたら、どんなに激しい叱責と処罰を受けるか……それを想像するだけで、恐怖に身が凍るようだった。

雑誌や本の撮影は、中学受験に集中したいと言ってしばらく休止して貰った。しかし本当は、痛みのせいで、もはや勉強どころではなかった。机に向かってもひたすら激痛に耐えるだけで、睡眠もままならない日々が続いた。頭に詰め込んだ漢字や公式は、歯と一緒にミュータンス菌に溶かされて、片端から消えていった。

二学期の期末テストは、惨憺たる有様だった。返却された答案用紙は、とても母親には見せられなかった。晃はそれを、クローゼットの秘密の箱に隠した。

採点が遅れているらしい、という言い訳は三日ともたなかった。

怪しんだ母親は、晃の目の前で部屋を徹底的に捜索し、クローゼットの奥から古ぼけた煎餅の缶を発見した。開けちゃだめと泣き叫ぶ晃を怒鳴りつけ、蓋を開けた母親は、平均を大きく下回る点数を記された答案用紙の束を見つけた。

顔を蒼白にし、手をわなわなと震わせる母親の視線が、箱の底に向けられた。そこにあったのは、幼い頃、家を出る父親に貰ったまま大事にしまい込んでいたチョコレートやガム、黒飴の袋だった。

母親の顔かたちが変わった。両眼がぎゅうっと吊り上がり、犬歯が剝き出され、髪の毛すら逆立ったように思えた。鬼の貌がそこにあった。母親は晃を床に引き倒すと、強引に口を開けさせた。

咬耗症と虫歯でぼろぼろになった晃の歯を見た途端、母親の喉から、人のものとは思えない絶叫が迸った。野太く、ごろごろと粘るその声は、獣の咆哮にすら似ていた。

母親は部屋から走り出ると、すぐに戻ってきた。恐怖のあまり口を開けたまま凍り付く晃の前歯を、母親は右手に持ったペンチでしっかりと挟み、叫んだ。

——砂糖を食べると歯が溶けるってッ！　言ったでしょおおおおおおッッ!!

高江洲は、くぐもった声を漏らしながら飛び起きた。

しばらく、自分がどこにいるのか解らなかった。真っ暗闇の中で四方をせわしなく見渡して

から、廃ビルに忍び込んだ経緯を思い出す。細長く息を吐き出し、体に掛けたブルーシートを首許まで引き上げる。

あの女の夢を見るのは何年ぶりだろう。滝のように流れる額の脂汗を、トレーニングウェアの袖口で拭う。指を口に突っ込み、歯がちゃんと生えているか確かめる。

大丈夫。あの女は、もう何もできない。

六年も前、大学を卒業したその日に、思い知らせてやったのだから。自分がどれほど息子に憎まれていたのかを。

母親の知名度とステイタスを全て引き継ぎ、高江洲は美食評論家としてデビューした。歯の大部分が作り物であることは秘密にして。

成長期に素人が乱暴な抜歯をしたせいで歯槽骨にもダメージが残り、インプラント治療ではなく部分入れ歯にするしかなかった。硬いものを嚙めない入れ歯の評論家であることがいつか暴露されるのではないかと恐れ続けたが、そんな日々も三ヶ月前に終わった。天から与えられた目玉を肉体に宿し、入れ歯を押しのけて新しい本物の歯が生えてきたあの日に。

……そうだ。

母親を嚙むことはもうできないけれど、嚙むべき人間はまだ残っている。

明らかに虐待を受けたと判断できる子供を、金を積まれて通報もせずに治療した歯医者。

東京に戻ったら、いまや高江洲が入れ歯であることを知るただ一人の人間である、あの女医

に会いに行こう。

生え替わった歯を診察させ、驚愕（きょうがく）する顔を存分に楽しんでから捕獲する。診察台に縛（しば）り付けて歯を一本ずつ抜き、ラムネ菓子のようにコリコリ噛（か）んでやる。もう、深夜の診察室で、特別料金を払って口のメンテナンスをさせる必要はないのだから。

だが、その前に、殻（から）付きの小僧だ。

短いまどろみの間に、火傷（やけど）の治癒（ちゆ）はかなり進んでいる。不思議に、空腹もあまり感じない。まるで、口の中にあるステンレスナットから、栄養分が染（し）み出したかのように。

ころころ、ころころ。

ナットをしばらく口の中で転がしてから——。

ごりごり、ぼりぼり。

高江洲（たかえす）は金属の塊（かたまり）を噛み砕（くだ）き、呑（の）み込んだ。

## 7

拍子抜（ひょうしぬ）けするほどに何事もなく、週末は過ぎ去った。

土曜日の早朝ランニング中も登下校の間も、日曜日に典江（のりえ）と一緒（いっしょ）に買い物に行った時も、バイターが姿を現すことも、ユミコとＤＤが再び接触してくることもなかった。秋ヶ瀬（あきがせ）公園での出来事は、たった二日で急速に現実感を失っていった。

月曜日の朝、典江と一緒に家を出る時には、全（すべ）てが幻（まぼろし）だったような気さえしていた。胸の奥に居座る球体——黒いサードアイの存在感だけは消えなかったが、もうそれすらも日常の一部だと思えた。

浦和（うらわ）駅近くの埼玉県庁に出勤する典江と途中の交差点で別れると、少し自転車のスピードを上げる。マフラーから少し顔を出し、冷たい空気を鼻から吸い込んでみても、あの特異な獣臭（けものしゅう）はまったく感じられない。

しかし、一つ——いや二つだけ、小さなトゲのように心に引っかかっていることがないわけではなかった。

一つ目は、三日前、公園から立ち去ろうとするミノルに、ＤＤが投げ掛けてきた言葉。

——ルビーアイの匂（にお）いに気をつけろよ、少年。

言われなくても、こうして空気の匂いはチェックし続けている。だが、ルビーアイの匂いに関連する会話の中で、彼らが何か重要なことを口にしていた気がしてならないのだ。しかし、その言葉がどうしても思い出せない。ミノルが一件の記憶を意識的に遠ざけようとした結果なのかもしれないが。

そして二つ目は、彼らが病院に運んでいった、箕輪朋美。

土曜日は、学校の中で彼女を見かけることはなかった。大きな怪我はしていないはずなのに、まだ療養しているのだとしたら、精神的な問題だろうか。それも無理はない。あの恐ろしい鮫男の顔を、間近で見てしまったのだから。何とか立ち直って、今日は学校に来ているといいのだが。

新大宮バイパスを渡る信号で自転車を停め、ふうっと息を吐き出す。

少なくとも、事件そのものは、もう終わったのだ。手酷い火傷を負ったうえに、謎の組織に負われていることを知ったバイターが、この近辺に何日も留まっている理由がない。とっくにどこか遠くに逃げてしまい、ユミコたちもそれを追っていったのだろう。

信号が青になり、自転車のペダルを強く踏み込みながら、ミノルは何度目かの言葉を胸の奥で呟いた。

終わったのだ、全て。

午前中の授業が終わり、昼休みのチャイムが鳴ると、教室はたちまち喧騒と弁当の匂いに満たされた。

その中をするりと横切り、ミノルは廊下に出た。

いつもなら真っ直ぐ学生食堂に向かうところだが、今日は足を止めて廊下の右側を見やる。

ミノルが所属する一年一組は校舎三階の東の端で、ずっと離れた西の端に八組――箕輪朋美のクラスがある。

DDたちが病院に運んでいった彼女が、その後どうしているのかミノルは知らない。メールアドレスを知っていれば、少なくともメールを打つかどうか悩むことはできただろうが、もちろんアドレス交換などしていない。

直接教室を訪れれば、登校しているかどうかは解るはずだが、廊下の端にある八組では通りがかりに中を覗いてみたという言い訳は成立しない。またあの陸上部員に見られでもしたら、面倒なことになりそうだ。

――などと、一瞬にせよ考えてしまう自分に幻滅しながら、ミノルは階段ではなく廊下の奥に向かって歩き始めた。見つかっても、また呼び出されれば済むことだ。次は、殴られる瞬間に《殻》を出さないよう気をつけなくてはならないが。

学食に向かう生徒たちの流れを、肩を縮めながら廊下の反対側までさかのぼったミノルは、開け放してある八組のドアからそっと教室の中を覗き込んだ。

素早く視線を走らせるが、やはり箕輪朋美の姿はない。

今日も学校を休んでいるのか、それとももう学食か部室に行ってしまったのか。

ドアの近くで考えを巡らせていると、後ろから低い声が聞こえた。

「おい」

反射的に息を吸い込みながら、素早く振り向く。立っていたのは、あの鮫男――ではなく、ミノルを格技場裏に呼び出した三人のうちの一人だった。会話するミノルと朋美を目撃したという、陸上部の一年生部員。たしか《オグッチ》と呼ばれていたはずだ。

五日前は、先輩部員の前でへらへらしていたような印象しかなかったが、いまは短く刈った髪の下で両眼を鋭く細め、口許も不機嫌そうに曲がっている。

「うちのクラスに何の用だよ、空木」

どすの利いた声でそう問われれば、「何でもない」と呟いて逃げてしまいたくなるが、肺の空気をゆっくり吐き出して踏み留まる。廊下の隅を見ながら、「あっちで話せるかな」と提案する。

陸上部員は、眉間に縦皺を刻みつつも頷いた。廊下の西端にある窓の前まで移動し、改めて向かい合う。

――そういえば、僕はこいつの渾名しか聞いていない。

と考えたミノルは、ほぼ同じ高さにある相手の眼を見ながら言った。

「ごめん、名前、知らない」

「…………尾久」

ぼそりと答える相手に軽く頷きかけ、前置きなしで本題に入る。

「箕輪さんが学校に来てるか、気になったんだ」

「……なんでお前が気にするんだよ」

尾久の声は、いよいよ低くなる。

突き刺さるような視線を受け止めているうちに、遅まきながらミノルは気付く。

この尾久は、箕輪朋美のことが好きなのだ。だから、朋美と会話していたミノルを警戒している。

なら、僕はどうなのだろう、と瞬間的に考える。

この街に引っ越してから、特定の女の子が気になるとか、仲良くなりたいとか、そういう感情を抱いたことはない。女子に限らず、他人と距離を縮めることを忌避し続けてきたからだ。辛い記憶、苦しい記憶、忘れたい記憶を抱えてしまうことを恐れ続けてきたからだ。

尾久は、朋美と話すミノルを見た瞬間、黒い感情に襲われたのだろう。だから上級生に告げ口し、ミノルが呼び出されるように仕向けた。しかし後から自分の行いを後悔したに違いない。なぜなら彼は、殴られて尻餅をついたミノルを見た時、激しく顔を歪めていた。

そして、いまも、同じ顔をしている。

「……箕輪さんは、友達だから」

なけなしの勇気をかき集め、ミノルは視線を逸らさずにそう答えた。

いつものように、なんでもない、やっぱりいい、というような言葉を口にしなかったのは、耳の奥にかすかな声が甦ったからだ。

——戦い続ける義務が、あなたにはあるのよ。

もう二度と会わないであろう、ユミコの声。

《ジェットアイ》として《ルビーアイ》と戦う。そんなことが自分にできるとは思えない。

だが、ユミコの言葉はミノルの生き方そのものを——八年間ただひたすら「どうでもいい」「関係ない」と全てに目を背け続けてきたことを質しているように感じられた。

ミノルは、箕輪朋美と何度も話し、バイターから助け、もう大丈夫だよ、と言葉をかけた。そんな朋美を、どうでもいいと切り捨てるのは間違っている。そして恐らく、目の前の尾久のことも。

ミノルの返事を聞いた尾久は、一瞬目を見開いてから、口許を強く強張らせた。

運動部員らしい、骨張った右肩がぴくりと動くのを見て、殴るつもりかな、とミノルは思った。だが尾久は、何秒かかけて体の力を抜くと、ぼそりと答えた。

「……箕輪、今日も休みだ。先週、自主練の時に怪我して、何日か入院するんだと」

「…………」

しばし沈黙してから、「わかった」と頷く。

恐らく、ユミコたちが朋美を病院に運び、そこに家族も呼ばれ、例の変質者云々という説明がなされたのだろう。結果、学校には《自主練習中の怪我》と伝えられたわけだ。

ミノルは、朋美が体には傷を負っていないことを知っているが、さすがにそれを尾久に伝えるわけにはいかない。ぺこりと頭を下げ、言う。

「ありがとう。じゃあ、僕はこれで」

体の向きを変えた時、ごく小さな声が聞こえた。

「空木。お前……箕輪のこと……」

述語を省略した問いかけに、少し考えてから、ミノルは真実を答えた。

「違うよ。でも、友達だから、心配したんだ」

「……そっか。じゃあな」

そう呟いた尾久は、近くのドアから教室に入っていった。

学食に向かって歩き始めながら、ミノルはふと、朋美の見舞いに行こうかと考えた。だがすぐに、そんな権利が自分にはないことを思い出した。

出遅れたせいで人気メニューは軒並み売り切れだったが、不人気ながら個人的には嫌いではない中華丼を急いでかき込み、教室に戻るとちょうど予鈴が鳴った。

午前中は朋美のことが気になっていまひとつ授業に身が入らなかったので、午後は頑張ろうと思っていたのだが、尾久との会話中の思考が断片的に甦り、集中を妨げる。

箕輪朋美のことが頭から離れないのは、異性として好意を抱いているからではない。彼女が学校を休んでいるうちは、日常が完全に戻ってきたとは言えないからだ。退院してきた朋美と、いままで以上に親しくなりたいわけではない。ただ、元気になって、以前と同じように一生懸命走っていて欲しいのだ。

怪我はしていないのだから、きっと、明日か明後日には登校してくるだろう。話しかけるつもりはないけれど、通学路か校内で朋美のジャージ姿を見かければ、この胸騒ぎも消えるはずだ。

そう自分に言い聞かせつつ、五時間目と六時間目を乗り切ったミノルは、速やかに靴を履き替えると――下駄箱に呼び出し状は挟まっていなかった――校舎の外に出た。駐輪場に向かいながら、鼻からゆっくり空気を吸う。知覚できる匂いは、学校特有の埃臭さと自動車の排ガス臭さだけ。

自分の心配性ぶりに苦笑しながら自転車にまたがり、校門を抜ける。大通りに出たところで、しばし考える。

バッグには、金曜に市立図書館へ返しそびれた本が入ったままだ。こんな時くらい真っ直ぐ帰宅するべきか、と思ってから、《こんな時》はもう終わったのだと打ち消す。

市役所近くにある大きな図書館に到着し、暖房の効いた館内に足を踏み入れたミノルがしたことは、やはり空気の匂いを嗅ぐことだった。もちろん、異常なし。肩をすくめ、返却カウンターで本を返してから、ふと思いついてPC利用コーナーに向かう。

いちばん端のブースに滑り込み、マウスを握る。ブラウザを起動し、トップ画面の検索ボックスに【サードアイ】と打ち込む。

自室にもノートPCがあるにはあるのだが、ユミコやDDに聞かされた幾つかの固有名詞を自宅から検索することは少々躊躇われた。まさかとは思うが、彼女たちの組織がネットまで監視していて、検索キーワードからミノルの自宅を突き止める……などということが絶対に有り得ないとは言えない気もする。

もちろん図書館にも防犯カメラは存在するが、自宅よりはマシだろう……などと考えながら、検索結果を眺める。

予想はしていたが、ヒットしたのは似たような名前の企業ホームページか、開運グッズや占い関係のサイトばかり。

追加の検索ワードとして、【ルビー】と【ジェット】を打ち込む。しかし検索結果は大して変わらない。思いつくままに、【目玉】【能力】【殺人】などの語句を加え、表示されたサイトを上からチェックしていくが、やはりそれらしい情報を載せているウェブサイトは一つも発見できなかった。

十数分の探索（たんさく）で得られた、どうにか有益と言えそうな情報は、ＤＤが言っていた《黒玉》は鉱物ではなく植物の化石から作る宝石で、英語の綴（つづ）りもジェットエンジンと同じｊｅｔである、という話くらいだ。黒い宝石なら、他にもオニキスとかモリオンとかあるのになあ――これも検索で得た知識だが――と思いながらブラウザの検索履歴（りれき）を消去し、バッグからウェットティッシュを出してマウスとキーボードを拭（ぬぐ）う。もちろん、後に使う人のためではなく、指紋を消すためだ。

自分の行動に気恥（きは）ずかしさを感じつつブースを離（はな）れ、雑誌閲覧（えつらん）コーナーに移動する。ラックをざっと眺（なが）め、表紙の【ＳＰＮシグナル大特集】という文字に興味を引かれてサイエンス系の月刊誌を抜き出す。

近くのソファに腰掛けて雑誌を開いたが、記事の内容はなかなか頭に入ってこない。思考はどうしても、秋ヶ瀬（あきがせ）公園での異常な体験に舞い戻っていく。

赤（ルビー）と黒（ジェット）、二種類のサードアイ。三ヶ月前に宇宙から降ってきて、何十人、あるいは何百人かの体に侵入し、超常の能力を与えた。

加えて、赤い球体に寄生された人間ルビーアイは人殺しの衝動（しょうどう）までをも与えられて、あのバイターのように人を襲（おそ）い始めた。だから、対抗できる力を持つジェットアイが、ルビーアイと戦っている。黒ブレザーの少女ユミコは、そう言っていた。

突飛すぎる話だが、ミノル自身も《不可視の殻（から）》という能力を得てしまった以上、信じない

わけにはいかない。しかし、どこか腑（ふ）に落ちないところもある。少し考え、気付く。

ルビーアイが与えられたのは、《力》と《殺人衝動》。

ジェットアイが与えられたのは、《力》だけ。

このアンバランスだ。

ルビーアイを駆り立てる殺人衝動が、催眠術（さいみんじゅつ）とか洗脳に類するものならば。ミノルやユミコたちジェットアイも、何らかの精神的干渉（かんしょう）を受けていないと言い切れるのだろうか？

――僕は今日、陸上部の尾久（おぐ）に対して、僕らしくない態度を取った。言葉を濁（にご）して逃げるかわりに、向かい合い、相手の目を見て、言うべきだと思ったことを言った。あんなことをしたら、消せない記憶（きおく）が増えてしまう――と考えすらしなかった。

――あれが、精神干渉の結果だったら……？　本当の僕は、前と何も変わっていないのに、ジェットアイのせいで好戦的になっているのでは……？

雑誌を持つ手に力が入りすぎ、ページに小さな皺（しわ）が寄った。その音で我に返り、慌（あわ）てて力を抜く。

――考えすぎだ。僕は、僕の意志で行動しているんだ。

そう自分に言い聞かせるが、しばらく立ち上がる気にはなれなかった。開いているページの特集記事を、ぼんやりと眺める。

月の望遠鏡が捉（とら）えた微弱な電波が、地球外文明からのメッセージなのではと大騒（おおさわ）ぎになった

のは半年前のことだ。その理由は、信号が繰り返された回数が2から17までの七つの素数と同じだったからだが、肝心な信号の中身を誰も解読できず、騒ぎは沈静化しつつある。

吉城高校でももう誰も話題にしていないが、ミノルはいまでも時々ＳＰＮシグナルのことを考える。理由はもちろん、空から降ってきた奇妙なモノと接触してしまったからだ。

シグナルと球体——サードアイの間には、何らかの関係があるのだろうか。それとも、ただの偶然なのか。

ユミコたちならば何らかの情報を持っていたのかもしれないが、とてもそんなことを訊ける状況ではなかった。成り行きによっては、怪しげな注射を打たれて、手術で胸のサードアイを摘出されていたかもしれないのだから。

——いや。

精神への干渉に怯えるくらいならいっそ、そうされたほうが良かったのだろうか。怪しげな力を持つ者たちの戦いなどという非日常から抜け出し、もとの平穏な生活に戻る機会に飛びつくべきだったのか。

雑誌から視線を外し、学生服の第二ボタンのあたりを見やる。その奥に存在するはずの黒い球体に向かって、思念を投げ掛ける。

——おい。お前は本当に宇宙から来たのか？　ＳＰＮシグナルと、何か関係があるのか？

——お前は僕に、何をさせたいんだ……？

もちろん答える声は聞こえなかった。だがミノルは、胸の奥にごくかすかな疼きを感じた。

その感覚は、逆に問い返してくるかのようだった。

お前こそ、与えられた力で何をすべきか解っているのか、と。

---

何冊かの雑誌を読み終え、トイレに立ち寄ってから図書館を出た時は午後六時を回っていた。少し急げば、ちょうど典江が夕食の支度を始める頃に帰宅できるはずだ。すっかり暗くなった住宅街を、自転車で走り抜けていく。

スピードを出すと、前から突き刺すような寒風が襲いかかってくる。早朝ランニングの時は体温が上がるので風は心地良いくらいだが、ママチャリを漕ぐ程度の運動では汗もかけない。ミノルが愛用しているマフラーは典江の手編みで、こもっている気持ちこそ既製品の何百倍なれど、防寒性能はさして高いとは言えない。

ざっくりした編み目からは容赦なく風が侵入し、耳がじんじんと痛くなる。つい、殻を出せばこんな風なんて……と考えてしまうが、能力を使いながら自転車は漕げないだろう。

「……チカラを使う、ってさあ……」

自分の思考を小さく声に出し、苦笑する。色々なマンガや小説でおなじみのフレーズだが、よもや現実に使う日が来ようとは——

「…………あっ！」

瞬間、ミノルは両眼を見開いた。

それだ。

心に引っかかっていた、小さなトゲ。思い出そうとして思い出せなかった、ユミコとDDの会話。

――バイターの匂いでも嗅いでなさいよ。

――力を使ってくんなきゃ嗅げねーよ。

二人は、そう言っていたのだ。

無意識のうちにブレーキレバーを強く握り締めてしまい、キキーと甲高い音を立てて自転車が停まる。

力を使わなければ、ルビーアイの匂いは感じ取れない。

バイターの能力は、口と歯を鮫のように変形させ、何でも嚙み切ってしまうこと。つまり、鮫男に変身している間は、ずっとあの獣臭を放散しているわけだ。

しかし、逆に言えば、変身していない時なら。普通の人間の外見でいる間は、たとえすぐ近くに接近されても、匂いでは感知できないということになる。

ミノルは素早く背後を振り返った。更に、左右を何度も見渡す。

住宅街の小さな十字路に、人影はなかった。だが、すぐ隣にあるブロック塀の向こうにあの男が潜んでいて、匂いに気付いたときにはもうがっちりと頭を咥え込まれている、ということだってないとは言えないのだ。

恐怖のあまり、防御殻を展開しようとして危うく思いとどまる。三日前は、殻を出した途端にバイターの匂いを感じられなくなった。いまは、匂いを遮断してしまうほうが危険だ。バイターは、襲いかかる直前には変身しなければならないはずで、その臭気を感じてから殻を出しても間に合うはずだ。

まずは、一刻も早く家に戻ることだ。対策を考えるのはそれからでもいい。

どうにか自分を落ち着かせ、ミノルは再びペダルを踏み込んだ。

寒さを忘れ、白い息を吐きながら、帰路をほぼノンストップで走り抜ける。

最後の角を曲がり、自宅のリビングの窓を満たす温かい光が目に入ると、ようやく全身から力が抜ける。今頃は、典江が夕食の準備を始めているだろう。今夜のメニューは、五日前に作って冷凍しておいた餃子だったはずだ。

門扉を開け、定位置に自転車を停めて、小走りで玄関に向かう。自転車の鍵を家の鍵に持ち替えながらドアの前に立った、その瞬間。

ミノルは、心臓がぎゅっと縮まるのを感じた。

鍵を差し込むべき鍵穴が――存在しなかった。

ドアハンドルの上には、鍵穴の代わりに、直径十センチはあろうかという大穴が開いていた。

反対側まで貫通しているその穴を、ミノルは呆然と凝視した。

ドリルのような工具を使って開けたものではない。金属製の化粧プレートに開いた穴の縁はぎざぎざと不規則に尖り、しかし内部のシリンダーの切断面は滑らかに輝いている。

まるで、尖った口を持つ獣が、鋭利かつ強靭な歯で食い破ったかのような。

ミノルは、冷え切って感覚のない右手でハンドルを握ると、そっと引いた。ドアは、わずかな抵抗感もなく、すうっと手前に動いた。

視界に入る全て——玄関から真っ直ぐ伸びる廊下、その左の上り階段、廊下の突き当たりのリビングルームに繋がるガラス戸までの範囲に、人や動物の姿はなかった。物音も一切聞こえない。ガラス戸から、少しオレンジがかった光が廊下に零れている。

ミノルは、思考停止状態のまま靴を脱ぎ、廊下に上がった。メッセンジャーバッグとチェスターコート、マフラーを廊下に落とし、一歩、二歩と進んだところでようやく気付く。

いつもなら、ここで必ず聞こえる音。

ぱたぱたと小走りに近づいてくるスリッパの足音が、聞こえない。

ようやく再起動した脳の真ん中で、二つの思考が爆発した。

——バイターが来たんだ。

——典江さん。

頑丈なディンプル式のキーシリンダーを歯で食い破ったのは、あの異形の鮫男でしか有り得ない。

つまり、いまこの瞬間も、家のどこかにバイターが潜んでいる可能性はある。しかしミノルは、無我夢中で廊下を駆け抜けると、ガラス戸をぶち破る勢いでリビングに飛び込んだ。

「——典江さん!!」

叫びながら、まず左手奥にあるキッチンを、次いで右手のリビング・ダイニングを見回した。天井のシーリングライトは明るく輝き、エアコンのスイッチも入りっぱなしだが、バイターの巨軀も、小柄な典江の姿もない。なら二階かと思いながら振り向いた時、右足が何かぐにゃりと柔らかいものを踏んだ。

「…………っ!」

一歩飛び退き、足許を見る。

フローリングに落ちているのは、乳白色をした小さな半円形の物体。腰を屈め、震える指で摘み上げる。

それは、五日前、典江と一緒に作った餃子だった。慌ててキッチンに駆け込むと、床に銀色のバットがひっくり返り、その周囲に数十個の餃子が散乱していた。

何があったのか、最早明らかだ。夕食の準備をするために、冷蔵庫から餃子のバットを取り出した典江を、バイターが襲撃したのだ。

ミノルは、キッチン中を食い入るように眺め回した。血痕のようなものは見つからない。次に、右手に持ったままの餃子を指先で押してみる。皮は柔らかいが、中の具はまだ半分凍って

いる。この室温なら、恐らく三十分もあれば芯（しん）まで解凍（かいとう）されてしまうだろう。つまり、襲撃（しゅうげき）があったのは、ほんの二十分足らず前だ。

半生の餃子（ギョーザ）をシンクに落とし、ミノルは再び二階に向かおうとキッチンから出た。すると、先刻は視界に入らなかったダイニングテーブルの真ん中に、黒い長方形がこれ見よがしに置かれていることに気付いた。

いつもはキッチンカウンターの端（はし）に立ててあるはずの、タブレット端末（たんまつ）。

テーブルに駆け寄り、端末を掴（つか）み上げてボタンを押す。表示されたのは、メモ帳アプリだった。そこに書かれている文章を、ミノルは食い入るように読んだ。

【女は無傷で確保している。そこから動かずに次の連絡を待て。その部屋には監視カメラが仕掛けてある。お前が部屋から出たり、どこかに連絡しようとしたり、カメラを無効化したりすれば女は殺す】

簡潔で明快、それゆえに現実感のない文章だった。だがタブレットのガラス面には、ほんの数十分前にこの文章を打ち込んだバイターの悪意が残留しているように感じられた。ミノルはタブレットをテーブルに戻し、どさりとダイニングチェアに座り込んだ。

典江（のりえ）は、まだ生きている。

それだけは信じていいはずだ。もし典江を殺すことが目的なら、危険を冒（おか）して拉致（らち）せずともここで殺せた。

だが、隠（かく）しカメラのほうはどうか。バイターが典江を襲（おそ）い、ミノルが帰宅するまで、長くても二十分。その時間でカメラをセットし、ネットワークの接続設定を行う時間が果たしてあっただろうか。

座ったまま、視線をリビング・ダイニングの各所に走らせる。綺麗（きれい）に掃除されてはいるが、ミノルの自室より遥（はる）かに広いのでカメラを隠せそうな場所は山ほどある。それに、専用の隠しカメラを使っているとは限らない。監視カメラアプリを起動したスマートフォンなら、どこかに置くだけで済む。

だめだ。典江の命を盾（たて）に取られている以上、この部屋から出ることも、壁際（かべぎわ）にある固定電話で警察に通報することもできない。本当に監視されているという前提で、指示に従うしかないのだ。

せめて、バイターが遠くに移動したと見せかけて二階に隠れている可能性を判断するべく、嗅覚（きゅうかく）に全神経を集中させて空気を吸い込む。

仄（ほの）かに……ごくかすかに、あの匂（にお）いを感じる気がする。だがこれは、典江を拉致した時の、言わば《残り香》ではないか。ほんの数メートルしか離（はな）れていない天井（てんじょう）の向こう側にあの男が潜（ひそ）んでいれば、たとえ能力を使っていなくても、もっと明確なシグナルを感じられるはずだ。

胸のサードアイも、いまは完全に沈黙（ちんもく）している。

やはり、バイターはすでに遠くへ移動してしまったのだ。

状況を認識するにつれ、最初のショックが少しずつ薄れ、代わりに黒くて冷たい絶望が胸を満たしていく。

——僕のせいだ。

僕が、バイターをこの家に引き寄せてしまった。

ユミコとDDに警告されていたのに。「自分の身は自分で守れる」などと強がり、その言葉どおり自分の周囲にだけ気をつけて、典江が狙われる可能性をまったく考えなかった。

警告をもっと真剣に受け取り、とことんまで考え抜けば、きっと気づけたはずなのだ。バイターには、ミノルの自宅を突き止めるすべがあったことを。

あの鮫男は、箕輪朋美にどこで目をつけたのか。最も可能性が高いのは、朝練か登下校のランニング中だろう。尾行すれば、自宅と学校は簡単に割り出せる。

そして、秋ヶ瀬公園で朋美を喰い殺す直前に乱入してきた男子高校生すなわちミノルは、通りすがりではなく知り合いだと考えたほうが自然だ。ならば、吉城高校の校門を監視すれば、ミノルを見つけることは可能。

サードアイは、特異な能力を与えるだけでなく、宿主の身体能力や知覚力——すなわち聴力や視力をも大幅に引き上げる。きちんと測ってはいないが、いまのミノルが視力検査をすれば、二・〇を超えるのではないか。

当然バイターも鋭い視力を持っているだろうから、校門から充分に離れた、たとえばマンシ

ョンの屋上からでもミノルを識別し、尾行することは難しくなかったはずだ。きっと、土曜の下校時だろう。ルビーアイの匂いに気をつけてはいたが、能力を使っていない時は匂いも感じ取れないという重要な事実を知らなかった——いや忘れていた。だから、うかうかとバイターを自宅まで案内してしまったのだ。

——僕の……せいだ。

もう一度、ミノルはその認識をきつく噛み締める。カメラで見られているかもしれない以上、妙な動きはできないので、大声で叫びたい衝動を必死に堪える。

また、こうなってしまった。大切な家族を、危険にさらしてしまった。

いや、バイターが、タブレットの書き置きどおりに典江を生かしているという保証はない。今頃はもう、鮫の歯で噛まれて、命を落としてしまっているかもしれない。

八年前と、同じように。

父親と、母親と、姉ワカバのように。

また、繰り返すのか。八年間ひたすら他人を遠ざけ、嫌な記憶を抱え込むまいとそれだけを考えて生きてきたのに、また同じ過ちを犯すのか。

「…………ッ」

喉の奥から、抑えきれなかったかすかな悲鳴が零れた。

僕が。僕の。僕に。僕を。

殺すなら……僕を。

顔を上げる。リビングルームを見回す。カメラの位置は解らない。そもそも本当に存在するのかどうかも定かでない。でも。

土下座して、必死に頼めば。

僕はいまここで、自分で自分の命を絶つから、だから典江さんは無事に返してくれと、一生懸命に懇願すれば。バイターが恨んでいるのは僕のはずなんだから、頼みを聞いてくれるかもしれない。

すぐそばのキッチンには、包丁が何本もある。いちばん大きくて頑丈そうな牛刀を思い切り胸に突き刺せば、いくらサードアイが潜り込んでいようとも、さすがに死ねるだろう。

ミノルは、もう一度、カメラを求めてリビングを見回した。いちばん隠し場所が多そうなテレビ台の周囲に視線を据え、大きく息を吸った。

そして、強く奥歯を噛み締めた。

ここが、分岐点だ。

今までと同じように、義務や責任から目を逸らし、投げ出すのか。

それとも、今度こそ、自分の意志で運命と戦うのか。

バイターは、単にミノルの命だけを欲しているわけではないだろう。鮫のようなあの歯で噛み殺したいと思っているのだ。だから、ミノルがここで自殺したら、むしろ怒りを典江にぶつけるかもしれない。

少しでも、可能性があるなら。

次の連絡で呼び出された場所でバイターと戦って、典江を取り戻せる可能性が残されているのなら。

耳の奥に、またしてもユミコの声が甦る。

戦い続ける義務が、あなたにはあるのよ。

――ジェットアイとして、人間を守るために不特定多数のルビーアイと戦うことが、僕にできるとは思えない。でも、空木ミノルとして、由水典江を……誰よりも大切な、もうひとりの姉さんを守るために、バイターと戦うことならば、きっとできる。

――戦わなきゃ、いけないんだ。

最後にもう一度だけ拳を握り締めてから、ゆっくりと全身の力を抜き、ミノルは浮かせかけていた体を椅子に戻した。

いまできること、するべきことは、心を落ち着かせて次の連絡を待つこと。体力と精神力の消耗を抑えて、戦いに勝つ可能性を少しでも高めること。

瞑目し、二人の姉に心の声で呼びかける。

――典江さん、頑張って。必ず、僕が助けるから。

――ワカちゃん、お願い。僕に、力を貸して。

八年前のあの夜と、同じくらい長くて重い時間だった。

食欲などあろうはずもなかったが、キッチンの戸棚にあったビスケットを何枚か齧り、床に散らばる餃子を片付けた。トイレに行きたくなると困るので、水はほんの一口だけ飲んだ。

ソファに座り、瞼を閉じて、ひたすらに待った。

ついに電話が鳴った時、時刻は真夜中の一時を少し回っていた。

弾かれるように立ち上がり、固定電話に手を伸ばしかけて気付く。鳴っているのは、廊下に置きっぱなしのバッグの中の、ミノルの携帯電話だ。

応答するにはリビングから出なければならない。もしこれがバイターではなく他の誰かからだったら……と一瞬考えたが、すぐに打ち消す。この着信音は典江の携帯からだ。掛けてきているのは、携帯を奪ったバイターだろう。

走って廊下に出るとバッグを掴み上げ、すぐリビングに引き返しながら電話を取り出す。画面に指をスライドさせ、耳に当てる。

「……はい」

短く応答すると、電話回線の向こうで、あの男の声が囁いた。

『やあ、久しぶりだね、少年。長く待たせてしまって申し訳なかった』

「……彼女は、無事なのか」

『そう焦るなよ、ラガッツォ。薬で眠ってもらっているから声は聞かせられないが、噛み跡ひとつつけちゃいないよ。もちろん、少年が私の指示に従っている間は……だがね』

いまは口を変形させていないのか、滑らかなテノールには三日前のような奇妙な歪みも掠れもない。だがその奥に、ミノルは滴るような悪意と欲望を感じる。胸骨の奥で、サードアイがずきんと疼く。

「指示には従う。どうすればいいんだ」

『簡単さ、これから、ある場所まで来て欲しい。だが、その間に警察なり、あの物騒なシニョリーナに連絡されちゃ困るからね。この通話を切らずに、そのまま移動するんだ。もし電波の具合で切れたらこっちから即座にコールバックするから、すぐに出る。いいね？』

「解った。どこに行けばいい」

そう問いかけつつも、ミノルは相手の言葉を予想していた。秋ヶ瀬公園の森の奥にある、あの物置小屋――。

だが、スピーカーから流れてきたのは、思わぬ言葉だった。

『まずは、さいたま新都心駅の近くの《けやきひろば》に向かってくれたまえ。十五分以内だ、急げ、ラガッツォ』

予想外の指示に驚くが、従うしかない。

「すぐに出る」

そう応じると、ミノルは電話を通話中のまま制服の胸ポケットに滑り込ませ、再びリビングから走り出た。今度はそのまま玄関に出ると、通学用のスニーカーではなく、早朝ランに使っているランニングシューズに足を突っ込む。コート掛けのウインドブレーカーを羽織り、鍵の掛からないドアから外に出て、真冬の寒さを感じもせずに自転車にまたがる。

新都心駅までは約五キロ。十五分で到着するには、平均時速二十キロで走らねばならない。軽快車、しかも市街地走行では無理のある数字だが、バイターはミノルがサードアイ所持者だと知ったうえで、ギリギリの時間を指定してきたのだ。

………典江さん。待ってて、すぐに行くから。

通話が続いているので、声に出さずにそう呼びかけながら、ペダルを思い切り踏み込む。

## 8

制服の上にウインドブレーカーを着てきたのは、防寒というよりも警察官対策だった。午前一時を回っているこんな時間に詰襟で自転車を飛ばす高校生を見つけたら、たいていの警官が止めようとするだろう。

実際、一度だけ警察官の乗る自転車とすれ違ったが、深く被っていたフードのおかげか声を掛けられることはなかった。もっとも、仮に止められてもスピードを上げて振り切るつもりだったが。

静まり返った住宅街を走り抜け、バイパスを渡る。少し広い道路に出ると、サドルから腰を上げて立ち漕ぎになる。三段変速つきの自転車はとっくにトップギアだが、いまのミノルには軽すぎる。

行く手に姿を現した、夜空を貫いてそびえる新都心の高層ビル群を見上げ、ひときわ力を込めて右足を踏み下ろした、その時。

ガキッ！　という衝撃とともにペダルの重さが消えた。右に転びそうになり、辛くも立て直してからブレーキを掛ける。足許を覗き込むと、切れたチェーンが路面までだらりと垂れ下がっている。

修理する技術も時間もないので、自転車はここに置いていくしかない。ガードレール脇に停めてから時計を見ると、十五分のタイムリミットまであと三分三十秒。残るおよそ一キロ半を、自分の足で走り抜かなくてはならない。

「……典江さん……！」

掠れ声で義姉の名を呼び、ミノルは深夜の歩道を疾駆し始めた。

---

さいたま新都心の中心には、けやきひろばと呼ばれる大きなスカイデッキがある。冬の夜間はブルーLEDでライトアップされているはずだが、その点灯時間が終わっていて、まばらな街灯が淡い光を放っているだけだ。

地上からデッキまでの階段を駆け上ったミノルは、無数に植えられているケヤキの木の一本に背中を預けると、荒い呼吸を繰り返した。もう一度時計に目を落とす。残り二十秒。

サードアイを宿してから、限界の走りに挑んだのは初めてだった。確か、千五百メートルの世界記録が三分二十五秒くらいだったな……と頭の片隅で考えながら、胸ポケットの電話を取りだし、繋がったままの相手に小声で話しかける。

「着いたぞ」

少しして、あの声が応じた。

『ああ、しっかり見えているよ、少年。自転車はどうしたんだい？』

「…………！」

はったりではなく、本当に見ている。素早く周囲に視線を巡らせるが、とうに終電の時間を過ぎているので、広場に人影はない。

「……途中で壊れたから、走ってきた」

そう答えると、くっくっと低い笑い声が流れた。

『それは災難だったね。だが泣き言をいわずに時間を守ったのは感心だ。彼女は、君にとって、よほど大切な人なんだね』

「当たり前だ！」

つい声を荒らげそうになり、辛くも堪える。あたりに人はいないが、広場の反対側には交番があったはずだ。囁き声に戻し、続ける。

「指示は守ったんだから、姉を帰してくれ」

『おいおい少年、まずは、と言っただろう？　当然次の指示も準備してあるさ。広場の北側を見るんだ』

「…………」

焦燥感を抑え込みつつ、指示された方向を見る。幅広のペデストリアンデッキが北に伸び、道路をまたいで同じ高さのスカイデッキに繋がっている。そのすぐ先には、巨大建造物の影が小山のように盛り上がる。日本でも最大級の多目的ホール、《さいたまスーパーアリーナ》だ。

ミノルがアリーナの屋根を見上げたタイミングで、携帯から声が流れた。

『君から見て、スーパーアリーナの右側面に向かえ。警官や警備員に見られるなよ』

「……右側面……」

バイターの意図は不明だが、従うしかない。もう一度周囲を見回し、誰（だれ）もいないことを確認してから、体を低くして走り出す。

橋を渡り、アリーナ側のスカイデッキに入ると、壁際（かべぎわ）の暗がりを東に移動する。数十秒で角に達し、回り込んで北を見ると、建物の側面に沿って幅広の階段が続いている。

携帯を左耳に当て、

「ここから……」

どうすれば、と言いかけたミノルに、バイターが三つ目の指示を告げた。

『少し進んだ左側に、非常階段の扉がある。開けて上れ』

命じられるまま前進すると、確かに金属製の扉が見えてきた。普段（ふだん）は当然ロックされているはずだが、ドアノブ部分がごっそりと抉（えぐ）り取られている。ミノルの自宅と同じように、バイターが喰（く）い破ったのだ。

分厚いスチールをものともしないパワーに戦慄（せんりつ）しながら、ドアを引き開ける。目の前に非常階段があるので、足音を殺して上る。

七階ぶんの階段を突破すると再び鍵（かぎ）を壊（こわ）された扉があり、そこを抜けると最上階のテラスに出た。素早く左右を見回すが、ここにも人影はない。上を見ても、ずっと高いところに、屋根を支える巨大な梁（はり）が突き出しているだけだ。

「……どこにいるんだ」

携帯電話に向かって、押し殺した声で呼びかける。

すると、焦（じ）らすような二秒ほどの静寂（せいじゃく）を経て、低い声が応じた。

『次の指示だ。そのテラスを裏手に回り込むと、屋根に上がるための梯子（はしご）があるから、それで登ってこい』

「や……屋根に……!?」

『そうさ。広くて気分がいいぞ。急げ、ラガッツォ』

「…………」

携帯電話を握（にぎ）り締（し）めたまま、もう一度頭上を振り仰（あお）ぐ。SSAの屋根は正面側から裏手側に向けて傾斜していて、正面に近いこの場所では、ミノルのいるテラスからでも二十メートル、地上からなら六十メートル以上の高さがあるのではないか。

そんな場所に、ほんとうにバイターがいるのか。何かの罠（わな）ではないか。そう考えてしまうが、典江（のりえ）を取り戻すまでは、指示に従い続けるしかない。

最上階テラスを南に走る。頭上に突き出た屋根の端（はし）が、だんだん降りてくる。建物の裏手に辿（たど）り着く頃（ころ）には、五メートルほどにまで近づいている。

　そして、角を回ったところに、バイターの言葉どおりアルミ製の梯子があった。氷のように冷たい金属を握り、一気に登る。

　とうとう辿り着いたさいたまスーパーアリーナの大屋根は、まるで夜空から流れ落ちてくる巨大な氷河のようだった。

　中心部がわずかに盛り上がった金属の斜面が、ミノルのいる場所から正面側に向かって圧倒的なスケールで伸び上がっている。実際の傾斜は十度以下だろうが、この位置からだと急峻な絶壁のようにも感じられる。

　立ち尽くすミノルの遥か上空で、雲のわずかな切れ目から、冷たい色の月が顔を出した。

　二〇一九年十二月十日の月は、満月に少し足りない十三夜月だった。それでも、サードアイによって強化されたミノルの眼には眩しいほどの月光が降り注ぎ、左右の幅百五十メートル、前後の長さ二百メートルの大斜面を銀色に輝かせた。

　そして、ミノルは見た。

　大屋根の最上部近く。斜面の中央に直立する、ひとつの人影を。

　人影の左腕が動き、握ったものを顔に近づけた。ミノルが同じように顔に押し当てた携帯電話から、密やかな声が漏れた。

『最後の指示だ。ここまで来い』

　そして人影は、左手の電話を遠くに放り捨てた。ガツッ、という衝撃音とともに通話が切断された。

　ミノルはウインドブレーカーを脱ぎ捨て、携帯電話を制服の内ポケットにしまった。

　屋根材のステンレス鋼板から右足を引き剝がし、前に踏み出す。続いて左足。右足。左足。徐々にスピードを増しながら、約二百メートルの斜面を一気に駆け上る。

　人影の十メートル手前で、ミノルは足を停めた。

　あの男――バイターが、屋根の端近くに、薄い笑みを湛えて立っていた。

　三日前とは、印象がまったく違う。身につけているのはトレーニングウェアではなく暗い色のスーツだし、靴も上等そうだ。そして何より、顔が変形していない。

　初めて見るバイターの素顔は、スマートで理知的な造作だった。スタンバトンで焼け焦げたはずの口まわりの皮膚も、たった三日で綺麗に治癒している。

　どこかで見たことがある顔のような気もしたが、ミノルが思い出すよりも早く、男が肉声を発した。

「よく来てくれたね。どうだい、なかなかいい眺めだろう？」

　ミノルの後方にはさいたま市中心部の夜景が広がっているはずだが、男の顔から視線を外すことなく、強張った声で問いかける。

「姉はどこにいるんだ」

　すると男は、軽く肩をすくめてから、右腕を斜め後方へと向けた。

大屋根の南端からは、六本の巨大な梁状構造物が長々と突き出している。虚空に伸び上がる幅三メートルの突起の、左から三本目の先端近くに、小柄な人影が横たわっていた。ミノルの眼は、それがテープで拘束されたエプロン姿の女性であることを瞬時に視認した。意識はないようだ。

——典江さん!!

胸中で叫ぶと同時に、突起に向けて走り出しそうになるが、どうにか踏み留まる。

そんなミノルを見て、口許の笑みを深くした男は、滑らかなテノールで告げた。

「心配するなよ少年、強い睡眠薬で眠らせているだけだ。電話でも言ったが、指一本噛んじゃいないよ」

「…………」

いまは、その言葉を信じるしかない。だが、典江が非常に危険な状況に置かれていることも確かだ。梁の先端から地上までは七十メートル近い落差がある。落下すれば即死は免れない。

いや。

ミノルひとりだけなら、落ちても死なずに済むかもしれない。試したことはないが、バイターの歯を防ぎ切った《防御殻》なら、高さ七十メートルからの落下にも耐える可能性はある。

しかし、ミノルが典江のクッションになることはできない。金属の扉を凹ませるほど硬い殻は、ヘタをすればアスファルト以上のダメージを典江に与えてしまうだろう。

なんという、利己的な力なのか。

改めて、そう思い知らされる。ミノルの殻は、世界と自分を切り離し、物理的な《孤独》を作り出す。殻の外にある危険を完全に遮断し、しかし自分以外の誰も助けることはできない。自分さえ安全ならそれでいいという、究極の自己保身。

——まるで、僕の生き方そのものだ。

苦々しくそう考えると同時に、ミノルはひとつの決断を迫られた。

典江を無事に取り戻す方法はただ一つ。危険な梁の突端から救出し、後方のはしごから下ろすこと。だが、眼前に立ちはだかる男がそれを黙って見ているはずがない。

戦って、倒すしかないのだ。

まるで、ミノルの頭を覗いたかのように、バイターがにやりと口の端を吊り上げた。

「覚悟を決めたかい、少年」

「…………」

無言で、小さく首を縦に動かす。

相変わらず、現実感は希薄だった。

登下校の道すがらに見慣れてはいるが、上からは一度も眺めたことがなかったＳＳＡの屋根に立っていること。すでに人間を何人も噛み殺しているという恐ろしい怪物と、たった一人で向かい合っていること。その怪物と、そしてミノル自身も、宇宙から来たという謎の球体によ

って超常の力を与えられたこと。全（すべ）てが、出来の悪い冗談（じょうだん）のようだ。

だが、たった一つ、確かなことがある。

典江（のりえ）を、守らなくてはならない。

眼前の男は、ミノルのあとに典江も殺すだろう。言動こそ理性的だが、両眼の奥には熾火（おきび）のような敵意と欲望がちろちろと赤く揺（ゆ）れている。それが、ユミコの言っていたルビーアイによる精神的汚染なのか、それとも男がもともと持っていたものなのか、そこまでは解（わか）らないが——いまとなっては同じことだ。

ミノルが殺されれば、典江も死ぬ。

胸に埋（う）まるサードアイに意識を集中し、いつでも防御殻（かく）を出せるように準備をするミノルを見て、バイターは笑みを少し深くした。

「いいね、ラガッツォ。公園で見た時は正直、君自身にはあまりそそられなかったが……そんな顔をされると、食欲が湧（わ）いてきてしまうね」

ゆらりと体を揺らし、右手の人差し指の背で顎下（あごした）をこりこりと撫（な）でる。

「さてさて、戦う前に、幾（いく）つか質問に答えて貰（もら）おうかな。私は、食べるものに関しては詳しく知っておきたい性質（たち）でね……」

なんで自分を喰（く）おうという奴（やつ）にそんなサービスをしなきゃならないんだ……と頭の中で反発しつつも、口を引き結んだまま考える。ミノル一人でバイターを倒（たお）せるという保証がない以上、

ここで少しでも時間を稼（かせ）ぐことはマイナスにはならない。なぜならバイターは、ミノルの家とＳＳＡの非常階段のドアを破るために能力を使った時、ミノルには感じ取れなかったが、一瞬（いっしゅん）にせよ《匂（にお）い》を発生させているはずなのだ。

「……なら、こっちから先に質問させて貰う」

ミノルの答えに、男は鷹揚（おうよう）な態度で頷（うなず）いた。

「いいだろう、何が知りたいんだね？　答えられる範囲で答えよう」

「なんで、こんな場所を選んだんだ」

その問いは予想外だったらしく、バイターは二回瞬（まばた）きしてからクックッと笑った。

「てっきり私の個人情報を訊（き）いてくるかと思ったよ。ま、それは教えられないがね……。ここを君との待ち合わせ場所に選んだ理由その一は、我（わ）が食卓に相応（ふさわ）しい場所だからだよ。広々として、実に贅沢（ぜいたく）じゃないか。まるで海の底にいるようだ」

地面から六十メートル以上も離（はな）れた屋根の上を海底になぞらえる感覚は異質だったが、少しだけ理解できる気もした。しかしコメントはせず、続きを促す。

「その二は？」

「単純に、邪魔（じゃま）が入らないからさ。……さて、今度は私の番だよ、少年」

バイターは、右手をひらりと後方に振った。

「君は、あの女性と実の姉弟（きょうだい）なのかね？」

「…………」

　ミノルと典江を殺そうとしている相手に、真実を答える義理はない。だが嘘をつけば見破られ、問答を打ち切られるという予感がしたので、やむなくかぶりを振る。

「違う。子供の頃に、義姉の家に引き取られたんだ」

「ほう……」

「今度は僕の番だ。お前はさっき『そそられない』って言ったのに、どうして僕と義姉を狙ったんだ」

　その問いに、バイターは再び洒脱なジェスチャーを交えながら答えた。

「正確には、『君自身にはそそられなかった』と言ったんだよ。だが、君の能力は興味深い。あの透明な殻は何で出来ているのか？　どれほど硬いのか？　そして、なぜあんな力が芽生えたのか……？　知りたいね、とても」

　軽く広げた両腕を、胸元で交差させる。

「だから、教えてくれ、ラガッツォ。君はどうして彼女の家に引き取られた？　子供の頃に、何があったんだい……？」

　舌なめずりせんばかりの表情で、バイターは上体を前に突き出す。切れ長の双眸の奥で、瞳が薄赤い光を帯びる。

　意識の深いところに押し込めた八年前の記憶が、わずかにひび割れるような感覚があった。

　ぎりっと歯を食い縛る。こんな奴に真実を教える義理はないが、嘘は見抜かれる気がするし、一秒でも会話を長引かせねばならない理由もある。

　何度か息を吸ってから、ミノルは押し殺した声で答えた。

「お前みたいな異常者に……家族を殺されたからだ」

　途端。

　バイターの唇の両端が、きゅうっと吊り上がった。露わになった歯たちは、金属質の光沢を帯びているように見えた。前のめりになっていた体をバネ仕掛けのような勢いで後ろに倒し、ルビーアイは高らかな笑い声を上げた。

「ハハッ、ハハハハハ！　そうか、なるほど、そういうことか！　家族を皆殺しにされて……自分だけが生き残った。だから、その殻か。エクセレンテ……これでますます嚙みたくなった！　君の骨はきっと、涙の味がするだろうね!!」

　ごきん。

　大きく仰け反ったバイターの両顎から、異様な音が響く。獰猛で凶暴で冷酷な、獣の臭気が嗅覚を直撃する。ルビーアイの匂い。

「ああ……だめだ、もう我慢できない。Q&Aコーナーはこれまでとしよう。さあ、心ゆくまで楽しもうじゃないか……」

　ごきん。ごき、ごきん。

「私と……君だけの………饗宴をッツ!!」

ごきごきごきっ！　と骨を鳴らしながら、尖った下顎が夜空に向けて高々と伸び上がる。

勢いよく体を前に戻したバイターは、もう人間ではなかった。三日前に秋ヶ瀬公園で目撃した鮫男の姿が、そこにあった。

巨大な口に浮かんだ獰猛な笑みの奥で、ナイフのような歯列が月光を受けてぎらりと光る。

「さて、まずは、もう一度イタチザメで試させてもらおうッ！」

奇怪に歪んだ声でそう告げると、バイターは体をいっそう前傾させた。張り詰めたスーツの下で、太い筋肉の束がうねる。

殻を。出さないと。

ミノルは、頭の芯に燃え上がるような熱を感じながら考えた。

だが、出せなかった。

呼吸が、肺が、言うことを聞かない。はっはっと浅い呼吸をせわしなく繰り返すばかりで、防御殻発動のキーである、大きく息を吸って溜め、胸骨のサードアイを押す——という動作ができない。

バイターの靴が、屋根の鋼板を激しく蹴りつけた。

長身が、まさしく鮫のような勢いで突進してくる。三角形のあぎとが、がばっと開かれる。

能力発動を諦め、ミノルは懸命に右へと飛んだ。

左足の靴からほんの数センチ離れたところを、鮫の牙が通り過ぎた。頭からダイブしてきたバイターが噛んだのは、屋根のステンレス板を押さえる、太さ五十センチほどの鉄骨だった。

ガキュン！　という強烈な衝撃音と眩い火花の中、鉄骨の一部が、まるで焼き菓子のように喰いちぎられた。

「………!!」

辛くも転倒を回避したミノルは、驚きに両眼を見開いた。

自宅ドアやSSAの非常階段の噛み跡を見たのだから、バイターの歯が金属すらも噛み切ることは想定していた。だが、まさか、これほどの切れ味だとは思っていなかった。大型のダイヤモンドカッターですら、あの太さの鉄骨を切断するには何分もかかるだろう。

殻なしで食い付かれたら、腕でも脚でも一瞬で持って行かれる。

——落ち着け。落ち着いて、深く息を吸うんだ。

頭で幾らそう考えても、肺はまったく言うことを聞かない。気管のすぐ先で堰き止められてしまったかのように、空気が押し戻される。

ゆらりと立ち上がったバイターが、巨大な金属の塊を吐き捨てるや、猛然と突進してくる。横っ飛びの回避を阻止するためか、今度は両手を大きく広げている。

「シャアアッ！」

奇声とともに迫る鮫の歯を、ミノルは体を沈み込ませて回避した。だが、このままでは押し

倒される。思い切って、頭からバイターの股下に突っ込み、長い脚をかいくぐって後方に抜ける。ごろりと前転してから立ち上がる。

呼吸はまだ整わない。いったん仕切り直さなければ。でもどうやって。向こうには必殺の歯と長い両腕がある。摑まれたら一瞬で終わる。

その時、ミノルの足許で、履き慣れたランニングシューズがステンレス板に擦れてキュッと鳴いた。

——そうだ。いまの僕にできること。バイターにも勝るかもしれないこと。それは——走ること！

振り向いて敵と対峙する代わりに、ミノルは体を前傾させ、思い切り屋根板を蹴った。

後方から、人喰い鮫が追いすがる気配がする。鋭い牙の切れ味を、うなじの肌でちりちりと感じる。しゃがみ込みたい衝動を蹴り飛ばし、ミノルは広大なスーパーアリーナの屋根の上を一直線に疾駆する。

短距離走はあまり得意ではないが、走り方は知っている。肩の力を抜いて、大きく、リズムよく腕を振る。体軸を意識し、重心の真下を蹴る。

無酸素運動なので呼吸はしない。痙攣しかかっていた横隔膜の動きが止まる。肺に詰まった炭酸ガスが抜けていく。バイターの足音が遠ざかる。パニックに陥りかけていた思考が徐々に冷却される。

胸骨の中心で、漆黒のサードアイが、どくんと震える。

——いける！

両足で急ブレーキを掛けながら、空になった肺に冷たい空気をいっぱいに吸い込む。

溜める。

押す。

視界の色が青みがかり、あらゆる音と温度が消えた。体が三センチ浮き上がった。

振り向くと、ＳＳＡの向かいに立つ高層ビルを背景に、両腕を広げて飛びかかってくる鮫男のシルエットが見えた。

「お……おおおおッ！」

防御殻の中で吼えながら、ミノルはバイターに向かって、頭から突っ込んだ。

スーツに包まれた胸板に激突しても、衝撃も、反動もほとんど感じなかった。どういう仕組みなのか、殻を出している時は運動の三法則すらも捻じ曲げられるらしい。ミノルのほうが明らかに体重が軽いのに、吹き飛ばされたのはバイターだけだった。

背中からステンレス板に叩き付けられた鮫男に、今度はミノルが飛びかかった。

格闘技番組の見よう見まねで馬乗りになり、握り締めた拳を左右交互に振り下ろす。

一発目はバイターの左肩に命中し、二発目は喉元を捉え——しかし、下顎目掛けて繰り出した三発目の右拳は、途中で停止させられた。

いきなり大きく開いたあぎとが、拳を殻ごと咥え込んだのだ。

今度こそ、ガキッという硬い衝撃を感じた。押しても引いても動かなくなった右腕の向こうで、バイターの両眼が赤い光を放った。

＊＊

頭突きを喰らった右胸は焼けるように痛み、拳で殴られた左肩と鎖骨はぴりぴりと疼く。骨にヒビでも入ったのかもしれない。

小僧の身体能力を、少しばかり甘く見ていた。日頃、トレーニング・ジムで汗を流している高江洲よりも速く走るとは……そして逃げると見せかけて、反転して突っ込んでくるとは。

想定外の事象は、それだけではなかった。

小僧には言わなかったが、高江洲が戦いの場にさいたまスーパーアリーナの屋根上を選んだ理由は、もう一つ存在する。屋根全体が塗装されたステンレス鋼板で覆われているため、土やアスファルトよりも滑りやすいのだ。

小僧が身にまとう透明な殻は、表面が異様に滑らかで、しかも恐ろしいほど硬い。常識外れの強度を持つガラスのような物質なのだとすれば、金属板の上では足が滑ってまともに動けないはずだった。しかし、急ブレーキから体当たりしてきた時、小僧はまったく体勢を崩さなかった。高江洲が履いてきたゴム底のウォーキング・シューズよりも、がっちりと屋根板を摑んでいるように思えた。

いったいなぜそんなことが可能なのかは解らない。だがもともと、目玉が与える力は常識外の代物だ。何が起きても不思議はない。

水も食料もないあの廃ビルで、高江洲の肉体を完全に――否、完全以上に復活させてのけたように。

思わぬ反撃に軽いダメージは受けたが、ともあれ小僧は捕まえた。いや、咥えた。こうなればもう逃がさないし、何もさせない。このまま、まずは右腕を殻ごと喰いちぎる。苦痛にのたうち、泣き叫ぶさまをしばし楽しんでから、左腕も喰う。次に右脚。そして左脚。あれほど速く走れるのだから、中身が詰まったいい骨を味わえるだろう。

四肢を失い、出血多量で声も出せなくなった小僧の目の前で、女も喰ってやる。入手困難なバルビツール酸系睡眠薬のストックを使ってまで生かしておいたのだ。義理の姉らしいが、なればこそ刺激的かつ感動的な味わいを与えてくれるだろう……。

そう考えた時、高江洲の頭の深いところに、ちくりと奇妙な痛みが走った。

それを無視して、小僧の体を右膝で突き上げ、同時に咥えた右腕を引っ張って、左側に引き倒す。もちろん顎は開かない。馬乗りになり、左拳での打撃を封じると、イタチザメ・モードの咬合力を解放する。

「ググルッ！」

喉から、獰猛な雄叫びが漏れる。顎周りの筋肉がみしみしと鳴る。凄まじい圧力を受け止める牙たちが、小刻みに震える。

しかし。

小僧の殻は、三日前と同じように、軋みも撓みもしない。物質を超えた硬さでイタチザメのパワーに耐え、崩壊を拒んでいる。このまま何十秒噛んでいても割ることはできないだろうと、歯ごたえが伝えてくる。

——だがね、少年。私も、三日前の私ではないんだよ。

腕を咥えたまま思念でそう囁きかけ、にやりと右の口角を上げる。

---

冷え切った廃ビルの奥で、口の火傷は治りかけたもののエネルギーの過剰消費によって死にかけた高江洲を救ったもの。それは床のあちこちに落ちていたステンレスのボルトやナットだった。

常識的には、人間が金属を舐めようが噛み砕こうが、一カロリーたりとも得られない。だが世界には、鉄を食う生物も存在する。2価鉄を3価鉄に変換することでエネルギーを取り出し増殖する《鉄酸化細菌》がそれだ。

同様のメカニズムが、高江洲の体内で発現したのかどうかは解らない。しかし事実として、ナットを一つ喰うたびに空腹感は収まり、火傷の治癒も進んだ。高江洲は、暗闇の中で埃塗れの床を這い回り、指先に触れる金属の塊を次々に口に運んでは貪り喰った。物心つかない赤子のように。あるいは、野生の獣のように。

屈辱だった。しかし同時に、倒錯的な悦びもあった。

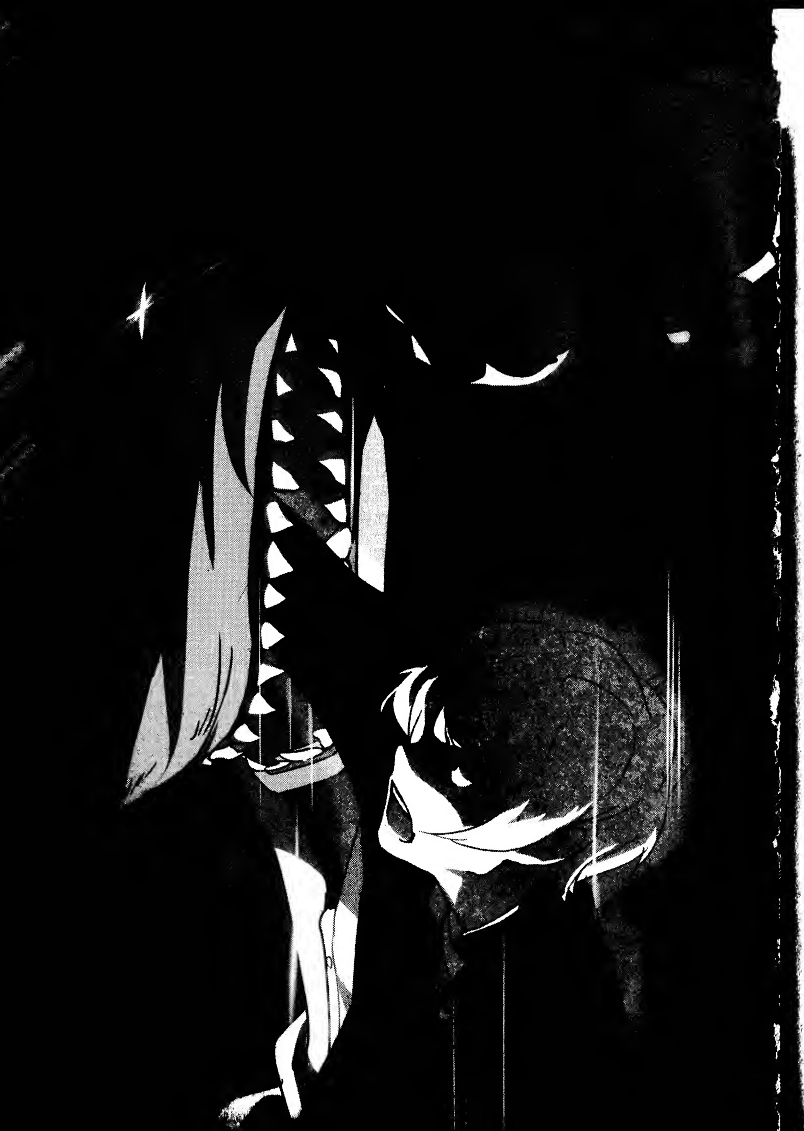
これこそが、喰うということだ。技巧を凝らした料理も、飾り立てた食卓も、全ては虚飾に過ぎない。

いつしかナットは飴のように甘く、ボルトはクッキーのように香ばしく感じられた。夢中で金属を貪り続け、腹が満ちた高江洲は再び深い眠りについた。もう昔の夢は見なかった。

やがて夜が明け、爽快な気分で目覚めた時、変形したままだった顎は元の形に戻っていた。Ⅲ度に達していたはずの火傷も完全に治癒し、動かしても痛みはまったくなかった。それだけではない。全ての歯は、まるで組織中に金属を取り込んだかのように銀色がかった輝きを帯び、指で弾くとキーンと澄んだ音を返した。

高江洲はジョガーを装ってホテルに戻り、シャワーを浴びてからチェックアウトした。地下の駐車場でマセラティのハンドルを握った時には、次にするべきことはもう解っていた。

あの小僧を見つけ出し、自宅を突き止める。尾行して人気のない場所で襲撃するか、それが難しければ家族を人質に取っておびき出す。スタンバトンの小娘と背後に控える組織のことを考えるとこの街に留まるのは危険だが、小僧とはどうしても決着をつけねば気が済まない。



次は必ず噛む。

なぜなら、高江洲はより強く、より大きく、より美しい鮫に生まれ変わったのだから。

「グ、ググ、ググゴゴオッ!!」

小僧を組み敷き、右腕を咥え込んだまま、高江洲は吼えた。

下顎の中央で、赤い目玉が激しく脈打つ。顎の骨が、腱が、筋肉が、そして歯が炎のように熱くなる。

ごきごきごき！　と異様な音を響かせ、顎が……いや、頭が丸ごと変形していく。燃えるような痛みと、それに数倍する快感が全身を貫く。

ついに……とうとう……ようやく、《あの鮫》になれる。

史上最大の肉食魚類。大海に君臨する絶対的支配者。高江洲が、二番目に好きな鮫。

和名、ムカシオオホホジロザメ。

英名、メガロドン。

＊＊＊

更なる変貌を遂げていくバイターの顔を、ミノルは驚愕とともに見上げた。

これまでも常人より十センチ以上突き出していた顎が、より大きく、長くなっていく。鼻梁は上顎の先端と一体化し、額から後頭部までが滑らかな曲線を描く。両眼は顔の側面に移動し、小さく、丸くなる。首も異様に太くなり、シャツのボタンとネクタイが千切れ飛ぶ。

そして、ナイフと鋸の二段構造だった歯は、巨大で分厚い剣先のような三角形に。

ミノルの右腕を咥えているのは、鮫男の完成形だった。首から下こそスーツを着た人間のままだが、見える範囲の皮膚は全て青黒く染まっている。

横幅が二十センチに達しようという顎の両側で、太い筋肉の束がうねった。

銀灰色の金属光沢を持つ歯が、月光を受けてぎらりと輝いた。

――だめだ。砕かれる。

そう感じた瞬間、ミノルは叫んでいた。

「うわあああああッ!!」

いままで噛まれるに任せていた右腕を、無我夢中で口の奥に突き入れる。指先――正確にはそこを包む防御殻――が喉の軟組織に埋まり、鮫男がわずかに頭を仰け反らせる。

瞬間、ありったけの力で右腕を引っ張る。不可視の殻に牙の先端が擦れるのを感じながら、どうにか腕を引き抜いたその瞬間、上下の顎が猛烈な勢いで衝突し、無音の世界にオレンジ色の火花が飛び散る。

今度は頭に噛み付かんと迫る巨大な顎を、ミノルは体を左に傾けて躱した。勢いのままに、

バイターの脇腹を右膝で一撃。のし掛かる圧力が緩んだ瞬間、体を回転させて馬乗りから逃れる。立ち上がり、後ろに回り込むように走って距離を取る。

呼吸はできるが息苦しい。まさか、殻の中の酸素が尽きてきたのだろうか。ここで失神するわけにはいかないので、やむなく防御殻を解除する。

ランニングシューズの底が鋼板に着くと同時に、これまでに増して濃厚なルビーアイの臭気が押し寄せてくる。

「っ……!」

思わず息を止めたくなるが、我慢して大きく深呼吸する。

やがて、鮫男がゆらりと立ち上がり、振り向いた。

頭部が巨大化したぶん上背も高くなり、いまは百九十センチほどもあるだろう。四肢の筋肉も肥大化し、スーツの袖やスラックスの縫い目が一部裂けている。ネクタイはとうに失われ、ワイシャツのボタンも腹のあたりまで千切れ飛んで、露出した胸筋はまるでボディビルダーの……いや、野生動物のようだ。

五メートル以上離れていても、空気を介して伝わってくる物理的破壊力に気圧され、ミノルは大きく息を吸い込むと再び防御殻を展開しようとした。

しかしそれより一瞬早く、バイターが歪んだ笑い声を発した。

「ハ、ハ、ハ……自分の姿を、見られないのが残念だ……」

大量の擦過音と野太い低音が混じり合う、人間離れした声。もっとも、唇も歯も舌も人とはまるで形が違うのだから、喋れること自体が非合理的なのだ。

悪夢から這い出てきたが如き怪物は、赤く底光りする眼でミノルを見据え、続けた。

「君の携帯で、一枚写真を撮って欲しいくらいだよ。私がこの姿になるために何を食べたか、言っても信じて貰えないだろうね、ハ、ハ、ハ」

鮫の口がにやっと笑う。露出した牙が、凶悪に輝く。

「時にラガッツォ、君は人間の咬合力……つまり噛む力が、歯一本あたり何キログラムだか知っているかね？」

「…………」

小刻みにかぶりを振る。すると鮫は、教師じみた態度で右手の人差し指を立てる。

「では、教えてあげよう。成人男性で、だいたい六十キログラムだ。もちろん個人差はあるがね……。これが、ライオンになると四百キログラム。ワニやカバでは千キログラムに達する。このあたりが、陸上動物の最大値だね」

「……お前の噛む力が、それくらいあるって言いたいのか」

ミノルが掠れ声で問いかけると、バイターは再びにやりと笑った。

「残念ながら、陸の獣なぞ問題外なのさ。海の支配者、最大級のイタチザメやホホジロザメの咬合力は二千キログラムだ。現生動物では最強と言っていいが……絶滅種には、彼らをも超える連中が存在する。おなじみの恐竜、ティラノサウルス・レックスの咬合力は五千キログラムだそうだよ。大変なものだね」

「何が言いたいんだ！」

鮫の頭から学術的な台詞が発せられる、悪夢さながらの光景に耐えかね、ミノルは叫んだ。時間を稼ぎたい事情はあるが、空中の梁に寝かされている典江も心配だ。睡眠薬が切れて眼を覚まし、パニックに陥ったら梁から落下してしまうかもしれない。

しかしバイターは、立てた人差し指を小刻みに振ると、尚も言葉を続けた。

「そう焦るなよラガッツォ。……では、史上最大の咬合力を持つ生物はT・レックスなのか？　答えはやはり否だ。百五十万年前の海にはね、T・レックスの三倍、実に一万五千キログラムもの咬合力を誇る王者がいたんだ。牙一本あたり十五トンだよ、分厚いクジラの皮膚すら容易に引き裂いただろうね。君も名前を聞いたことくらいあるはずだ。その絶対王者こそ、全長十メートルを軽く超える最大最強の鮫……カルカロクレス・メガロドンさ！」

いきなり音量を増した声で、バイターは叫んだ。

「そしてッ！　絶滅したメガロドンはいま、悠久の時を超えて復活したッ！　……すなわち、この、私だ――――ツッ‼」

どうっ！　と男の足許でステンレス鋼板が波打った。

巨体からは想像もつかないスピードで躍りかかってくるバイターを、大きく右に跳んでやり

過ごしながら、ミノルは再び能力を発動させた。

だが、今度ばかりは、防御殻があの恐ろしいほど巨大な歯を防ぎ切ってくれるという確信は持てない。好き放題噛み付かせて、その間に拳で反撃するという手はもう使えない。

——もし生きて帰れたら、いったいこの殻が何トンまで耐えてくれるのか、どうにかして確かめよう。

などと頭の片隅で考えてしまってから、その思考を振り払う。いまは、目の前の怪物を倒す方法だけを考えなければ。

バイターの武器が鉄さえ噛み切る顎なら、ミノルの武器は殻に包まれた両の拳だ。手の骨や手首関節へのダメージを気にすることなく殴れるうえに鋼鉄のように硬いので、大型ハンマーを叩き付ける程度の威力は期待できる。——当たりさえすれば。

「う……おお！」

鮫男の右に回り込みながら突き出した拳は、しかし空を切った。バイターが、敏捷な動作で飛び退いたからだ。即座に襲ってくる牙を、危ういところで回避する。再び拳を振りかぶり、突き出す。しかしまたしても躱される。

自分のパンチが、素人丸出しの大振りになっていることは自覚している。だが、事実ずぶの素人であるミノルには、正しいパンチの打ち方などさっぱり解らない。少しずつ、バイターは余裕を持って拳を躱すようになり、しかしミノルは殻を牙で擦られ始める。

このままでは、いつか捕まる。

武器。拳の他に、何か武器はないか。

パンチより威力はあるだろうが、キックは論外だ。蹴った瞬間に転ぶか、足を噛まれる。

こんなことなら台所から包丁の一本でも持ってくるんだったか。いや、包丁を握った状態で殻を出したら内側に弾かれて、自分を刺してしまうかもしれない。

どうする。どうすれば——。

危うい攻防を続けるうちに、ミノルはいつしか大屋根の東の端に追い詰められていた。

これ以上後ろには下がれない。バイターもそれに気付いたのか、両腕を大きく広げて、じわじわと距離を詰めてくる。

次の攻撃は躱せない。飛び退いたら最上階テラスに、下手をするとＳＳＡを囲む道路にまで落下する。この位置では、落差が六十メートルはあるだろう…………

——待て。

確かさっきも、こんなことを考えたはずだ。しかも、逆の方向から。

そうだ。まだ武器はある。特大の、絶対に回避されない武器が。

ミノルは腰を落とし、ちらりと右に眼を向けた。

その方向に回避すると読んだのだろう、バイターは重心をそちらに傾けながら、一気に飛びかかってきた。

——典江さん、すぐ戻ってくるから、あと少しだけ、じっとしてて!!

最愛の姉に心の中で呼びかけながら、ミノルは両膝を屈めてバイターの体に組み付き。

思い切り両足で屋根板を蹴って、真後ろに跳んだ。

ミノルの頭に噛み付く寸前のバイターが、両眼を大きく見開いた。左手を後方に伸ばしたが、もう遅かった。

二人のサードアイ保持者は、絡み合いながら、大屋根の端から勢いよく飛び出した。

＊＊＊

自分の力に対する、絶対の信頼。

《メガロドン・モード》の高江洲が揺るぎなく持つそれを、しかし小僧は持っていないように思えた。殻を噛ませず、不格好に逃げ続けるのはそれが理由だと。

ゆえに、想像できなかった。まさか、高江洲を道連れに、高さ六十メートルの屋根から身を投じようなどとは。

「グルアアッ!」

怒りと驚愕の声を漏らしながら、高江洲は必死に屋根の端を掴もうとした。だが、伸ばした指先はコンクリートの梁を掠めただけだった。

屋根の真下には、非常階段と繋がる最上階テラスが存在する。だがこの勢いではそこを飛び越えて、何十メートルも下の地面にまで落下する。

さいたまスーパーアリーナの屋根を戦いの場に選んだ時、もちろん落下のリスクは考えた。だが、何せ大屋根は約三万平方メートルもの広さがあるのだ。中央部で戦っている限りは落ちようはずもないし、小僧だって端には近づかないだろう。

そう予測していたのに、狩りに夢中になって小僧を端まで追い詰め……しかも、もろとも落下するという狙いを見抜けずに飛びかかってしまうとは。

愚か。愚か。まさか、脳まで鮫になってしまったわけではなかろうに。

悔いてももう遅い。どうにかして、落下のダメージを最小限にしなくてはならない。それには小僧をクッションに………

いや、いや、違う。小僧は鉄より硬い殻に包まれている。そんなものの上に落ちたら衝撃は倍加する。離れるんだ。離れて、街路樹か植え込みの上に落ちる。

瞬時にそこまで思考を巡らせた高江洲は、自分にしがみつく小僧を押しやろうとした。だが、両腕でがっちりとホールドされて引き剥がせない。

もう地面は間近まで迫っている。落下地点は、SSAの東側に接する広い歩道。アスファルトへの激突は避けられない。できることはもう、目玉に与えられた……否、自分で自分の中に見出した力を信じることだけ。

耐える。生き延びてみせる。

「グルオオオオッ‼」

急接近する路面に向けて獰猛な咆哮を迸らせながら、高江洲は全身の筋肉を硬直させた。

衝撃。

まず視界が真っ白に染まり、すぐに暗転した。

＊＊＊

墜落直前にバイターが体を捻ったため、ミノルは左肩から道路に接触した。

ぐぐっ、という減速感。体の芯を押されるような圧迫感。

**それだけだった。**

アスファルトにはクレーターじみた大穴ができたのに、痛みどころか衝撃すら感じなかった。

不可視の防御殻は、六十メートルの垂直落下がミノルの肉体に与えるはずだった致命的損壊を完全に遮断した。

——いったい、何なんだ、この殻は。

自分の能力に対する恐れのようなものを初めて感じたが、それも一瞬のことだった。いまはただ感謝するしかない。なぜなら、同時に右肩から落ちたバイターは、少し離れた路面に倒れたまま身動きひとつしないのだから。

巨体の下に、真っ黒い血だまりが広がっていく。手足の先だけが、びく、びく、びくん、と不規則に痙攣している。

死んだ——のだろうか。ミノルが用いた《絶対に回避されない武器》、すなわちアスファルトに覆われた地面は、脅威のパワーとタフネスを誇ったルビーアイを絶命させたのだろうか。

——それは、つまり、僕が殺したっていうことだ。

不意にその認識が訪れ、ミノルは殻の中で無味無臭の空気を鋭く吸い込んだ。再び耐えがたい息苦しさに襲われ、無意識のうちに能力を解除する。シューズの底がアスファルトの破片を踏み、じゃりっと音を立てる。

墜落時は途轍もない轟音が響いたはずなのに、世界はしんと静まり返っていた。

右にはSSAの壁。左側は、道路を挟んでJRの線路。地形的に、この道に入ってくるのはSSAの地下駐車場に向かう車だけだし、その駐車場もとうに閉まっているが、音を聞きつけた警備員なり警官なりが駆けつけてくる気配もない。

北風が街路樹の葉を揺らす音だけを聞きながら、ミノルはしばし立ち尽くした。

バイターと戦って、倒す。その覚悟は固めていたつもりだった。しかし、倒すという思考がそもそも不覚悟だったといまになって気付く。

殺す、という表現を無意識のうちに避けていたのだ。RPGの、モンスターをやっつけた、

こらしめた、というメッセージと一緒だ。結局、最後の最後まで、現実を直視できなかったのだ……。

そんなことを考えながら、ミノルはバイターに向かって一歩、また一歩と慎重に近づいた。

俯せに倒れるルビーアイの頭は、鋭く尖った鮫のままだ。後頭部に残る髪の毛も、青い針状に変化している。このまま人間に戻らないのだとしたら、死体はどのように処理されるのだろう。それとも、この巨体をどこかに運んで隠すところまでがミノルの義務なのだろうか。でも、どうやって。

そんなことを考えながら、もう一歩前に進んだ、その時。

かすかな、しかし奇怪な音が、耳に届いた。

ぼりぼりぼり。

ごりごりごり。

何か硬いものを砕くような。

いや、正確には——噛み砕くような。

「————ッ!!」

驚愕に両眼を見開きながら、ミノルは一歩飛び退った。

一瞬遅れて、バイターの巨体がバネ仕掛けのように動いた。逞しい右腕が大蛇のように閃き、ミノルの右足首を掴むと、力任せに放り投げた。殻を出す暇もなく、歩道と車道の間の植え込みに背中から突っ込んでしまう。

すぐには立ち上がれないミノルの眼前で、死んだとばかり思っていたルビーアイが、ゆらりと体を起こした。

深いダメージを受けている。それは間違いない。白いシャツは血でどす黒く染まり、下顎からはいまもぼたぼたと血が垂れている。だが、他にも路面に落ちるものがある。小刻みに動き続ける口の端から、細かい破片のようなものが次々と零れ落ちていく。

ごりごり、ぼりぼり。

喰っていたのだ。道路を。アスファルトの塊を。

見れば、バイターの足許には大きな穴が開いている。落下でできた穴ではない。巨大な牙が喰いちぎったのだ。

「…………カッティーボ」

ミノルには何語なのかすら解らない単語を吐き捨てた鮫男は、顔を上げると口の端を歪めて笑った。

「……だがまあ、アスファルトの主成分である炭化水素と、米やパンの炭水化物は名前も似ているしね。喰えば同じようなものだろう?」

「…………そんな……いくら鮫だって、アスファルトなんか消化できるはずが……」

倒れ込んだままミノルは呆然と呟いたが、その間にも、バイターの上半身に刻まれた無数の

裂傷（れっしょう）が少しずつ塞（ふさ）がっていく。信じがたい回復力だ。

「クク……鮫（さめ）の消化力を舐（な）めちゃいけないね。それに、他の魚ならすぐに死んでしまうような傷からも鮫は回復できるんだよ」

思考を読んだように、鮫男がうそぶく。

「……だが、さすがに、あの高さからの墜落（ついらく）は少々堪（こた）えたかな……。もう一度上まで登るのも面倒（めんどう）だし、時と場所を改めさせて貰（もら）おうか。君はそこで寝ていたまえ」

体の向きを変え、ゆっくりと歩き始める。右肩をかばい、右足を引き摺（ず）るその様子を見る限り、確かにダメージは残っているようだ。

バイターが向かう先には、地下駐車場に続くスロープがある。中に自分の車を駐（と）めてあるのだろうか。さすがに車を使われたら、走って追いかけることはできない。

傷ついているいまのうちに、とどめを刺すべきだ。ここで見失えば、傷を癒（いや）してから再び朋美（ともみ）や典江（のりえ）を狙（ねら）うかもしれない。

頭ではそう解（わか）っていても、ミノルは植え込みに埋（う）まったまま動けなかった。

倒（たお）すのではなく、殺す。いくら異形の鮫男であっても、もともとは人間であった相手の命を奪（うば）う。その行為の重さが全身にのし掛かり、四肢（しし）から力を奪う。

――できない。人間を殺すなんてことが、僕にできるはずがない。そんなこと、一度だって考えなかった。想像さえしなかった。だから無理だ。これ以上はもう戦えない。

――それに、バイターだって、サードアイと接触する前は普通（ふつう）の人間だったのかもしれない。精神に干渉（かんしょう）を受けて、いわば洗脳状態で人殺しをさせられているのだとしたら、その罪（つみ）を裁く権利が僕にあるのだろうか。

――そうだ……僕にはできない。バイターだろうと、他の誰（だれ）だろうと、自分の意思で誰かの命を奪うなんて……そんなこと、僕には…………

いや。

違う。

たったひとりだけ、その機会が訪れれば一切の躊躇（ためら）いなく殺せる人間がいる。どれほど時が経（た）とうと決して消えない殺意が、ミノルの中にもある。

父と、母と、姉の命を奪い、八年が経ついまもまだ捕まっていない犯人。顔も名前も性別も解らないが、たとえどんな人間だろうと、どんな事情があろうと、そいつだけは殺せる。

殺したい。いちばん惨（むご）い方法で殺してやりたい。

バイターも、あの犯人と同じことをしたのだ。箕輪（みのわ）朋美を襲（おそ）う前に、もう四人も殺していると自分で言っていた。サードアイに操られていようがいまいが、事実に変わりはない。

犠牲者（ぎせいしゃ）たちにも、家族はいたはずだ。ミノルと同じように嘆き、苦しみ、絶望の淵（ふち）に突き落とされた家族が。

関係なくはない。どうでもよくもない。

たとえ権利はなくとも、ミノルには義務がある。ここでバイターを倒し――いや殺し、次の犠牲者が出ることを止める義務が。

すでにバイターは緩いスロープを下り終え、駐車場に足を踏み入れている。営業が終わっているので、内部は真っ暗だ。大きな背中が、ゆっくりと闇に沈んでいく――。

両拳を握り締め、奥歯を食い縛り、ミノルは体を植え込みから引き剝がした。

立ち上がる。右足を前に出す。決意を込めて、舗装を蹴る。

走る。長いスロープを駆け下り、バーゲートの隣の歩行者用通路を抜けて、地下駐車場に走り込む。

緑色の非常灯にぼんやりと照らされる広大な空間に、車はほとんど存在しなかった。しかしバイターが目指す先には、派手な外見の大型スポーツカーが駐められている。

不規則に揺れる大きな背中に、ミノルはありったけの意志を込めた声を叩き付けた。

「待て!!」

異形のシルエットが、ぴたりと止まる。

「たかが屋上から落ちたくらいで、尻尾を巻いて逃げるのか!?」

しばし静止していた影が、ゆるりと振り向いた。

「逃げる……だって……?」

闇の奥で、二つの眼が赤い光を放つ。

「ククク……ずいぶんと、勇ましいことを言うじゃないか。君こそ、屋根の上では、小イワシのように逃げ惑っていたくせに」

「ああ。でも、もう逃げない! 僕は、お前を……ここで、殺す!!」

ミノルの宣言は、広い駐車場いっぱいに反響した。

赤い両眼が、ゆっくりと一度瞬かれた。気温が急速に冷えていくような感覚に襲われるが、精神力を振り絞ってその場に立ち続ける。

「…………殺す……? 獲物である君が……捕食者たる、この私を……?」

バイターの右足が、重々しい靴音とともに一歩前に出る。

「真の優越種である私を、たかが薄い殻一枚持っているだけの君が、殺すというのか……?」

続いて、左足。遠近感を上回る速度で、黒い影が巨大化していく。

「許されないな……その言葉がいかに愚かで罪深いものかを、教えてやる必要があるね……」

みし、みし、と骨を軋ませながら、バイターの筋肉が盛り上がる。朧な光を受けて、無数の牙が凶悪に煌めく。

「噛む……かむ……かむかむカムカムカム噛んでやるぞおおォォ――――ッッ!!」

異様な雄叫びとともに、巨体が空中に躍り上がった。

同時に、ミノルもコンクリートの床を蹴った。

防御殻を展開。右拳を、あらん限りの力で握り締める。

「うあああああ――――ッ!!」

絶叫しながら、真上から降ってくる鮫の頭めがけて、拳を突き出す。

尖った鼻先に、殻に包まれた拳が激突した。青黒い皮膚が放射状に裂け、大量の鮮血が飛び散った。だが、鮫は頭を左に振って拳を滑らせると、限界まで開いたあぎとで、ミノルの頭を丸ごと咥え込んだ。

＊＊＊

怒り。

かつて感じたことのない――三日前、小娘のスタンバトンで口を焼かれた時をも上回る激烈な怒りが、高江洲の全身を駆け巡っていた。

小僧の策にはまって無様に落下したから？

傷を癒すために、アスファルトを喰う羽目になったから？

尻尾を巻いて逃げるのか、などという屈辱的な言葉を浴びせられたから？

そうだが、それだけではない。この怒りは、何時間も前から……小僧の自宅を襲撃し、義理の姉だという女を攫った時から、高江洲の深部に存在した。

本当は、即座に殺すつもりだったのだ。

頸動脈洞への圧迫では、せいぜい数分間しか気絶させられない。今回は市街地の真ん中を通るので、車のトランクで覚醒されたら面倒なことになる。どうせすぐに小僧も殺すのだから、遠目に生きているように見えれば――いや、仮に死体だと見抜かれても、さして大きな問題ではない。

しかし、キーシリンダーを静かに喰い破り、ドアを開けて侵入し、キッチンで夕食の準備をしているらしい女の後ろ姿を見たその瞬間、高江洲はある種の形容しがたい感覚に襲われた。

自分がこの場所に何をしに来たのか、それすらも思い出せなくなった。

女は、フライパンを載せたガスコンロの火加減を確かめながら、背後で立ち尽くす高江洲に向けて明るい声で言った。

『お帰りなさいみーくん、今日はずいぶん静かに入ってきたのね。ちょっと待っててね、すぐご飯にするから』

実際には、棒立ちになっていたのはほんの一秒程度だったのだろう。しかし高江洲は、一秒のあいだに、かつて憶えのない混乱や葛藤を次々に感じた。もしかしたら、あの空間を満たしていた空気のせいかもしれなかった。

炊飯器から噴き出る、炊きたてのご飯の匂い。

フライパンで油が弾ける、軽やかな音。

女の小さな背中で揺れる、エプロンの紐。

それらが一体となって醸し出す空気は、高江洲には縁遠いもののはずだった。にもかかわらず、どこか寒くて暗いところからこの場所に帰ってきたのだ、というような感覚が全身を包んだ。

もうすぐテーブルには湯気を立てる皿が並び、向かいの椅子に座った誰かが、笑顔で言う。百点のご褒美に、今日はひーくんの好きなミートボールのスパゲッティよ。よく噛んで、いっぱい食べるのよ……。

気付いたときには、高江洲は女の首に右腕を回し、慎重に頸動脈洞を押さえていた。しばらくして小柄な体から力が抜けると、そっと床に横たえた。

計画とは違う。そう気付き、女の頸骨を粉砕しようとしたが、細い首を掴んだ右手は震えるばかりでまったく力が入らなかった。

赤い目玉を宿してから、高江洲はすでに四人の命を奪っているというのに。別荘の地下室にある大きなダイニングテーブルに獲物を縛り付け、足から骨を噛む時も、なんの躊躇いも感じなかったのに。

しかし、何度右手に力を込めようとしても、腕の筋肉は小刻みに震えるばかりで、高江洲の意思に従わなかった。下顎では目玉がどくんどくんと脈打ち、殺せ、殺せ、と喚いていたが、いつもなら心地良いその声も、頭の芯に鈍い痛みをもたらすだけだった。

やむなく計画を変更し、朦朧とした様子の女に貴重なバルビツール酸系睡眠薬を飲ませると、

元々は死体を運ぶために用意した大型スーツケースに押し込んだ。窒息しないようにジッパーを少し開けさえした。

ダイニングルームで見つけたタブレット端末に小僧へのメッセージを書き残し、家から出た。近くに駐めたワンボックスカーの後ろにスーツケースを積む。車は昨日、県の北部で盗んできたものだ。愛車のマセラティは目立ちすぎるし、トランクも狭い。それに、遠征には別の狙いもある。

ハンドルを握り、新都心へと車を走らせ始めた頃にはもう、右手に力が入らなかった理由を考えることはやめていた。

だが、意識の奥底では気が付いていた。

どうしても認めたくない事実。殺すつもりだった女を殺せなかったのは、《母親》の匂いを感じたからだという事実に。

高江洲は、大学を卒業したその日に実の母親を殺した。二十二年間にわたって数え切れない命令と禁止、苦痛と屈辱を与え続けた支配者を人生から取り除いた。

時間をかけて練り上げた計画を実行する瞬間、心の中に存在したのは、歯をペンチで抜かれたことへの恨みと憎しみだけだった。あれから六年、ただの一度だって後悔してはいない。

だから、あってはならないのだ。小僧をおびき出すための餌でしかない女に、母性を感じるなどということは。

この高江洲晃は、無価値な情動など全て捨て去った優越種なのだから。

都市を優雅に泳ぎ、人間どもを獲物として狩る捕食者なのだから。

証明する。

小僧の頭を殻ごと噛み砕いてから、スーパーアリーナの屋根に戻って、あの女も喰い殺す。

そうすれば、高江洲の中に残る弱さは全て消え去る。

「がるらあああッッ!!」

怒り——であるはずのエネルギーを咆哮に変えて撒き散らしながら、高江洲は噛んだ。

噛んだ。

振り回される小僧の拳が胸や肩に当たるたびに筋肉が潰れ、骨が軋んだが、痛みを無視して噛み続けた。

「ぐるるろおおおおおッ!!」

再び、野太い叫び声が喉から放たれる。下顎の目玉はかつてないほどの勢いで脈打ち、熱いものを口全体に行き渡らせる。上下の顎骨を繋ぐ腱と筋肉が、びきびきと音を立てながら肥大していく。

すでに高江洲の頭は、七割以上が口と化している。牙もますます大きく、分厚くなり、強烈な圧力に耐えるために歯根が深々と歯槽骨を貫く。スタンバトンで灼かれた時以上の激痛が、

神経を駆け巡る。

にもかかわらず。

小僧の殻は、軋みもせずに高江洲の歯を受け止め続ける。

たとえ目玉が生み出す超常現象であろうとも、何らかの物質である以上、これほどの圧力を加えられてわずかにも変形しないなどということが有り得るのか。

否。あってもいいはずがない。

もう少し……もう少しだけ力を振り絞れば、きっと砕ける。

ぎ、ぎ、ぎ、という異様な音が、体の内側から聞こえる。顎の骨が異常な圧力に耐えかねてひび割れ、即座に修復されているのだ。同様のプロセスは腱や筋肉にも発生し、皮膚が裂けては癒着するたびに、鮮血の雫が飛び散る。

だが——殻は割れない。

理不尽なまでの、この硬さ。これはきっと、高江洲に与えられた最後の試練だ。小僧の殻を噛み砕いたその時こそ、いまなお母親の幻影を振り切れない魂の弱さは消え去り、高江洲は真の捕食者に……本物の鮫になれる。

そう、私は……ぼくは、鮫だ。

高江洲がいちばん好きな鮫。最も速く泳げるアオザメよりも、海亀さえ噛み砕くイタチザメよりも、最大最強の帝王メガロドンよりも強い共感を抱く鮫。

それは、シロワニ。

ネズミザメ目オオワニザメ科に属する。最大でも約三メートル、ほとんど人を襲うことはなく、外形もごく標準的。

しかし、約五百種も存在するサメ類の中で、シロワニにしかない特徴がひとつだけある。

《卵食・共食い型》。シロワニの胎仔は、母親の子宮の中で、未受精卵だけでなく他の仔ザメをも喰らうのだ。

高江洲も、そうだった。

男の子と女の子の双子になるはずだったのよ、と物心ついた頃から母親に何度も言われた。晃と燈。名前も決まっていたそうだ。

しかし、産まれたのは高江洲だけだった。具体的に何があったのかは知らないが、妊娠初期のちょっとした事故が原因で、双子の片方がもう一人――つまり高江洲に吸収されてしまったのだ。《バニシング・ツイン》と呼ばれる稀な現象で、父親との離婚もそれが遠因となったらしい。

母親はことあるごとに、ひーくんはあーちゃんのぶんまで頑張らなきゃ、と言い聞かせた。激怒した時は、あんたはあーちゃんを食べちゃったんだからね、とまで口走ることもあった。

図書室の図鑑でシロワニの生態を知ったのは、小学三年生の時だ。

ぼくと同じだ、と思った。

ぼくは人間じゃないんだ。鮫だったんだ。だからママのおなかの中で妹を食べちゃったんだ。鮫なら、友達がいなくても平気。おやつが煮干しでも平気。

ぼくは鮫。ぼくは鮫。

母親にほぼ全ての歯をペンチで引き抜かれてからは、その呪文だけが心の支えだった。サメ類は、生涯にわたって無限に歯が生え替わる。だから自分にもいつか、新しい歯が生えてくる。

三ヶ月前、呪文は真実となった。

そしていま、真実を証明する時がきた。

認めよう。小僧の殻は、およそありとあらゆる物質の中で最も硬い。

だが高江洲の歯も、万物の中で最も強い。

この殻を噛み砕いた時、高江洲は最後の壁を越える。人の弱さ、人の愚かしさを捨て去り、本物の鮫になれる。

「ガルラアアアアアア――――――ッ!!」

増大し続ける筋繊維によって塞がりかけた喉で、高江洲は吼えた。破壊と再生を続ける口腔から、炎の如き血煙が迸った。

不意に、全ての音が消えた。内耳さえも筋肉に転換されたようだ。

構うものか、全部顎になってしまえ。

そう考えた次の瞬間、左右の眼球が弾ける感覚とともに視界が暗闇に包まれた。

血の味が消えた。鉄臭い匂いも消えた。顔を灼くようだった痛みが消えた。

くれてやる！　全部くれてやる！　高江洲は声ならぬ声で絶叫した。何もかもくれてやるから、この絶望的なまでに硬い——硬い…………。

なにを？

私は、何を噛んでいるんだ？　なぜ思い出せない……？

脳が……脳すらも、筋肉になっていく……。

---

残されたのは、体の芯で何かがどくんどくんと熱く脈打つ感覚だけだった。

その脈動が脳にまで侵入し、記憶と感覚を奪いながら筋肉に変えていく。

高江洲の中から、捕食者であった三ヶ月の記憶が消えた。

美食評論家として活躍した六年間の記憶が消えた。

入れ歯であることをひた隠しにして過ごした学生時代の記憶が消えた。

ペンチで歯を抜く母親、九九を暗記させようとする母親、煮干しを噛ませる母親、百点の答案を褒めてくれた母親の記憶が消えた。

別れの日にお菓子をくれた父親、手をつないで川べりを散歩した父親の記憶が消えた。

高江洲の頭部は、もはや、巨大なあぎととそれを駆動する筋繊維の塊でしかなかった。

人間のものではない咆哮が轟く。

大量の血液が迸る。

全ての筋肉が限界を超えて収縮する——。

次の瞬間、上下の顎ががくっと動いた。

無数の銀光が飛散し、美しく煌めきながら宙を舞った。

砕けたのは、小僧の殻ではなく、高江洲の存在証明である歯たちだった。

直後。

かつては高江洲晃という人間の顔と頭と脳だった肉の塊が、猛烈な勢いで爆ぜた。どす黒い血と肉片が、滝のように噴き上がった。それに混ざっていた一枚の歯が駐車場の天井に激突し、深い穴を穿った。

下顎の一部を残して頭部を丸ごと喪失した肉体が、最後まで軋みもせずに存在し続けた透明な殻の上をずるずると滑り、アスファルトに転がった。

＊＊＊

かち、かちかち、という不規則な音が響いている。

変だな、殻の中は正体不明の重低音しか聞こえないはずなのに——とぼんやり考えてから、ミノルはようやくその音の発生源が自分の歯だと気付いた。

顎のみならず、全身の筋肉が小刻みに痙攣するのを、どうしても止められない。血管の中に、血液ではなく氷水が流れているかのようだ。うなじから爪先までがじんじんと痺れて、立っていられるのが不思議なほどだ。

これほど死に近づいたのは、十六年と少しの人生で二度目——いや三度目か。

八年前のあの夜は、ミノルはパントリーの床下収納に隠れていて、殺人犯の顔を見なかった。そのことをミノルはずっと悔いてきたのだが、こうして文字通りの《死のあぎと》に肉薄されてみると、恐怖に凍り付く以外にできることは何もなかった。

ミノルの頭をがっちりと咥え込んだバイターの歯列は、破壊装置とでも形容すべき圧倒的なパワーを秘めて鈍く輝いていた。巨大な牙のひとつひとつが、殺意と悪意を幾重にも折り重ねて鍛え上げた刃のようだった。

無理だ、と思った。これほどの力は、いくらなんでも防げない、と。

殻が無力化されるその瞬間を、短い時間の中で何パターンも想像した。ガラスのように無数の破片となって砕け散るのか。ゴムのように引き延ばされるのか。それとも、泡の如く一瞬で弾けて消えてしまうのか。そして、その時は、いつなのか。

バイターを殺す。その覚悟は固めたはずだった。しかし、殺すか殺されるかの戦いというものが、これほど恐ろしくて、グロテスクなものだとは知らなかった。ヒロイックさなど欠片もない、剝き出しの敵意の激突。

もちろん、ミノルの中にも憎しみは存在する。家族を殺した犯人への憎悪。朋美と典江を殺そうとしたバイターへの憎悪。それらの熱量が、バイターが自分に向けてくる憎しみに劣るとは思わない。

だが、それを力に変えられるかどうかは別の問題だ。憎悪と殺意をエネルギーとして戦う。そのための回路のようなものが、自分には備わっていないことをミノルは思い知らされた。あるいは、それこそが、ジェットアイとルビーアイの違いなのかもしれなかった。

ゆえに、自らの大きすぎる殺意を制御できずに内破したかの如くバイターの頭部が崩壊し、大量の血と肉を撒き散らしながら巨体が地面に崩れ落ちても、ミノルは勝利の雄叫びを上げることはおろか、安堵のため息をつくことすらできなかった。

「…………こんな…………」

最後まで自分を守り続けた殻の上を、黒い雨だれの如く鮮血が流れていくさまを見ながら、ミノルは呟いた。

「…………こんなの…………」

戦いじゃない。そう続けようとしたが、言葉にはならなかった。

ルビーアイ《バイター》は死んだ。

頭部を丸ごと失った無残な骸となって地に伏した。積み重ねてきた全ての記憶を空しく飛散させてこの世を去った。そして、それは確かにミノルのしたことだった。たとえ棒立ちになっ

ていただけだとしても、ミノルは己の力を用いてバイターを殺した。

これは不可避の結末だったのか。それとも異なる選択肢が存在したのか。

その疑問に、答えてくれる声はなかった。ミノルは、目の前に転がる骸から視線を逸らせると、よろけながら体を起こした。殻のくぼみに留まっていた血液は、その動きによって残らず流れ落ち、駐車場の舗装に滴った。

数歩下がってから防御殻を解除すると、途端に濃密な血の匂いが押し寄せてきて、ミノルは顔を歪めた。バイターの死体をこのまま転がしておくのも躊躇われるが、いまはやむを得ない。急いでスーパーアリーナの大屋根に戻って、梁の上から典江を救出しなければ——。

その時だった。

急激に膨張した空気が、ミノルの背中を叩いた。続いて、合成ゴムの靴底がアスファルトに擦れる音が響く。反射的にもう一度殻を出しそうになったが、中止して振り向く。

駐車場の出口へと続くスロープの手前に立っていたのは、黒ブレザー姿の女子高校生だった。ミノルが名前しか知らないジェットアイの少女、ユミコ。三日前と同じく、右手に大型のスタンバトンを携えている。

ユミコは、転がるバイターの死体と、その奥で立ち尽くすミノルに視線を走らせると、通信機能つきの時計に口を寄せて短く囁いた。

「DD、見つけた。地下駐車場」

左腕を下ろし、厳しい表情のまま小走りに近づいてくる。小さな唇が動き、何かを言おうとする。

だが、声を出したのはミノルのほうが先だった。自分でも驚くほどの音量で、ほとんど怒鳴るような言葉を叩き付けた。

「なんで、全部終わってから出てくるんだ！」

バイターとの戦いが始まる前に時間を稼ごうとしたのは、ユミコたちがルビーアイの匂いに気付くのではと予想、いや期待したからだ。

二人への協力を拒んだミノルが、救援を期待するのは身勝手というものだ。その自覚はあったが、しかしどうしても叫ばずにいられなかった。

「言ってたじゃないか！　あんたたちが、バイターを見つけるって!!　なのに……なんで、今更……！」

「…………」

開きかけた唇を一度きつく噛み締めてから、ユミコは低く抑制された声で訊いてきた。

「バイターと一人で戦ったのね。大丈夫？　怪我してない？」

予想外の問いに気勢を殺がれ、頷く。

「……今のところ、痛みはないけど……」

「そう。念のため、病院に運ぶ手配をするわ」

ユミコはスタンバトンを右脚のホルスターに戻すと、再び左手首の時計を口許まで持ち上げようとした。

「あ、ま、待って！」

慌てて割り込む。怒鳴っておいて頼るのは躊躇われるが、そうも言っていられない。視線を向けてくるユミコに、口早に説明する。

「ここの大屋根の上に、僕の姉が取り残されてるんです。バイターに攫われて、薬を飲まされて……早く助けて、病院に連れていかないと……」

だがユミコは、まくし立てるミノルを左手で制しながら頷いた。

「大丈夫、お姉さんはＤＤが屋根から下ろしたわ。外傷はないし、バイタルもしっかりしてるって」

「……そ、そうですか……」

ほっ、と息を吐く。

時計を持ち上げたユミコは、ミノルに向かって歩きながらどこかに連絡を入れた。

「こっちは終わった。バイターは活動停止。あの子も無事だけど念のため診て貰うから、要救を収容したら地下駐車場まで車を回して」

通話を終えると、少し離れた場所に転がる異形の死体に眼を向ける。次に天井を見上げ、何かに得心したような顔をしてから言う。

「すぐに車がくるわ。……念のため、確認させて欲しいんだけど……バイターは、あなたが？」

「……ええ。僕が……殺しました」

「そう」

短く応じると、ユミコは真っ直ぐにミノルを見た。魂の底まで見透かされそうな深い闇色の瞳を、ミノルは懸命に見返した。

三日前のように叱責されるのだろうと思った。先刻は感情のままにユミコを怒鳴りつけてしまったが、バイターによる典江の拉致という事態を招いたのは、七割がた、自分の油断と無思慮のせいだという自覚があったからだ。

しかし、予想に反して、ユミコは長い髪を揺らして低頭した。

「ごめんなさい。今回のことは、こちらの落ち度だわ。昨日、バイターは、熊谷の建設会社に押し入ったの。日曜だったから人はいなかったけれど、車が一台盗まれた。私とＤＤは、奴が北に逃げると読んでそのまま十七号を北上したんだけど……今日になって、ようやく陽動だと気付いて戻ってきた。殺人の手口や能力の傾向から、衝動型のルビーアイだと判断した私たちのミスね……」

「…………」

三日前とは打って変わった、殊勝とさえ思えるユミコの態度に、ミノルは当惑した。

数分前の怒りも、説明を聞いているうちに霧散してしまったようだ。代わりに、胸に浮かん

だ疑問を投げ掛ける。

「でも……あなたには、いわゆる、テレポート能力があるんですよね？　それを使えば、一瞬で移動できたんじゃ……？」

　するとユミコはかすかに苦笑し、かぶりを振った。

「私の力は、いわゆる瞬間移動とは違うのよ。何て言うか……加速力を増幅して、ただ真っ直ぐに進むだけなの。障害物を突き抜けたりとかもできないから、とても街中の長距離移動には使えないわ。加速中に建物や車にぶつかったりしたら、たぶん死ぬわね」

　だから三日前、藪を突っ切って逃げたバイターを追えなかったのか、と考えながらミノルは頷いた。

「そう……だったんですか。なんだか……便利なようで不便なものですね、サードアイの能力って……」

　防御殻を展開すると、外部の音がまったく聞こえなくなってしまうことを思い出しながら、ミノルは呟いた。

「いったい、どんな基準で能力を決めてるのか……」

「それはね……。サードアイは、寄生した人間の記憶を……」

　瞳をわずかに伏せながらユミコはそう言いかけたが、スロープを下ってくるエンジン音が言葉を中断させた。

　現れたのは、何の変哲もない、黒のミニバンだった。地下駐車場に入ったところでエンジンが止まり、運転席のドアが開く。すたっと床に降り立ったＤＤは、三日前と同じく迷彩ベスト姿だったが、今回は黒と灰色の夜戦仕様らしい。

　同色のキャップのつばを軽く持ち上げ、ミノルを見ると軽く手招きする。ユミコも頷くので小走りに車へ近づく。

　ＤＤが左後ろのスライドドアを開けると、フルフラットに倒された後席に横たわる小柄な姿が眼に飛び込んだ。

「……典江さん！」

　押し殺した声で叫び、車に上体を乗り入れる。夢中で抱きかかえ、車から出すと、床にしゃがみ込みながらもう一度呼びかける。

「典江さん……大丈夫ですか、典江さん！」

　体温を保つためか、薄手のウインドブレーカーにくるまれた義姉の体は、驚くほど軽い。瞼を閉じたままの顔は、非常灯の下では真っ白に見える。ミノルの声に、わずかに唇を動かした気がしたが、覚醒には至らない。

「いまはまだ薬の影響で眠っているけど、命に別状はないよ、少年」

　そう告げたＤＤは、安心させるようにぽんとミノルの肩を叩いてから、離れた場所に横たわるバイターの死体に歩み寄っていった。

巨大な傷口を覗き込み、次に天井を見上げると、それだけで状況を理解したのか、ユミコと同じように改まった態度で頭を下げる。

「少年、すまなかった……そしてありがとう。謝罪と感謝は、また改めてするよ。まずは君とお姉さんを病院に運ばないとな。例によって、場所は任せて貰っていいかな？」

「は……はい」

ミノルが頷くと、DDはユミコに視線を向けた。

「バイターの死体回収は課長に依頼した。ちょうど病院に向かってるところだったから、先にこっちに回ってもらうことにしたよ。二十分くらいで着くと思うから、ユミコちゃんはそれまでここで待機してくんない？」

暗い地下駐車場に死体と一緒に置き去りにされることにユミコは一瞬嫌そうな顔をしたが、素直に頷いた。

「解ったわ。とにかく、早く二人を運んでちょうだい」

「了解了解。――っと、その前に念のため確認。少年、バイターのサードアイは《離脱》したんだよね？」

「り……離脱？」

言葉の意味が解らず、首を傾げるミノルに、ユミコが解説を加えた。

「離脱っていうのは、宿主が死んだ時、サードアイが体から抜けて、発光しながら空に飛んでいく現象のことよ。心臓が止まった時点で、ほぼ必ずそうなるわ」

「え……空に……？」

呟きながら、ミノルは顔を仰向けた。ユミコとDDも同じように上を見る。コンクリートと配管類が剝き出しの天井には、直径五センチほどの穴が黒々と穿たれている。だが、あれを作ったのはサードアイではなかったはずだ。

顔の向きを戻し、少し前の記憶を再生しながら言う。

「ええと……僕の目の前で、バイターの頭が吹っ飛んで……体はそのまま倒れて……。でも、光るものが飛んでったりはしてないと思いますけど……」

それを聞いたユミコが、両眼を見開いた。

「えっ、でも、あそこに穴が開いてるじゃない」

「あれは、吹き飛んだバイターの歯が刺さった痕です。ほら、よく見ると、奥に銀色の……」

ミノルに最後まで言わせず、ユミコが叫んだ。

「まずいわDD、離脱してない！　早くサードアイを摘出しないと……！」

三人は同時に、少し離れた場所に転がるバイターの首なし死体を見た。

相変わらず首はなかった。しかし、それはいつの間にか、死体ではなくなっていた。

おかしな方向に捻じ曲がった右腕が、ぶるぶると震えながら舗装に指を突き立て、ゆっくりと上体を持ち上げようとしている。

眼前で起きていることが信じられず、ミノルは典江の体をしっかり抱き締めたまま、何度も瞬きを繰り返した。しかし、バイターの死体だったものの動きは止まらない。ごきん、ごきんと腕の関節から嫌な音を立てながら、ぎこちない動作で胴体を地面から引き離していく。

首からの出血は、もうほとんど止まっていた。半分ほど残っている巨大な下顎から、粘度の高い液体が大量に染み出し、剝き出しの断面を分厚く覆っている。ぶくぶくとピンク色の泡が盛り上がっては弾けるのは、気管を空気が出入りしているからか。

「……頭が……ないのに……」

ミノルは、掠れ切った声で囁いた。

バイターは、自らを鮫になぞらえていた。しかしいくらなんでも、脳を失って生きていられる鮫などいるはずがない。

それなのに、数十秒前まで死体だったものの動きはどんどん激しくなる。ついに両脚までもがぶるりと震え、靴底を地面につけると、よろけながらも立ち上がろうとする。

首の切断面には新しい肉が分厚く盛り上がり、残っていた下顎と融合しつつラッパのような形に広がった。まるでヤツメウナギの口のようだ——と思った直後、蠕動する肉を突き破って、無数の鋭い歯が生えてくる。

がふっ！

という音とともに、かつてはバイターの食道だった黒い穴から、霧状の血が混じった空気が

噴き出した。分厚い胸がふいごのように動くたび、気道に流れ込んでいた血液が排出されていく。

数秒間その動作を繰り返すと、バイターだったものは動きをぴたりと止めた。

円形の《口》の下側、粘液に濡れた肉の一部がぐりぐりと動き——。

まるで、縦に開く瞼の如く左右に分かれた肉の奥から、赤く光る球体が顔を出した。ミノルにも、それがバイターに取り付いたサードアイであることがすぐに解った。

確かに、これは眼だ。人間の眼球とは色も構造もまったく違うのに、放射される磁力的な視線がはっきりと感じられる。

傍らで、ＤＤが低く呻いた。

「これが……肉体変容型ルビーアイの《暴走》か。まるで……別の生き物だ……」

「ぼ……暴走……？」

聞き返すミノルを見ずに、ＤＤは掠れた声で解説した。

「俺たちは、そう呼んでる。宿主が致命傷を受けて心臓が止まると、ふつうサードアイはすぐに《離脱》するんだけど、脳に大きな損傷を受けて、なおかつ体が無事な場合は、サードアイそのものが肉体を制御し始めるケースがあるんだ」

「このあと……どうなるんですか……？」

「これまでのケースでは、例外なく周囲の生物を無差別に襲い始めた。でも、すぐに大量出血

のせいで心臓が停止して、離脱が起きた」

「で……でも、あいつは、もう血が止まって……」

「バイターみたいな、自分の体を変容させられるルビーアイの暴走は、俺たちも初めて見るんだ。まさか、あれほどの傷を治すなんてな……どうやら、これは、待ってても……」

「待ってても無駄みたいね」

ＤＤの言葉を引き継いだユミコが、きっぱりとした口調で囁いた。

「長時間生存できるとは思えないけど、少なくともすぐに離脱するのを期待できる状況じゃなさそうだわ。アレが市街地に出たりする前に、私たちでなんとかするしかない」

「なんとかって……どうするんですか？」

「殺すのよ、もう一度」

ユミコは、あくまで冷静な眼でミノルを見た。

「大丈夫、私とＤＤで処理するわ。あなたはお姉さんと一緒に駐車場の外まで退避して」

「で……でも、大丈夫なんですか、あんな奴を、その電撃棒だけで……」

会話の間にも、怪物は更なる変容を遂げようとしていた。

両腕がボディビルダー並に太くなり、スーツの袖は肩まで裂けて、左手首の高級そうな時計も呆気なく弾け飛ぶ。巨大化した手は、中央部から横に裂け、その中にも鋭い牙が生えているようだ。頭部の丸い口はもちろん、手だけでも、ユミコ愛用のスタンバトンなど容易に破壊してしまいそうだ。

だが、ユミコは決然とした表情で頷くと、唇の端に仄かな笑みを滲ませた。

「見せてあげるわ、私の能力の、本当の使い方」

言うや、左手でスカートを大きくたくし上げる。すらりと伸びる左脚の上部には、右のそれとは形が異なるホルスターが装着されている。そこからシュッと音を立てて抜き出されたのは、大型のコンバットナイフ。

二十センチを超えるであろう分厚い刀身が、非常灯の光を受けてぎらりと輝いた。

ゆっくりと体を前傾させながら、ユミコは低く囁いた。

「ＤＤ、援護よろしく」

「おいら、後方支援型なんだけどなー……」

ぼやきながらもＤＤは右手を迷彩ベストの下に突っ込み、驚いたことに小型の拳銃を引っ張り出した。先端に消音器らしき筒が装着された自動式、ということくらいしかミノルには解らないが、この状況で出てくるからには本物なのだろう。慣れた手つきでセーフティを外し、かしゃりと小さな音を立ててスライドを引く。

ＤＤが「ＯＫ」と囁くと、ユミコは背後のミノルに向けて言った。

「私たちが攻撃を始めたら、アレの注意を引かないようにゆっくり後ろに下がって。充分に距離を取ったら、スロープから外に出なさい」

「は、はい」

もし、あなたたちが出てこない時はどうすれば、と思ったが口に出す時間はなかった。

ユミコとDDは、ちらりとアイコンタクトすると――。

「ゴー！」

という短い合図とともに、まずDDがアスファルトを蹴った。

地下駐車場は広いが、グリッド状に太い柱が立ち並んでいる。暴走バイターの左側にある柱目指して、一直線に走っていく。

怪物の赤い目玉がぎょろりと動き、DDの小柄な姿を追う。

「ゴフッ」

唸り声を上げると、獲物に襲いかかる獣の如く背中を丸める。

その上半身に向けて、DDは右手の拳銃を立て続けに発射した。かすっ、かすっ、と何かを引っ掻くような音がしたかと思うと、バイターの体を申し訳程度に覆う布地のあちこちが小さく弾ける。

「グルォッ」

バイターは再び唸り、同心円状に生えた無数の歯を激しく動かしたが、倒れはしなかった。

両手で地面を掻き、自分の右方向へ走っていくDDに向かってクラウチング・スタートのような姿勢を取る。

怪物の左脇腹が晒された、その瞬間。ユミコが、右足を大きく前に出し、アスファルトの床を踏み、蹴った。

まるで力みのない、無造作な一歩だったのに、ユミコの体は一瞬にして掻き消えた。

ずばっ！　という衝撃音が生まれ、一瞬前までユミコがいた空間に向かって、大量の空気が流れ込んだ。

「ゴガアアアッ！」

という怒りの咆哮が轟き、ミノルは慌てて視線を前に動かした。

その時にはもう、ユミコは怪物への攻撃を成功させていた。DDを追ってダッシュしようとしていた怪物の左脇に、コンバットナイフが深々と突き刺さっている。それを握るユミコの髪とスカートが激しく風に舞い、突進の恐るべき勢いを如実に物語る。

言われたとおり、典江を抱きかかえて慎重に後退しながらも、ミノルは内心でなるほど、と思っていた。

右足で地面を蹴ることで生まれた加速力すなわち運動エネルギーを、彼女の言葉を借りるならば何十倍にも《増幅》し、一直線に猛烈なスピードのダッシュを行う。それがユミコの能力なのだ。

ならば確かに、スタンバトンよりもナイフのほうが数段相性がいいはずだ。突進のスピードをそのまま武器の威力に載せられる。その上、瞬間移動としか思えないあの猛ダッシュを見てから回避することは、いかなサードアイ保持者の反射速度を以てしても不可能だろう。

どうやら肺に深い傷を負ったらしく、怪物の口から、再び大量の血液が迸った。

「ガグルオオオオッ!!」

苦悶と怒りの叫びを上げながら、それでも倒れずに、牙の生えた右手でユミコを薙ぎ払おうとする。

しかしその攻撃が届く直前に、ユミコは体を後ろに傾けつつ、トンと床を蹴り――消えた。

湧き起こった空気の渦に、怪物の脇腹の傷口から飛び散った血が巻き込まれ、霧となって拡散する。

十メートルほど下がった場所に出現したユミコは、スニーカーの底をギュギュッと鳴らして制動すると、再び前に地面を蹴った。ずばんと空気を鳴らして消滅。

バイターの背中に深々とナイフを突き刺した状態で出現し、またもや瞬時に離脱。敵が反応し、腕を振り回した時にはもう、遠く離れた場所に移動している。

二箇所の深手に、さすがの怪物も大きくよろめき、片膝を突いた。

超治癒力を持つ暴走バイターにも、失った血を補充することはできないようだ。本来の頭が吹き飛んだ時の大量出血と、ユミコの二度のナイフ攻撃によって流れ出た血は、常人ならとうに昏倒、絶命しているであろう量に達している。

ルビーアイが放つ赤い光が、接触不良の電灯のように不規則に瞬いた。

がふっ、がふっ、とせわしない呼吸が繰り返されるたび、赤く染まった粘液が口から飛び散る。

やがて、巨体の重みに耐えかねるように、怪物は両手を床に突いた。掌に出現した口がガリガリとアスファルトを引っ掻くが、もう立ち上がる力はないようだ。ルビーアイの光が明滅する間隔が、だんだん長くなっていく。

息を詰めてその様子を見守りながら、ミノルは胸中で呟いていた。

——いったい、お前は、なんなんだ。

宇宙からやってきて、人間に取り付いて奇怪な力を与え、その力が大きすぎたがゆえに宿主が命を落としたあとも、意識なき肉体を操ってまで他の生命を襲おうとする。

そこに、いったい何の意味があるのか。このような、醜悪で悲惨な結末に、どんな必然性があるというのか。

同じようなことを、ユミコとＤＤも考えているようだった。二人とも足を止め、どこか痛ましそうな表情を浮かべて怪物を見ている。

やがてユミコは、ナイフを両手で握ると、体の右側にしっかりと構えた。右足を引き、腰を落とす。

何かを感じたらしい怪物が、大きく上体をもたげた。

ユミコが床を蹴った。

空気が弾ける音。舞い上がる砂埃。約十メートルの距離を一瞬で突き抜け、分厚い筋肉に包まれた怪物の胸の真ん中、心臓にナイフを撃ち込む——。

がきぃん!!　という甲高い金属音。暗闇をオレンジ色の火花が引き裂く。

ミノルは目を見開いた。破けたシャツの奥、心臓があるはずのその場所に、第四の口が出現していた。

上下に割れた皮膚の奥はザクロのような肉色で、縁には鋭い牙が並ぶ。がっちり咥えたナイフの刀身を噛み砕かんと、激しく蠢いている。

ユミコはほんの一瞬、ナイフから手を離して後退すべきか、あるいはこのままナイフを突き入れるべきか迷ったようだった。そしてその停滞を、怪物は見逃さなかった。

猛然と振り回された左腕が、ユミコの体を真横から薙ぎ払った。華奢な体はひとたまりもなく吹き飛ばされ、数メートル離れたコンクリートの柱に衝突した。

「あっ……」

ミノルが息を呑むと同時に、

「ユミコちゃん！」

ＤＤが拳銃を構えて突進した。消音器の先端に、黄色い閃光が立て続けに瞬く。しかし怪物は分厚い両腕で体を覆い、弾が体幹に当たるのを防ぐ。

乾いた金属音が響き、怪物の胸に咥えられていたユミコのナイフが半ばから砕け散った。口

はそのまま、まるで煎餅でも嚙み砕くかのように、分厚い刀身をごりごりと咀嚼していく。

「グルアアアッッ!!」

金属を喰うことでエネルギーを回復させたのか、バイターは巨軀を反らせて高々と吼えた。メインの口に埋まる一つ目が、血のようなディープレッドに輝いた。

ＤＤが更に二度、引き金を絞った。一発は外れ、一発は怪物の右脚に当たった。しかし次の弾は発射されなかった。怪物の右腕が蛇の如く五メートル以上も伸び、銃身に嚙み付いてＤＤの手から奪い去ってしまったのだ。

バキバキバキッ！　という破壊音とともに拳銃は瞬時に粉砕され、右手の口に呑み込まれる。咄嗟に飛び退こうとするＤＤを、真横から左手が痛撃する。

「ぐはっ……」

恐ろしいほどの勢いで吹き飛ばされたＤＤは、遠く離れた柱に叩き付けられ、そのまま床に転がった。

気を失ってしまったらしいその姿にはもう目もくれず、バイターは再び赤い単眼をユミコに向けた。彼女も、意識こそ保っているがまだ立ち上がれない。巨体が大きく跳躍し、ユミコの目の前に着地する。深く前傾した上半身から円形の口が五十センチ以上も伸び、ぼたぼたと滴る粘液が灰色のスカートを汚す。

この時点で、指示されたとおりにスロープを全力で駆け上り、スーパーアリーナから離れて

いれば、ミノルは怪物の脅威から逃れられただろう。

だが、その選択肢は頭に浮かびすらもしなかった。気付いた時にはもう、ミノルは大声で叫んでいた。

「やめろ――――ッ!!」

ユミコを喰おうとしていたバイターは、その声にぴくりと反応すると、異形の頭を百八十度後ろに向け、口の中にある赤い眼でミノルを見た。

怪物の反応は素早かった。ユミコから離れると、両手の牙でアスファルトを引っ掻きながら、大型の霊長類のような動きで一直線に突進してくる。濃密に放たれる、かつて感じたことがないほど凶悪なルビーアイの匂いがミノルの五感を直撃する。

「グルルルッ……」

湿った唸り声が、気管の穴から発せられる。頭部を失っているのに、間違いなく人間だった時よりも大型化した体軀が目の前に迫る。頭部では幾重にも生えた牙がざわざわと蠢き、胸と両手の口もがちんがちんと開閉を繰り返す。

思い切り息を吸い、防御殻を展開しようとしてから――ミノルは激しく戦慄した。

できない。

いま能力を使えば、腕に抱いた典江の体は殻の外に弾き飛ばされてしまう。

中腰で凍り付くミノルと、眠り続ける典江に、四つのあぎとが近づいてくる。何百本にも及

ぶであろう牙（きば）が、ぎらり、ぎらりと順に輝（かがや）く。

圧縮されたかのようにゆっくりと流れる時間のなかで、ミノルはふと、三ヶ月前のとある情景を思い出す。

---

九月の半ばだった。

夜半に台風が通り過ぎ、日課の早朝ランニングに出た時にはまだ強い風が残っていた。空を物凄（ものすご）いスピードで流れていく雲を見上げながら、濡（ぬ）れた道路を自宅から荒川（あらかわ）まで走ったミノルは、ふと思いついていつもは渡らない橋に向かった。

荒川は、日頃（ひごろ）とはまるで違う様相だった。《荒ぶる川》の名前のとおり、河川敷（かせんしき）いっぱいに、茶色の濁流（だくりゅう）が渦巻いていた。ごうごうと橋桁（はしげた）にぶつかる水の圧力が、靴底から伝わってくるかのようだった。

渦巻（うずま）く水面をじっと見下ろしているうちに、耳の奥に甦（よみがえ）る声があった。

——だめよミーくん、台風のあとは、ぜったい川に近づいたらだめ。

ずっと昔、幼いミノルに優しく言い聞かせてくれた、姉ワカバの声。

どうして忘れてしまったのだろう。もし憶（おぼ）えていたら、川なんか見にこなかったのに。

姉との思い出は日々失われていく。その場所に、辛（つら）くて、痛くて、悲しい記憶（きおく）だけが降り積もる。

もし。

もしいま、あの流れに飛び込めば。荒れ狂う激流が、何もかも洗い流してくれるだろうか。姉や父や母の待っている場所に連れて行ってくれるだろうか。

ミノルは、両手で欄干（らんかん）を強く握（にぎ）った。

その時、誰（だれ）かに呼ばれた気がした。

茶色の濁流から視線を外し、灰色の空を見上げる。

最初は、シャボン玉かと思った。小さな、灰色がかった泡のようなものが、ふわり、ふわりと舞い降りてくる。

やがて、シャボン玉では有り得ないことに気付く。なぜなら、ミノルの正面からは、強烈（きょうれつ）な南風が吹き付けてきているのだ。何であろうと、空中に漂（ただよ）うほど軽いものなら、瞬時（しゅんじ）に吹き散らされてしまうはずだ。

しかし、丸い物体は、風をまったく無視してミノルの頭上へと落下してくる。呆然（ぼうぜん）と両眼を見開きながら、ミノルは両手を差し上げ、そっと掌（てのひら）に包み込む。

顔の前まで持ってきたそれは、かつて見たことのない何かだった。透（す）き通った灰色の球体の中に、ひとまわり小さな漆黒（しっこく）の球体が閉じ込められている。見た目はビー玉に似ているのに、まったく重さを持たないかの如（ごと）く、掌の中でふわふわ漂っている。

やがて球体は、音もなく浮き上がると、すいっと空中を流れてミノルの胸に触（ふ）れた。

ランニングウェアの生地をすり抜けて、肌に接触した瞬間、ほのかな温度を感じた。まるで、誰かの指先でそっと触れられたかのようだった。

しばし呆然としてしまってから、ミノルは慌ててジッパーを引き下げ、自分の胸を見た。

球体はどこにも存在しなかったが、胸骨の上の肌が少し赤くなっていた。しかしその変色も、数秒で消えてしまった。

いまのは何だったんだろう。それとも、立ったまま夢でも見たのか。

首を傾げながら、ミノルは橋の歩道を引き返し始めた。直前に自分を呑み込みかけていた衝動のことは、もう忘れていた。

**それが、サードアイとの接触にまつわる記憶の全てだ。ミノルがサードアイそのものを直接見た時間は、わずか数十秒に過ぎない。**

**暴走バイターの《眼》――つまり、あの時以来三ヶ月ぶりに見る深紅のサードアイを至近距離から凝視しながら、ミノルは感じていた。球体のずっと深いところに秘められた、何らかの意思のようなものを。**

人間だった時のバイターが宿していた悪意や殺意、怒りや憎しみとは、まったく違う何か。ミノルの理解など遠く及ばない、絶対的に異質なロジック。ホホジロザメの真っ黒い眼よりも、金属質に輝く昆虫の複眼よりも、遥かに深く遠い隔絶を秘めた眼。

ミノルは、いままさに自分を喰い殺そうとしている怪物の眼球を、ただじっと見詰め続けた。

分厚いナイフすらも粉砕した牙が、粘液を滴らせながら近づいてくる。

口の真ん中に開いた穴が、飢えたように蠕動を繰り返す。

逃げなきゃ、典江さんだけは助けなきゃ、そう思うのに体が動かない。赤い眼に秘められた底無しの深淵が、恐怖や焦燥すらも吸い取っていく。

その時――。

怪物が、視線を少しだけ下に向けた。腕に抱いた典江を見たのだと、ミノルは直感した。

サードアイの無機質な光が、わずかに揺れた。

ほんの一瞬のことだったが、ミノルは怪物の眼に人間らしさを感じた。人が人であるがゆえに惑い、悩み、苦しむ時の揺らぎだと思えた。

怪物の動きが止まった。グロテスクな口の奥から、ぐふる、というような低い唸りが漏れた。

突き出していた顔を引き、がちんがちんと牙を鳴らし続けている両手も下ろして、怪物はじりじりと後退していく。

呆然と両眼を見開くミノルから数メートル離れた怪物は、ぐるりと後ろを向くと、打って変わって凶暴な雄叫びを撒き散らしながら走り始めた。

進行方向では、ユミコがようやく立ち上がったところだった。まだダメージが抜けないのか、左手で右肩を押さえている。右手にもうナイフはなく、スタンバトンを抜くこともできないそ

の姿は、襲いかかる巨大な獣に対してあまりにも無力だった。

それでもまだ、黒い瞳に宿る意思の力は消えていなかった。すっと腰を落とし、両足を前後に広げる。

「ガッフ!!」

飢えた咆哮を轟かせながら、怪物がユミコに飛び掛った。

牙を剥き出した両腕が触れる直前、ユミコは右足で地面を蹴り、《加速》した。

だが、出現したのは、ほんの三メートルしか離れていない場所だった。そのうえ制動に失敗し、がくりと右膝を床に突く。

怪物の反応は速かった。左手の牙でアスファルトを抉り、そこを支点にぐるりと方向を変えると、突進の勢いを保ったまま跳躍する。

ユミコはぎりぎりのところで立ち上がり、再び加速したが、前よりも更に距離が短い。

加速力を増幅するというユミコの能力は、何十メートルもの距離を移動するためには、充分な初動を必要とするのだろう。サードアイ保有者の脚力で力強く地面を蹴り、強烈な加速力を生み出すことでユミコは飛ぶのだ。半ば倒れこむような踏み切りでは、二、三メートルの移動が限界ということか。

ユミコを追って、怪物が再びダッシュした。蛇のように伸びる右手をユミコは危うくかいくぐったが、牙の一本が制服のリボンを捉え、引き裂かれた布が血のように宙を舞った。

その時点で、ミノルは意を決して走り始めていた。

スロープの方向に、ではない。典江をコンクリートの柱の陰に横たえ、暴走バイター目掛けて全力で疾駆したのだ。

自分にとっては典江の安全が最優先だと頭では理解していても、ユミコとDDを見捨てて逃げることは、どうしてもできなかった。もう二度と、誰かを犠牲にして生き残るような真似はしたくなかった。絶対に。

ミノルの足音に気付いたユミコが、さっと振り向いた。恐らくは、バカ！　と叫ぼうとしたのであろう彼女の声は、ミノルには聞こえなかった。

防御殻を展開しつつ、ユミコの隣を駆け抜ける。

接近するミノルを捕らえた怪物の眼は、もうまったく揺らがなかった。

無機質な排除の意思だけを宿してルビーアイがぎらりと輝き、掌に牙を生やした両手が左右から襲いかかる。

両腕を殻の上から噛まれたが、恐怖を押し殺して猛然と床を蹴る。バイターの胸に、頭から激突する。

「う……おおおおお――――――ッッ!!」

巨体が浮き上がった。同時に、ミノルは叫んだ。

両手をがっちりとバイターの胴体に回し、両脚に残された力の全てを振り絞って突き進む。

走る。走る。

——もしかしたら、僕がずっとランニングを続けていたのは、この瞬間のためだったのかもしれない。

そんなことさえ考えながら、ミノルは走った。バイターを抱え上げたまま、広大な地下駐車場を一直線に駆け抜ける。

やがて、行く手に一台の自動車が見えてきた。暗いブルーの大型スポーツカー。

人間だった頃のバイターが逃走のために用意していたのであろうその車に、

「いっ……けえええぇッ！」

絶叫しながら、バイターの体ごと激突する。

流麗なラインを描くリアフェンダーが、ぐしゃりと潰れた。リアウインドウが粉々に砕け散り、トランクの蓋が跳ね上がった。

バイターの異形の口と、ユミコのナイフが与えた傷から噴き出した鮮血が、防御殻に降り注いだ。しかし怪物は動きを止めず、両腕を無茶苦茶に振り回しながら、頭部の巨大なあぎとでミノルを喰い殺そうとする。

顔からわずか三センチ先に何度も噛み付く牙の行列を、ミノルは歯を食い縛って見据えた。

顎のサイズからして、防御殻が受けている圧力は、人間バイターがメガロドンになぞらえた咬合力の数倍に達していると思われた。

幾重にも円を描いて並ぶ無数の歯が、独自の意思を備えているかのように蠢き、殻を破ろうとする。たまに圧力に耐えかねて砕ける歯があっても、すぐに内側の歯が迫り出してきて穴を埋める。

氷のように冷たい恐怖が、全身を痺れさせる。心臓が痛いほど脈打ち、呼吸は浅くなる。

だが、ミノルは懸命に耐えた。耐えることができたのは、胸の真ん中で息づく、ささやかな温度のおかげだった。

目の前で光る深紅のサードアイは、人を殺させるためにバイターと呼ばれた男を選んだ。

ならば、ミノルの胸に宿る漆黒のサードアイは、なにゆえにミノルを選んだのか。

いまはまだ解らない。それを知ることは永遠にできないのかもしれない。

でも、この瞬間だけは信じよう。自分以外の人を助けたいと願った、自分の意思を。

歯を食い縛り、冷たく痺れた右の拳を握り締め——ミノルは渾身のパンチを繰り出した。

殻に包まれた拳が、怪物の左脇腹に突き刺さった。狙ったわけではないが、そこは、ユミコのナイフが深く抉った場所だった。

暴走バイターが巨体を仰け反らせ、両腕を無茶苦茶に振り回した。牙の生えた左腕が、スポーツカーの後部をざっくりと切り裂いた。

次の瞬間——。

車の内部から透明な液体が大量に迸り、ミノルの殻とバイターの体を濡らした。

——水？　あの男が、トランクにミネラルウォーターでも積んでいたのか？

そう考えてから、すぐに打ち消す。匂いは嗅げないが、これは水ではない。

ガソリンだ。

「…………!!」

刹那、脳裏に閃いたアイデアに息を呑む。

そんなの無理だ、という怯えを、やるしかない！　と打ち消す。

だが、ガソリンだけでは足りない。もう一つ、必要なものがある。

顔を上げる。バイターは、ガソリンが気管に入ったのか、ミノルの頭から口を離して苦しげにもがいている。チャンスはいましかない。

恐怖に耐えつつ、大きく息を吸い——殻を解除。

気化しているであろう燃料を吸い込んでしまわないように気をつけながら、大声でひと言だけ叫ぶ。

「点火して!!」

直後、ミノルの声を聞いたバイターが猛然と噛み付いてきた。再び殻を出すのがコンマ一秒遅れたら頭がなくなっていただろう。目の前でガチン！　と止まった牙に震え上がりながら、その瞬間を待つ。

やがて——。

視界の右端に、長い髪が躍った。

そちらを見る。五メートルほど離れた場所に、瞬間移動してきたユミコが立っている。右手にはスタンバトン。だが、両眼には迷いの色がある。

必死の力で暴走バイターを抑え込みながら、聞こえないと承知のうえでミノルは叫んだ。

「構わないから投げろ!!」

その声が届いたかのように——。

こくりと頷いたユミコは、スタンバトンのスイッチを入れ、ミノルとバイターに向けて放った。空中にスパークの残像を引きながら、バトンはゆっくりと近づいてきて——。

ミノルの視界が、眩いオレンジ色に染まった。

着火というよりも、爆発に近かった。

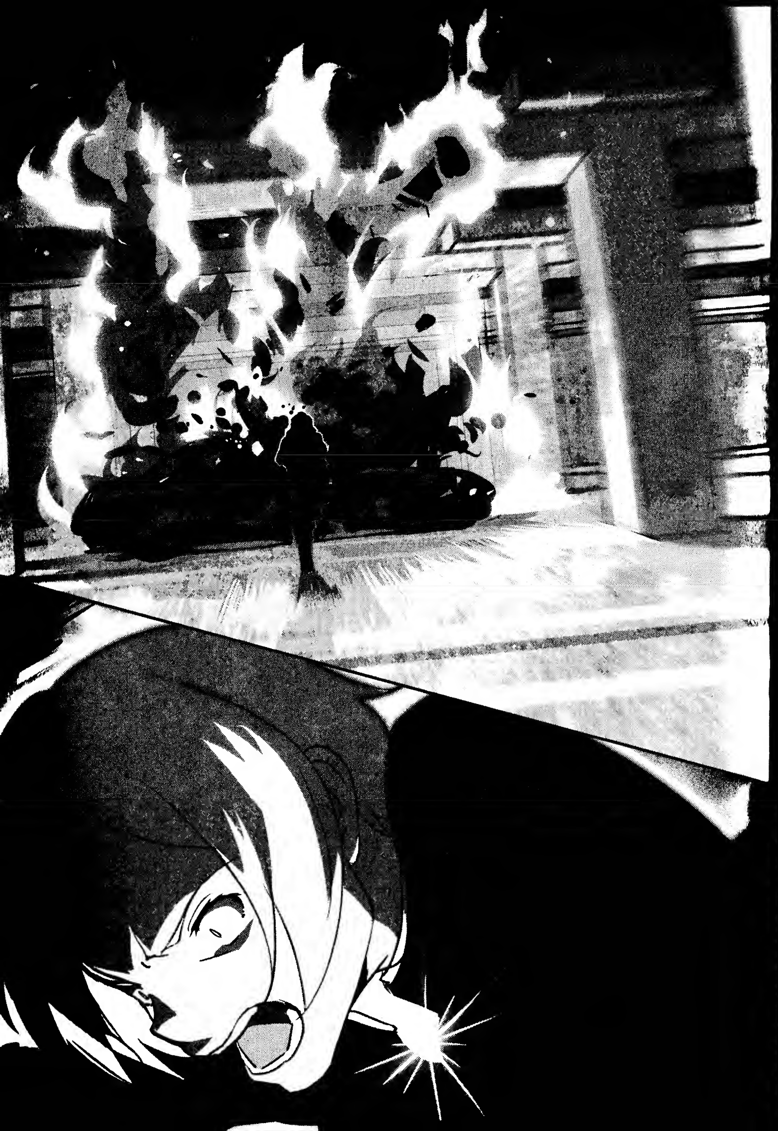
ごうっと瞬間的に広がった炎から、ミノルは反射的に顔を背けた。

しかし、不可視の防御殻は、火炎が発する高熱を——電磁波であるはずの輻射熱をも、完璧に遮断した。わずか三センチの距離で荒れ狂う深紅の輝きに、思わず息を呑む。

ミノルに抑え込まれる暴走バイターの体もまた、紅蓮の炎に包まれていた。

ぼろぼろに破けていたスーツの生地が、瞬時に燃え尽きる。青黒く変色した肌も、見る間に黒く焼け焦げていく。炎はスポーツカーをも呑み込み、連続的な小爆発が発生する。

滅茶苦茶に暴れる怪物を、必死の力で抑え込みながら、ミノルは叫んだ。



「もう……止まれ――――っ!!」

巨大な口の内側の粘膜が爛れ始める。気管の穴が激しく震えているのは絶叫しているからかもしれないが、ミノルの耳には届かない。高熱から逃げるためか、サードアイが粘膜に埋もれていくが、炎は容赦なく肉を焼き焦がし、炭に変えていく。

本来であれば、大量の水分を含む人間の体は、たとえガソリンを浴びても簡単には焼けないはずだ。しかし、ルビーアイによる無理な変形の影響なのか、怪物の肉体はそれ自体が可燃性の物質ででもあるかの如く、激しい火柱を上げて猛然と燃えた。

防御殻を通して、逞しい肉体がみるみる萎んでいくのが感じられた。まず四肢から燃え尽き、露わになった骨が関節部から外れて床に転がった。

突然、ほぼ全体が黒焦げになった胴体が激しく収縮し、口だった場所に開いた小さな穴からわずかな量の粘液が排出された。

それが、怪物の、最後の生命活動だった。弱々しく動いていた体から、ふっと全ての力が抜けた。

---

そして、ミノルは見た。

輝きを失ったサードアイが、ガラス細工のように砕け。

その中から、赤い光の玉が、凄まじいスピードで飛び上がった。

光は駐車場の天井に触れると、直径二十センチほどの大穴を開けて貫通した。その上の階も、

更にその上も——さいたまスーパーアリーナの全てのフロアと鋼鉄の大屋根を貫いて、赤い光はどこまでも上昇していく。

……これが……サードアイの、《離脱》……？

ぼんやりとそう考えたのと、ほぼ同時に。

ミノルの体の下で、かつては同じ人間だった男の肉体が、何千もの黒い欠片となって砕け散った。

あたかもそれを待っていたかのように天井のスプリンクラーが作動し、勢いよく降り注ぐ水が、防御殻に降り積もった煤や灰を跡形もなく洗い流していった。

## 9

靴底がリノリウムの床材を擦るかすかな音に顔を上げると、長い黒髪を揺らしながら歩いてくるユミコの姿が見えた。

ミノルは、座っていたベンチから立ち上がろうとしたが、ユミコは右手を上げて押し留めた。

「……お姉さんの具合はどう？」

小声の問いに、同じく控えめな音量で答える。

「少し前に目を醒まして、話もできました。いまはまた眠ってますが……」

「そう。よかった」

ゆっくりと頷いたユミコは、スカートの裾を捌きながらミノルの隣に腰を下ろした。思わず背筋を伸ばしながら、ミノルは説明を続けた。

「外傷のほうは、軽いかすり傷くらいだそうです。バイターの姿も見てない……っていうか、何があったのかもよく憶えてないみたいでした。ＤＤさんに言われたとおり、家に押し込み強盗が入って、襲われかけたところにちょうど僕が帰ってきて、強盗は逃げた……って説明しておきました」

「そう」

　ユミコは口許に右手の指先を触れさせながら、思案顔で言った。

「それなら、記憶ブロックまでは必要ないかもしれないわね。判断するのは課長だけど。もうすぐ上がってくるわ。君は、怪我とかしなかった？」

「ええ、僕は……。――ユミコさんのほうこそ、大丈夫ですか？　怪我、早く診てもらったほうがいいですよ」

　ユミコのブレザーは、暴走バイターに薙ぎ払われた右腕と、柱に激突した背中の布地がぼろぼろに解れている。良くて打撲か、あるいは骨折していてもおかしくない――と思いながら口にした言葉だったが、ユミコはなぜか口をへの字にしたまま押し黙ってしまう。

「え、あの……何か……」

「いえ、別にいいんだけどね。あなたが私をどう呼ぼうと」

　と素っ気ない口調で言われ、ようやく自分が何気なく『ユミコさん』と呼びかけてしまったことに気付くが、そうは言われても名字を知らないので致し方ない。

　謝るべきか開き直るべきか悩むミノルをちらりと横目で見て、ユミコは軽く肩をすくめると改めて答えた。

「私も平気よ、ぶつけたところが軽く内出血したくらい。この程度のダメージはいつものことだわ」

「いつも……ですか……」

　思わず眼を伏せてしまうミノルだったが、ユミコは平然と言葉を続けた。

「DDの奴も、骨や内臓に異常はないけど、頭を打ってるから念のために検査してるわ。まったく、何だかんだ言い訳してトレーニングをサボるから受け身の一つも取れないのよ。明日からしごいてやらないと……」

　年上であろうDDに対して、出来の悪い弟を持つ姉のような言い方をするユミコに、ミノルは思わず口許を緩めてしまった。怒るかと思ったが、ユミコはふんと鼻を鳴らしただけだった。咳払いして、もうひとつ知りたかったことを訊ねる。

「あの……スーパーアリーナの駐車場、車は燃えるわ、最上階まで穴は空くわで大変なことになっちゃいましたけど、あれはどんなふうにごまかすんですか……？」

「簡単よ。隕石が降ってきて、建物を貫通して地下駐車場の車に命中、爆発炎上」

　真顔で答えるユミコを、思わずまじまじと眺めてしまう。

「……そ、そんな、無茶苦茶な……」

「どうせサードアイも宇宙から来たんだし、落ちてきたか飛んでいったかの違いだけでしょ」

「…………そ、そうですか……」

　バイターとの激闘から、三時間が経過した。

　さいたま市大宮区の東側にある、医大附属病院の最上階に二人はいる。午前五時という時間

のせいもあるだろうが、薄暗いフロアに他の人間の姿はない。

暴走バイターからルビーアイが《離脱》したあと、ミノルと典江はDDが運転する車でこの病院まで運ばれた。事前に話が通っていたようで、典江は緊急搬入口でストレッチャーに乗せられ、即座に精密検査が行われた。幸い怪我らしい怪我はしていなかったが、バイターに強い睡眠薬を飲まされたため、大事を取って最上階の個室に収容されたのだ。

先刻、数分間だけ眼を醒まし、ミノルと少し話をしてまた眠った。今日は県庁を休まねばならないだろう。

ユミコは、《課長》なる人物と一緒に現場の処理と情報封鎖を行うと言って、スーパーアリーナの駐車場に残った。典江の個室にほど近いベンチでユミコを待ちながら、ミノルは彼女の怪我をそれなりに心配していたのだが、先ほどの歩き方を見る限り重傷ではなさそうだ。

きっと、自分で言うだけあってうまく受け身を取ったのだろう。彼女にとっては、あれほどの非日常的な戦いも、本当に《いつものこと》なのだ。

しかしもちろん、ミノルにはまだ何もかもが夢の中の出来事のようだった。ユミコに訊きたいことは山ほどあるのに、軽い虚脱状態がいまも続いていて、何から質問すればいいのかさえ決められない。

正面の窓から見える、夜明け前の空をぼんやりと眺めているうちに、自分でも思いがけない言葉が口から零れた。

「あの時……暴走したバイターが、僕と典江さんを殺そうとした時……」

口籠るミノルに、ユミコが促すように強い視線を向けてくる。

「……あいつ、典江さんを見て、何ていうか……迷ったみたいでした。絶対に意思疎通なんてできないと思ったのに、あの瞬間だけは、考えてることが伝わった気がしたんです。あいつ、典江さんを……殺したくないと思ってた。そして実際に、攻撃を止めた……。どうして、そんなことが……」

「…………」

ユミコは正面に向き直ると、数秒間沈黙を続けたが、やがて小さな声で言った。

「……サードアイは、ある程度、宿主の記憶や人格をコピーしていると考えられているの」

「えっ……き、記憶を……？」

「そう。バイターの前に暴走した二例のルビーアイたちも、本能的、機械的な攻撃を続けながらも、宿主の記憶に由来すると思われる言葉を口にしたわ。その時点で、宿主の脳はほとんど損壊していたにもかかわらず」

「…………！」

鋭く息を呑み、ようやく回転し始めた頭でユミコの言葉の意味するところを考えながら、ミノルは掠れ声で呟いた。

「……じゃあ……典江さんを襲うのを躊躇ったのは、あの男の……バイターの記憶や意思が、

ルビーアイに残っていたから……なんですか……？」

「――そう考えるのが、いちばん合理的ね」

「でも……だって、バイターは、いままでに何人もの人を襲って殺した極悪人なんですよね？　三日前は箕輪さんを噛み殺そうとしたんだし……そんな奴が、なんで、典江さんだけ……」

どうにかそこまで口にしたミノルは、きつく唇を噛んだ。

バイターの記憶をコピーしていたがゆえに、あの怪物は典江を殺さなかった。その仮説は、どうしても受け入れがたいものに感じられた。

黙り込んだミノルに、ユミコは上体ごと向き直った。黒い瞳が、内心の迷いを映してか、ほんの一瞬だけ揺らいだ。しかしジェットアイの少女は、一度だけ瞬きをしてから、静かな口調で話し始めた。

「確認済ルビーアイ保持者第二十九号、コードネーム《バイター》に関しては、さっき本名が解ったばかりなの。身分証の類は持っていなかったし、車と一緒に車検証も燃えちゃったから。車のナンバーを照会して、ようやく返事が来たんだけど……名前を見て、私も課長も驚いたわ。ＤＤなんか、だいぶショックを受けてたわ。ファンだったみたいだから」

「え……ファン……？　タレントとかですか……？」

「似たようなものね。そこそこ有名なグルメ評論家で、雑誌にレストランの記事を書いたり、時々はテレビにも出ていたみたい。フルネームは、高江洲晃」

「高江洲……晃……」

鸚鵡返しに呟いたその名前には、確かに聞き覚えがあった。芸能人だの文化人にはまったく詳しくないが、それでは、ＳＳＡの屋上で初めて素顔のバイターと相対した時、どこかで見たようなと思ったのは気のせいではなかったのか。

そんな社会的地位のある人間がなぜ……と思っていると、ユミコが再び語り始めた。

「高江洲の母親も、有名な教育評論家だったの。でも、六年前に自動車事故で死んでいるわ。本当に事故なのか、それとも不審死なのかは定かでないけれど、ずっとネットで調べた限りでは、高江洲は子供の頃から母親と一緒にタレント活動をしていたみたいね」

「……お母さんのことが、好きだったんでしょうか……？」

ミノルの呟きを、ユミコは肯定も否定もしなかった。代わりに、いっそう低い声で、囁くように言った。

「解らない。だから、事実だけ言うわ。私たちが、バイター……高江洲の犠牲者だと推測している女性たちは、年齢にかかわらず全員が独身だった。つまり、あいつが主婦を狙うことはなかった。これは、何の根拠もない、私の勝手な想像だけれど……高江洲が、エプロン姿だったあなたのお姉さんに自分の母親を重ねて、それゆえに拉致しても傷ひとつつけなかったとすれば……その感情はサードアイにもコピーされていて、だから暴走状態に陥ってもお姉さんを襲わなかった……」

「でも……それじゃ、まるで……」

ミノルは深く俯き、喉の奥から声を押し出した。

「まるで、バイターも、犠牲者みたいじゃないですか。サードアイに命令されて、しかたなく人を殺したっていうんですか。今更そんなのないですよ。あいつは、自分の意思で、罪もない人を襲って噛み殺す極悪人だったんでしょう？　死んで当然の、絶対悪だったんでしょう……？」

ミノルの言葉に、ユミコはいっとき沈黙してから、これまでいちばん穏やかに聞こえる声で答えた。

「たぶん、絶対悪なんてものは存在しないのよ。……サードアイは、入り込んだ人間の記憶を鋳型にして、様々な特異能力を生み出す。それに加えて、ルビーは《他の人間を殺せ》という衝動を与え、ジェットは……当事者だから自覚できないけど、でもきっと私たちも、何らかの命令を与えられてるんだと思うわ。そこに、どんな意味や目的があるのか、まだ誰にも解らない。もしかしたら……これが自然現象じゃなくて、地球に二色のサードアイを送り込んだ何者かがいるんだとしたら、そいつにとってはルビーのしていることが善で、その邪魔をする私たちが悪なのかもしれない。——でもね」

不意にユミコは、膝の上できつく握り締められたミノルの右手に、そっと自分の指を触れさせた。

「少なくとも私は、そしてきっとお姉さんやあの陸上部の女の子も、あなたのしたことに感謝

してるわ。あなたは彼女たちと、私とDD、それにこれからバイターが殺すかもしれなかった人たちの命を救った。それは、誰がなんと言おうと善いことよ。……絶対悪の存在は疑っても、私はその反対は信じる。世界には、すべきこと、どうしてもしなきゃならないことがある。私にとっては、それは、地球上にばら撒かれたルビーアイを全部宇宙に叩き返して、犠牲になる人を一人でも多く減らすことなの。たとえそれが、宇宙の意思だかなんだかに逆らう行為だとしても」

「そのとおりだ。少なくともそれが、我々ジェットアイの存在意義であることは間違いない」

不意に響いたその声は、凛とした力強さに満ちていた。

ユミコが凄まじいスピードで手を引き戻したが、それに気付くこともなく、ミノルはさっと顔を上げた。

長身痩軀の男が一人、こつこつと靴音を響かせながら廊下を歩み寄ってくる。ダークスーツに海老茶のネクタイという地味な出で立ちだが、高い鼻梁の奥では、鋭利な形の両眼が強い光を放つ。年齢は三十代後半といったところか。口の両側と眉間にはかすかに谷が刻まれているが、丁寧に撫で付けられた髪は黒々としており、若々しい印象がある。

この男が、何度か名前を耳にした《課長》だろうか。

その呼称から連想される管理職的イメージとはほど遠い、時代小説に出てくる武士のような佇まい。いつもなら、こういう堂々たる人物の前に出ると萎縮してしまうミノルだが、いまは

深く疲労しているせいか、それともジェットアイという《同種》なのだという認識のせいか、目をそらすことなく自然に立ち上がった。

　隣で同時に立ったユミコが、両手を体の後ろに回しながら、まずミノルに向けて言った。

「この人が、私たちの課長。他人の記憶を操作するっていう、とっても危ない能力を持ってる人よ。——で、課長、彼が恐らく関東では最後のジェットアイ。能力は——」

「聞いているよ。完全防御シールド……とでも呼ぶべきなのかな？　実に興味深いね、教授が喜びそうだ」

　滑らかだがよく通る声でそう言った男は、淡い笑みを浮かべながらミノルに右手を差し出してきた。

「初めまして、厚労省安全衛生部特別課、通称《特課》を預かっている氷見です。よろしく」

　差し出された右手を、ミノルは慌てて握り返した。

「あ、う、空木です」

「そう硬くならないでくれたまえ、ユミコ君が言うほど危険な能力なんて持ってないんだよ。相手が協力してくれなければ、私は何もできないんだから」

「いえ……そんな」

　氷見という男の大きな手は、武術で鍛え上げたのであろう強靭さとしなやかさを備えていて、まるで体ごと包み込まれるような感覚があった。ミノルは一瞬ぼんやりとしてしまってか

ら、慌てて手を解いた。

「あの、僕のほうこそ、大した力じゃないんです。自分しか守れないんですから……。ユミコさんやDDさんは、バイターと戦って怪我してるのに、僕だけが無傷で……」

　視線を伏せたまま、不明瞭な声でどうにかそんなことを口にした。しかし、頼りなく消えかけた語尾に、氷見の静かだがはっきりとした声が重なった。

「しかし、君は逃げなかった」

　びくりと体を強張らせるミノルの肩に、氷見の大きな手がそっと載せられる。

「逃げずに、お姉さんやユミコ君たちを助けるため、持てる能力と周囲の状況を最大限に活用して巨大な敵と戦った。ジェットアイにも、それができる者はそう多くない。端的に言わせてもらうが、君は、我々が必要としている人材なんだ。空木ミノル君、どうか、一緒に——」

「やめてください」

　ミノルは俯いたまま大きくかぶりを振り、氷見の声を遮った。

　長身の男の、毅然とした相貌を一瞬だけ見上げ、すぐに視線を落として続ける。

「——名前を知ってるってことは、どうせもう八年前の事件のことも調べているんでしょう。なら、あなたたちは知ってるはずだ。僕は、逃げる人間、隠れる人間なんです。大事なのは、自分の日常が平穏に繰り返されることだけなんです。箕輪さんや、典江さんや、ユミコさんたちを助けようとしたのも、もし助けられなかったら自分が嫌な思いをするから……それだけが

理由なんです」

「それでいいじゃない」

　背後から掛けられたユミコの言葉は、思いがけず柔らかな響きを帯びていた。

　振り向くこともできずに立ち尽くすミノルは、続く言葉を聞いていっそうの驚きを感じた。

「ごめんなさい。私、あの公園で、君に色々と理不尽なことを言ったわね」

「……いえ……言われて、当たり前ですから……」

「そうじゃないの。私……たぶん、君の能力が羨ましかったんだわ。その力があれば、私は、助けられなかった人を助けられたかもしれない……って思っちゃったから……」

「…………」

「でも、それもやっぱりエゴだよね。自分が楽になりたいから、そんな事を考えたんだわ……。だけど……たとえ自分自身のためだとしても、私は、私の力で助けられる人がいるなら助けたい。どうせ人が何かするときの理由なんて、自分でも本当には解らないんだから、動機なんて何だっていいと思う。重要なのは、何を為したか、それだけよ。もう一度言うけど……君は、私の命を助けてくれた。その理由がなんだって、私の感謝の大きさは変わらないわ。──なんですか、課長」

　最後の一言は、ミノルの肩越しに、氷見へと向けられたものだった。俯いたままのミノルの前方で、氷見のわずかな笑みを含んだ声がした。

「いや……ただ、驚いただけだよ。ユミコ君がそんなに喋るところを、私は初めて見たよ」

「やめてください。……もう喋りませんから」

　すとん、と勢いよくユミコがベンチに腰を落とす。

　ミノルは唇を強く噛み締めながら、ユミコの言葉の一部分を胸中で繰り返した。

　──重要なのは……何を為したか。

　──この僕に、何事かを為しうる──と、彼女は言っているのだろうか？

　防御殻の性質を知ってから、ミノルは、球体に与えられたこの能力は自分と世界を切り離すためのものだと考えていた。独りになりたい、独りになりたい、と念じ続けたその声を聞き、物理的な方向で願いを叶えたのだと。

　だが、違ったのだろうか。

　この力は、贖罪のために与えられたものなのか。かつて、自分ひとりだけで暗い穴に隠れ、父と母と姉を見殺しにした罪を、より多くの人たちを守ることで贖えと、誰かが言っているのだろうか……？

　贖えるわけがない。たとえ何十人、何百人を救おうとも、胸の奥に打ち込まれた自責の杭が抜け落ちることはないだろう。

　……でも──でも。

　……もし、僕が、誰かを助けるために戦って、その過程でいつか命を落としたら。

……次に会ったときは、僕を許してくれる……？　ワカちゃん……？

自分がどれほど長く沈黙していたのか、ミノルには解らなかった。しかし、ゆっくり視線を持ち上げると、そこにはわずかにも表情を変えることなくミノルの返事を待っている氷見の顔があった。

ミノルは一瞬だけ振り向き、背中を押してくるようなユミコの眼を見てから、再び氷見に向き直った。

「……僕のサードアイを手術で切り取って、関連する記憶を全部消してください……って言っても、無駄なんでしょうね」

「申し訳ないが、答えはイエスだ」

「もし、あなたの組織に協力して、いつかルビーアイのことが全部解決したら、何か報酬を貰えるんですか？」

「ああ。特課が解散するときは、メンバーには慰労金が支給されることになっている。額までは、ここでは言えないが」

「そうですか。……まだサードアイが降ってきて三ヶ月しか経ってないのに、ずいぶん手回しがいいんですね」

ミノルのコメントに、氷見は謎めいた笑みを浮かべた。

「そこはまあ、色々あるのさ。何なら、慰労金の一部を前払いすることは可能だが……」

「お金は一円も要りません」

きっぱりと言い切り、続けて言う。

「でも、何もかも終わったら、あなたの能力を貸してほしいんです」

それを聞いた氷見はわずかに眉を持ち上げたが、手振りで続きを促した。ミノルは大きく息を吸い、その先を口にした。

「あなたの能力で……僕を知っている全ての人たちから、僕に関する記憶を消してください。あなたがた自身からも」

しん、とした沈黙が数秒間続いた。ようやく夜明けが近付きつつある窓の外で、救急車のサイレンがかすかに響いた。

「――しかし、それは、現実的にはとても不可能なんじゃないのかな？」

さすがに驚いたような氷見の声に、ミノルは小さくかぶりを振った。

「正確には、僕のことをある程度深く知っている、と僕が認識している人間だけでいいんです。家の近所や学校にも、そう多くはないはずです」

「……それによって君が何を得るのか、私には解らないが……。――だが、君がそれを望むのなら、約束しよう。私がその時まで生きていれば、だが」

「ありがとうございます。なら……僕でいいのなら、《特課》に参加させて貰い……」

「お姉さんからも？　あの人からも、君の記憶を消すの？」

ミノルの言葉を遮ったのは、口調こそ落ち着いているが、初めて会った時のような厳しさを帯びたユミコの声だった。ミノルはもう一度振り向くと、頷いた。

「僕がいなければ、典江さんは自分自身の家庭を築いて、自分のために生きられるんです」

「……それをあの人が望んでいるのかどうかは、君にも解らないと思うけど……で、それで、君はどうするの？　誰も君を知らない世界で？」

挑みかかるような光を放つユミコの瞳を、ミノルは真っ直ぐに見詰め返した。

「さあ……。もしかしたら……それを知りたいだけなのかもしれません。誰も僕のことを知らない世界っていうのが、どういうものなのか」

---

まったく口を開こうとしなくなったユミコから少し離れた場所で、ミノルは氷見課長から詳しい話を聞いた。翌々日の放課後に、東京都内にあるという特課の本部を訪れることになり、もう一度握手を交わしたところで、氷見は思い出したように言った。

「ああ……そういえば、私はこれから、君が助けた女の子……箕輪朋美さんと面談することになっているんだが」

「え……箕輪さんは、この病院に入院してるんですか？」

「うん。ここは、いわば特課の《特約病院》だからね。他の病院で、強盗に襲われて怪我したなんて言ったら、即座に所轄署の刑事が飛んでくるよ」

「そう……ですよね。でも、箕輪さんは、なんで三日も入院しているんですか？　怪我をしてたんですか……？」

「いや、幸い外傷はほとんどなかったが、彼女は能力発動時のバイターを見ているからね……。意識を取り戻してから、慎重にカウンセリングを行い、事情を説明して、記憶封鎖に協力してくれるよう要請するのに時間がかかってしまった」

「……記憶を、消すんですか……」

「それが決められた手続きであり、最善の対処でもあるんだ。たとえ外傷を負わなくとも、ルビーアイに襲われた時の恐怖は、被害者の心に巨大な負荷をかけるからね」

きっぱりと言い切った氷見は、静かな声で続けた。

「万全を期するため、バイターに襲われる数時間前まで遡って記憶を封じることになる。彼女も了承してくれたんだが、その前に、一度君に会いたいと言っているんだ。お礼を言いたいんだそうだよ。どうするかね？」

「え……どうせ、その記憶もなくなるのに……？」

ミノルが首を傾げながら呟くと、腕組みをして壁によりかかっていたユミコがややきつめの声で言った。

「ほんとに、人の気持ちって解ってないわね、君は。たとえ自分が忘れても、君の記憶には残るでしょう？　そのほうがずーっと重要なのよ、あの子にとっては」

「…………」

でも、僕は――。

僕にとって、記憶というのは、いつだって重くて、苦しくて、悲しいものなんです。

胸の奥でそう言い返しながら、ミノルは、早朝の荒川土手で箕輪朋美と遭遇してからのことを思い出していた。

あの時、あんなことを言わなければ。あんなことをしなければ。そういう感情も、もちろん存在する。

しかし、ミノルにとっても意外なことに、それだけではなかった。真っ白い朝靄を背景に、にっこり笑う朋美。学校の廊下を並んで歩いた時の朋美。秋ヶ瀬公園のベンチで涙を零す朋美の姿ですら、ミノルの中に、決して不快ではない、甘い痛みのような感覚をもたらした。

「……箕輪さんに、会わせて下さい」

ミノルが小声でそう告げると、氷見は微笑みながら頷いた。

---

箕輪朋美の病室は、同じ最上階フロアの、典江が入った個室からほど近い場所にあった。

氷見が扉をノックすると、中からすぐに「はーい」という声が返ってきた。

ユミコに背中をつつかれ、意を決してスライドドアを引き開ける。個室に足を踏み入れると、真っ先に感じたのは、ベッドサイドに生けられた生花の匂い――ではなく、何度か嗅いだ朋美自身の、お日様を思わせる香りだった。

「なに突っ立ってるのよ」

後ろから小声で言われ、そっちこそなんでついてくるんだよ、と思いながら足を前に進める。

白いカーテンを回り込むと、大きなベッドの真ん中に、ちょこん、という感じで上体を起こす箕輪朋美の姿があった。

黄色のパジャマの上に、アイボリーのカーディガンを羽織っている。思ったより元気そうだ。

ミノルを見た途端、大きな笑みを浮かべながら右手を振る。

「おっはよ！　よかった、空木くん、来てくれたんだ。そんなとこ立ってないでこっち来なよ」

先にそう言われてしまい、やむなくベッドの傍まで歩み寄る。幸いと言うべきか、ユミコと氷見はカーテンの手前に残った。

「お……おはよう、箕輪さん。具合は、どう……？」

パジャマ姿の朋美を直視するのは気恥ずかしかったが、真っ直ぐな視線をどうにか受け止めながら、ミノルは訊ねた。

「ぜんっぜん元気だよー。もともと、ちょっと擦りむいたくらいだったし。足が走りたがって困っちゃうよ」

上掛けの下で両足をぴょんぴょん跳ねさせ、あははと笑ってから、朋美は不意に口を噤んだ。

数秒間沈黙してから、小声で訊いてくる。

「……あいつは、どうなったの……？」

バイターのことだと、すぐに解った。やはり朋美は、顔を異様に変形させたルビーアイの姿を目撃し、しかもちゃんと憶えているのだ。

大きく息を吸い込み、ミノルはひと言ひと言、はっきりと告げた。

「……もう、平気だよ。あいつは、いなくなった」

「ほんと⁉　空木くんが、やっつけてくれたの⁉」

「…………」

もちろん、ミノルがひとりでバイターを倒した……いや、殺したわけではない。だが、ここで朋美に対して謙遜や韜晦をしても、それはただ自分のためでしかない。

そっと、しかし確かな動作で頷き、ミノルは言った。

「うん。僕には、ああいう奴らと戦える力があるんだ。だから、もしまた悪い奴が来ても大丈夫だよ。僕が……」

息継ぎをして、より大きな声で。

「箕輪さんは、僕が守るから」

すると、朋美の瞳がいっそう大きく見開かれ、きらきらと星空のように輝いた。

星たちが寄り集まり、白く煌めく水滴となって零れる。

三日前、夕暮の秋ヶ瀬公園でも、ミノルは朋美の涙を見た。しかしいま、白い頬を濡らす雫たちは、まったく違う色と温度を持っているように思えた。

ぽろぽろと涙を溢れさせながらも、朋美はもう一度大きな笑顔を浮かべて、

「うん」

と震える声で言った。

何度か深呼吸して、わななく息を整えると、頬を拭いながら続ける。

「あのね……、あたし、公園であったこと、忘れなきゃならないんだって。あの怖い人のことを忘れるのはいいんだけど……でも、空木くんに守って貰ったことも忘れちゃうのは残念だな」

「……うん……」

それ以上なんとも言えずにいると、朋美はベッドに身を乗り出し、右手を差し出してきた。

握られた手から、細い小指だけがぴんと伸ばされている。

「ね、空木くん、約束して。もしあたしが、公園でのことや、その前に何度か空木くんと話をしたことを忘れちゃっても……もう一度、荒川の土手で会ったら、またあたしと友達になってくれるって」

「…………うん」

ミノルは頷き、右手を伸ばすと、朋美の小指に自分の小指を絡めた。

ゆびきりげんまん、と声を合わせて歌いながら、たとえいつか失われる関係性だとしても、この約束だけは守ろうとミノルは考えた。

そんなふうに思える自分が、少しだけ不思議だった。

朋美（ともみ）の記憶封鎖（きおくふうさ）を行う氷見（ひみ）を病室に残して、ミノルとユミコは外に出た。

廊下を横切り、窓の前に立つ。夜から朝へのグラデーションを描く東の空に、明けの明星（みょうじょう）が白々と光っている。

赤と黒のサードアイは、あの星よりもずっと遠いところから地球に降ってきた。そして接触した人間たちの運命を変えた。

そこにどんな意味があるのか。

あるいは、意味など何も存在しないのか。

隣（となり）で、同じように星を見上げたユミコが、ぽつりと言った。

「――いまもまだ、あの子に……君の周りにいる人たち全員に、自分のことを忘れて欲しいと思ってるの？」

ミノルは、地上の街明かりに視線を落としながら頷（うなず）いた。

「じゃあ、私と君も、期間限定の付き合いってわけね。とりあえず自己紹介しとくわ。こっち向きなさいよ」

体を回したミノルに向かって、ユミコは右手を真（ま）っ直（す）ぐに突き出しながら、凛（りん）とした声を響（ひび）かせた。

「――私の名前は安須（あず）ユミコ。コードネームは《加速者（アクセラレータ）》。君のことを忘れるまで、よろしく」

――この人と、互（たが）いにちゃんと名乗ったことはまだなかったんだ。

そう考えながら、ミノルはユミコの、擦（す）り傷が残る手をそっと握（にぎ）った。

「空木（うつぎ）ミノルです。あなたが僕を憶（おぼ）えてるあいだ、よろしく」

終わり

# あとがき

はじめまして、あるいはお久しぶりです、川原礫（かわはられき）です。『絶対ナル孤独者（アイソレータ）』第一巻『咀嚼者—The Biter—（ザ・バイター）』をお読み下さり、ありがとうございます。

二〇〇九年のデビュー以来、丸五年ぶりの新規シリーズということになりますが、この本は私の別作品である『ソードアート・オンライン』と同様に、ウェブ上で連載された作品を元にしています。『SAO』も『アクセル・ワールド』も刊行継続中なのになぜこのタイミングで文庫化なのか……ということから、まずは書いてみようと思います。

理由は、大きく二つあります。まず一つは、未完のまま中断してしまった『絶対ナル孤独者』（ウェブ版はタイトルが少し違って『絶対ナル孤独』でしたが）が、プロデビューしてからも心の片隅にずっと引っかかっていたことです。私はどちらかと言えばテンションでお話を書くタイプなので、このまま放置していたら、もう二度と続きが書けなくなってしまうのではないかという懸念（けねん）を常に感じていたのです。

そして二つ目は、キャパシティの問題です。

私はこの五年間、基本的には偶数月刊行の年六冊、というペースで本を出版してきました。これは別に最初からそうしようと決めていたわけではなく、年末が近づいて担当編集者さんと

翌年のスケジュールを相談する時に、「じゃあまあ……今年と同じ感じで……」などと曖昧（あいまい）な意思表示をしてきた結果であります。

なので昨年末、デビュー当初と比べて一冊あたりの作業時間が増えてきたこともあり、また文庫以外の仕事も増えそうだったので、二〇一四年は一冊減らして五冊にしましょう、と担当さんと合意した時は特に何を思うこともありませんでした。しかしその後、自分の中に迷いと言うか躊躇（ためら）いと言うか、「こんなに簡単にペースを崩（くず）してしまっていいのか？　刊行冊数を減らす前に、頑張れるところまで頑張るべきではないのか？」という気持ちがフツフツと湧（わ）き上がってきたのです。

年六冊にこだわることに、どんな意味があるのかは自分でもよく解（わか）りません。単に、五冊になった時に《何か》が変わってしまうのを闇雲（やみくも）に恐れているだけなのかもしれません。ともかく、そこで私が考えたのが、すでに存在する『絶対ナル孤独者（アイソレータ）』の原稿を、最小限の手直しで文庫化することでした。それならば、スケジュールを圧迫（あっぱく）することなくもう一冊出せるのではないか、というわけです。

もちろんその前に、担当さんに原稿を読んで頂いて出版可否の判断を仰（あお）ぐ必要がありましたが、幸いゴーサインを頂けたので、さっそく修正作業に取りかかりました。

しかし、何せ一巻相当部分は十年前の原稿ですので、気になる部分が次から次に出てきまして……。小さくは文章表現から大きくはキャラクターの設定まで、直せる範囲で直そうとした

んですが、気付けば原稿の九割以上を書き直していました。当然、かかった時間も『SAO』や『AW』以上で、スケジュールは猛烈に圧迫されまくり、担当さんには「こうなると思ってましたよ……」的な表情をされてしまいましたが、しかし私に悔いはありません。いまの私が発生させられるラノベパワーを余さず注ぎ込んだ一冊になったと思いますので、あとは皆様に楽しんで頂けたことを祈るばかりです。

---

出版の経緯はこれくらいにして、内容についても少し。

『絶対ナル孤独者』は、ジャンルでくくれば《異能バトル物》ということになるでしょうか。《不思議な能力を手に入れた少年少女たちが悪の能力者たちと戦う》という何のヒネリもない設定を、よくもまあそのまま書いたものだと十年前の自分に呆れるやら感心するやらですが、考えてみれば他の二作品も大してヒネっていないので、これはもうそういうモノだと諦め……ではなく今後も前向きにバシバシ直球を投げていこうと思っております。

唯一、どうにかヒネリらしきものが存在するかなーと思わなくもない部分は、主人公であるミノル君の能力でしょうか。作中では《防御殻》と呼ばれていますが、要はアレです。皆様がご幼少のみぎり、腕や指を交差させながら「バリヤー！」とやっていたアレの具現化です。

……すみませんやっぱりヒネってないですね……。

主人公としてちょっとどうなのかという完全防御型の能力ですが、この『絶対ナル』は私の

書くものにしては珍しく敵方にもかなり焦点が当たるシリーズでして、ミノル君の完全防御バリヤーを敵の能力者たちがどうやって攻略していくのかを描くという要素もあります。皆様も、これぞという攻略法を思いついたらツイッターやお手紙などでぜひお知らせください！

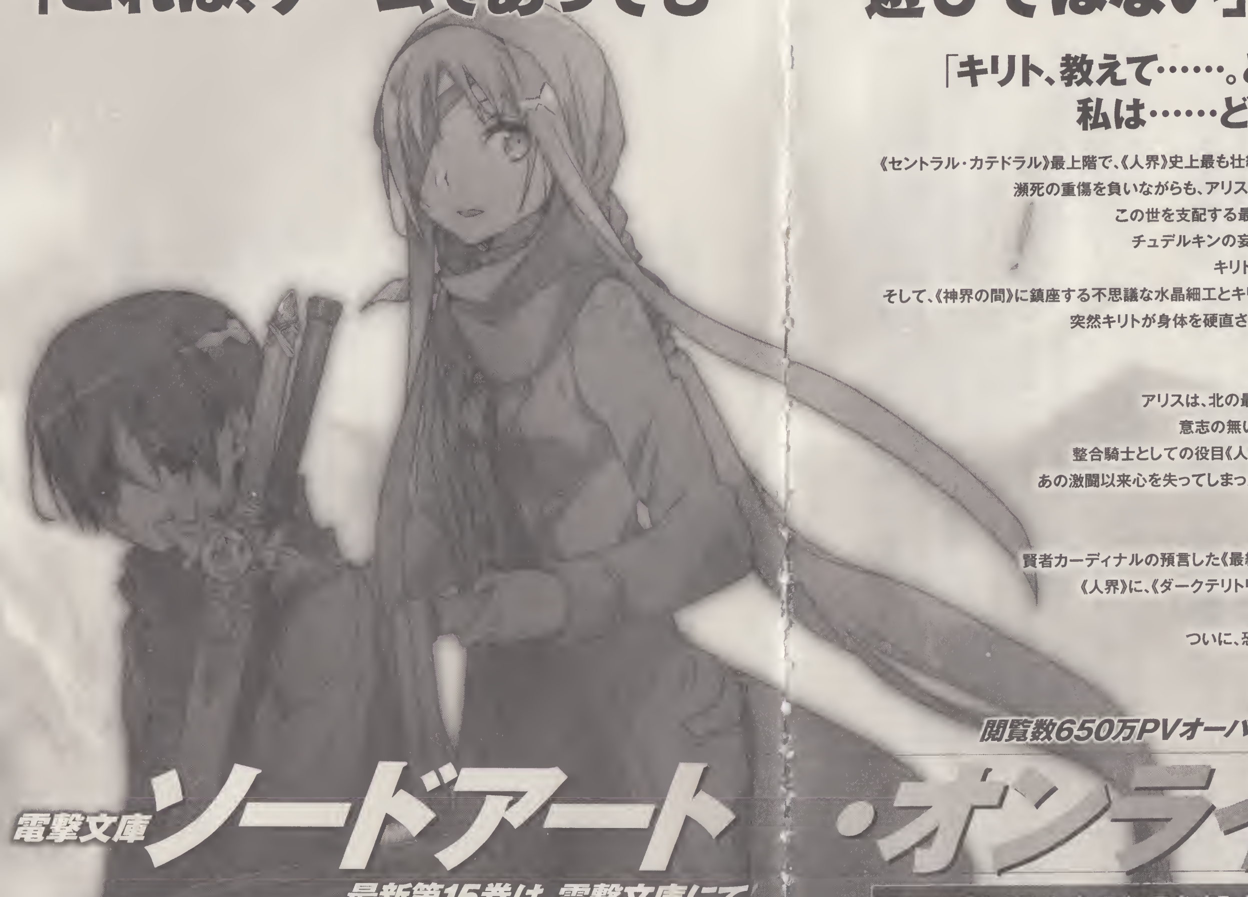
と、勢いで募集までしておいてナンですが、そもそもが偶発的な経緯によって刊行スタートとなった『絶対ナル孤独者』ですので、二巻をいつお届けできるかはまだ決まっておりません。それ以前に、出版社さんが二巻を出させてくれるのかどうかも未定ではありますが……ともかく作者としては頑張るのみ！　ということで、いつか出る（はずの）二巻もどうぞよろしくお願いいたします。サブタイトルは『発火者 ―The Igniter―』となる予定です。

---

すでに説明済みの経緯によって大いにご迷惑ご心配ご面倒おかけしてしまった担当の三木さん、今回もお世話になりました！　またライトノベルの挿絵という色々大変な仕事を引き受けて下さり、かっこよくて美しくてド迫力なイラストを描いて下さったシメジさん、本当にありがとうございました！　そして最後にもう一度、皆様応援よろしくお願いします！

二〇一四年四月某日　川原　礫

「これは、ゲームであっても遊びではない」──天才プログラマー・茅場晶彦



「キリト、教えて……。どうすればいいの？
私は……どうすれば…………」

《セントラル・カテドラル》最上階で、《人界》史上最も壮絶な激闘が繰り広げられ、そして終決した。
瀕死の重傷を負いながらも、アリスはおぼろげに戦いの全てを知覚していた。
この世を支配する最高司祭アドミニストレータとキリトの死闘。
チュデルキンの妄執の炎に巻かれ、共々に消えた最高司祭。
キリトのパートナーであったユージオの死……。
そして、《神界の間》に鎮座する不思議な水晶細工とキリトが奇妙なやりとりを交わしたその刹那、
突然キリトが身体を硬直させて倒れ──世界は完全に沈黙したのだ。

半年後。
アリスは、北の最果て《ルーリッドの村》に身を寄せていた。
意志の無い虚ろな表情で車椅子に乗るキリトと共に。
整合騎士としての役目《人界の守護》をベルクーリに託したアリスは、
あの激闘以来心を失ってしまったキリトと静かに暮らすことを選んだのだ。

しかしその頃、全《アンダーワールド》に、
賢者カーディナルの預言した《最終負荷実験》が刻一刻と近づきつつあった。
《人界》に、《ダークテリトリー》からの邪悪な息吹が流れ込み始める。
それはルーリッドの村も例外ではない。
ついに、恐るべき闇の軍勢が動き出そうとしていた。

個人ウェブサイトながらも、
閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説！

電撃文庫 ソードアート・オンライン
イラスト／abec

最新第15巻は、電撃文庫にて
2014年8月10日発売──！

特報!!!『アクセル・ワールド17』は
▶▶▶2014年冬頃発売予定!!!

電撃コミックス『ソードアート・オンライン アインクラッド』①②巻 発売中!(作画／中村貯子)
電撃コミックス『ソードアート・オンライン フェアリィ・ダンス』③巻2014年6月27日発売!(作画／葉月 翼)
電撃コミックスNEXT『ソードアート・オンライン ガールズ・オプス』①巻2014年7月10日発売!(作画／猫猫 猫)
電撃コミックスNEXT『ソードアート・オンライン プログレッシブ』②巻2014年7月10日発売!(作画／比村奇石)
電撃コミックスEX『そーどあーと☆おんらいん。』①巻 発売中!(作画／南十字星)
原作／川原 礫　キャラクターデザイン／abec

『ソードアート・オンライン ファントム・バレット』(作画／山田孝太郎)は「コミックウォーカー」にて連載中!
『ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ』(作画／葉月 翼)は「電撃文庫 MAGAZINE」(偶数月10日)にて連載中!

# 絶対ナル孤独者《アイソレータ》

Sect.001
## 咀嚼者
The Biter

THE ISOLATOR
realization of
absolute solitude

Reki Kawahara
川原 礫

illustration»Shimeji
イラスト◎シメジ

---

か-16-33

絶対ナル孤独者《アイソレータ》1
—咀嚼者 The Biter—

川原 礫

電撃文庫

---

ISBN978-4-04-866510-0
C0193 ¥590E

9784048665100

1920193005905

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス
KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価：本体590円
※消費税が別に加算されます

---

『ソードアート・オンライン』の川原礫が放つ最新作!!!

「僕のコードネームは、孤独者（アイソレータ）です」

イラスト／abec

2014年7月5日より TVアニメ『SAOII』放送開始!!

©2014 川原 礫／KADOKAWA アスキー・メディアワークス刊／SAOII Project

電撃文庫

好評発売中!!!

アニメ ソードアート・オンライン Extra Edition

Blu-ray＆DVD 完全生産限定版特典

★原作者：川原礫書き下ろし新作短編小説「ソードアート・オンライン 虹の橋」
★キャラクターデザイン：足立慎吾描き下ろしデジジャケット仕様
★特典 CD：キャラクターソング「Heart Sweet Heart」ユイ（CV：伊藤かな恵） ★三方背クリアケース ★特製ブックレット（16P）
★特典映像 川原礫黙認「そーどあーと・おふらいん Extra Edition」
※SD キャラ達によるキャラクターコメンタリー映像

発売：アニプレックス
販売：ソニー・ミュージックマーケティング

# 絶対ナル孤独者《アイソレータ》

Sect.001
咀嚼者
The Biter

THE ISOLATOR
realization of absolute solitude

Reki Kawahara
川原礫

illustration»Shimeji
イラスト◎シメジ

電撃文庫

---

か-16-33

絶対ナル孤独者《アイソレータ》1
—咀嚼者 The Biter—

川原礫

電撃文庫

---

9784048665100
1920193005905

ISBN978-4-04-866510-0
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス
KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価：本体590円
※消費税が別に加算されます

# 絶対ナル孤独者
## 《アイソレータ》

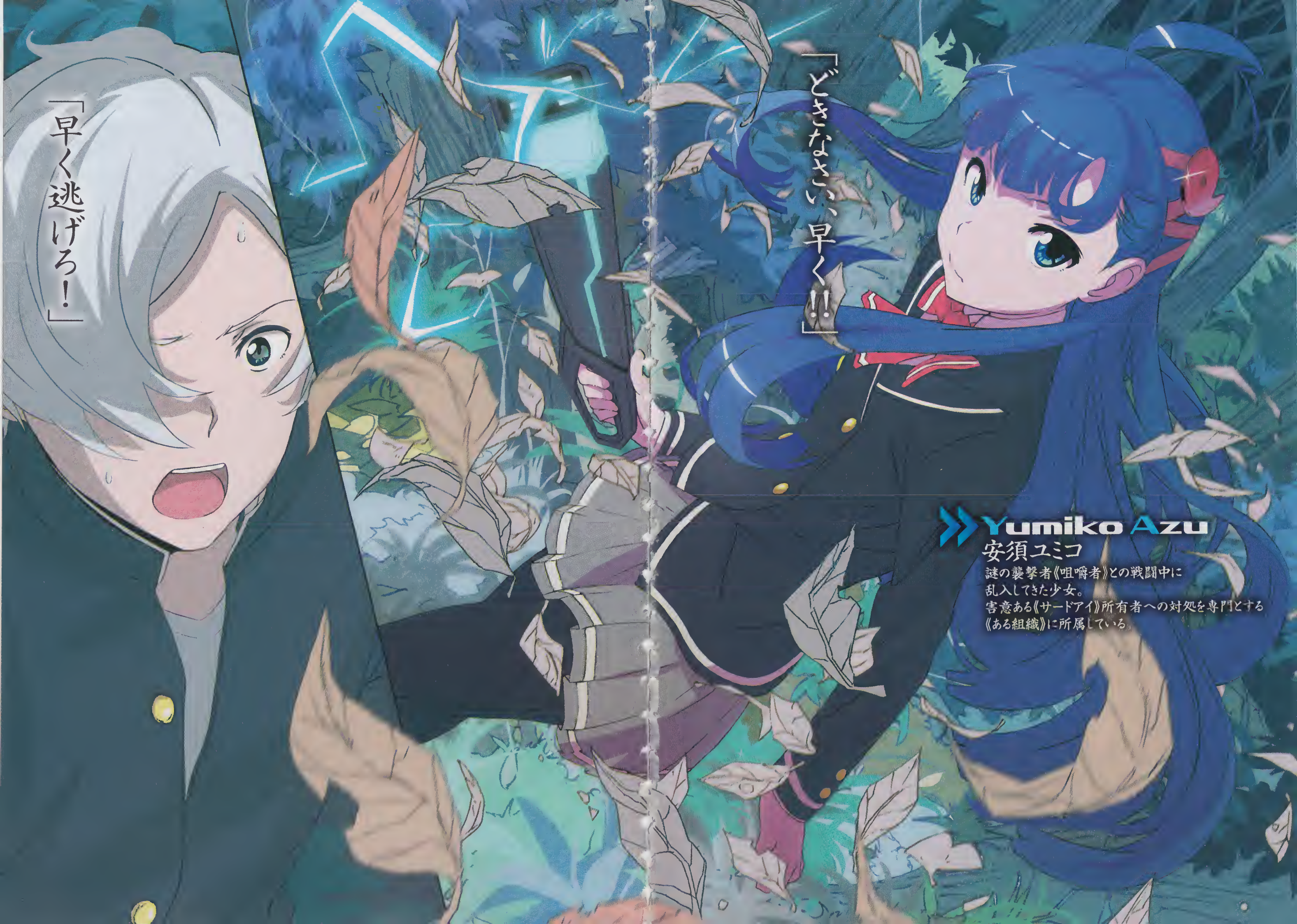
THE ISOLATOR
realization of absolute solitude

1 Sect.001
咀嚼者 The Biter

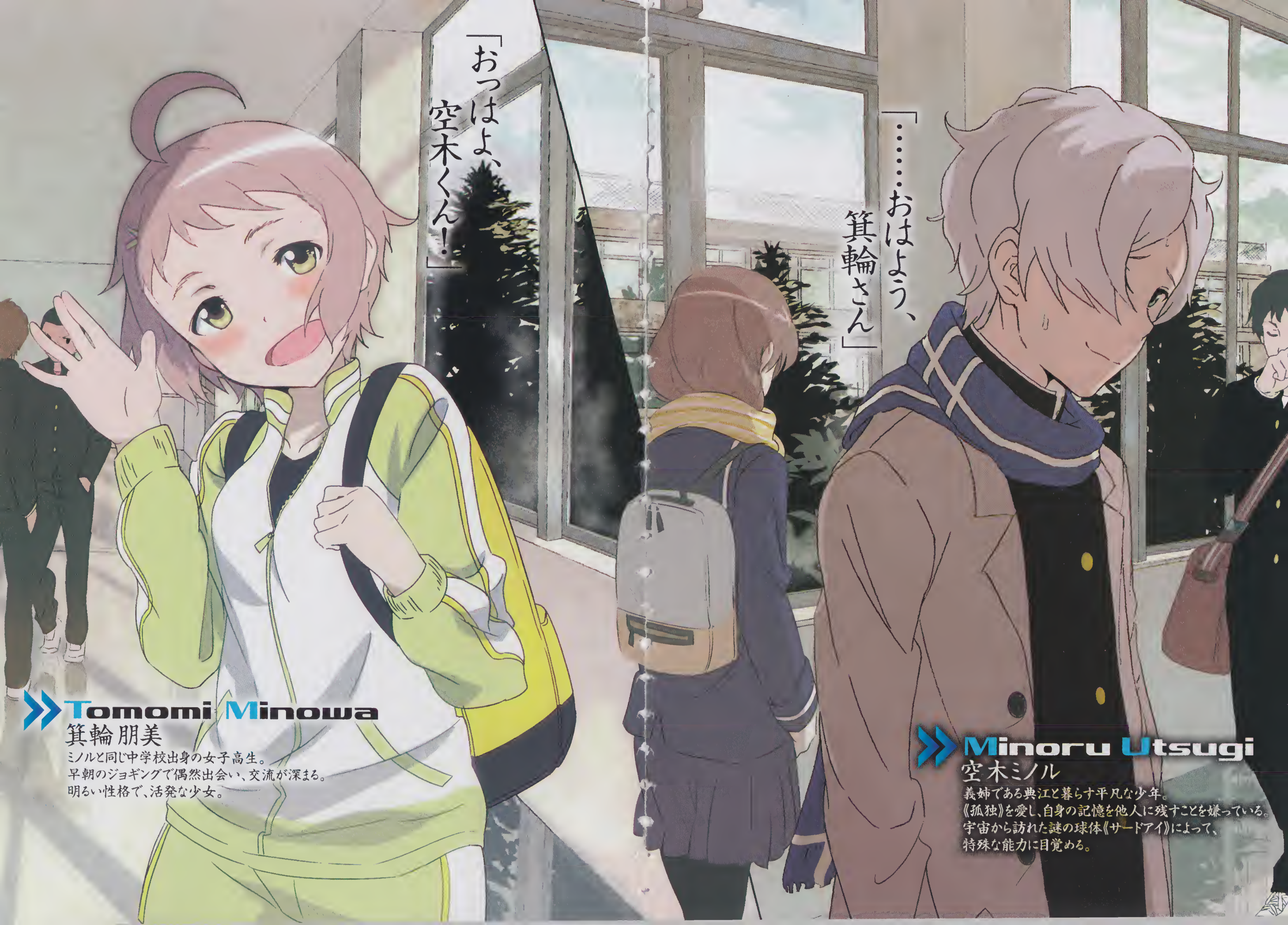
Reki Kawahara
川原 礫

illustration»Shimeji
イラスト◎シメジ

design»BEE-PEE
ビィピィ

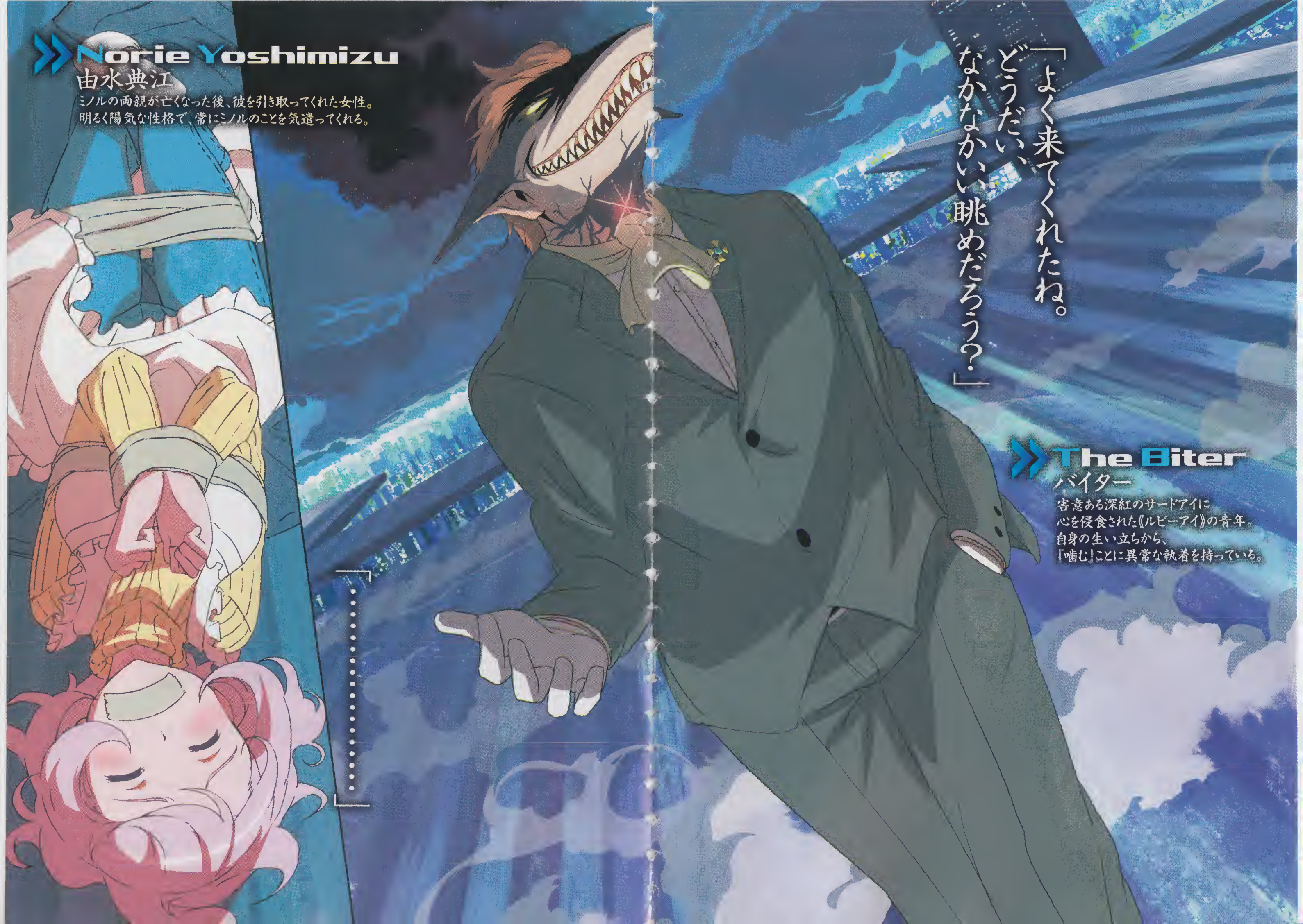

「どきなさい、早く!!」
「早く逃げろ!」

**»Yumiko Azu**
**安須ユミコ**
謎の襲撃者《咀嚼者》との戦闘中に
乱入してきた少女。
害意ある《サードアイ》所有者への対処を専門とする
《ある組織》に所属している。


「……おはよう、箕輪さん」
「おっはよ、空木くん！」

**Minoru Utsugi**
**空木ミノル**
義姉である典江と暮らす平凡な少年。
《孤独》を愛し、自身の記憶を他人に残すことを嫌っている。
宇宙から訪れた謎の球体《サードアイ》によって、
特殊な能力に目覚める。

**Tomomi Minowa**
**箕輪朋美**
ミノルと同じ中学校出身の女子高生。
早朝のジョギングで偶然出会い、交流が深まる。
明るい性格で、活発な少女。



**Norie Yoshimizu**

**由水典江**

ミノルの両親が亡くなった後、彼を引き取ってくれた女性。
明るく陽気な性格で、常にミノルのことを気遣ってくれる。

「よく来てくれたね。どうだい、なかなかいい眺めだろう？」

「……」

**The Biter**

**バイター**

害意ある深紅のサードアイに
心を侵食された《ルビーアイ》の青年。
自身の生い立ちから、
『噛む』ことに異常な執着を持っている。

THE ISOLATOR
realization of absolute solitude

# CONTENTS

010 Fragment 01
022 Fragment 02
025 第一章 –咀嚼者 The Biter–